

ちよつと待って。なん
で俺、Gガンダム世界
にTS転生して、東方
師匠と拳交えてる
の！？

ひいちゃ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Gガンダムファンの主人公は、気が付いたら少女ガンダムファイター『ジャンヌ・エスプレッソ』に転生して、作中最強の人物、東方不敗マスター・アジアと戦っていた！
そのさなか、そのGガンダム愛ゆえに東方不敗の魂の叫びを聞いた彼女は、彼の悲劇を回避するため、人類排除計画をソフトランディングさせようと、ある行動に出る――
！

果たして、ジャンヌの道の行く末は……?!?

※この物語は、このような方にお勧めですw

・最初から最後までかっこいい東方師匠が見たい

・ギアナ編での小物に堕ちた師匠は見たくない

・師匠に死んでほしくない

・マイナーなファイターたちの活躍やファイトが見たい

※XINNさんから、ジャンヌのファンアートをいただきました！

※またXINNさんからファンアートをいただきました！

生体コアとなったジャンヌのイラストです！ 大感謝！

※XINNさんから、またファンアートをいただきました！

感謝です！

※阿井 上夫さんからもファンアートをいただきました！

ありがとうございます！

※再びXINNさんからファンアートをいただきました！ 感謝！

※XINNさんから、37話、38話のファンアートをいただきました！ ありがとうございます！（平伏）

（37話）

（38話）

※XINNさんから、38話の挿絵の別バージョンもいただきました！ ありがとうございます！

目次

転戦編

序章

1st Fight 『兄妹を守り抜け

！ 復活の雇われガンダムファイター

!!』 9

2nd Fight 『変幻自在の逃走

者！ 変わり者ファイターに隠された魂

!!』 29

3rd Fight 『誇りを取り戻せ

！ 自然のために魂を売ったG（ガンダ

ム）ファイター！』 43

4th Fight 『DG細胞に引き

裂かれた二人！ ジャンヌ、救うために
彼を撃て！』 63

5th Fight 『発見、最後の四天

王！ 孤島を守る人ならざる守護者』

80

閑話 I

【閑話】登場モビルファイター解説（5

話まで） 90

新宿編

6th Fight 『危険な師弟再会

！ 二人のマスターアジア』 93

7th Fight 『ドモン対二大ガ

ンダム！ 新生シャッフル同盟見参！』

104

8th Fight 『試練の対決！』

ドモン対ジャンヌ!!』 121

9th Fight 『出現！ アナ

ザーデビルガンダム!!』 133

10th Fight 『新たなる戦い

への別れ！ アナザーデビルガンダム最

期の日!!』 140

ギアナ高地編

11th Fight 『編み出せ！

新必殺技豪熱マシンガンパンチ!!』

148

12th Fight 『恐怖から抜け

出せ！ 勇気のローゼスハリケーン!!』

13th Fight 『中口激突！

サイ・サイシー対アルゴ!!』 175

14th Fight 『決勝目前！

迫るジャンヌ包囲陣!!』 187

15th Fight 『目覚める明鏡

止水！ ジャンヌ包囲網突破作戦!!』

201

201

16th Fight 『運命の対決再

び！ ドモンの選択!!』 220

決勝編

17th Fight 『決勝開幕！

緊急事態ゴッドフィンガー発動せず!!』

232

ヘルトライデント対ダークホッパー

!!』

291

18th Fight 『前進のための

ケジメ! 沈黙のボルトラッシュ』

危険なアレンビー!』

304

238

19th Fight 『苦戦の初陣!

帰ってきたミケロ!』

24th Fight 『騎士対紳士!
チャップマン最後の挑戦』

319

20th Fight 『恋か勝利か!?

迷いのサイ・サイシー』

た光明! 発動ゴッドフィンガー!!』

339

21th Fight 『社長の大逆襲

! 危うしガンダム・マックスリボル

石破り天驚す拳!!』

353

バー!!』

27th Fight 『大会中断!?

363

22th Fight 『四天王激突!

襲来アナザー五人衆!』

363

再び世界転戦編

28th Fight 『絆無情に。襲

来へブズソード』—— 377

29th Fight 『進撃グランド・

ガンダム！ 物資輸送隊を守れ！』

393

30th Fight 『牙をむく奇門

遁甲の陣！ デモンガンダムの謎！』

405

31th Fight 『穀倉地帯絶対

防衛線！ へブズソード迎撃作戦!!』

32th Fight 『危うしロンド 423

ン！ 獅王争覇、女王を潰すか？』

435

33th Fight 『総力戦！ 狙

われたコロニー国家平和会議！』

444

34th Fight 『真なる伝承！

マスター魂の天驚拳!!』—— 462

35th Fight 『シュバルツの

正体！ ついに訪れた再会!!』—— 473

最終章

36th Fight 『師匠復活！

決戦デスメギドガンダム』—— 485

37th Fight 『一体何が!?

デビルガンダム大暴走!!』

504

38th Fight 『想いよ届け!

集結ガンダム連合!』

518

39th Fight 『地球と人類危

うし! 憎しみに染まったデビルガンダ

ム!!』

534

Final Fight 『俺とみん

なで切り拓く明日! 光輝く未来へレ

デーゴー!!』

550

転戦編

序章

『俺』の意識が目覚め、この体の自我が書き換えられたその時、俺の頭に浮かんだのはこの一言だった。

——ちよつと待って。なんで俺、Gガン世界にTS転生して、東方師匠と拳交えてるの!?

いや、まさにそうなのである。今俺はガンダムに乗って戦っているところだ。

俺の乗るガンダムはビームセイバーを振るい、それを東方師匠こと、東方不敗・マスタージャアのクローンガンダムが、なんとその拳で受け止めている。

しかも、さすがが東方師匠というべきか、クローンガンダムは、その光の剣に斬られるどころか、むしろその剣を押ししている。

やばい、このままでは押し切られてやられてしまう!

「とりやつ!!」

幸い、戦い方は「身体」が覚えてくれているらしい。その記憶が教えるままに、俺はクローンガンダムを蹴り飛ばし、それと同時に後ろに飛びずさつて距離を取る。

にらみ合う俺のガンダムと、クーロンガンダム。俺はにらみ合っているその間に、今のこの現状を再確認することにした。

今俺は、金髪碧眼の美少女になっている。胸のふくらみはあるが、それでも大きいとは言えない。言わば、発展途上の身体。記憶によれば、名前は『ジャンヌ・エスプレッソ』といい、ネオ・ノルウェーのガンダムファイターだそうだ。

そしてこのガンダムは、登録番号『GF13-047NN』機体名『ガンダム・ピュセル』。ジャンヌの剣技を再現することを重視した機体とのこと。必殺技は『約定必勝・ウイニングセイバー』。

この機体をもってガンダムファイト13回大会に参戦したジャンヌは、ここ新宿で東方師匠と相まみえ、ガンダムファイトを挑んだ、ということらしい。

それにしてもまさかこんなことになるとは……確かに俺はGガンダムが好きで好きで、『超級!!』を読んでいるうちに線路に転落してお亡くなりになるほどのGガンダム好きの男子高校生だったけど、Gガンダムの世界に転生し、しかも女になり、さらには東方師匠と戦っているなんて。

だが、こうして転生し、東方師匠と剣を交えることになったからには、やらなければならぬことがある。それは、彼を止めること。

地球の未来のこととか犠牲のこととかもあるが、一番の理由は、彼を止めなければ

ガーに当たる技) クーロンフィンガーがぶつかりあった!

さ、さすが師匠! そのパワーは俺なんかとは段違いだ。ふんばっても、気力を振り絞っても押し切られてやられてしまいそうだ。だが、この世界のためにも、師匠のためにも、ここでやられるわけには……!

その時だ。

俺の脳裏と意識に見えた景色と、聞こえてきた声があった。

* * * * *

廃墟と化した町、濁った川、荒れ果てた森。天空に浮かぶコロニーたち。

そしてその町にたたずむ東方不敗・マスターアジア。

これは……前回のガンダムファイトの風景?

その惨状を目の当たりにした師匠は声もなく慟哭する。

声なき慟哭のはずなのに、その声は俺の意識に届いていた。

——これは……この惨状は……ま、まさか……!

——わしが、わし自らが、地球を破壊し、汚し、この惨状を招いていたというのか

!

——なんとということだ! これは……ガンダムファイトの真の闇に気づかず正義
気どりで拳を振るい続けたわしの罪!

—— おおおおお!!

—— 地球よ、自然よ、すまなんだ。わしが早くそれに気づいていればこんなことはならなんだのに……!!

—— 許せ、海よ、山よ、湖よ、わしが愛しんでいた自然、地球よ! うおおおおお!!

聞いたことがある。

優れた格闘家同士は、拳を通して己を語るものだ。

—— ということは、これは師匠の心の叫び……!?! 俺のGガンダム愛がそれを聞かせてくれたのか……?!

* * * * *

そして気が付くと、俺は再び師匠と必殺技をぶつけあっていた。

だが俺は師匠の心の慟哭を感じ取ったと同時に気が付いたことがある。

ここで師匠と拳をぶつけ合っている場合ではない。こんなことをしても、地球の汚染も、師匠の嘆きも、止めることはできないのだ。

そのためにはやはり、師匠の言う通り、人類を地球から巢立たせるしかない。だが、そのために人々が犠牲になることは望まない。それに原作のままの人類排除を行っていったら、原作通りの結末を迎えてしまう。そうさせないためには——。

俺はビームセイバーを消すと、とっさに身をかわした。

師匠のクローンフィンガーが俺のピュセルガンダムの左肩に炸裂し、俺の左肩に激痛が走る。

「あがつ……!!」

『どうした、なぜ拳をひく？ 戦いの途中で拳を退くなど、勝負を捨てた者のすることぞ』

しかしその師匠の言葉に俺は臆せず、ガンダムピュセルを降りて返す。

左肩の痛み……師匠の心の痛み……に耐えながら。

「いえ。ここで師匠と戦っても、世界を救うことも、師匠を救うこともかなわないと悟りましたから」

『なに？』

「ガンダムファイトが続いている限り、いえ、人類が地球で営みを続ける限り、地球は汚れ破壊され、師匠の嘆きや憂いは深まっていく……」

『!? おぬし……』

その時、あたりを地震が襲う。そして、地を割って現れたのは……。

『デビルガンダム!? まさか、この娘の想いの強さにひかれて現れたのか!?』

「それを止めるためには、強大な力で、人類を無理やり巢立たせるしか……。キョウジで

はなく私が……」

そして俺は、デビルガンダムに向けて歩き出す。

デビルガンダムから飛び出した触手で、俺のファイトスーツが引き裂かれ、俺は一糸まともぬ姿になったが、俺は迷わずデビルガンダムに向けて歩いていく。

その様子を、師匠は息をのんで見守っている。

『まさかおぬし、キョウジ・カツシユの代わりになつてデビルガンダムのコアになろうというのか!』

「はい……。そうすることで、私の望む、私なりの人類排除が為せるなら……」

そして俺は、デビルガンダムの前に立った。

その胸装甲が開き、中から一人の男が排出される。Gガンダムの主人公ドモン・カツシユの兄、キョウジだ。そしてそれと同時に、デビルガンダムの中から触手が再び放たれ、俺の細い腕を、きやしやな体を、きれいでなめらかな肌をからめとっていく。

そして俺は引き寄せられるように、デビルガンダムの中に取り込まれた。そして——
—!!

* * * * *

「う、うう……?」

キョウジ・カツシユはふと目を覚ました。見渡すと、そこは地球上の町、新宿の荒れ

果てた風景。

だが彼はすぐ、自分のおかれていた状況に違和感を抱いた。

「どういふことだ……？ 私は、アルティメットガンダムと共に地球に降りたはず。そして暴走してデビルガンダムとなった機体に取り込まれてコアに……？」

そこで見上げた彼は目を見開いた。そこにあつたのは元アルティメットガンダムのデビルガンダム。だがその姿は、地球に墜落した時より大きく、強く、美しいものとなっていた。

「馬鹿な、もう第二形態に!? しかも、計算されていたものより美しいものになっているとは……!!」

そう疑問の叫びをあげたカツシユに顔を向けたデビルガンダムは、一瞬彼を見つめると、そのまま地面へと潜っていった。

「なんとということだ！ 早くドモンたちと会い、対策をとらないと大変なことになる！」

1st Fight 『兄妹を守り抜け！ 復活の雇われ ガンダムファイター!!』

ある一室。そこで数人の男が向かい合っている。

一人の男が椅子に縛り付けられており、それを数人の男がにらみつけている状況だ。

そして、一人の偉そうな、だが胡散臭そうな男が口を開いた。

「我々の招待を受けてもらって、感謝している。ミケロ・チャリオット君」

「何を言ってるやがる、無理やり連れてきたくせしてよ。まあ、あの臭い豚箱から出してくれたことには感謝するがな。それで、俺に何をさせたいんだ？」

「物分かりがよくて助かるよ。君には、この男を連行してきてもらいたい」

そう言ってる男が出したのは、一枚の、兄妹が映った写真だ。

それを見たミケロが、それを一瞥したところで、男のほうに向きなおって聞く。

「こいつは……ネオ・メキシコのチョコ・ロドリゲスか？ 奴さんは確か……」

「そうだ。ネオ・ジャパン代表のドモン・カッシュとの戦いで機体が大破、死亡したとき
れていて、我が国の政府の首脳もそう信じている。だが、我々情報部は、実はそれは虚
偽の情報で、彼はひそかに逃げ延びていると突き止めたのだよ」

「へえ……」

ミケロがその声をあげる。それに対し、男は表情を変えず、うなずいて答えた。

「奴が本当に死んだのならどうこうすることもなかったが、生きのびているなら話は別だ。敗戦して我が国に泥を塗ったばかりか、それまでガンダムファイトから逃げ続けた奴を許すわけにはいかない。ただちに我が国に連れ戻して、その罪にふさわしい罰を受けさせなければならん、と、我々のオフィサーがおっしゃっていてね」

「それで俺に、奴を捕まえてきてほしい、と」

「そういうことだ。生死や手段は問わんが、その代わり、任務中に君に何が起こっても、我々……ネオ・メキシコは関知しない」

この手の輩が言う常套句だな、とミケロは皮肉な笑みを浮かべて口を開いた。

「それで、捕まえたなら何をくれるんだ? こんな危ないことをするんだ。ただ働きなんてごめんだぜ」

「わかっている。この任務が成功したら、ネオ・イタリア政府にかけあって、君の身の安全を保障すると同時に、それなりの報酬金も用意しよう」

「わかった。この俺の金の足にかけて、その依頼、クリアしてきてやるよ」

そして部屋は再び闇に包まれた。

* * * * *

俺……ジャンヌ・エスプレッソは、ネオ・アメリカの直轄地の南端にある小さな町に
来ていた。

俺と師匠……東方不敗・マスターアジアの目指す『地球からの人類排除』のための同
志を求めていることだ。『彼』はガンダムファイトのせいで良い目にあっていないかったし、
賛同してくれるとは思うのだが、こればかりは実際に会ってみないとわからないな。

さて、街のあちこちには、おいしそうな食べ物売っている店がたくさん。思わずつ
ばを飲み込んでしまう。

デビルガンダム細胞で作られたこの体は、特に食事をとる必要はないが、それでも食
欲は普通にあるのだ。

* * * * *

ジャンヌが小さな町に立ち寄る数日前、彼女がデビルガンダムに取り込まれた直後。
東方不敗・マスターアジアは目の前に立つデビルガンダムの強く、美しい姿に驚愕し
ていた。

「おお……この姿は……！　そうか！　デビルガンダムのコアに真にふさわしいのは女
性ということだったのか！　これなら、これなら人類を排除し、地球に自然を取り戻す
ことも……」

「いいえ、すみませんが、師匠の望む人類排除は諦めてもらわなければなりません」

「ぬうつ……!?!」

声とともに、背後から現れた気配に振り向いた彼が見たのは、先ほどデビルガンダムに取り込まれた少女と寸分違わぬ人物だった。

「おぬし、その姿は……そうか、デビルガンダムD G 細胞でクローンを生み出したのか」

「はい。私の本体はデビルガンダムの体内でその制御に集中しています。私はその本体の代理として生み出された存在。といっても、自我や記憶は、本体と同じものですし、私の見聞きしたものは、本体にも伝わるようになってますが」

「なるほどな」

「はい。それで、ここからの人類排除……いえ、人類追放計画は、私の考える通りに変更させていただきます。あなたの思う通りの、人類を絶滅させての人類排除は、少なくともあなたにとっては悲劇しか生まないから」

そのジャンヌの指摘に、マスターアジアは面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「ふん。わかったようなことを言う」

「いえ、感じて、考えたことです。師匠の拳から、師匠の心の慟哭を感じたことから」

「なんだと……!?!」

マスターアジアを目をむいた。確かに一流の武闘家は、拳を交えることで相手に自分の想いを伝えることができる。

だが、こんな愛弟子よりも若く、実力も自分より劣る娘が、その境地に達していいようとは。もしかしたら、これは天が彼女に与えたもうたことか。そしたら彼女は、天がこの地球に与えた救いなのかもしれない。

「まさかおぬしもその境地にたどり着いているとはな。大した娘だ」

「いえ。私はただ、師匠も、この世界に生きる全ての人々も、そしてこの世界が大好きなだけです。その愛が奇跡を生んだだけですよ」

「そうか。して、わしの計画がダメならどうする気だ？」

その彼の問いかけに、ジャンヌは視線をそらすことなく答えた。

「人類を地球から追い出すのには同意しますが、人類を抹殺するまでのことは必要ないと思います。人々を宇宙に追いやり、地球を閉ざせば……。デビルガンダムの力ならそれが可能なはずですよ」

「ふむ……よかろう。うぬの意見を受け入れよう。地球が青き姿を取り戻すなら、その過程にこだわるつもりはないからな」

「ありがとうございます」

そして、話は現在に戻る。

* * * * *

そして俺が店からフランクフルトを買い、食べながら歩いていると……。

「何をするんだ!」

「黙れ、不法移民者(ゴ)ときが!」

町の一角が、何かもめているようだ。その声には何か気になるものを感じ、行つてみると……。

警官らしき男たちが、もう一人の男に暴行をふるっている。その暴行されている男は……なんてことだ、チコ・ロドリゲスじゃないか! ネオ・メキシコのガンダムファイター。今は死亡扱いで、ネオ・メキシコの追っ手から解放されたはずだ。

とはいえ、放つておくことはできない。俺がここに来た目的は、彼と接触することだしな。

俺は手元からあるものを取り出して、警官に向けて投げつけた。地面にぶつかると同時に白煙が噴出し、周辺を白く染め上げる。そして急いでその中に飛び込んだ。

「チコ・ロドリゲス、こっちです!」

「君は? どうして俺の名前を?」

「話はあとです。早く!」

そして俺たちは白煙の中、逃げ出していったのだった。

* * * * *

「そうですか……。違法入国で、このネオ・アメリカ側に……」

「ああ。妹の具合が悪化してきてな。こちらなら医療も充実していると思って、入国したんだ」

警官らしき奴らから逃げ出した俺は、この町の片隅にあるぼろ小屋で、チコと会話をしていた。

そういえば、チコの妹は、重病で余命が一年しかないという話だったな。それは兄であるチコとしては、心配だし助けたいと思うだろう。彼らが密入国したいと思っても、それを責めることはできない。

しかし、これは、彼を説得するのは諦めたほうがいいか……？　いくら俺の考えに賛同してくれても、そんな余命いくばくもない妹を置いていくことはできないだろう。それを責めることも、無理やり来てもらうことも、俺にはできない。

……待てよ、チコの妹の病といえは……。

「ん、どうしたんだ？」

「いえ、なんでも……」

と、そこで！

突然扉がぶつ飛ばされた！　こちらに飛んでくる扉を、俺は持っていた剣で真つ二つにして、二人に衝突するのを阻止した。

「へへへ、見つけたぜ、チコ・ロドリゲス……！」

そして扉の向こうから聞こえてくる、聞き覚えのある声。

その声の主は……!!

「お前は……!!

「ミケロ・チャリオット! 元ネオ・イタリアのガンダムファイター!」

そう。ネオ・イタリアの代表で、ドモンの最初の対戦相手だった男!

あの戦いの後、ネオ・イタリア警察にかまっていたはずだが……。

「元ネオ・イタリアだったのは昔の話さ。今はただの雇われガンダムファイターだ。さて、ネオ・メキシコのお偉いさんがお怒りのようだな。俺と一緒にネオ・メキシコに帰ってもらうぜ。チコ・ロドリゲス」

「くそ、一体どこから、俺が生きていることがわかったんだ!」

「チコ、ここは私に任せて、早く逃げてください!」

「す、すまない! 恩に着る!」

俺はそう言うのと、改めて剣を構えて、ミケロと対峙した。

それを見て、奴はにやりと笑った。

「へえ、小娘、お前もガンダムファイターだったのか。遊んでやりたいところだが、今は依頼のほうが優先なんだな!」

そう言つて、ミケロは俺を無視して、脱出しようとするチコに襲い掛かるが……。

「させないと言っています！」

そのミケロの前に立ちほだかり、剣を横一文字になぐ。奴はそれをたやすくかわして距離をとった。

この間に、チコと妹さんは逃げられたみたいだが、それでもミケロは余裕の笑みを崩しはしなかった。

「なかなかやるじゃねえか。だが、追っ手が俺だけだと思つてねえか？」

「……まさか！」

ミケロの奴、邪魔が入った時のために、別の追っ手を用意していたのか！ うかつだった！

自分のうかつさを呪いながら、二人を追う準備をしようとする俺だが……。

「さっきの言葉を返してやるよ。させねえと言わせてもらおうぞ！」

「くっ……！」

* * * * *

妹を抱きかかえ、町の裏路地を逃げていくチコ・ロドリゲス。

飯の住処から大きく離れ、もう大丈夫だと、安心して息を吐く彼だが、それはまだ甘かった。

「!!」

彼の前方から、ネオ・メキシコの軍服を着た男たちが近づいてきたのだ。

「チコ・ロドリゲスだな? ネオ・メキシコ情報部だ。我々と一緒に来てもらおうか」

「くっ……」

男たちが一步を踏み出し、チコは一步後退した。そして、男たちが二歩目を踏み出したところで、チコは逃げようと後ろを振り向こうとするが、そこからも男たちが……!

「我々も手荒なことはしたくない。大人しく捕まったほうが身のためだ」

「くそ、こんなところで……!」

と、そこに。

「待てい!!」

* * * * *

ミケロをなんとかまいた俺は、チコたちの後を追っていた。無事だといいいのだが……。

必死に走る俺が、なんとかチコたちに追いつくと、そこには……。

「う、うぐ……」

「(、)これは……」

地面にはいつくばっている、ネオ・メキシコの追っ手と思われる男たちと、妹さんを抱きかかえたままたたずんでいるチコと、その横のもう一人の男。その男は……。

「ドモン・カツシュ！」

そう、Gガンダムのも主人公で、尊敬する東方師匠の愛弟子であるドモン・カツシュだった。

その彼は、俺をにらみつけて口を開いた。

「ふん、ウルベから、ミケロがこの町に潜伏して悪さを図っていると聞いていたから来てみれば、やはりか。……お前も、ミケロの一味か？」

「いえ、そんなことはありません。私はこのチコを守り、逃がしてあげたんです」

俺は焦る心を落ち着けてそう答える。ガンダムファイターとして戦いを挑まれるならまだしも、こいつの仲間と思われるのは心外も心外だ。

ドモンの厳しく鋭い視線を真っ向からとらえ続ける。やがて、それでわかってくれたのか、警戒を解いてくれた。

「そうか。疑って悪かった。だがその身のこなし、かなりの実力のあるファイターと見た！俺とガンダムファイターを……」

と、そこに！

街の一角を割り、一機モビルファイターのM Fが現れた！ あれは……あちこち変わってはいるが、ミケロのネロスガンダム！？

『ちきしょう、役立たずどもが！ それならこのネロスガンダム・スクラップでぶっ殺し

てやる! 生死は問われなかったからなあ!』

「おのれ、ミケロめ! 往生際が悪い! レイン、シャイニングを……」

シャイニング・ガンダムを呼ぼうとするドモン。しかし。

『ごめんなさい、ドモン! シャイニングは今、整備中で動かせないわ!』

「なんだと!?! えーい、こんな時に……!」

つまり、今回ドモンは出れないというわけか。それなら……。

「ドモンさん、ここは私に任せてください」

「何、いいのか?」

「はい」

そう言つてほほ笑む。乗りかかった船だしな。

そして俺は、ミケロのネロスガンダム・スクラップに向きなおる。そして。

「来て! ガンダムオルタセイバアアアア!」

その声とともに、天から光が降り注ぎ、そこから一機のガンダムが降りてくる。まるで天使……いや、墮天使のように。

黒い翼を持ち、黒い鎧を身にまとう細身の姿。それはまさに、黒衣の女騎士のごとし。

これが俺……ジャンヌ・エスプレッソの、ガンダム・ピュセルの新たな姿、ガンダム・オルタセイバだ。

それに乗り込むと、ファイティングスーツを苦悶の声を挙げながら着込み、戦闘態勢をとる。

「あなたはガンダムファイターではないけど、あえて言わせてもらおうわ！ ガンダムファイター！」

『レディーー！』

「ゴオオオオオオオ!!」

そして俺のオルタセイバーと、ミケロのネロスガンダムSC（スクラップ）とのガンダムファイターがはじまった！

ネロスガンダムSCスクラップのパンチとキックを組み合わせた見事なコンビネーションを、俺はオルタセイバーの運動性を活かしてかわしていく。そしてその隙について、ビームセイバーを振るおうとするが……。

ガシイ!!

「なっ!?!」

ミケロの、まさに目にもとまらぬ蹴りで、そのビームセイバーを叩き落とされてしまった。俺はとつさに、右腰の予備のセイバーを抜いて、その場を飛びのく。

こいつ……あの蹴りにさらに磨きをかけている!?! 『男子三日会わざれば刮目してみよ』というが、それがこんな奴にも該当するとは!?!

『どうだ驚いたか! こんなネロススクラップだがな! 足回りだけはさらに強化されてるんだよ!! 受けな! 必殺!! 銀幻の脚い!!』

ネロスガンダムSCは突進してくると、まさに銀色の幻と呼ぶにふさわしい、数百発の蹴りをオルタセイバーにはなってきた!

俺は必死にそれを交わし続けるが、かわしきれずに一撃をもらってしまっ! 追撃をもらう前に飛びのくことができたのは、まさに僥倖だ。

『なかなかやるじゃねえか。ドモン・カッシュと戦った時を思い出して、身体が熱くなってくるぜえ……!』

「あなたもね。ただの悪党と生きていたけど、やるじゃない。ならば私も技を見せてあげるわ。きなさい!」

『おもしろえ!』

構える俺のオルタセイバーに対し、ミケロのネロスガンダムSCは再び突進してきた。そして。

『とどめだ! 銀幻の脚いいいい!!』

あの無数の蹴りを放ってきた! それに対し俺は……!

「流派東方不敗亜流! スプラッシュソードオオオオ!!」

『なっ!』

無数の突きを放ってそれに対抗した！ 俺は本体がデビルガンダムのコアになったあと、東方師匠から流派・東方不敗を教わった。

付け焼き刃的なものであったが、DG細胞による影響からか、半分ほどではあるが、その技のある程度体得することができた。その技を未完ながらも自分の技として昇華することも。

この技、スプラッシュソードもその一つ。元はドモンがチボデーとの再戦で見せたゴッドシャドーだ。アレの応用で、無数の突きを放つようにしたのだ。

* * * * *

そのガンダムオルタセイバーのスプラッシュソードを見たドモンは、真剣な表情を浮かべた。彼女の技が、自分の使う流派・東方不敗ととても似ているように感じたのだ。

「あの技……あの娘も、俺と同じく、師匠から流派・東方不敗を習ったのか……」

* * * * *

はてしなく続く、俺が放つスプラッシュソードの無数の突きと、ミケロが放つ銀幻の脚の無数の蹴りの激突。

俺の無数の突きは、無数の蹴りをことごとく迎撃し続けた。

さすがに本人が足回りを強化したというだけのことにはあり、スプラッシュソードをもつてしても、迎撃し続けるので精いっぱいだ。だが、負けるわけにはいかない！

俺は必死に、スプラッシュソードを放ち続けた。

そしてついに! 俺のビームセイバーの突きが、ネロスガンダムSCの脚を貫き、砕いた!!

『ぎゃあああああ!』

「やりましたね……。自慢の脚をやられたら、あなたももうおしまいですね」

そう言つて俺は一步を踏み出す。そこに。

『ま、待つてくれ。あんたも覚えてるだろう? ガンダムフアイト国際条約第二条……!』

「ええ、覚えていますよ。『敵のコクピットは狙つてはいけない』……。でも、今のあなたはガンダムファイターではありません。ただの雇われファイターです。なら、別に第二条を適用する必要はありませんよね」

『ぐ……』

さらに一步を踏み出す。それでミケロも覚悟を決めたのか。

『や、やつてやるううう!! 俺も元はガンダムファイターだあああああ!!』

ミケロは右脚を破壊されたネロスガンダムSCを突進させてきた。そして、壊されて使え物にならない右脚で膝蹴りを放ってきた!

そこに。

「ミケロ……。あなたの、わずかに残っていたガンダムファイターの魂に敬意を表し、この

技で応じます！ 必殺!!」

折りたたまれていた翼が展開し、ガンダムオルタセイバーがエメラルドグリーンに輝く！

「絶対勝利・エクスカリバーン!!」

俺のオルタセイバーも突進！ すれ違いざまに、ネロスガンダムSCを横一文字に一刀両断する。

そして爆発!!

ガンダムファイトは俺の勝利で幕を閉じた。

実はこの時、俺はわざとコクピットを狙わなかった。心の中にわずかながらもガンダムファイトとしての魂が残っていた彼に感嘆した俺は、彼が生き残るか死ぬかを天に預けたのだ。もし天がミケロのガンダムファイトの魂に感じ入ったなら、彼は助かるかもしれない。天に見放された死んだとしたら、その時はその時。極悪人に天罰が落ちただけのことである。

* * * * *

「それではドモン。ジーナさんのことはよろしくお願いします」

「ああ、わかった。任せてもらおう。ネオ・ジャパンのほうには既に連絡をしておいた」
そう返事をするドモンに、レインが横やりを入れてくる。

「連絡したのはあなたじゃなくて私よ、ドモン」

「わ、わかっている! 無事に彼女をネオ・ジャパンコロニーに連れ帰り、最先端医療を施してもらえるようにする」

「ありがとう、ドモン・カツシュ。お前には二度も助けられた」

「気にするな。同じガンダムファイターとしてのよしみだ。妹さんが快方に向かった暁にはすぐに連絡する」

そしてドモンとレインは、チコの妹、ジーナを乗せた救急車と共に去っていった。

そう、『超級!』を読んで、ジーナの病はネオ・ジャパンの最先端医療で治せることを知っている俺は、ドモンに頼んで、ジーナをネオ・ジャパンに連れ帰って、治療をしてもらうようにお願いしたのだ。

ドモンは、俺が東方師匠から流派・東方不敗を習った、いわば同門の身であることからその願いをすんなり聞いてくれた。本当にありがたいが、その俺が師匠と共に『地球からの人類追放』のために動いていることを思うと、少し申し訳ない気分である。

さて、ドモンたちが去っていったところで、俺は改めて、チコのほうを振り返った。

「それで本当に、私たちに力を貸してくれるんですか? 四天王の一人になつてくれると?」

「ああ。地球に降りて過ごしてきてわかった。地球も汚され、傷ついていると。もしか

したら、ジーナの病状が急に悪化したのはそのせいもあるのかもしれない。いわばジーナは、そうした人類の汚染や破壊の犠牲者なのかもしれないと思つた」

「……」

「正直、人類を宇宙に追放するというやり方には異を唱えたいところもあるが……だが、犠牲者を出すことなく、それを果たして、地球の環境をよくするというのであれば、ジーナを助けるため、ジーナのように汚染や破壊のために苦しむ人たちのため、俺がそれに力を貸すのを拒む理由はない」

「そうですか……ありがとうございます」

そう言つて俺は懐からカプセルを取り出した。

「それを俺に感染させるのか？」

「いえ。あなた本人に感染させるつもりはありませんよ」

「？」

そして俺はカプセルを地面に置いた。そして祈る。

「目覚めて、そして進化して……！」

すさまじい揺れ。そして地面から一機のモビルファイターが現れた。それは……。

「これは……俺のテキーラ!？」

「いえ、これはもう、テキーラガンダムではありません」

「なんと!?!」

俺たちの目の前で、テキーラガンダムはその姿を変えていく。

その腕が、脚が、そして頭部、胴体が新たな姿へと変化していった。

そして現れたのは、テキーラガンダムの面影を残しながら、その鋭さと力強さを増し、その一方、邪悪さを残したガンダム。

そう。これが……。

「これがあなたのガンダム。テキーラガンダムが、DG細胞によって進化した機体。ガンダム・ヘルトライデントです」

「ガンダム・ヘルトライデント……」

「改めて、これからよろしくお願いします。デビルガンダム四天王ナンバー3、チョコ・ロドリゲス」

「ああ」

そう言葉を交わし、握手を交わす俺たちの姿を、俺のガンダム・オルタセイバーと、チコの新たなガンダム、ガンダム・ヘルトライデントが見下ろしていた。

2nd Fight 『変幻自在の逃走者！ 変わり者 ファイターに隠された魂!!』

「ここが、オランダのキンデルダイクか……」

俺……ジャンヌ・エスプレッソは、周囲の絶景を見て、思わず素の口調に戻りながらつぶやいていた。

今は、最後のデビルガンダム四天王の情報収集をチョコに任せ、ガンダムファイトのため、ここオランダを訪れているところだ。俺も一応、ガンダムファイターだからな。

それにしても、本当にこのキンデルダイクに並ぶ風車の群れは絶景だなあ。本当に癒され、自分がデビルガンダム四天王であることすら忘れてしまう……いやいや忘れていてはダメだろ俺。

「ん？」

と、そこで俺は違和感に気づいた。風車のうちの一体が、他の風車とほんの少し違うのだ。普通の人ではまず気づかないほどだが。俺がD・G細胞クローンだからこそだろうか。

とはいえ、ずっと見ていると、特に変化はない。違和感は気のせいかな。

そう思って、俺はきびすを返して、先に進もうとした。

その時!

ガシャガシャガシャ!

なんということだ! その違和感を感じた風車が突然変形して、ガンダムになったじゃないか!

そういえば……思い出した!

原作でのネオ・オランダのガンダムはネーデルガンダム。風車に変形して予選をスルーして決勝まで進んだ奴だと。

そのことを思い出した俺を横目に、ネーデルガンダムはそのビームサーベルを振り下ろしてきた! 俺のガンダムファイターとしての気に反応したのか!? それならば!

俺はその攻撃をかわし、そして。

「来てええええ!! オルタセイバアアアアアア!!」

くるりと一回転してガンダムオルタセイバーを呼び出した。

そして乗り込み、ビームセイバーを抜き放つ。

「それじゃ行きます! ガンダムファイト、レディーゴオオオオオ!!」

そして、俺のガンダムオルタセイバーと、ネオ・オランダのネーデルガンダムとの戦いが始まった! しかし、その決着はあっけなくついた。

「なっ!?!」
ビームセイバーの一撃で、右肩の装甲がはぎとられると……。

ネーデルガンダムは突然、煙幕を発したのだ。そして煙幕が晴れた時には、目の前には誰もいなかった。戦闘を避けるという、元々の戦略を思い出したのだろうか？

だが、逃げられたのなら仕方ない。俺はビームセイバーをしまい、オルタセイバーから降りた。

* * * * *

対戦相手のネーデルガンダムに逃げられてしまった俺は、仕方ないので、ネーデルを探しながら、オランダ観光を続行することにした。

ガンダムファイトや人類の所業による汚染で荒れ果てている地球ではあるが、このオランダ地域は、それほど汚染されてはいないようだ。川を流れる水もとてもきれいだし、空気もとても清々しいし、緑も豊かだ。

東方師匠がいたら、この美しさに感激していたかもしれない。もしかしたら、ネオ・オランダの代表が必死にファイトを避けているか、その影響だろうか。

そんなことを考えながら歩いていたら、夕方になってしまった。どこか宿を探さないと。

そして町に戻って歩いていると、ある宿屋が目に入った。それほど大きくないが、小

きれいなのももちろん、なぜか気になるものがあったのだ。

そして入ってみると、カウンターには一人の男が。ぱつとしない、大人しそうな男性だが、俺にはわかった。筋骨たくましく、その気配は一流の格闘家だと感じさせる。

もしや……? と思ったが、その疑問をとりあえず心の奥に押し込んで、部屋を取ることにした。微笑みを浮かべてカウンターへ向かう。

「いらつしやい、お嬢さん。お泊りかい?」

「はい。どれくらいいるのかわかりませんが、とりあえず一週間ほど」

そう言って、ネオ・ノルウエーのガンダムファイト委員会からもらった資金の一部を出す。

「ありがとうございます。それでは、13番の部屋へどうぞ……っ」

と、その時だ。突然その男が、右肩を押さえてうめいたではないか!

「どうかしましたか?」

「い、いえ、大丈夫です。仕事で痛めてしまったんですかね、ははは……」

そう言って男は部屋の鍵を、俺に渡してきた。俺はそれを受け取って、あてがわれた部屋の上って行ったが、その中である疑問を深めていた。

もしや彼が、ネオ・オランダのガンダムファイター……?

.....

.....

そして、真夜中。俺はある音で目が覚めた。ガンダムファイターである俺にはわかる。パンチやキックなどの演武をしている音だ。

その音が気になって、窓を開けると……。

いた。

あの宿屋の主が、上半身裸で、パンチやキックを繰り返していた。やはり彼が、ネオ・オランダのファイターで間違いないようだ。

その様子からは、燃える闘志を抱いているが、何かの理由で、それを抑え込んでいるみたいだ。何か事情があるのだろうか？

やがて、宿屋のほうから一人の女性がやってきて、男に何かを会話する。男は不本意そうにうなずくと、服を着て宿屋に戻っていった。

色々二人の関係や、ファイトを避ける理由について疑問は尽きないが、二人の様子から、それを聞くのは野暮だろう。俺は、そつと窓を閉じて、眠りについた。

* * * * *

そして一週間が過ぎた。だが、ネーデルガンダムはあれから一度も姿を現さなかった。やはり、戦わずに予選をやり過ぎず戦略なのか……？

なら仕方ない。ここでのファイトは諦めよう。俺は旅の準備を整え、部屋を出ていった。

降りるとカウンターには、あの男と、昨日のあの女性がいた。旦那と同じくらいに大人しいものの、どこか鋭さを感じさせる女性だ。年のころは、男より少し若いぐらい……20台後半だろうか？

「ああ、お嬢ちゃん、チエックアウトかい？ もうそんなに経ったか」

「はい、お世話になりました。オランダを出て、次の地域に行く予定です」

「そうか……」

そこで男は何かを言おうとしたが、そこで女性が腕をつかんで引き留めようとする。

そこで彼は、何かを飲み込むような表情を浮かべ、そして言った。

「いや……なんでもない。良い旅をしてくれよ」

「……ありがとうございます。それでは、次に会う時まで、お元気で」

そして俺は、宿屋を出ていった。

……

……

……

俺は再び、キンデルダイクの風車通りの前を通っていた。この町を出る前に、この景

色をもう一度見たいと思ったからだ。いやー……本当に癒される。

それにしても、四天王探しをしているチコからの連絡はまだ来ないな。まあ、そう簡単に見つかるものでもないからな。実力者で、ガンダムファイトや今の社会に疑問を持つている者、という条件があるから。

まあ、気長にやるしかないな。最悪、師匠、俺、チコの三人で計画を進めるしかないかもしれないが。

……と、そう思っている。

殺気、いや闘志を感じた！

俺が飛びずさると、そこにビームサーベルが振り下ろされる！

後ろを振り向くと、そこにはあのネーデルガンダムが！　そこから聞こえるのは聞き覚えのある声。

『やはり、君がガンダムファイターだったのだな。君がここを出る前に、一度ファイトを望みたい！』

「いいでしょう。私も、ファイトをすることなく出るところだったので、もやもやしていたところですよ！」

そして、オルタセイバーを呼び出し、対峙する。

だが、ファイトが始まろうとした、その時！

「待つて! ルドガー! ルドガー・バーホーベン!!」

あの女性が駆け付けてきたではないか!

「戦いをやめて、ルドガー! ネオ・オランダの委員会からの指示は、ファイトのスルーだったはずよ!」

『止めるな! 例え、君が委員会から派遣された監視役でも、このファイトの邪魔だけは……』

しかし、その男……ルドガーの言葉に対し、女性は首を振った。

「違うの! 私はあなたに死んでほしくないのよ! あなたは、一年前のデビルガンダムとの戦いで、ファイトをするたびに寿命を削るような大けがを……」

「!!」

それを聞いた俺は衝撃を受けた。まさか彼が、ルドガーがデビルガンダムの戦いの犠牲者だったとは。その時、俺は四天王ではなかったとはいえ、申し訳なさすぎる。どうしたら彼への償いになるのか……?」

その俺をよそに、二人の会話は続く。

『わかっていた……。俺も君の愛に気づいていた。君が俺の身を案じていたことも。だから今まで、闘志を押し殺して、極力ファイトしないように心がけてきた。だが、この熱く燃える思いを封じ込めることはできなかつたのだ!』

「ルドガー……」

『許してくれ、アマリア……。闘志を抑えきれず、再びファイトに身を置き、戦いに身を置くこの俺を……！』

そしてルドガーは、ビームサーベルを俺へと向ける。

『お嬢さん！ 改めて君にファイトを申し込みたい！ 受けてくれないか。この俺の闘志のために！』

その申し込みを受けて、俺は少し迷う。受けて、寿命を縮ませるファイトをしていいものかどうか。

……いや、愚問だな。俺がガンダムファイターで、目の前に何を犠牲にしても、ファイトを望む者がいるなら、俺ができる償いは一つだ。

「わかりました、受けましょう。ただし、一つだけ条件があります」

『なんだ……？』

「この一戦で、その闘志を終わりにしてください。もちろん、あなたを満足させるだけのファイトができるように頑張ります。だから、これでもうガンダムファイトから手を引いてください。アマリアさんのためにも……」

『……』

そして数秒の沈黙。

『わかった、恩に着る。ガンダムファイト!』

「レディー……ゴオオオオオオ!!」

かくして、俺とルドガーの、ルドガーにとって最後のガンダムファイトが始まった!

* * * * *

ネーデルガンダムがビームサーベルを振り下ろす。それをガンダムオルタセイバーはひらりとかわし、ビームセイバーで切りかかる。ネーデルはそれを受け止めるも、オルタセイバーが左手で抜いたサブのビームセイバーで、そのビームサーベルを弾き飛ばされてしまう!

「はあっ!!」

オルタセイバーは右手のビームセイバーで斬撃を放つも、なんとネーデルガンダムは胸の風車を取り外し、それでビームセイバーを受け止めた!

「行くぞー! ローテレンデ・リング!!」

さらにその風車を回転され、逆にビームセイバーを弾き飛ばす! そして横なぎにその回転する風車をふるってきた!

「くっ!」

それをまともに受ければ、機体を直つ二つにされかねない! オルタセイバーは後ろに飛びずさり、それをなんとかかわした。だが完全にかわしきることはできずに、腹部

に傷を作ってしまう。

「なかなかやりますね……」

「君もな……。だが、これで終わりではないだろう？　俺の闘志は、まだまだ燃え尽きて

はいないぞ！」

「もちろんです！」

そこでジャンヌ、ルドガーの二人とも笑みを浮かべたのは、なんの偶然か？　それとも、ガンダムファイターだからこそ、か。

そして、ネーデルガンダムは風車を胸に戻した。そして再び構える。

「これを受け止めてみてもらおう！　必殺！　ネーデルタイフーン!!」

すると、その風車が高速回転をはじめ、大きな竜巻を生み出したではないか！　その竜巻は、巨大な恐るべき風の竜と化し、ジャンヌのオルタセイバーに襲い掛かる！

「くっ……！」

ジャンヌは必死にその風圧に耐えるが、ガンダムオルタセイバーは少しずつ、風の勢いに押され、後退していく。

一方のルドガーも無事ではない。

「ぐはっ……！　まだだ……俺は……まだやれるぞ……！」

血を吐きながら、さらにネーデルタイフーンを放ち続ける。

そのルドガーの生み出す竜巻に、ジャンヌは必死に耐えるが、それも限界が近づいてきた……。

「このままでは……何か打開策を……」

と、そこで、ジャンヌは一つの、流派東方不敗の技を思い出した。

「あの技を応用すれば……でもできるの……? 失敗すれば、私はこの竜巻に飲み込まれる……」

だが、そこで瞳に闘志をさらに宿らせる。

「ううん、結果がどうでもやらなければ! そうしないと、彼の闘志は満足しない!!」

そして構えて、気合をこめる。その気合に合わせて、闘気が立ち上り、それはやがてガンダムオルタセイバーを取り巻く渦となる。

「いきますー!」

そして突進! ジャンヌの右回りの渦と、ルドガーが放つネーデルタイフーンの左回りの渦がぶつかりあう!!

その渦同士は打ち消しあい、四散した。そこをジャンヌは見逃さない! そのままネーデルガンダムに突進する!!

「必殺! 絶対勝利・エクスカリバーン!!」

そして一閃! ネーデルガンダムの頭部を斬り飛ばした!

* * * * *

そして、例の宿屋の前。

「負けたよ、お嬢さん。まさか俺渾身のネーデル・タイフーンを打ち破るとはな」

「いえ、一か八かでした。あれが失敗していたら、私の負けでしたでしょうね」

そう苦笑しながら、松葉づえをつくルドガーに言う俺。

そう、本当に一か八かだった。もしあの技……ぷち超級霸王電影弾に失敗していれば、やられていたのは俺のほうだったろう。それに、もし成功していても、ルドガーのネーデル・タイフーンに打ち勝てなければ、やはり俺の負けだった。本当に賭けだったのだ。

だが、その賭けに勝った代償はちよつときついものがある。その反動で、身体が悲鳴をあげているのだ。はつきり言つてすごい痛い。もしこの体がDG細胞で作られていなければ、良くて寝たきり、悪ければ命を落としていただろう。

だけど、こんな代償が大きい賭けに挑もうと思えたのは、やはりルドガーの闘志のおかげかもしれない。

「ゆつくり養生して、身体を治してくださいね」

「ああ、わかった。アマリアもいるしな。そして一つ決心したよ」

「？」

俺が首をかしげると、彼は晴れやかな笑みを浮かべて言った。

「身体を治して、そしてガンダムファイターのコーチになる。そして俺より、いや誰よりも強いガンダムファイターを育て上げてみせる。必ず、彼をガンダムファイターに優勝させてみせるよ」

「そうですか。素敵ですね」

そう俺は複雑な笑みを浮かべて応えた。ガンダムファイターが地球に及ぼす影響を知る俺としては、複雑な心境だが、ガンダムファイターは地球上でしなげなければいけないということもあるまい。地球に影響が出ない形でやるのなら全然OKだ。それに、聞いていて、とても素敵な目標だと素直に思った。

「楽しみにしていますね。あなたの育てたガンダムファイターが大会に出る時を」

「ああ」

そして握手をかわし、俺はネオ・オランダを去って行った。

その空は、ルドガーの心のように、青く晴れ渡っていた……。

3rd Fight 『誇りを取り戻せ！ 自然のために
魂を売ったG（ガンダム）ファイター！』

俺……Gガンダムファンの高校生がTS転生した少女ガンダムファイター、ジャンヌ・エスプレツソは、アフリカのケニア地域にやってきた。

もちろん、ガンダムファイターのためだ。

このケニア地域を統治するネオ・ケニアのガンダムファイター、コンタ・ン・ドウールは野性味あふれるトリツキーなファイターを得意とするという。その情報に武者震いがとまらない。はつきり言うと、早く戦いたくて仕方ない。

だがしかし。

『ガンダムファイター！』

『レディーゴー!!』

残念だがそれは諦めなければならないようだ。既に先客がいる。

全身に白黒のシマ模様がペイントされた独特なカラーリングのガンダム……おそらくあれがネオ・ケニアのガンダム・ゼブラだろう……と、中国のイメージを具現化したようなガンダム……ネオ・チャイナのドラゴン・ガンダムが対峙している。

ガンダム・ゼブラが槍を怒涛のように繰り出すのを、ドラゴン・ガンダムは次々とかわしていく。さすがネオ・チャイナのサイ・サイシー。少林寺の再興を託され、後にシヤツフル同盟の一人となるだけのことはあるな。

だが。

「?」

なぜだろう、俺はこのファイトに違和感を持った。俺がD^{デビルガンダム}G細胞クローンだからなのか、それとも、Gガンダムを見ていたからなのかはわからないが。ドラゴンはともかく、ガンダム・ゼブラがどこか手を抜いているような感じがしたのだ。

俺がそう思っているうちに戦いは進み……。

『これで終わりだあ! ドラゴンクロー!!』

ドラゴンガンダムの左腕が伸び、ドラゴンの頭に変形し、ガンダム・ゼブラの頭部に飛んでいく。

そして噛みつくのだが、やはりそれにも違和感があった。どこか、かわしたり、払ったりといった抵抗をあまりしないままに、わざとすんなり噛みつかれるままに噛みつかれたという感じがしたのだ。

そして、ドラゴンクローの牙がガンダム・ゼブラの頭部に突き刺さり、爆発。そして、煙が立ち上り、ガンダム・ゼブラはあおむけに倒れこんだ。

『この戦い、オイラの勝ちだ!』

喝采が上がる。だがなぜだろう? やはりそのサイ・サイシーの声からは、あまり戦いに勝ったうれしさは感じられず、どこかこの戦いの違和感への戸惑いも感じられたのだ。

* * * * *

さて、何か違和感や疑問の残ったファイトであったが、決着が着いてしまった以上は仕方ない。

ガンダムファイト国際条約第一条、『頭部を破壊された選手は失格となる』。

この条文の通り、頭部を破壊されて敗北したガンダム・ゼブラのコンタ・ン・ドゥールは失格、ガンダムファイトの予選からは脱落となる。もう、ガンダムファイトには出られない、ということだ。

となれば、気持ちを切り替えなくてはな。また新しい相手を探しに、他の国に行くか……。

と思いながら、俺がスラムを歩いていた時だ。

「!!」

突然、気配を感じた。それと同時に、頭上から何か……猿のようなものが飛び掛かってきた!

俺はそれをとっさに飛びずさってかわすと、腰からセイバーを抜いた。

「いきなり襲い掛かるとは、ケニアの猿は気が荒いようですね」

だが、相手は猿ではなかった!

「ひどいなあ、姉ちゃん。オイラは猿じゃないよ」

聞いたような覚えがある声。特に前世でよく。

そう。猿と思っていた襲撃者の正体は……。

「ネオ・チャイナのサイ・サイシー……」

「へへへ、オイラのことを知ってくれたのかい? 嬉しいね!」

そりや、Gガンダムの主役、シャツフル同盟の一員だもの。知ってるに決まってる。

襲撃者の正体は、ネオ・チャイナ代表、サイ・サイシーだった。

「なんで襲ってきたのですか? ファイトであれば喜んで受けて立ちますよ」

「いや、そういうわけではなくてさ……」

と、そこでサイ・サイシーのおながが鳴った。

* * * * *

「そうですか……やっぱり、あなたも感じていたんですね、あのファイトの違和感を」

「うん……もぐもぐ……そりやわかるさ……むしやむしや……というか、武道の心得が

ある者だったらみんな、あの違和感に気づいたと思うぜ」

スラムにある食堂。そこで俺たちは、夕食を食べながら昼間のファイトの件について話し合っていた。

それにしても、よく食べる。骨付き肉はもう50本目、ライスは30杯目だぞ。ネオ・チャイナのスタッフの皆さん、お疲れ様です。

「オイラの気のせいだったらいんどけさ。もし、実は八百長だったというのなら、それで勝つのは嫌だし、白黒はつきりしておきたいのさ」

「なるほど……気持ちにはわかりませう」

「惠雲も瑞山に話して本国に問い合わせても、向こうからはだんまりばかりなんだよ。それでこれは何かあると思ってさ」

なるほど。そういうわけか。それにしても。

「ですが、私を襲ったのには何かわけが？」

「ああ、うん。それについて調べようと思っただけど、オイラは馬鹿だから、助けになる人がほしくてさ。姉ちゃんならいいかなと思って、腕試しをさせてもらった」

「なるほど……って、でも腕試しのためとはいえ、いきなり襲い掛かってくるのは感心しませんね。この件は、ネオ・チャイナの運営委員会に苦情を……」

俺がそう言うと、サイ・サイシーは慌てだした。

「うわー、それは勘弁してくれよ！ 参加資格を奪われるのはもちろん、惠雲や瑞山に怒

られちまうよ!」

参加資格よりあの二人に怒られるのが怖いのかい。その慌てふためく彼の様子を見て、苦笑が漏れ出る。

「冗談ですよ、それでは行きましょうか」

「おう! 行こうぜ!」

* * * * *

そして、俺とサイ・サイシーは調査のためスラムを歩き回っていった。が、収穫はほとんどなかった。残念なり。

そしてそんな中、街はずれにやってきたのだが、そこにあつたのは、あまりにあまりといった光景だった。

「これは……ひどいですね……」

「うん。オイラもネオ・チャイナの間人だけど、これはどうかというのはわかるよ……」
その一角に張り巡らされたフェンス。その中で作業に励む作業機械たち。その機械によつて荒らされていく大地。

そう。そこでは、ネオ・チャイナ系の企業が、開発作業を行っていたのだ。しかし、そのやり方があまりにひどすぎる。自然への影響などまるで考えず、無計画にただ地面を掘り、木々をなぎ倒していく。

このGガンダム世界の地球汚染の一端をじかの目の当たりにして、思わず現実逃避しそうになる俺であった。……いやいや、現実逃避してはダメだろ俺。俺はこのように荒らされていく地球を憂いて、デビルガンダム四天王になったんだから。

「聞く話では、^{モビルファイター}M Fの装甲素材の元になるデイマリウムの鉱脈がこのケニア地域にあるとかで、うちの国の企業がネオ・ケニアと話し合いで、この地域の開発権を手に入れたんだってさ」

「それでこんな開発を……」

デイマリウム。M Fの装甲である『ガンダリウム合金スーパーセラミック複合材＋レアメタルハイブリッド多層材』に使われている合金の一つの原料となる鉱石だ。重力や慣性制御の能力を持ち、さらに意志の力に反応するというとんでも特性まで持っている。

そう、この世界のガンダムが変態機動ができたり、拳が泣いているのがわかったり、といったトンデモパワーは、この合金のおかげなのだ。

そんなM Fにとって重要な素材の鉱脈がここにあるとなれば、どんなことをしてでも開発権を得ようとするだろう。採掘して作り出した合金を自国のM Fの強化のためにふんだんに使ってもよし、生産を独占し、他国に高く売りつけるのもよし、だ。

とはいえ、こんな乱開発はよくないと思うが。

そこに。

「Oh、とんでもないね。ネオ・チャイナの連中のやることは」

これは前世で聞いた覚えのある声だ。その声が出たほうを見ると、そこには一人の男が。

気のいい兄ちゃんといった感じの見た目の男。そう、その男は……。

「ネオ・アメリカ代表。チボデー・クロケット! 愛機はガンダム・マックスター!」

「へえ、こんな土地にも俺の名前が知れ渡ってるなんて嬉しいねえ。だがお嬢さん。俺に惚れてはいけません。既に先約があるんです」

いや、惚れるつもりなどないが。確かに彼にはチボデーギャルズという娘たちがいるし、俺は男だし、展開次第によっては、彼と敵対しなければならぬんだ。『恋人たちの哀しい戦い』なんかやりたくもない。

何はともあれ、俺たちは自己紹介をすることに。

「ネオ・ノルウェー代表のジャンヌ・エスプレッソです。よろしく」

「ネオ・チャイナのサイ・サイシーとはオイラのことさ。よろしく!」

「へえ、こんな若くてかわいいのにガンダムファイターとはな。驚いたぜ」

「どういたしまして。それでチボデー、なんであなたはここに? あなたもネオ・ケニアのファイターとファイトするために?」

俺がそう言うと、チボデーは首を横に振った。

「いや。このケニア Area の開発権を巡って、ネオ・チャイナとネオ・ケニアとの間で、ガンダムファイトに絡んだ密約があると、ネオ・アメリカの情報局がかぎつけてね。その調査員の護衛にやってきたってわけさ。こんなことはガンダム・ファイターの仕事じゃないと思うんだけどな。そんなことするよりはハンバーガーを食べていたい」

「ええ、わかりますよ、その気持ち」

「わかってくれるかい！ 話がわかりそうなお嬢さんと嬉しいぜ」

「オイラはハンバーガーより肉まんのほうが好きだけど、やっぱり気持ちはわかるぜ。それでチボデーの兄貴。収穫はあったのかい？」

サイ・サイシーがそう尋ねると、チボデーはうなずいた。

「ああ。今回のファイトについて不満を抱いていたネオ・ケニアのスタッフが密告をしたと言ってきてね。今日の夜、そのスタッフと接触をすることになっている。もしよければ、二人もついてくるかい？ Escote するぜ」

もちろん拒否する理由はなかった。

* * * *

そして俺たちは、ネオ・ケニアのスタッフとの待ち合い場所にやってきた。それにしても……。

「チボデー、そういえばネオ・アメリカの情報員は同行しないんですか?」

「ああ、そいつにはちよつと他の用事があるんな」

「なるほどね。でも遅いなー……」

サイ・サイシーがそうつぶやいた直後!

「た、助けてー!!」

女の声が響いた!

「今の声は!?!」

「あつちのほうからだぜ、アネゴ! チボデーの兄貴!」

「OK! 行ってみよう!」

そこに駆け出していくとそこには……!

「あ、あなたたちは……」

制服らしき服を着こんだ女性が、腕から血を流して倒れていた。その後ろには、凶器を持った男たちが!

「そのUniform……。ネオ・ケニアか。もしかしてお嬢さんが?」

「はい……ネオ・ケニアのガンダム・ゼブラ整備スタッフの、ザワディといいます……」

「お願いです、ン・ドゥールを……」

「それ以上しゃべらないでもらおうか!」

口封じをしようと、ザワデイとかいう娘に、男たちが襲い掛かっていく!

これは、助けがないわけにはいかないな!

「今はこいつらをどうにかして、お嬢さんを守ることにはしましょう! 行きますよ!」

「わかった!」

「OK!」

そして、男たちのバトルを開始する俺たち。男たちは強かったが、それでも俺たちが
ンダムファイターほどではない。大した苦戦はせず、倒すことができた。

* * * * *

男たちを撃退した俺たちは、ザワデイさんの傷の治療をしながら、話を聞いてみるこ
とにした。

「それでお嬢さん、ン・ドゥールのことを言っていたが……」

「はい。実はン・ドゥールは、ネオ・ケニアとネオ・チャイナとの密約のために、イカサ
マファイトを強いられているんです」

「なんだって……?!? それは……」

俺がそう聞くと、ザワデイさんは目を伏せて話し始めた。

「このケニアエリアで、ネオ・チャイナがデイマリウム合金の採掘をしていることはご存
じだと思えます」

「ああ」

「それについて、ネオ・ケニアとネオ・チャイナが密約を結んだんです。『今回のネオ・チャイナとネオ・ケニアのファイトでネオ・ケニアが負けてくれれば、採掘を中止すると』」

「なんだって……?!? じゃやっぱ、オイラはその密約による八百長で勝ったっていうのか?!」

やはり、あのファイトはできレースだったのか。だが、疑問はまだあった。

それをチポデーが口にしてくれた。

「だが、開発はまだ続いているみたいだぜ?」

「はい。そこがネオ・チャイナの狡猾なところで、その密約では『ネオ・チャイナ政府による採掘はしない』とあったんです。なので彼らは、採掘権をネオ・チャイナのダミー企業に譲り渡し、引き続き、開発を続けているんです。しかも……」

「しかも……?」

と、そこで。

「ネオ・チャイナは俺を傭兵として雇った。そして戦っていれば、いずれ開発から手を引き、それぞれどこか、このケニア地域の自然の回復にも手を貸してくれる、とな。俺は、このケニア地域の自然を守るため、奴らに心売り渡したのだ」

「!!」

その声に振り向くと、数人の男たちがやってくる。そのうちの一人は、毛皮をまとったひげ面の屈強そうな男だった。資料で見たことがある。おそらく彼が、ネオ・ケニアのガンダムファイター、コンタ・ン・ドゥールだろう。その後ろには、ネオ・チャイナの高官らしき男たちもついてきている。

「知ってはいけないことを知ってしまったアルね。ならば仕方ない。ここで三人とも死んでもらうアル。委員会には、三人はガンダムファイト中の事故で死んだと報告すれば済むことアルよ」

「そう簡単に行くかな？ 俺たちがガンダムファイターだということを忘れてもらっちゃ困るぜ？」

だがそのチボデーの言葉にも、高官は表情を変えなかった。

「心配ないアル。今頃、我が国の工作員が、お前たちのガンダムの機能をロックしているころアル。呼ぶことはできないアルよ」

「なんだと……卑怯な……！」

それと同時に、地面が割れ、一機のガンダムが現れた。コンタ・ン・ドゥールのガンダム・ゼブラだ。それにコンタ・ン・ドゥールが乗り込む。

「さあ、ン・ドゥール！ 四人を踏みつぶしてしまえアル！」

「それはどうでしょう?」

「アル!」

確かにチボデーのマックスター、サイ・サイシーのドラゴンはそれで封じることができらるだろう。だが!!

「来て! ガンダム・オルタセイバー!!」

その俺の声とともに、天空から、俺の漆黒のガンダム、ガンダム・オルタセイバーが舞い降りてきた!

そう、俺のオルタセイバーは、DG細胞によつて強化された特別製! 機能ロックなど意味をもたない!

俺はさつそくオルタセイバーに乗り込み、戦闘態勢をとる。

「えーい、ン・ドゥール! こうなったら、彼女のガンダムもやってしまえアル!」

「……」

だが、ガンダム・ゼブラは動かない。ン・ドゥールも心の中で葛藤があるのだろう。

高官はさらに怒鳴りつける。

「戦うアルよ! ケニアの自然がどうなつてもいいアルか!」

本当に心が腐り果てた奴だ……!

でも、その奴の言葉に、ついにン・ドゥールも構えをとつた。その構えには、まだ迷

いが見受けられるが。

「が、ガンダムファイトローラー!!」

「レディー、ゴオオオオ!!」

* * * * *

ガンダム・ゼブラはその槍を怒涛のように繰り出してくる。その速さは、この前のドラゴンガンダムとのファイトの時とはくらべものにならない! これが彼の本気ということか……?」

でも、やはりその槍筋には迷いがあるように見えた。

「誇りを取り戻してください、コンタ・ン・ドゥール! あんな奴らに飼われ続け、八百長を強いられて、あなたのガンダムファイターの誇りが泣いていないのですか!」

「泣いてなど……いない!!」

そう言いながら、ガンダム・ゼブラは槍を横風ぎに払う。俺はそれをビームセイバーで受ける。激しい衝撃が襲う。

「もうこんなことはやめてください! こんなことで自然を守つて、自然が喜ぶと思っ
ているんですか!」

「黙れ、お前に何がわかる!!」

そう言うと、ガンダム・ゼブラは突進してきた。そして地面に槍を突き立てると、棒

高跳びの要領で天高く飛び上がる! そして盾をかざして急降下!!

「はあっ!! ……なっ!!」

ビームセイバーでその盾を切り払うが、その後ろにゼブラはいなかった。その盾のはるか上方にその姿が。

彼は、盾を投げつけて、それをおとりとしたのだ。

そして俺のオルタセイバーは蹴りを受けて吹き飛んだ。

「くっ……! ……?」

だがその瞬間、俺は聞いた。ほんのかすかだが、泣き声を。自然を愛し、ガンダムファイターとしての誇りに満ちた自らの心を、その自然のためにネオ・チャイナに売り渡した悲しきガンダムファイターの心の嘆きを。

やはり、彼の誇りは生きていた。自然のため、ネオ・チャイナに心売っているながらも、その心は完全に死んではおらず、悲鳴をあげていたのだ。

ならば俺ができることは一つ。彼を倒し、奴らから解放してやることのみ!

「仕方ありません。私があなたにできることはこれのみ! 来なさい!!」

そして構えを取る。墮天使の翼に似た、オルタセイバーの背中のウィングが展開する。機体がオーラに包まれる。

「う、うおおおおお!!」

「必殺！ 絶対勝利・エクスカリバーン!!」

突っ込んでくるガンダム・ゼブラと、同じく突進するガンダム・オルタセイバーが激突！ そして、すれ違う。

そして数瞬の間。

「ぐ、ぐああああ!!」

勝ったのは俺のほうだった。俺のエクスカリバーンが、コンタ・ン・ドゥールの攻撃がさく裂するより早く、彼の機体の両腕を斬り落としていたのだ。

「私の……勝ちです」

ネオ・チャイナの高官はうろたえているが、すぐに我に戻った。そして、ザワデイに視線を向けた。まさか……!」

「お、おのれ小娘……! こうなったら、ザワデイとやらを人質にとって……!」

だが、彼の目論見がかなうことはなかった。彼の目の前の地面に、ナイフが二本突き立てられる。

「な、なにアルか!?!」

そしてやってきたのは、ネオ・アメリカの職員らしき男性と、一人の若い女性。

「国際ガンダム・ファイト運営委員会、監査委員のローレン・ホワイトです。話は聞かせていただきました」

「な、ななな……アル」

「ガンダムファイト国際条約第8条『政治的思惑を持ったファイトの禁止』、第9条『ガンダムファイターを傭兵とすることの禁止』、第10条『ガンダムファイト以外で、ガンダムファイターへの危害を加えることの禁止』、第11条『ガンダムへの違法な操作の禁止』などの違反容疑で話を聞かせていただきたいと思います。ご同行願えますね?」

「……」

彼女……ローレン・ホワイトさんの言葉に観念したのか、高官たちはうなだれて、彼女の引き連れてきた官憲たちに連れ去られていったのだった。どうやら、ネオ・アメリカの工員が俺たちに同行しないのは、これが理由らしいな。

* * * * *

そこに、通信が入ってきた。ガンダム・ゼブラのコンタ・ン・ドゥールからだ。

「見事だった……。さあ、とどめを刺すがいい。ガンダムファイトで八百長で敗北し、しかもその魂も奴らに捧げてしまった俺は、もうガンダムファイターとして戦う資格はない……」

力ない彼の言葉。だが。

「いいえ、そんなことはありませんよ?」

「なに?」

疑問のまなざしを向けたン・ドゥールに答えたのはチボデーだった。

「ガンダムファイト国際条約・第12条『正当なる目的、手続きをもつて行われなかったファイトは、これを無効とすることができ』」

つまり、イカサマや八百長で行われたガンダムファイトは、その試合結果を無効にできる、ということだ。

「あのファイトについて委員会に申し立てれば、あの結果を無効として、またファイトに立てるだろうさ。ミス・ローレンという証人もいることだしな」

「オイラとしても、八百長で勝ったままなんて、きわめて不本意だからな！ 改めて戦おうぜ！ 正々堂々とさ！」

「チボデー・クロケット……。サイ・サイシー……」

そして俺は、ガンダム・ゼブラに手を差し伸べた。それを受け取るかのようにガンダム・ゼブラは弱々しくも立ち上がったのだった。

* * * * *

その後。

今回の件は、ネオ・チャイナ政府の総意ではなく、あの高官の独断だったことがわかり、高官は国際警察に捕まって獄中の人となった。果たしてその通りなのか、ネオ・チャイナが高官を斬り捨てたかは、今となってはわからない。

例の企業による採掘・開発計画も中止となり、企業は人知れず姿を消した。ダミー企業だったんだから当然だろう。また、今回の件についての謝罪として、ネオ・チャイナからネオ・ケニアへ多額の賠償金が支払われたようだ。

サイ・サイシー対コンタ・ン・ドゥールの試合についての申し立ては無事に通り、ン・ドゥールの敗北は無効となり、彼はまたガンダムファイターとして戦えることになったのだった。

そうしたことがあつた数日後、俺はケニア地域を旅立つことになった。

「姉貴、今回は世話になったね!」

そう言つて笑うサイ・サイシーに、俺も微笑んで答える。

「いえ、こちらこそ世話になりました。サイ・サイシー、チボデー・クロケツト」

「あれぐらいどうつてことないさ。それと、お嬢さんのファイトも見事だった。ぜひ今度、ファイトさせてもらいたいね」

「ええ、こちらこそ喜んで」

そして互いに手を握り合つて、その場をわかれた。俺は、彼らと敵対することにならないうようにという、叶いそうもない願いを抱きながら。

4th Fight 『D G細胞に引き裂かれた二人！ ジャンヌ、救うために彼を撃て！』

俺……ジャンヌ・エスプレッソはトルコ地域のイスタンブールの町にやってきた。

チコの話では、ここイスタンブールに、デビルガンダムD G細胞に関連する者がいるという。その情報を頼りにやってきたのだ。

トルコでD G細胞絡みとすると……。

そう考えを巡らせながら、イスタンブールの町に入ると……。

そこは戦場だった。

暴れまわっている一機のガンダムに、ネオ・トルコ軍のものらしき戦車が砲撃を加えている。そのガンダムは……。

間違いない、ミナレットガンダムだ。

ミナレットガンダムは、ネオ・トルコのガンダムで、ファイターは、Gガンダムのヒロイン、レインの元恋人セイト・ギユゼル。

彼は以前、デビルガンダムが出現した時にその迎撃に参加し、戦うものの、その戦いでD G細胞に感染してしまう。

DG細胞は高い感染力と、感染した宿主の破壊衝動を極大まで増幅してしまう効果があり、当然セイトもDG細胞により増幅された破壊衝動の赴くままに、こうして暴れまわるようになってしまった、というわけだ。

そう俺が思い出している間にも、ミナレットガンダムは暴れまわっている。戦車を踏みつぶし、その剣で切り裂き、建物を一刀両断していく。はつきり言って、思い出している場合じゃないな。止めないと。

「来てえ! ガンダムオルタセイバー!!」

俺のガンダム、ガンダムオルタセイバーを呼び出して乗り込む。

俺のきやしやな身体をファイトスーツが包むと同時に、モビルトレースシステムが俺の身体をチェックし、オールグリーンを知らせる。ファイト準備完了だ。

「これは正式なファイトではありませんが、言わせてもらいます! ガンダムファイト・レディーゴオオオオ!!」

俺はオルタセイバーのビームセイバーを抜くと、バーニアを吹かせて、ミナレットガンダムに突進していった。奴に対して、剣を振り下ろす。こちらに向きなおったミナレットガンダムは、その名前の元である剣、ミナレットでそれを受け止めた。

ミナレットはすごいパワーで俺を押し返し、変幻自在な剣技を繰り出してきた! 読めない軌道の斬撃に苦勞するが、なんとかそれを捌いていく。

そうしていくうちに、ミナレットに隙ができた！ 俺はそこを突いて一撃を加えようとビームセイバーを振るった！

だがそこで、突然ミナレットガンダムは俺に対してタツクルを仕掛けてきた！ そのタツクルのパワーに、俺のオルタセイバーは吹き飛ばされ、あおむけに倒れこんでしま

う。
しまった！ こいつはレスリングも得意なんだった！ 確か大学ではレスリング部に所属していたと、設定の本で読んだことがある。

そして、ミナレットが逆に俺を攻撃しようとしたところで。

「こおおおおいっ！ ガンダアアアアムツツ!!」

その場に居合わせたドモンがそう叫び、地面からシャイニングガンダムが現れた！
そしてドモンが乗り込み、俺のオルタセイバーをかばうように立ちはだかる。

『今度は俺が相手だ！ ガンダムファイト、レディイイイゴオオオウツツ!!』

そして、ビームソードを抜いて、ミナレットに斬りかかる！ シャイニングのビームソードと、ミナレットガンダムのミナレットがぶつかりあい、スパークを放つ。

『ぬああああつ、はああつ!!』

そして、力を振り絞り、ミナレットガンダムの手から剣を弾き飛ばす！

『俺のこの手が光って唸る！ お前を倒せと輝き叫ぶ!!』

シャイニングガンダムの各部の装甲が開かれ、バトルモードに変形する。その右手が緑色に発光する。

『必殺! シャイニングツ! フィンガー!!』

出た! ドモンの必殺技、シャイニングフィンガーだ! ドモンの、シャイニングの輝く右手がミナレットの頭部を握りつぶそうと迫る!

だが、ミナレットもただでやられはしない。DG細胞によって生存本能も増幅されているのか、ミナレットはその右腕をもって頭部をかばったのだ。

シャイニングフィンガーが右腕をつかみ、粉碎する! だがそれと同時に、ミナレットガンダムの左腕が伸び、弾き飛ばされたミナレットをつかみ、そのままシャイニングガンダムに斬りかかる!

間一髪、シャイニングはそれを回避した。それと同時に、ミナレットガンダムは地面に潜って消えていったのだった。

* * * * *

一方、レインは、デビルガンダムの調査のために、イスタンプールの町を歩いていた。

だが、肝心のデビルガンダムについての手がかりは一切なし。

「はあ……。はずれだったのかしら。あのガンダムはデビルガンダムと関係ありそうな

のに……」

と、そこでレインの耳に、聞き覚えのある声が届いた。

「う、うぐ……」

「こ、この声は、もしかして……」

そして彼女が、声がる裏道に行くと、そこには……。

「セイツト！」

「レイン、レインか……!?!」

そこには、レインと同じ大学に通った男友達、いや友達以上恋人未満と言ってもいい仲だったセイツト・ギユゼルが座り込んでいた。

「セイツト、あなたとこんなところで会うなんて……。それに、どうしてここに……」

「ああ、俺は……」

とセイツトが言おうとしたところで。

「いたぞ、あそこだ！」

「国家反逆罪犯人だ！ 逃げがすな！」

ネオ・トルコ警察の制服を着た男たちがやってきた！ 彼らは二人を見つけると、一

斉に銃をかまえた。

「話はあと！ 逃げましょう！」

「あ、ああ……」

そして二人は、銃弾が飛び交う中を逃げ出した。

* * * * *

「ここまで逃げれば、もう大丈夫でしょう……」

「済まない、君まで巻き込んでしまって……」

そう言つて詫げるセイトに、レインは首を振った。

だがそこでレインはあることに気が付いた。それは、セイトの首を覆う。

「これは……D G細胞!? セイト、どうしてこれに……?」

「見つかつてしまったか……。一年前、デビルガンダムが落下してきたさいに、俺もその迎撃作戦に参加して、その時に……」

「そう……」

「だから、もう離れてくれ……。このままでは、俺はまたD G細胞に吞まれて、化け物になつてしまう……」

だが、それでもレインはまた首を振る。

「ううん。あなたは化け物じゃない。どんなことになつても、あなたはあなた、セイトのままよ」

「レイン……強くなったな」

「そうかしら……」

そう言って、互いに微笑む。

「希望をもつてセイット。ドモンに連絡して、ネオ・ジャパンに連れて行ってもらえば、きっとよくなるわ」

「ドモンとは、さつきミナレットガンダムと戦っていたガンダムに乗っていた者か？」

「ええ。私の幼馴染で、パートナーよ」

「パートナー……」

それを聞いたセイットの心の中にどす黒い感情が生まれた。それはD G細胞の力でどんどん強く大きくなり、それにあわせてD G細胞が再び活性化しはじめる！

「……いを……」

「セイット……?」

「俺の愛を、愛ヲオオオオオオ!!」

「きやああああああ!!」

* * * * *

「よし、これで大丈夫だろう」

「ありがとうございます……ドモン・カッシユ」

一方、俺はミナレットガンダム戦で受けた傷の手当を、ドモンにしてもらっていた。

まさか、原作の主人公直々に怪我の手当をしてもらえると、すごく感激だ。

なお、俺がDG細胞クローンであるとは、俺の本体がデビルガンダムを制御している影響で、俺の本体がコアになった後のデビルガンダム由来のDG細胞は、感染力などの特性はそのままではあるものの、見かけは普通の細胞と変わらなくなっている。

なのでちよつと見では、俺がクローンだと見破られることはないのだ。

「礼はいらん。同じ流派東方不敗を学んだ同門のよしみだからな」

「同門って……私は少し師匠から教えてもらってかじっただけですよ」

「謙遜はいらん。あれだけ身に着けていればたいしたものだ。並みのファイターでは、そもそもかじることさえ難しい流派だからな」

「はあ……」

そんなに人を選ぶ流派だったのか。それはきつと、もし俺がDG細胞クローンでなかったら、本当に少し実践することすら不可能だったかもしれない。この体に感謝だな。

「そういえば、師匠は元気だったか？」

「ええ、相変わらずでした。厳しいところも、理想に燃えるところも」

その理想と厳しさから、デビルガンダムによる人類排除に走ってしまったんだけど

な。

まあ……俺も似たものどうか。

「そういえばドモン、レインさんとは一緒にやないんですか？」

「ああ、彼女はこの町で、デビルガンダムについての情報を調べているところだ」

「そうですか……ん？」

そこで俺は一つのことを思いついた。

確か、俺の本体がコアになったことでわかったことだが、DG細胞にはある特性がある。それは人の負の感情……怒りや憎しみや嫉妬など……に反応して、それを増幅しつつ、さらにその感情エネルギーを糧として急成長を遂げるというものだ。

なので、宿主が負の感情を抱いてしまうと、感情を増幅↓糧として成長↓成長した細胞がさらに感情を増幅↓それを糧として成長……の無限ループに陥り、強大な怪物となってしまうのだ。もちろん、成長には限界があるから、無限とはいかないが。

もし、セイトがレインと会っていて、さらにドモンのことを知って、嫉妬に取り付かれたりしたら……。

その時だ。

『オレノアイヲキミハアアアアアアアアア!!』

* * * * *

現れたのはミナレットガンダムだ。だが、前に戦った時より、さらに大きく、まがまがしくなっている。

約2倍……いや、3倍ぐらい大きくなっているぞ。

……悪い予感が当たってしまったか……。

「どういふことなんだ、あれは!? さっきより大きくなっているぞ!」

「おそらく、ガンダムファイターの負の心を喰らって成長したんでしょう。DG細胞にはそんな特性がある……と、ある研究資料で読んだことがあります」

「なんだって!」

本当は、俺の本体がデビルガンダムのコアになったからなのだが、それは秘密だ。今はドモンに敵対心を持たれたくない。

だが、そんな俺たちをよそに、ミナレットは前より激しく暴れながら、街を破壊し、こちらに進んでいく。

『アイヲ、アイヲオオオオオオオ!!』

おそらく、奴のターゲットは俺たち……いや、ドモンだろう。何はともあれ、このままにしていくなわけにはいかない!

「行きましょう、ドモン!」

「おう、お前の力、頼りにさせてもらおうぞ! あいつを倒し、止める!」

そして。

「来てええええええ！ オルタセイバアアアアアアア!!」

「こおおおおいっつ！ ガンダムアアアアアアムツツ!!（パチンツ）」

俺とドモンはそれぞれ、ガンダムオルタセイバーとシャイニングガンダムを呼び出して、巨大ミナレットと対峙した。

先手を取ったのは、巨大ミナレットガンダムだった。奴が振り下ろしたミナレットを、俺たちは左右に飛びずさってかわす。そしてドモンが、着地すると同時に、ビームソードを手に飛び掛かっていった。

「はあっ!!」

一閃！ そのビームソードは、巨大ミナレットの胸部装甲を切り裂いた！ だが、そこからのぞいたのは……。

「れ、レイン!?!」

なんとということだ！ 巨大ミナレットガンダムの内部には、ドモンのパートナー、レイン・ミカムラが取り込まれていたのだ！ おそらく、原作のデビルガンダムのように、生体ユニットとして組み込まれているんだろう。

「どういうことだ、なんでレインがあの中に!?!」

「落ち着いてください、ドモンさん!」

「これが落ちていていられるか! ……うおっ!!」

動揺したドモンのシャイニングガンダムが、巨大ミナレットのタックルを喰らって吹き飛ばされた。奴は、さらにドモンにミナレットの一撃を加えようとするが……。

「させません! スプラッシュ・ソードオオオオ!!」

無数の刺突を放ち、注意をこちらにひきつける。巨大ミナレットの斬撃を、俺はかろうじてかわした。そしてその間に、ドモンは態勢を立て直すことができた。

「済まなかった、ジャンヌ。だが、一体どういうわけなんだ……?」

「おそらく、ミナレットガンダムの生体ユニットとして使われているんでしょう。それで、ファイターの、レインさんへの悪感情をさらなる力にしていると思われます」

「……詳しいな」

ぎくっ!? 怪しまれている!?

「そそそ、そんなことないですよ、読んだ資料から推測しただけですとも」

「そうか、まあいい。だがどうする? これではレインを人質にされているようなもの……だっ!!」

再び襲う、ミナレットの斬撃! 俺たちはそれをなんとかかわす。

それから、俺たちは、巨大ミナレットの攻撃を次々かわしていくが、ドモンが言う通り、レインを人質に取られているようなものなので、なかなか反撃に出ることができ

ない。変なところを攻撃して、取り込まれているレインに後遺症が出たら大変だ。

と、そこで、俺の脳裏に、Gガンダムの作中でドモンが聞いていた言葉が思い浮かんだ。

ドモン曰く。

『格闘家の拳は、己の心を語るものだと、俺に教えてくれたのはこの東方不敗だ！』

それを使えば……いちかばちかだな。

「ドモンさん、一つ考えが浮かびました。かなり勇気がいることですが」

「なんだ!? レインを助け、こいつを倒すためだったら、なんでもするぞー!」

再び攻撃が迫りくる! それをかわしながら続ける。

「あなたのレインさんへの気持ちを拳にこめて、奴の胸部装甲に一撃を喰らわせるんですー!」

「な、なにい!?!」

「ある人が言っていました。格闘家の拳は、自分の心を語るものだと。ならば、その気持ちを込めた拳を食らわせれば、装甲を通して中のレインさんにそれを伝えて、正気に戻し、脱出させることができるかもしれません!」

「そ、そんなこと言われても、心の準備がだなあ!」

「そんなことを言ってる場合ですか! なんでもするって言ったじゃないですか!……」

きやつ!!」

俺のオルタセイバーは、巨大ミナレットガンダムの裏拳を喰らって吹き飛ばされた。一方のドモンはまだうじうじしてるし……。

こうなったら、無理やりにでもことを運んでやらせるしかなさそうだ。

俺はなんとか立ち上がると、巨大ミナレットガンダムに突撃していった!

「いいですね! 私が隙を作りますから、あなたの気持ちを込めた一撃を喰らわせてやってください!」

「あー、もう、わかった!」

そして俺は斬撃やスプラッシュソードを放ちながら、巨大ミナレットガンダムの攻撃をかわし、牽制していった。

そうしていくうちに、ついに巨大ミナレットにとって致命的な隙ができた!

「今です!」

「うおおおお!!」

そして。

「戻ってこいレイン! 俺にはお前が必要なんだっつ!!」

拳がさく裂! どうだ……?」

『レイン……レイイイイイイ!! アイヲ、アイヲオオオオオ!!』

突然、巨大ミナレットが苦しみだし、胸部がまるで何かを吐き出すかのように蠢きだす。もう一撃だな。ならば！

「一点集中スプラッシュソードオオオオオオ!!」

無数の刺突を一点集中して胸部装甲に浴びせる。もちろん、中のレインまで串刺しにしないように。

それが最後の一撃になったのか、胸部装甲がはじけ、中からレインが吐き出された！それをなんとか左手で受け止める。

「とどめです、ドモンさん！」

「うおおおおおおっ！ シャアアアイニングッ！ フィンガアアアアア!!」

そして、ドモンのシャイニング・フィンガーがさく裂し、巨大ミナレットの頭部が粉砕された。

* * * * *

「世話になったな、ジャンヌ・エスプレッソ」

「いえ、同門のよしみじゃないですか」

「ふふ、そうだな」

戦いが終わった後、礼を言ってきたドモンに、俺はさっきのお返しみたいな感じで返した。

ちなみに、ミナレットガンダムに乗っていたセイツトは、無事救出され、救急車に収容されていた。そのそばには、レインがいたことは言うまでもない。

「レインさん、身体の具合はどうですか?」

「うん、特に問題はないみたい。助けてくれてありがとうございます」

「いえ、礼を言われるほどのことではありませんよ」

そこでレインは、ドモンのほうを向いた。そして微笑んで。

「あなたも……ありがとう、ドモン。『お前が必要だ』と言われて、とても嬉しかったわ」

「か、勘違いするな。メカニックとして必要だという意味だ」

「もう、ドモンの馬鹿っ!」

その様子を見て、俺は微笑んだ。

もし救出が失敗していたら、こんな夫婦漫才も見ることができなかつたかもしれないから。

「でも、本当に仲がいいんですね。うらやましいです」

「ふ、ふん。でも、本当に助かった、ありがとう。俺にできることがあれば、いつでも言うてくれ。なんでもしてやる」

「はい、その時はお願ひします」

そして俺は、ドモンたちと別れた。

いつか、彼らとも戦うことになる運命を感じながら……。

5th Fight 『発見、最後の四天王! 孤島を守る人ならざる守護者』

俺……ジャンヌ・エス・プレッソ……は、デビルガンダム四天王の仲間、チコ・ロドリゲスから、四天王最後の一人になりうる者を見つけたとの情報を受け、ある孤島に降り立っていた。

それにしてもこの島、この風景……かすかに見覚えがあるぞ。でもどこだろう……?

俺、確かに前世ではGガンダム好きだったけど、主にアニメがメインで、外伝の漫画作品はあまり読んでないんだよなあ。

と、俺がそんなことを思いながら歩いていると……!!

「!!」

突然、頭上からMモビルファイターFが降下してきた! それと同時に俺に向かってパンチを振り下ろす! なんとか回避。

『ニンゲン、デテケ! ニンゲンミンナ、ジヨナサンノカタキ!』

そのMFから聞こえてくるたどたどしい声。『人間出てけ』とか、『人間みんな仇』と

言ってるってことは、相手は人間ではないのか？

俺がそう考えている間にも、そのMFはひたすら俺を攻撃し続けてくる。

なら……仕方あるまい！ 降りかかった火の粉は振り払うのみ！

「来てえええええええ！ オルタセイバアアアアアアアアア!!」

すると、上空から俺のガンダム、ガンダム・オルタセイバーが舞い降りてくる。さつそくそれに乗り込み、モビルトレースシステムを起動させる。

「フアイトを挑まれたなら、受けるのみ！ ガンダムフアイト、レデイイイイゴオオオオオ!!」

そして俺と、謎のガンダムフアイトとのフアイトが始まった！

俺のオルタセイバーの突きを、謎のガンダムはしゃがんでかわすと……。

「きゃつ!!」

伸びあがる勢いで、俺のオルタセイバーにアッパーを放ってきた！ このパワー、動き……。

「ボクシングの腕は、チボデーと同等かもしれないね……」

それからも、謎のガンダムはストレートやフック、ジャブと色々なパンチを立て続けに放ってくる。その怒涛の連打は、奴のスタミナには限界がないのか、と思えるほどだ。

そしてそのパンチの数々をかわしながら戦っていくうちに、思い出したことがあつ

た。

このガンダムはジャンピング・ガンダム、乗り込んでいるのは物言うカンガルー、カンちゃんだ。カンガルーでカンちゃんとは、なんとも安易なネーミングだが。

とすれば、このカンちゃんは敵ではない。説得すれば……
と思っていたところに。

「!？」

突然、後ろから銃弾が飛んできた！ ジャンピングはそれを軽々とかわすと、森の中へと引きかえしていくのだった。

逃げられたか……。説得しようと思っていたのに……。

* * * * *

そして俺は、この島の主、モッチー・オーガネの招待を受け、彼の館に案内されることになった。

……彼についても思い出した。

実はこの島は、元々は彼のものではない。この島はもともと、ネオ・ドードーの科学者、ジヨナサン博士のものだったが、彼を部下にしようとして失敗したこの男……モッチーが暗殺し、この島を奪い取った……ということだったはずだ。

そんな彼がいけしやあしやあと俺の前で

「私はこの自然を多くの人々に見せたいのです！」

と、おおっぴらな身振りで言うものだから、怒りも殺意も通り越して呆れてしまう。もつとも、東方不敗の師匠なら、秒で抹殺するだろうな。この島にやってきたのが俺だということに神に感謝したほうがいいぞ、モッチー。

俺は半眼になりながら聞いた。

「それで、私に何をしてほしいんです？」

「おお、それは失礼しました。あなたも遭遇したあのMF。あれが私たちの建てたりゾート施設を破壊して、邪魔しているのです。なにとぞ、きやつを退治してほしいのです」

「……」

断るべきだろうか。それとも、今この場で、速攻で奴を倒すべきだろうか。

いや、おそらくチコの言っていた四天王候補とは、あのカンちゃんのことだろう。彼ともう一度接触して話し合いたいところだが、向こうは俺を仇と思っている様子。

ならば、拳を通して誤解を解き、和解するしかないかもしれない。(Gガンダム脳) そのためには、彼の依頼を利用するのも一つの手だろう。

「わかりました。どこまでやれるはわかりませんが、やってみます。でも、結果はどうなるかわかりませんよ？」

「おお、ありがとうございます! あなたなら、見事にあのにつくきガンダムを倒してくださると信じています! なにとぞ、この島に平和を!」

そう言い終えた後に、彼の顔に一瞬浮かんだ、邪悪な笑みを俺は見逃さなかった。

……こいつ、俺とカンちゃんが戦って消耗したところを襲って、俺たち二人をまとめて倒す気だな。

* * * * *

俺は、再び森の入り口へとやってきた。

そしてさっそく。

「来てええええええ! オルタセイバアアアアアアア!!」

ガンダムオルタセイバーを呼び出して乗り込む。

そして森に近づいていくとさっそく。

『ニンゲンクルナ、ニンゲンデテケ! ジャナサンノカタキ!』

「私はあなた方の敵ではない……と言つてもわかつてはもらえないでしょうね。仕方ありません。それならば拳で伝えるのみ! 行きます! ガンダムファイト!!」

『レディイイイイ、ゴオオオオオオ!!』

そして俺とカンちゃんとの二回戦が始まった! 先手を取ったカンちゃんのジャンピングガンダムが突っ込んできた。そして、パンチの間合いに入ると同時に、鋭いスト

レートパンチを放ってきた！ 早い！

俺はそれをなんとかかわすと、反撃の突きを放とうとしたところで……。

「きゃあーっ!!」

後ろ向きになってしゃがんだジャンピングガンダムから、後ろ蹴りを喰らって吹き飛んでしまった。後ろ蹴りつて、カンガルーかよ！……つて、カンガルーか。

そしてジャンピングガンダムは、俺のオルタセイバーの上に乗リマウントを取ると、顔面にパンチを乱打してくる。

もうやりたい放題だ。だが、やられっぱなしでいるほど、こちらは甘くない。

「いい気にならないでください……よっ!!」

巴投げの要領で、ジャンピングガンダムを投げ飛ばす。さすがカンガルーというべきか。カンちゃんさんは地面に叩きつけられることなく、うまく受け身を取り、態勢を立て直す。その間に、こちらも立ち上がった。

「今度はこちらの番です!」

ジャンピングガンダムに突進し、突きや斬撃の連打を見舞う。驚くべきことに、カンちゃんはそれほどんどをさばいていった。

「なかなかやりますね。ですが!」

俺は左手でビームセイバーを抜きはらうと、そのまま薙ぎ払いを放った! その一撃

で、ジャンピングガンダムが左腕が斬り落とされた。

そしてそれから、俺たちは激しいバトルを繰り広げていった。そして1時間ぐらいしたところ。

……そろそろか。

そう思ったのと同時、俺の背後に殺気を感じた!

「そこです!」

俺は予備のビームセイバーを背後、殺気を感じたほうに投げつけた。

* * * * *

俺たちが戦っていたのは、カンちゃんの住処である大きい森と、モッチーの邸宅とレジャー施設の近くにある小さな森に挟まれた草原。

乱入者……モッチーの社長ガンダムは、その森の中に潜んでいたのだ。

『くそ、二人まとめて処分してやろうと思ったのに……なぜわかったのだ!』

「それはわかりません。ですが一つ言えることがあります。それは……露見しない悪事はないということですよ!!」

それでカンちゃんも俺が敵ではなく、むしろモッチーの敵だとわかってくれたのか、俺と並んで戦闘態勢をとる。

『おのれ! だが、この社長ガンダムに勝てると思うなよ!』

そう言うと、社長ガンダムは、各部にあるミサイルランチャーをオープンし、ミサイルを乱射してきた！

俺とカンちゃんは、それを必死にかわし続ける。

『はははは！ どうだ、この社長ガンダムの力は！ ガンダムファイトなど、犬畜生に任せとおけばいい！』

ある時はかわし、またある時は、ビームセイバーや手刀でミサイルを切り払っていく俺たち。そうしていくうちに、俺とカンちゃんの視線があつた。そして考えを通じ合わせる。

それも知らず、モッチーは、俺たちがミサイルに翻弄されているのに気をよくしたのか、さらに言い放つ。

『ふははは、馬鹿どもめ！ わしは』

「金の力で世界を支配してやる、ですか？」

『金の力で世界を支配してやる！ ……はあつ！』

「いきますー！」

俺はオルタセイバーを、社長ガンダムに突進させた。社長ガンダムは当然、こちらにミサイルを発射してくるも……。

「スプラッシュソード!!」

スプラッシュソードの無数の刺突で、そのミサイルを次々と撃ち抜いていく。焦ったモッチーはさらに俺にミサイルを発射していく。

だが、そうして俺に気を取られているのが命取りだ。

『ピョーンツ!!』

『なに!!?』

社長ガンダムの上空から、いつの間にかジャンプしていたジャンピングガンダムが猛スピードで降下してきた! そしてその勢いを加えた打ち下ろしのブローを、社長ガンダムの頭上に叩き込んだ!

地面にたたきつけられた社長ガンダムはなんとか立ち上がったが!

『ひ、ひいいいいいい!!』

「終わりです! 必殺! 絶対勝利・エクスカリバーン!!」

ビームセイバーを一閃! 社長ガンダムを真っ二つに切り裂いた! そして爆発!!

その爆発から、モッチーの乗った脱出ポッドが飛び出していくものの、それを許すほど彼は甘くない。

『シャチャョー、デテケエエエエエ!!』

『うわああああ!!』

ジャンプして追撃したジャンピングガンダムの蹴りが炸裂!! 脱出ポッドは、サッ

カーボールのように遠くへ飛んでいったあと爆発したのだった。

* * * * *

俺とカンちゃんの目の前で、彼のジャンピングガンダムが、デビルガンダムD G 細胞により変化していく。

そして生まれたのは、巨大な脚が特徴の暗い緑色のガンダム……ダークホッパーガンダムだ。

それを見守る俺たちの周囲には、鳥に擬態したデスバーデイが飛び回っている。彼らは一見すると普通の鳥にしか見えないが、鳥に悪意を持って近づくものを見つけると、元のデスバーデイの姿に戻り、外敵を攻撃するようになっていたのだ。

モッチーから島を解放した俺は、この島をこれ以上悪意ある者たちに踏み込ませないように、デビルガンダムの力で島を隔離することにしたのだ。ドモンはデビルガンダムを敵としか思っただけだったが、このように使うことによっては役にたつ。

変化が終わったところで、俺は改めて、カンちゃんに手を差し出す。

「それでは、これからよろしくお願いしますね、カンちゃん。地球を守るために」

『ウン、ヨロシク、アネキ！』

その俺たち、そして二体のガンダムを、夕日が赤く照らし出していた……。

閑話1

【閑話】登場モビルファイター解説（5話まで）

○GF13-047NN ガンダムピュセル

オリ主、ジャンヌ・エスプレッソが当初搭乘していたMF。駆動系が強化されており、彼女の剣技を完璧に再現することに特化している。その姿は、可憐な少女騎士のよう。

メイン武装はビームセイバー『カリバーン』。必殺技は、『約定勝利・ブライトカリバーン』。光のオーラをまとうて突進し、そのオーラで強化されたカリバーンで敵を一刀両断する一撃必殺の技だ。

○ガンダム・オルタセイバー

デビルガンダム

ガンダムピュセルが、DG細胞で強化改装された姿。ピュセルが少女騎士なら、こちらは漆黒の鎧をまとい、堕天使の羽を背負った女騎士といった姿。

DG細胞により、ピュセルの弱点であったパワーが強化されている。

必殺技は、『絶対勝利・エクスカリバーン』。基本は『ブライトカリバーン』と同じだが、こちらはオーラが黒い不死鳥の姿をとる。

他にも、無数の刺突を放つ『スプラッシュソード』も使える。

○ガンダム・ヘルトライデント

新生デビルガンダム四天王となったチコ・ロドリゲスの乗機。彼のかつての愛機、ガンダム・テキーラがDG細胞によって生まれ変わった姿。

そのフォルムは、テキーラよりさらに鋭利かつ邪悪なものになっている。その名のもととなっている三又の槍が特徴。その鋭い刺突で敵を撃ち貫く。

○ダークホッパーガンダム

新生デビルガンダム四天王の一機。ファイターはモノ言うカンガルー『カンちゃん』。彼の愛機ジャンピングガンダムがDG細胞で（ry

その大型化した脚部が特徴。もちろんこの脚部は伊達ではなく、その脚から放たれる蹴りの威力は絶大。

○ネロスガンダム・スクラップ

ネオ・メキシコの傭兵となったミケロ・チャリオットが乗るガンダム。かつての彼の愛機、ネロスガンダムを修理改修したものである。

外見はほとんど改修前と変わらないが、足回りは強化されており、さらに素早く強力な蹴りを繰り出せるようになった。

必殺技は、無数の蹴りを放つ『銀幻の脚』

※原作登場MF

○ネーデルガンダム

第2話にて登場。原作で設定されていた必殺技『ネーデルタイフーン』のほかにも、武器としても使える胸の風車『ローテレンデ・リング』も持つ。

○ガンダムゼブラ

第3話にて登場。野性味あふれるトリッキーな戦い方が特徴。

ジャンヌとのファイトでは、槍を棒高跳びのように使い、高く飛び上がり、上空から襲い掛かるといふ戦法も見せた。

○ミナレットガンダム

第4話にて登場。原作通り、デビルガンダムとの交戦時にDG細胞に感染してしまっていた。DG細胞により増幅されたセイトのレインに対する愛憎を糧として巨大化してしまう。

○社長ガンダム

第5話にて登場。ミサイルを多く持つが、相手があの二人だったので……。

新宿編

6th Fight 『危険な師弟再会！ 二人のマス
ターアジア』

ネオ・ホンコンのある部屋。

暗闇に包まれたその部屋で、ある男が通信を受けている。

「そうですね……わかりました。こちらでも困ったことが起きています……。プランを変更する必要があるようです。はい……はい。了解しました。また連絡いたします」

そして通信が切られる。

「まったく、あのお方には困ったものです。当初のプランから外れた行動をとるなど……。やはり、あのジャンヌとやらの娘の色香に惑わされたんでしょうかねえ……。仕方ありません。ここはあのお方と当初のプランには見切りをつけて、次のプランにうつすとうまいでしょうか……」

* * * * *

荒れ果てた町……新宿に、俺……TS転生者ガンダムファイター、ジャンヌ・エस्प
レツソは立っていた。

東方師匠こと、東方不敗・マスターアジアに、「相談したいことがある」と言われて、
ここに呼び出されたのだ。

しかし……この荒れ果てた方はひどい。確かに地球は、人類の過度の営みや、ガンダム
ファイターで傷ついているとはいえ、これはそれ以上だ。やはり、デスアーミーが暴れて
いるのだろうか？

だが、デスアーミーを統率していた師匠は、今回は無意味な破壊行為はしないように
してくれているはずだし、そもそもほとんどのデスアーミーは、デビルガンダムのコア
となつている俺の本体の支配下にあるはずなのだが……。はぐれデスアーミーでもい
るのだろうか？

俺がそう思っていると、向こうから誰かがやってきた。あれは……。

「師匠!」

そう、俺の協力者で、俺が尊敬する東方師匠その人だった。

「おお、ジャンヌか。無事に合流できて何よりだ」

「師匠こそ……いえ、師匠には無用な心配でしたね」

「こやつめ、言いおるわ。さて、この新宿は見たか？」

「はい。デスアーミーが暴れているようですが、一体何が……?」

俺がそう聞くと、師匠はうなずいて、真剣な表情を浮かべて口を開いた。

「うむ、わしもそのことが気になって、お主が来るまで調査しておったのだ」

「そうですか……それで結果は?」

「うむ、原因はわからぬが、その手掛かりをつかむことができた」

「なんと!?!」

俺は思わず驚きの声をあげた。いや、師匠の実力ならそのぐらいできて不思議ではないんだけどさ。

「これから手がかりが示す場所に行こうと思う。お主も来るか?」

「はいー!」

そして俺は師匠とともに、その場所に向かっていった。

だが俺は気づかなかった。歩き出す直前、その師匠に、師匠らしからぬ邪悪な笑みを浮かべていたのを……。

* * * * *

そして、師匠に導かれてたどり着いたのは、東京地下の地下鉄線路の一角。

「師匠、ここに一体何が……?」

「くくく……気づかぬか? この愚か者が」

師匠が邪悪な声色でそう言うと、俺たちの前後からゾンビ兵の群れが! いや、よく見ると、本物のゾンビ兵とは少し違うような。いや、そんなことを考えている場合ではない。

師匠は巧みな身体さばきで俺から離れると、前方のゾンビ兵の群れの奥に着地したのだ。

その身体からは邪悪な気配が……この気配はまさか……!?

「^{デビルガンダム}D G 細胞により作られた……師匠の偽物!」

「くくく、その通りよ。まんまとだまされおつて! 我が主の計画を狂わせる者、ここで果てるがよいわっ!!」

師匠の偽物……偽マスターアジアがそう言うと、同時に偽ゾンビ兵たちが俺に襲い掛かってきた!

「このぐらいのゾンビ兵で私の命を狙うとは……。私の命の見積もりとしては甘すぎるということを見せなければいけませんね」

俺はそう言い放つと、偽ゾンビ兵との戦いに突入した!

そう不敵なことを言ったものの、戦い始めると、かなりきつい。やはり数が多いうえに、前後から挟み撃ちにしてくるのだ。

こちらにとってかなり不利なのは言うまでもない。

「はあっ!!」

剣で目の偽ゾンビ兵を斬り捨てるが、その俺の後ろから……。

ズバツ!!

「きやあっ!!」

別のゾンビ兵に背中を斬りつけられた! 痛みをこらえながら、その偽ゾンビ兵を一刀両断する。すると、向こうのほうから偽ゾンビ兵がマシンガンを乱射してきた!

「くっ……!」

俺はそれを縦横無尽な動きでかわし続けるが、やはり長時間の連戦で消耗してきたせいか、交わしきれずに銃弾の一発を脚に受けてしまった!

「うぐっ!!」

そして地面に転落してしまう。それを見て、にやつと邪悪な笑みを浮かべる偽マスタージャア。

ここまでか……だが俺がやられても、また別のDG細胞クローンを生み出せば済むこと。そう俺が覚悟を決めていると……。

* * * * *

「行くぞ! 仮にもわしに技を教わった者なら、わしの弟子なら、見事よけてみせいっ

!!」

だがその憎しみの声にも、師匠は動じずに、会心の笑みを浮かべるのみ。

「ふん。D G細胞の気配を感じたから来てみたが……まさかここで、わしの偽物が悪だくみをしていたとはな。まあよい。かかつてくるがよい。偽物の実力がどれほどのものか、見定めてやろう」

「オオオオオオオ!!」

構えをとった師匠に襲い掛かる偽物。かくして、本物と偽物のバトルがはじまった。

偽物はパンチや蹴りといった基本的な技はもちろん、流派東方不敗の技も駆使して師匠を攻めたてるが、師匠はそのことごとくを、涼しい顔をしてかわしていく。

その実力は、本物の師匠に迫るものがあるが、それでも『迫る』というだけ。本物の実力には半歩、一歩どころか五歩ほど及ばないように見えた。その実力では、師匠を捉えるのは不可能だろう。その証拠に、師匠は不敵な笑みを浮かべたままだ。

「わしの物真似としてはなかなかやるようだが……技に魂がのつておらぬ! そんな技では、わしにかすり傷一つ負わせることもできぬわっ!!」

「グハアアアアアアアッ!!」

師匠の掌底が偽物をとらえ、奴は大きく吹き飛ばされた。師匠本人としては本気ではないようだが、それでも偽物に大ダメージを与えるには十分だったようだ。やはり偽物は偽物ということか。いや、師匠がすごすぎるのか。

「さて、偽物と遊ぶのも飽きてきたところだ。そろそろ、とどめを刺してやるとしようか」

そう言って一步を踏み出した師匠の右手が暗い光を放ち始める。それを見た偽マスターアジアは、恐怖にかられ、師匠に背を向けて逃げ出していった。むろん、それを逃す師匠ではない。

「相手に背を向けて逃げ出すとは! それでもわしの偽物かあああああ!!」

大きく地面をけつて、逃走する偽物を追撃する東方不敗・マスターアジア。そして。

「必殺! ダークネス・フィンガアアアア!!」

師匠の必殺のダークネス・フィンガーが偽物の頭をわしづかみにした。そのエネルギーが偽物の身体を焼き尽くし、消滅させていく。

「ア、アアアアアアアア!!」

「消え去れい、この偽物……痴れ者があああああ!!」

そして哀れ、偽物は消滅して果てた。

* * * * *

新宿の街の片隅に俺と本物の師匠は座り込んでいた。俺は今、背中と脚の傷を、師匠に手当してもらっているところだ。

DG細胞の身体を持つ俺は、放っておいても自然に傷は治るが、やはり手当をしても

らったほうが回復が早いのは普通の人間と同じである。

しかし、師匠本人に手当をしてもらえらるとは……ファン冥利に尽きすぎるな。

「よし、これでいいであろう。後は、お主自身の自己再生能力でなんとかならう」

「はい、ありがとうございます……」

そして二人で、荒れ果てた新宿の街並みを見下ろす。

「まさか、わしの偽物がここで、悪事を働いておったとはな」

「そうですね……。もしかして師匠、あの偽物は……」

俺がそう聞くと、師匠は苦々しい表情を浮かべて応えた。

「うむ。おそらく、ネオ・ホンコン首相、ウォン・ユンファの仕業であろう。あの小物め、お主との出会いをきっかけに、わしが自分の思い通りに動かなくなつたのを見て、わしに見切りをつけ、偽物を生み出してそれを使って野望を果たす気になつたと見える」

……やはりそうか。

ウォン・ユンファ。師匠が今言った通り、ネオ・ホンコンの首相だ。そして、Gガンダムの物語の黒幕（の一人）でもある。

原作では師匠と組んで、デビルガンダムの力を手に入れ、その力で世界を支配しようとする。結局それは、師匠の暴走と、ドモンたちの奮闘によってくじかれたわけだが、本人はそれでもあきらめず、ウォルターガンダムに乗り込み、最後まであがく程の執念

を見せた。

まあ、それでも最後はドモンのゴッドガンダムが騎乗していた風雲再起の蹴りを受けて果てたのだが。

その彼はここでも同じことをしているらしい。

ん、待てよ、ドモン？

「師匠、もしかしてウオンはドモンにも……」

「あり得るな、デビルガンダムを追うドモンは、あの小物にとつては自分の野望の邪魔もの。わしの偽物を使って抹殺しようとする可能性はあるだろう」

「急ぎましょう、ドモンがウオンの毒牙にかかる前に」

「そうじゃな、じゃがお主、傷のほうは大丈夫か？」

そう気遣って聞く師匠に、俺はなんとか立ち上がりながら言った。

「はい。傷はかなり治りました。それにこうしている間にも、ドモンに毒牙が迫りつつあるんです」

「よし、それではさっそく出発するでしょう!」

「はい!」

* * * * *

一方そのころ、時すでに遅く、ドモン・カッシュは師匠である東方不敗・マスターア

ジア……の偽物と接触していた。

例の流派・東方不敗の演武を演じ終えた彼は、偽物の手を握り泣き崩れる。

実はこの時、数度ほど演武の息が合わなかったのだが、師匠との再会に感激していたドモンは、それを気にもしていなかった。

「師匠……お会いしようございましてああああ!!」

「どうした、男子たる者、何を泣くことがある」

そうして弟子……偽物のマスターアジアからしたら狩るべき相手……を見つめる偽マスターアジア。

その表情に、一瞬邪悪な笑みが浮かんだのを、やはりドモンは知る由もなかった……。

7 t h F i g h t 『ドモン対二大ガンダム! 新生
シャッフル同盟見参!』

偽物の東方不敗・マスターアジアと再会を果たしたドモンは、彼に案内され、新宿の街を歩いていて。

「師匠、この先に何かがあるのですか?」

「うむ。わしもデビルガンダムの調査をしていますな」

「なんと!?!」

驚くドモンに、偽マスターアジアはうなずくと話を続けた。

「それで、この先の東京タワーに、その手掛かりがあることを突き止めたのだ」

「そうだったのですか、さすがは師匠です!」

「ふふふ、そう褒め殺すではない、こやつめ」

そう仲良さそうに進んでいく二人だが、時折見せる偽マスターアジアのかすかに邪悪な笑みに、やはりドモンは気づくことはなかった。

そしてそんな二人を遠くから見守る影が二つ。

本物の東方不敗・マスターアジアと、TS転生者ガンダムファイター、ジャンヌ・エ

スプレッソである。

「ドモンめ、偽物とは気づかず、あのように浮かれおって」

「ですが師匠……助けに行かなくてよろしいのですか？」

「かまわぬ。偽物に気づかずやられるようでは、キング・オブ・ハートは務まらぬわ。これも奴には良い試練よ。むろん、いざとなれば出ていくつもりではあるがな」

「厳しいのか弟子馬鹿なのかよくわかりません……」

ジャンヌがそうぼそりとこぼすが、それを聞き逃さなかったマスター・アジアは、その彼女をきつとにらみつけた。

「何か言ったか？」

「い、いえ、なんでも……」

「まあよい。むろん、すぐに出て行かないのには、別の理由もある。気になることがあるのだ」

「気になること？」

「うむ」

一方、ドモンと偽マスターアジアは、東京タワーの前までやってきていた。

そこで突然、偽マスターアジアの雰囲気が一変した。

表情を引き締め、戦う構えを取る。

「師匠?」

「気をつける、ドモン。敵じゃ」

「敵!?!」

そして現れたのは……。

「アルゴ・ガルスキー! ジョルジュ・ド・サンド!」

そう、かつてドモンが戦ったガンダムファイター、アルゴとジョルジュの二人だった。「久しぶりだな、ドモン。だが再会したばかりでなんだが、お前はここに骨をうずめることになる!」

「あなたの首を、あのお方の御前に捧げてあげましょう!」

「な、何を言ってるんだ!?!」

「問答無用!!」

ドモンの言葉には耳も貸さず、アルゴとジョルジュはドモンに襲い掛かってきた!

アルゴは巨大ながれきを抱え上げ、ドモンに投げつける。それをかわしたドモンだったが、そこにジョルジュが……!」

「その美しい瞳、あのお方には、よい供物になりそうです!」

「!!」

ドモンの目めがけて、目つぶしの突きを放ってきた! ドモンは背をそらせて、それ

をなんとかかわした。

そんなドモンは、困惑から抜け出せずにいた。

「どうしてしまったんだ、ジョルジュ！ お前は目つぶしなんて、卑怯な手を使う奴ではなかったはずだ！ お前は騎士ではなかったのか!?」

「ええ、騎士ですよ……。ただし、あのお方のね！」

アルゴとジョルジュの、卑劣かつ激しい攻撃を、なんとかかわしていくドモン。それを、偽マスターアジアはほくそ笑みながら見つめていた。そこであることに気づく。

「む……。どうやら、あそこにネズミが入り込んだようだな」

そして彼は人知れず姿を消した。むろん、そのことにドモンに気づくことはなかった。

アルゴとジョルジュの二人との戦いはまだ続く。ジョルジュの斬撃を刀で受け止めるドモン。だが、その後ろからアルゴが羽交い絞めにする！

「アルゴー！」

「ふふふ、さあ、ジョルジュ！ こいつを一刀両断してしまえ！」

「わかりました、さあ、ドモン。いよいよ最期の時です！」

「やめろ、やめるんだ、二人とも！ お前たちはこんな卑劣なことをする奴らではなかったはずだろう!」

そんなドモンの説得にも、やはり二人は耳を貸さない! ジョルジュは、偽マスターアジアが浮かべていたのと、同じような邪悪な笑みを浮かべて言い放った。

「そんな過去のことは忘れましたよ。さあ、これでお別れです!」

だがその時!

「H e y ! ちよつと待ちな!」

「兄ちゃんたちをやらせはしないよ!」

どこかで聞いたような声があたりに響く!

そして廃墟のビルの屋上に現れたのは四人の人影。そしてそのうち二人は、ドモンも見覚えがある顔だった。

「チボデー・クロケツト! サイ・サイシー!!」

* * * * *

一方そのころ、レインは新宿の地下を探索していた。

新宿にD デビルガンダム G 細胞の反応を見つけた彼女は、ここの地下に、デビルガンダム関係の何かがあるとにらんで、潜入してきたのである。

そしてその考えは正しかったようだ。

向こうのほうから、ゾンビ兵が近づいてきた。そのゾンビ兵は、レインを見つけると、戦闘態勢をとって襲い掛かってきた!

しかしレインも、それなりの心得はある。伊達にネオ・ジャパンチームのスタッフはやっていない。

彼女は懐から銃を取り出すと、心を落ち着けながら狙いを定めて……撃つ！

さすがに一発では倒せなかったが、さらに銃を発射！ それでゾンビ兵を倒すことができた。そこでレインは一息つく。

「ふう……。ここにゾンビ兵がいるってことは、やはり……」

「そう、ここがわしの主、その野望の苗床よ」

「!？」

声がしたほうを、ぎよつとしてレインが見ると、そこから一人の老人が複数のゾンビ兵と共にやってきた。

それは……。

「やはりあなたが黒幕だったのね……？ 東方不敗・マスターアジア！」

「くくく、その通りよ。知られたからには、例えば女だろうが生かしておくわけにはいかん。我がしもべたちの餌食となるがよいわ」

「……………」

レインは一步退き、偽マスターアジアのそばに控えるゾンビ兵が一步踏み出した。その時。

「はあっ!!」

空中から、覆面姿の男が急襲! レインを襲おうとしていたゾンビ兵を一蹴した!

その男は、しゅたつとレインの前に着地した。

「大丈夫だったかな? お嬢さん」

「あ、あなたは……?」

「今はそんなことを聞いている状況ではなからう? ここはわしに任せて、早く脱出するがよい」

「は、はい!」

男に促され、レインは今来たほうに駆け出す。男の声、どこかで聞いた覚えがあるがどこだろう? 年を取った声だったが。

一方、レインを逃がしてしまった偽マスターアジアは、憎々し気な視線で、男をにらみつける。

「おのれ、またわしらの邪魔をする気か。東方不敗・マスターアジア……!」

「無論よ。ことを成す過程で罪を犯したり、汚名を着るのは覚悟しているが、必要のない汚名や悪名を着るのは遠慮したいのにな」

「くっ……。アナザーゾンビ兵たちよ、このおいぼれを足止めしろ!」

そう言うのと、偽マスターアジアは、本物に背を向けて走り出した。その命を受けて、ゾ

ンビ兵たちは一歩踏み出す。

それを見て、本物のマスターアジアは、にやりと不敵な笑みを浮かべた。

「ふん……これだけの数でわしの足止めをしようとは、なめられたものだな」

* * * * *

一方、新宿の地上。ドモンたち、その場にいる者たち全員が向けた視線の先。

そこには、女性と男性、そしてチボデー・クロケット、サイ・サイシーの姿があった。

そして、チボデーがバツが悪そうに、傍らの男性に聞く。

「な、なあ。どうしてもあのポーズをしなくちゃいけないのか？ 俺はものすごく恥ず

かしいんだが……」

「何を言う。あれは我らの神聖なる儀式。やらなくてどうする」

「そうだけチボデーの兄貴。それにオイラ、こういうの好きだけだな」

「そういうことです。いきますよ、クイーン・ザ・スピード、クラブ・オン・エース」

そう言つて、女性がビルから飛び降りた。もう一人の男性と、サイ・サイシーも後に

続く。

そしてチボデーも。

「あー、もう、わかったよ！ こうなりやヤケだ！」

そして着地する。

最初に着地した女性が名乗りを上げる。構えをとって。

「ブラック・ジョーカー!」

次に男性も着地して、ポーズをとって名乗る。

「ジャック・イン・ダイヤ!」

そしてサイ・サイシーも。

「クラブ・オン・エース!」

最後にチボデー。

「クイーン・ザ・スピード!!」

そして四人一緒にポーズをとる。

「!」我ら、正しい戦いの守護者、シャッフル同盟!!」!」!」

「!」……」!」

その様子を、ドモン、ジョルジュ、アルゴは呆然として見ていた。

その視線を感じたチボデー曰く。

「だ、だから俺はこんな恥ずかしいことしたくなかったんだよお……」

そして沈黙。

やがて、ドモンが我に返った。

「あ、あなた方は! 師匠から話は聞いています! シャッフル同盟! そして、チボ

デー、サイ・サイシー！ お前たちがシャツフル同盟になつていたとは！」

「ああ、久しぶりだな、ジャパニーズ・ボーイ！ お前たちと別れてしばらくした後には彼らと会つてな。力と称号を譲り受けたのさ！」

「そういうこと！ ここはオイラたちも手を貸すぜ！」

そこで、アルゴとジョルジュも我に返る。

「おのれ、シャツフル同盟の横やりが入るとは！」

「ですが、私たちの邪魔はさせません！ ゾンビ兵、現れなさい！」

ジョルジュの号令と同時に、ドモン、チボデー、サイ・サイシー、ブラック・ジョーカー、ジャック・イン・ダイヤの5人を取り巻くようにゾンビ兵が現れた！

「どうやら、あの二人はD G細胞を植え付けられて洗脳されているようです。普通のD

G細胞とは違うようですが」

ブラック・ジョーカーの言葉に、得心したようにうなずき、続いて渋い顔をするドモン。

「やはり……しかし、彼らのような格闘家までがD G細胞で洗脳されるとは……」

「それだけD G細胞は危険だということですよ。ですが、詳しい話はあと。皆さん、彼らとゾンビ兵をお願いします。私とジャック・イン・ダイヤは、彼ら二人を正気に戻す術の準備をします」

「できるのですか!? そういうことが?」

「ああ、任せてもらおう。お前たちはそれまでの間、持ちこたえてくれ」

「OK!」

「よし、いくぞー!!」

そして、ドモンとチボデー、サイ・サイシーは、アルゴたちとの戦闘に入った。

ドモンが刀を振るって、数体のゾンビ兵を薙ぎ払う。

チボデーはパンチの連打と銃を駆使して、多数のゾンビ兵たちと渡り合う。

サイ・サイシーも少林寺拳法を駆使して、ゾンビ兵たちを倒していった。

さすがに一流の格闘家であるドモンたち。彼らは数の差をもともせず、アルゴたち

やゾンビ兵と互角の戦いを繰り広げていた。

一方のシャッフル同盟の二人は、気を練り、術の準備を整えていく。

「よし、行きますよ、ジャック・イン・ダイヤ!」

「わかった!」

そしてジャンプし、アルゴとジョルジュの二人の頭上に舞い上がる!

「シャッフル同盟!」

「奥義!」

「シャッフル浄化拳!」

突き出した二人の手から閃光が放たれ、アルゴたちにあびせられる。それを見てドモンが言う。

「やったか!?!」

しかし。

「こんなものでは」

「俺たちはなんともなああああいつつ!!」

無情にも、その光はアルゴたちに何の影響も与えることはできなかった。反撃にとアルゴは、近くの巨大ながれきを抱え上げると、ブラック・ジョーカーたちに投げつける。術を放ったばかりでかわす態勢ができていなかった二人はその直撃を受けてしまう。

「ブラック・ジョーカー! ジャック・イン・ダイヤ!」

ドモンが悲鳴をあげる。そこに。

「人の心配をしている場合ではありませんよ、ドモン!」

「くっ!」

ジョルジュが剣の斬撃を放ってきた! ドモンはそれをなんとか刀で受け止める。

「あのお方の生み出した新しいDG細胞の前には、あなた方など敵ではありません。さあドモン! あなたもあのお方のしもべとなるのです!」

「ぐぐぐ……誰が……!」

そのころ、ブラック・ジョーカーとジャック・イン・ダイヤはなんとか立ち上がった。致命傷は避けられたとはいっても、やはりあれだけのがれきの直撃を受けたのだ。ダメージはかなりのものがあつたようだ。

「大丈夫か、ブラック・ジョーカー?」

「ええ。ですが、シャッフル浄化拳を耐えるとは……。新種のDG細胞、恐るべきパワーを秘めているようです……」

「このまま放っておくわけにはいかぬな……」

「はい。となれば残る方法はただ一つ、私たちの命を燃やし尽くし、秘奥義を撃つことのみ」

「うむ、新しい世代を救い、我らの全てを受け継がせることができるのならためらいはない! やろう!」

そして二人ともうなずきあう。そして、自分の気どころか、命を燃やしていく。

そしてそして! 再び二人ともジャンプし、アルゴとジオルジュの頭上に舞い上がる

!

「ふん、また来たか!」

「私たちにはそんなものは効かないと、わかったはずです!」

だが、それでも二人は動じない!

「なんの！」

「私たちの力、心、命、全てを燃やし尽くせば！」

「浄化できぬものはなし！」

そして二人の身体がまばゆい光に包まれる！ それを見たチボデーが、ゾンビ兵を倒しながら、思わず声をあげる。

「ミス！ ミスター！ ダメだー！！」

その制止の声を聴きながらも、二人はさらに構えをとる。

「新しきシャツフルの者たちよ！」

「我らの称号、力、そなたたちに託す！」

「シャツフル同盟、最終！」

「秘奥義！！」

「シャツフル・フラッシュユ！！」

二人から放たれた光は、先ほどより激しい輝きをもって、二人に降り注いだ！ そして今度はさつきまでとは違った。

「ぐ、ぐおお……！」

「ぐ、ぐこれは……！」

途端に苦しみだすアルゴとジョルジュ。その身体からD G細胞が消えていく。いや

それだけではない。二人の手の甲には何かのあざ……シャッフルの紋章が刻み付けられていく。

一方のブラック・ジョーカーたちも無事では済まない。その身体はどんどん光に吞まれていく。

「私たちはもはやこれまでのようです……」

「新しいシャッフルの者たちよ。後はそなたたちに託す……。頼んだぞ、戦いの秩序を……」

そして二人の身体は光にかき消されて消え去った。それと同時に、アルゴとジョルジュの二人も倒れこむ。その表情に、邪悪な気配は感じられない。

「ぶ、ブラック・ジョーカー……ジャック・イン・ダイヤ……」

ドモンが呆然としながらつぶやく。

だがそこに! その感傷を打ち砕く声が響いた。

*** ** *

「ドモン、大変よ!」

「レイン!? どうしたんだ!?!」

果たして、その声の主はレインだった。彼女は、全力でドモンのそばに駆け寄ると衝撃的な事実を口にした。

「やっぱり、ここの地下にはゾンビ兵の工場があったの！」

「なんだって、やはりか!？」

「ええ、でもそれだけじゃなかったの！ マスターアジアが……！」

「師匠が!? 師匠がどうしたんだ、レイン!？」

その時！

「くくく……あのような馬の骨を救うために命を投げうつとはな。シャツフル同盟、やはり彼らは負け犬よ。あそこを抜けて正解だったわ！」

「!? この声は……師匠!？」

そして現れたのは、二人のゾンビ兵を従えた東方不敗・マスターアジアだった。それは偽物であったが、それにドモンが気づくよしはない。

「師匠、なぜゾンビ兵たちとともに……まさか!？」

「くくく、そのまさかよ。わしはデビルガンダム様の忠実なるしもべ、東方不敗・マスターアジアよ！」

そして彼の背後に、クローンガンダムが現れる！ だがそれは醜く変形をはじめ、原作のマスターガンダムよりさらに醜悪でまがまがしいガンダムへと姿を変えた！

「まさか、師匠がデビルガンダムの手下だったなんて……！」

「ドモンよ、お主と戦うはわしの本意ではない。わしと共にくるのだ。お主の兄、キョウ

ジ・カツシユも一緒にいるぞ」

「師匠がデビルガンダムの……兄貴も一緒……」

ドモンは衝撃のあまり、一時的に自我崩壊状態に陥り、偽マスターアジアの方に歩み寄っていく。

「だめよ、ドモン! マスターアジアのところに行ったら! 正気に戻って!」

「師匠も……兄貴も……」

だが、レインの制止も聞かず、ドモンはさらに偽マスターアジアがいるところへ進んでいく。それを見て、偽マスターアジアがにやりと邪悪な笑みを浮かべる。

だがそこに!

「待てい、ドモン! そのような偽物の甘言に惑わされるでない!!」

「!!」

また新たな声。ドモンとレイン、いや彼らだけでなくチボデーとサイ・サイシーもその声のした方向を向くと、そこには二人の人影が。

そう、それは……。

クローンガンダムの登頂部に立つ本物の東方不敗・マスターアジアと、ガンダムオルタセイバーの右肩に立つジャンヌの二人の姿だった!!

8th Fight 『試練の対決！ ドモン対ジャンヌ

!!』

それぞれの機体の上に立つ、本物のマスターアジアとジャンヌ・エスプレッソ。

マスター・アジアは、アルゴ・ガルスキーとジョルジュ・ド・サンドの倒れ伏している姿を見つめてふとつぶやいた。

「次代を担う若き者たちを救い、あとを託すためとはいえ、命を投げ捨て、わしより先に逝くとは……。この馬鹿者たちめ……」

そうつぶやく彼の目に、ふと涙がにじむ。それは、マスター・アジアなりの、散っていった同胞たちへの手向けであった。

それを悟ったジャンヌがそつと声をかける。

「師匠……」

「いや、なんでもない。それより今は……」

声をかけられたマスター・アジアは涙を振り払うと、愛弟子と、その弟子をたぶらかそうとした偽物に鋭い視線を送る。

一方、師匠の姿を見上げるドモンの表情には、やはり戸惑いが浮かんでいた。

「し、師匠!? 師匠が二人、一体これは……?」

「ドモンよ、そやつは偽物。悪者が自分の傀儡とするべく、新種のDデビルガンダムG細胞を使って生み出した存在よ!」

偽物と指摘された、偽マスター・アジアも、負けじと言い返した。

「こ、こやつの言うことにだまされるなドモン! わしこそ本物。傀儡はそやつのほうじゃ!!」

二人のマスター・アジアから「自分こそが本物」と主張され、ドモンはどちらが本物がわからず混乱していた。そこに、本物のマスター・アジアの声が飛ぶ!

「ドモンよ、いまだ本物と偽物の区別すらつかんか。修行が足りぬわ。はあっ!」

そう叫ぶとマスター・アジアはクーロンガンダムから飛び降り、ドモンに向かって舞い降りていく。

「ならばこれならどうじゃ! 答えよドモン! 流派・東方不敗はっ!」

その声を受けて、ドモンも我に返ってかまえる。

「王者の風よ!」

そして拳をすさまじい速度で交わしあう。

「全新!」

「系裂!」

「天破侠乱!!」

そして最後に、拳を激しくぶつけ合わせる。

「見よ! 東方は紅く燃えている!!」

先ほどの偽物との演武とは違い、今の演武は見事に、何から何まで全てかみ合っていた。

そして拳から伝わってくるものを感じ、ドモンは確信した。今、目の前に立ち、自分と拳をぶつけ合った師匠こそが本物だと。

「師匠! 師匠こそ、本物だと確信いたしましたあ……!」

「わかってくれたか。それでよいのだ」

その二人の様子を見た偽マスターアジアは、憎々し気な視線を彼らに向けた。

「おのれ、もう少しでドモン・カツシユを始末できたものを……!」

その視線を、本物のマスター・アジアは正面から受け止め、さらに不敵な笑みで応じる。視線には明らかかな敵意をこめて。

「ふん、貴様のような偽物に好きにはさせぬわ。待っておれドモン。今、この偽物を葬ってくれよう」

そしてマスター・アジアは、クーロンガンダムに乗り込むと、偽物に向けて飛び掛かっていった。一方の偽マスター・アジアも、自分の偽マスターガンダムに乗り込んだ。

* * * * *

はい。ここまでの展開に置いて行かれた、ジャンヌ・エスプレッソですこんにちは。師匠こと東方不敗・マスターアジアが、ドモンに飛び掛かって演武をはじめたと思ったら、クーロンガンダムに乗り込み、偽師匠の乗ったマスターガンダムの偽物に飛び掛かっていった、という構図になっています。

師匠の放つ突きや蹴りを、偽物はさばきながらも、自分からも攻撃を加えていく。

先ほど師匠が倒した偽物のデータをフィードバックしたのか、偽物の動きは、前よりさらに鋭さを増していた。本物の師匠と互角のようにさえ見える。

それを師匠も悟っているのか、面白そうな声色で問う。

「ほほう、前に戦った時よりも強さが増しておる。前回とは違うようだな」

「わしは、前の個体から貴様についてのデータを受け継いでおる。前のようにはいかぬわー!」

そう言って、偽物はほくそ笑みながらさらに攻撃を続ける。しかし。

「だが、それだけでこのわしを超えられると思っっているのか、たわけが!」

次の瞬間、師匠のさらに鋭い突きが、偽物を捉えた! 偽物が衝撃と苦しさをミツクとした苦悶の表情を浮かべている。

「ぐ、が………、これは………」

「愚か者め！ わしをデータなどというもので図ろうとすること自体が誤りよー！」

今までののは、師匠にとつてはセカンドギアに過ぎなかつたらしい。さらに鋭さと速さを増した攻撃が、偽物を打ちのめしていく。最初はなんとかさばいていた偽物も、ついには防ぎきれなくなつて、ほとんどの攻撃をその身に受けることになつていた。

そしてついに、敗色を悟つた偽物が機体から飛び降りた直後、師匠のクローンガンダムの拳が、偽マスターガンダムを貫いた！

その様子を見て、ドモンも安堵と感動の表情を浮かべていた。

「さすが師匠ですー！ 見たか偽物！ 師匠がデビルガンダムの手先になどなるはずがな
らー！」

「……」

それを聞いた師匠から返つてきたのは、重い沈黙。俺にはその理由がよくわかつた。

師匠も、俺も、地球再生のためとはいえ、デビルガンダムを利用するという、ドモンとは相いれない立場にいる。そしてそれは同時に、ドモンの師匠への信頼を裏切ることでもあるのだ。そのことに、師匠は心の痛みを感じているのだろう。

一方の偽物は、遠くのビルの屋上まで駆け上ると、号令をかけた！

「おのれ、かくなる上は……現れよ、オルタ・デスアーミー!!」

* * * * *

「おのれ、かくなる上は……現れよ、オルタ・デスアーミー!!」

その偽物の言葉と同時に、地面から多数の、俺たちの支配下にいる奴らとは、違う形状のデスアーミーの大群が現れた!

その数は、先ほど、新宿の地下で師匠が超級霸王電影弾で薙ぎ払ったゾンビ兵の数より、さらに多い。

俺はあわてて、師匠のもとに合流した。

「師匠、いかがなさいます? 超級霸王電影弾を使っても薙ぎ払える数ではないと思いますが……」

すると通信スクリーンに映った師匠は、苦渋に満ちた表情を浮かべた。彼がこんな表情を浮かべるのも珍しい。

それが、彼がこれからしようとしていることについて、どれだけ痛恨事かということ物語っていた。

「仕方あるまい。わしらもアレを出して迎え撃つとしよう。どうせ、いずれは馬鹿弟子にも知られることになるのだ」

「師匠……」

そして師匠は、ドモンへとすまなさそうに声をかけた。

「すまぬ、ドモン……」

「師匠……?」

そして。

「いでよ、デスアーミー、いやデスセラフ軍団!」

師匠のその号令とともに、天空からデスアーミー改めデスセラフの軍団が舞い降りてきた。

みな、デスアーミーを基に、俺の本体が手を加えたものだ。ゾンビ兵を必要とせず、俺か俺の本体、あるいは師匠の命令のみに従って動く。自ら人に害をなすことはないが、俺たちが指示すれば、躊躇なく人に害をなす存在。

「こ、これはデスアーミー……! まさか……!」

「デスセラフたちよ、あの偽物のデスアーミーをせん滅するのだ!」

師匠の号令一下、デスセラフたちは、目の前のオルタ・デスアーミーに向けて攻撃を開始した。各所で激しい戦闘が繰り広げられる。

それを見つめながら、師匠は横眼で生弟子を見た。

「信頼を裏切つてすまぬ、ドモン。これが全てよ」

「師匠……そんな……」

衝撃を受けるドモンの視線を受け止めながら、師匠は話を続ける。

「だが一つだけ言っておきたい。わしもジャンヌも、デビルガンダムを利用しようとし

ていることは確かだが、そこには邪心も私利私欲もない。わしらが成し遂げねばならぬこと、わしらの志のためじゃ。今のお主には信じられぬことかもしれないがな」

「……」

「じゃが、あの偽物の背後にいるものは違う。きやつめは、どこから入手したD G細胞を使い、それを改変したものを使って、その力で世界を支配しようとしている。あの偽物はその手先よ」

「師匠……教えてください、師匠たちがデビルガンダムを利用してまで成し遂げなければならぬこととは……その志とはなんなのですか!？」

そのドモンの問いには、俺が答えることにした。

「それは教えることはできません……」

「ジャンヌ・エスプレッソ……なぜだ!？」

「今のあなたには教えても、理解することができません。今のあなたには、それだけの心も力も、まだ身につけていないのです。その状態で教えても、その後には悲劇が待っただけ……。それを許すわけにはいけません」

「……だが、それでも……!」

と、そこで師匠が一步踏み出して、再び口を開いた。

「どうしても知りたいか? ならば……ジャンヌと戦ってみせよ」

「!？」

* * * * *

突然、師匠が指示した、俺とドモンとの決闘。それには思わず、俺も驚きを禁じ得なかった。

「今一度言う。ドモン、ジャンヌと戦ってみせい。それでわしがお主に明かしても大丈夫と思えば、すべてを教えてやろう」

「し、師匠?」

そう聞き返す俺に、師匠はにやりと会心の笑みを浮かべた。

「お主にも、成し遂げたい願いがあるのであろう? ならばドモンと戦ってみせよ。そうすればその願いへの道が見えてくるであろう」

「師匠……」

俺はそう茫然と師匠を見つめていた。だが、師匠の言葉からは嘘偽りは感じられなかった。師匠には、俺では見えていなかったものが見えているかもしれない。俺が求める未来に続く道が。

ならば、それを断る理由はない。

「……わかりました!」

力強く答え、戦闘態勢をとる。そして、一方のドモンも。

「こおおおおおいつ! ガンダアアアアアアムツツ!」

指を鳴らし、シャイニング・ガンダムを呼び出す。

そして二人とも構えを取る。

「行くぞ、ジャンヌ・エスプレッソ! 師匠の真意を知るために、お前を倒す!!」

「受けて立ちます、ドモン・カツシュ! 私の望む未来のために!!」

そして互いに一步を力強く踏み出す。

「ガンダムファイトツ!」

「レディイイイゴオオオオ!!」

そして、俺とドモンとのガンダムファイトが始まった。俺のオルタセイバーの突きを、ドモンのシャイニング・ガンダムがかわして、蹴りを放つ。俺はその蹴りをバク転して回避。横一文字に斬撃を放った。

それをかわしたドモンは、両手にビームソードを持ち、斬りかかってきた! 俺はそれを、同じく二刀流に構えたビームセイバーでさばいていく。

「なかなかやりますね……。さすがはキング・オブ・ハート」

「お前もな」

「では、次はこちらから行きます! スプラッシュ・ソード!!」

俺はスプラッシュ・ソードの無数の突きを放った。それに対してドモンは……。

「どれが本物の剣かわからん。ならば、全てさばききるのみ！ 必殺、シャイニング・シャドー!!」

なんと何体ものシャイニングに分身し、無数の突きを全て、その分身でさばいていった！

そうして激闘を繰り広げる俺とドモンを、師匠はただ静かに見つめているのみ。

そして。

「今度はこちらの番だ！ 必殺！ シャイニング・フィンガアアアア!!」

「必殺！ 絶対勝利・エクスカリバーン!!」

そして、ドモンのシャイニング・フィンガート、俺のエクスカリバーンが激しくぶつかりあった！

数瞬かもしれない、だが一時間か、もしかしたら一日かもしれない。そんな短くも長い時間。

それだけの間、二人の技がぶつかり合い、火花を散らしていく。

だが、それは突然、終わりを迎えた。

ドモンが突然、技を解き、拳を降ろしたのだ。

「ドモン、なぜ拳をひいたのですか？」

「わからん……だが見えたんだ。死にゆく師匠を、俺が抱きかかえ、看取る姿を。そして

感じた。今、お前たちと戦うべきではない、と」

ああ……どうやら、俺の剣から、悲劇の可能性を感じ取ったらしい。もしかしたら師匠が俺たちにフアイトを命じたのは、このためだったのかもしれない。その証拠に、師匠は腕を組んだまま、満足そうな笑みを浮かべている。

そして師匠が口を開いた。

「うむ。見事……とはいえんが、一応及第点はあげられるであろう。それでも、お主に全てを明かすことはできんがな」

「師匠……」

だがその時!

突然、地面が揺れて割れ、奥底から何かが現れた!!

9 t h F i g h t 『出現！ アナザーデビルガンダム』

『！！』

俺とドモンがともに、拳を退いて戦いをやめたその時！

突然、地響きと共に地面があれ、何かが現れた！

「な、なんだ!？」

「あ、あれは!？」

「むう……!？」

そこに現れたのは、ガンダムだが、まがましい姿。デビルガンダムより、さらさまがましい感じがする。

そしてその頭部に立っているのは……。

「ふふふ、これがあれば、お前らなど虫と同じよ!？」

「偽マスターアジア!？」

そして、偽マスターアジアはデビルガンダムもどきの頭部から飛び降りると、たちまちその胸部からの触手に絡みつかれ、内部に取り込まれていった。

『さあ、見よ！ 降臨の時を!』

そのデビルガンダムもどきに、偽マスターアジアのデスアーミー……デスアーミー・オルタたちが群がり、その肉体となっていく。デビルガンダムもどきはどんどん大きくなり、ついにはギアナ高地での第二段階ぐらいの大きさにまでなった!

『ふふふふ、これぞ、あのお方がフェイクDデビルガンダムG細胞を使って生み出したデビルガンダム! 名付けて、アナザーデビルガンダムよ!! さあ、このアナザーデビルガンダムの力の前に、怯えながらくたばるがいい!!』

だが、その偽マスターアジアの言葉にも、師匠は動じない。さすがだ。

「ふん、黒幕の奴から借りただけの力を見せつけておいて、何を偉そうに」

『『虎の威を借る狐』という言葉の意味を知らないと見えますね!』

『ふふふ、口だけは達者だな。だが、五人だけでは何もできません!!』

そう勝ち誇ったように偽マスターアジアが言う。だがその時!

「五人だけではありませんよ!!」

*** ** *

ビルの上に立っている二人の影。それを見たドモンが叫ぶ。

「ジオルジュ・ド・サンド! アルゴ・ガルスキー!!」

そう、手の甲にシャッフルの紋章を浮かべた、ジオルジュとアルゴの姿だった。

「心配をおかけしましたね、ドモン・カツシユ。私、ジャック・イン・ダイヤことジオル

ジユ・ド・サンドと」

「俺、ブラック・ジョーカーの紋章と力を継承したアルゴ・ガルスキーも助太刀させてもらうぞ!!」

さらに！ 援軍は続いた。

「待たせたな、ジャンヌ、東方不敗マスターアジア!」

「アネキ、オマタセ! ブジダツタカ?」

反対側のビルにも二人……というか、一人と一匹。

「チコ・ロドリゲス! カンちゃん!!」

「うむ、修行とDG細胞の制御の訓練が終わったのでな。急いで駆け付けてきたぞ!」

「アネキ、テツダウ! マカセトケ!」

そう、我がデビルガンダム四天王の残り二人の姿だった。

「よし、我らの力を結集させて、このアナザーデビルガンダムとやらを倒すぞ! いで

よ、デスセラフ軍団!!」

そして師匠の号令で、俺たちの背後にデスセラフ軍団が現れた。

しかし、その軍団の姿を見て、ドモンは複雑な表情を浮かべている。

「いくぞ、ドモン! 用意はいいか?」

「は、はい!」

「かかれえ!!」

そして俺たちは、アナザーデビルガンダムに襲い掛かっていった!

* * * * *

「ギガンティック・マグナムツ!!」

チボデーのガンダムマックスターが、銃を発射する。発射された銃弾は、光線となつてアナザーデビルガンダムに突き刺さり、爆発を起こした。

「グラビトン・ハンマアアアアア!!」

アルゴのボルトガンダムの投げつけたグラビトン・ハンマーがアナザーデビルガンダムに炸裂した。

しかし、アナザーデビルガンダムも負けてはいない。全身からビームを発射し、爪を振り下ろして、反撃を返してくる。

その爪の一撃が、サイ・サイシーのドラゴンガンダムに炸裂して、吹き飛ばした!

「うわあ!!」

「ダイジョウブカ、チビ!? ユダンハキンモツ!」

その吹き飛ばされたドラゴンガンダムを、カンちゃんのだークホップガンダムが受け止めた。

「あ、ありがとよ、助かったぜ……。でも、オイラはチビじゃなくて、サイ・サイシーだ

からな！」

「ワカツタ、チビ！」

「だからチビじやねえって！ うおっ!!」

そこに、アナザーデビルガンダムのビームが発射され、二機は左右に散開して、それをかわした。

その後も、俺たちの猛攻は続く。

「いきなさい、ローゼス・ビット！」

「ガトリング・デススピアー!!」

ジョルジユのガンダムローズから放たれたローゼス・ビットが、アナザーデビルガンダムを取り囲み、四方八方からビームを浴びせ、チコのガンダム・ヘルトライデントの無数の突きが、アナザーデビルガンダムを襲う。

「スプラッシュ・ソード!!」

「十二王方牌大車併!!」

俺のスプラッシュ・ソードと、師匠の十二王方牌大車併が同時に炸裂。奴にダメージを与える。

もちろん、デスセラフたちも、こん棒やビームライフで、アナザーデビルガンダムに応戦する。

だが、そんな中、ドモンのシャイニングガンダムだけ、ちょっと動きが悪い。何か、戸惑いがあるようだ。やはり、宿敵であるデビルガンダムのしもべであるデスアーミー（正しくはデスセラフだが）たちと共に戦っていること、そして俺と師匠がデビルガンダム側であることに、迷いがあるのだろうか。

「ドモン、しっかりしてください! あなたにも思うところはあるでしょうが、今は目の前の脅威であるアナザーデビルガンダムを止めることだけを考えましょう!」
「わ、わかつている! くっ……!」

俺の言葉に、ドモンはそう応えて応戦を再開するが、やはり動きに精彩がない。それほど、彼の迷いは深いのだろう。

そこに!

「危ない、ドモン、よけよ!」

「え? うわあ!!」

「ドモン!!」

迷いを抱えて戦うドモンのシャイニングガンダムに、アナザーデビルガンダムの拳の一撃が直撃し、彼は大きく吹き飛ばされた。

そこに、アナザーデビルガンダムの放った触手が迫る!

「ドモン!!」

「!!」

その時!

ズバツ!!

何者かのガンダムが割り込んできて、その触手を断ち切った。それを見た俺は思わずつぶやく。

「え? あれは……」

10th Fight 『新たなる戦いへの別れ! アナザーデビルガンダム最期の日!!』

ドモンを襲う触手を断ち切ったもの。

それは二本の刀を持った、忍者のような雰囲気ガンダムだった。

「え、あれは……?」

俺はそれを見て呆然とつぶやいた。そのガンダムのことを知らなかったわけではない。

だが、その正体が原作通りだとすれば、あのガンダムとそのファイターが存在しているはずがないのだ。

登録番号GF13-021NG、ガンダムシユピーゲル。ネオドイツのファイター、シユバルツ・ブルーダーのガンダムだ。

だが、実際にはドモンの兄、キョウジがDデビルガンダムG細胞で作りだしたクローンが、本物に

成り代わっている。ドモンの支援のために。彼はその後も、色々ドモンのために助けになり、最期にはオリジナルもろともデビルガンダムとともに散るといふ結末を迎えた。

だが、この世界では違う。

俺の本体は、キョウジになり代わってデビルガンダムのコアになった。制御権を俺の本体に奪われたキョウジは排出され、デビルガンダムの呪縛から解放されたはずだ。だから、彼がDG細胞を使ってシユバルツを生み出すことはできず、ゆえにシユバルツが存在するはずはないのだ。

なのになぜ？ まさか本物のシユバルツ？ だとしたら、ドモンたちを助ける理由がないんだよなあ。うーむわからん。

そんな俺の疑問をよそに、シユピーゲルは立ち上がると、その後も迫りくる触手を断ち切り続ける。その太刀筋は本当に見事だった。いったい何者なんだ？

そしてシユピーゲルはドモンのシャイニングガンダムに目を向けて言った。

「ドモン、何をためらっている!？」

うわ、声までキョウジ兄さんだよこの人！ 本当に何者なんだ!？」

「う、うるさい、あんたに言われる筋合いはない!？」

「馬鹿者！ そのようなことで、あのアナザーデビルガンダムを倒せるか!？」

「うっ……」

シユバルツ（仮）に一喝され、絶句するドモン。まるで兄に叱られてしゅんとしている弟のようだ。本当に何者だよシユバルツ（仮）!？」

「あのアナザーデビルガンダムは直近の脅威! あれを野放しにしておけば、さらに被害が増していくだろう。ドモン、お前はデビルガンダム憎しの心に囚われ、アナザーの被害を見過ごすのか!」

「そ、それは……」

「ならば私たちのすることは、あのアナザーを止めるために、彼らを利用……いや、彼らの、アナザーを脅威と感じ、止めようとしている心を信じ、共に戦い、あれを破壊することではないのか!? どうだドモン!!」

「う、そ、その通りだ……わかった……!」

おお、あのドモンを説き伏せた! さすが、あの声と口調は説得力があるなあ。なおこうしている間にも、アナザーデビルガンダムは俺たちへの攻撃の手を緩めることなく、絶賛交戦中であります。

むろん、俺のほうにも触手やビーム、生体ミサイルが飛んできて、それを交わしたり迎撃したり、断ち切ったりしている。

あの……そろそろ、説教をやめて、戦いを再開してほしいのですが。

「よし、いくぞドモン! 全力を尽くして、あの化け物を止めるのだ!」

「おう!!」

* * * * *

そして、シュバルツ（仮）のガンダム・シュピーゲルも加勢し、俺たちはアナザーデビルガンダムに対して反撃を開始した。

「たあーっ!!」

俺のオルタセイバーのビームセイバーが、その身体を切り裂き。

「ドラゴンファイヤー!!」

サイ・サイシーのドラゴンガンダムの火炎放射・ドラゴンファイヤーが、奴を焼く。

「サイクロン・パーンチッツ!!」

「ガトリング・デススピアー!!」

チボデーのガンダム・マックスターのサイクロンパンチが生んだ竜巻が、アナザーの身体を切り刻み、チコのガトリング・デススピアーが貫く。

「はあっ!!」

「アナザー、デテケ!」

ジョルジュのガンダム・ローズのビームサーベルが一閃し、カンちゃんのダークホットパーガンダムの蹴りが炸裂する!

「グラビトン・ハンマアアアア!!」

アルゴのボルト・ガンダムのグラビトン・ハンマーが、アナザーの顔面に叩きつけられる!

「シユツルム・ウント・ドラクウウウウウ!!」

「おおおおお!!」

シユバルツのガンダム・シユピーゲルがシユツルム・ウント・ドラクと、ドモンのシャイニングのビームソードが、アナザーを切り刻んでいく。

シユバルツがドモンを立ち直らせたことで、流れは再びこちらに傾いてきた。アナザーデビルガンダムもこちらに応戦してくるが、みんな鮮やかな動きでそれをかわし、さらに攻撃を加えていく。

そして。

「必殺! 絶対勝利! エクスカリバーンツツ!!」

俺の絶対勝利・エクスカリバーンがさく裂! アナザーはその攻撃に耐えかねたのか、ついにその胸部装甲を開いた! その中の、偽物マスターアジアが無防備になる! そして!

「碎け散れい、偽物よっ! ダークネス・フィンガアアアア!!」

「グアアアアア!!」

師匠のダークネス・フィンガーが炸裂し、そのエネルギーで偽物は跡形もなく消滅した。それで制御を失い、アナザーは崩れ落ちながらも、苦しそうに暴れまわる。

「今じゃ、ドモン!」

「はいー！」

そしてドモンのシャイニング・ガンダムがデビルガンダムのまがいものに突撃していき。そして。

「俺のこの手が光つてうなる！ お前を倒せと輝き叫ぶっ！ うおおお!!」

シャイニングはスパーモードに変形し、ビームソードを抜いて構える！

「必殺！ シャイニングフィンガーソオオオオオドツ！ メン、メン、メー……ンツツ!!」

その斬撃が決まった！ アナザーはいくつかのパーツに切断され、そして爆発して果てた。

悪しき者によって生み出されたまがいものの悪魔は、ついに倒されることになったのである。

* * * * *

「シユバルツとやら、よく我が弟子を立ち直らせてくれた。それと、まがい物を葬ることに手を貸してくれたことにも礼を言うぞ」

「……あの場は、アナザーを倒すことが重要だったから、手を貸したまでだ。デビルガンダムが脅威で、倒すべきという私の考えと立場が変わったわけではない」

「シユバルツ……」

戦いを終え、俺たちはそう言葉を交わしていた。だが、ドモンたちと同様、シユバルツとも相容れることはできなさそうだ。今はあくまでアナザーという脅威があつたから一時的に手を組んだだけで、互いに戦うことあれど、和解することはよほどのことがない限り、ないということだろう。それを考えると、俺はちよつと寂しさを感じた。
ん、そうだ。

「あの……シユバルツ」

「なんだ？」

「その覆面をとつていただけませんか？」

覆面を取つて、その正体がなんなのか確かめなければ。

だがやはり、それを言われたシユバルツは、それまでの態度がどこかにいったかのよう慌てふためいた。

「こ、これは忍びの命！ とることなどできぬ！ これを失うことは、私の命を失うも同じ、さ、さらばだ!!」

「……」

そしてシユバルツは、脱兎のごとく去つていった。逃げたな……。

まあ、仕方ない。

「それでは師匠、いきましようか」

「うむ……さらばだ、ドモンよ」

「師匠！」

ドモンに呼び止められ、師匠の脚がとまった。そして振り向くことなく口を開いた。「そうであった。約束であったな。わしらの真意の片鱗でも伝えておかねば。わしらがデビルガンダムを使うは、ただ地球のことを憂いてのことよ。今のお主には、これ以上のことを教えるわけにはいかぬがな」

「師匠……それは一体……？」

「ドモン。知りたければ心と力をさらに鍛えてください。師匠の思い、考えを感じ取り、理解できるほどに。そうなれば、おのずから答えがわかることでしょう」

「ジャンヌ……」

そこで、師匠がやっとドモンのほうを振り向いた。

「その通りじゃ、ドモンよ。強くなれ。全てを知り、答えを導くことができるほどにな。さらばじゃ」

「師匠……」

そして俺たちは、今度こそ、振り返ることなく新宿を後にしたのだった。

ギアナ高地編

11th Fight 『編み出せ! 新必殺技豪熱マシンガンパンチ!!』

いずこかへ飛び立っていく、五機のシャツフル同盟たちのガンダム。

俺……ジャンヌ・エスプレッソと、師匠こと東方不敗マスター・アジアは、それを遠くから眺めていた。

「ドモンたちは、ギアナ高地に飛び立っていききましたか……」

「うむ、かの地は、わしとドモンが過去、修行に励んだ地。奴らにとつても、よい修行になるであろう」

そう、彼らが向かったのはギアナ高地。ジャングルに覆われた秘境の地。彼らはそこで、さらなる力を身に着けるべく修行に挑むのだろう。

……となれば、俺としてもやるべきことがある。彼らを導き、高め、俺の目指す結末を迎えるためにも。

「それでは、私とチコ、カンちゃんも向かうことにします。ギアナ高地へ」

その俺の言葉に、師匠は顔をわずかに曇らせ、前方を向いたまま口を開いた。

「そうか。だが気をつけよ。わしの見立てでは、お主の身体は……」

さすが師匠、感づいていたのか。その眼力に内心恐れ入りながら、俺は苦笑して返した。

「大丈夫ですよ、師匠。少なくとも師匠よりは問題ありません」

「こやつめ、言いおるわ。……無理はするでないぞ」

「はい。私の望む結末を迎えるまでは、倒れる気はありませんから」

そして俺、チョコ、カンちゃんの新生デビルガンダム四天王の三人もまた、ギアナ高地へ飛び立っていった。

* * * * *

ギアナ高地、その一角。

「はあっ！ とりやつ！ ぬおあああっ!!」

ここでは、ネオ・アメリカ代表のガンダムファイター、チボデー・クロケットが激しいトレーニングに励んでいた。

彼が拳を振るうたびに、汗が朝露のように弾け、空を切るたびに、空気が切り裂かれる。

だが、そのような激しく鋭い動きを繰り返しても、チボデーに満足は訪れなかった。

——まだだ、まだ足りない!

チボデーは必死に技を繰り出し、トレーニングを続ける。
そこに。

「はい、チボデー。タオルとドリンクよ」

彼のスタッフ、『チボデー・ギャルズ』の一人、キヤスが、チボデーにタオルとドリンクを手渡す。

それを受け取ったチボデーは、それでタオルで軽く汗をふくと、荒っぽくドリンクを飲みほした。

「ふう、一息ついた。サンキュー」

「チボデー、もっと休憩したら? どう考えてもハードワークすぎるわ」

そのキヤスの言葉にうなずきながらも、チボデーはトレーニングを再開する。そして身体を動かしながら言った。

「……勝てないんだ」

「え?」

答えるチボデーの表情には、苦渋がにじみ出ていた。

「アナザー戦で俺は見た。カンちゃんとかいうあのファイターの動きと技を。あいつには、今の俺では絶対に勝てない」

「……」

「どのような思惑であれ、あいつらがデビルガンダムを擁している以上、あいつとも戦う時が来るだろう。だから！　今より強くなつて、カンちゃんに負けられないようにならなければならぬんだ！」

「チボデー……」

どう声をかければいいのかわからず、ただ彼の名をつぶやくことしかできないキヤス。

そこに！

「オレヲヨンダカ!?!」

「!?!」

* * * * *

チボデーとキヤスが見上げたがけの上、そこには一機のガンダムが仁王立ちしていた。

見間違えるわけがない。カンちゃんのダークホッパーガンダムである。

「お前は……カンちゃん!?!　なぜここに!?!」

「理由ハワカラナイケド、じゃんぬノ頼ミ！　オマエ、ブチノメス!!」

そして崖を飛びあがって、チボデーに襲い掛かる！

「キヤス、離れている！　巻き込まれるぞ！」

「う、うん、チボデー、気を付けてね!」

チボデーはうなずくと、自分のガンダム、ガンダム・マックスターを呼び出す。そして乗り込み……。

「それでは行くぞ! カンガルー野郎! ガンダムファイトツ!」

「レディイイイゴオオオオオ!!」

そして、チボデーのガンダム・マックスターと、カンちゃんのダークホッパーガンダムのファイトがはじまった!

先手を取ったのはチボデーだ。フック、ジャブ、そしてストレート。様々なパンチを次々に繰り出す。だが、野生の勘なのか、カンちゃんはそのパンチを次々とかわしていく。

そして、チボデーの攻めの間隙を突き、ダークホッパーのリバーブローがマックスターに突き刺さった!

「がはっ……!」

そこから形勢逆転! カンちゃんがチボデーに様々なパンチを浴びせる。リバーブローが効いているのか、それともカンちゃんの強さか、チボデーはそれらを防ぐのが精いっぱいだ。しかも、ガードしきれず、数発ほどもらってしまう。

「くっ……調子に乗るなあ!!」

チボデーも負けてはいない。飛んできたストレートをかわし、クロスカウンターで反撃！ それでダークホツパーが後ろずさったのを合図に、チボデーが逆襲に出る！ パンチの連打を繰り返し出し、カンちゃんはそれをよけていく。

「くらええ!!」

マックススターが強烈なフックを放った！ しかし、ダークホツパーはそれをしゃがんでかわすと、後ろ向きになり……。

「なに……? うわあつ!!」

チボデーは、カンちゃんの強烈なカンガルーキックで吹き飛ばされた！

* * * * *

ファイトは、カンちゃん有利に進んでいた。

カンちゃんの、蹴りを交えた怒涛の攻めに、チボデーは徐々に防戦一方に追い込まれていく。

蹴りも使うカンちゃんは、ボクサーであるチボデーにとって強敵であった。

こちらの攻撃の間隙をぬい蹴り攻撃の一発。

パンチの連打に紛れ込んでの蹴り。

こちらの攻撃をかわしてのカウンターキック。

まさに変幻自在というべきカンちゃんの攻撃に、チボデーは翻弄されていた。

そもそも、パンチのみというボクシングのステージで戦ってきた彼だ。ガンダムファイトでいくらか他の技にも慣れてきたとはいえ、やはり蹴り技も使う敵との相性は悪いと言わざるを得ない。

そして、再びカンちゃんの蹴りが、チボデーに炸裂! マックスターは再び吹き飛ばされた。

「ちぼデー、マダマダ! ソロソロ、トドメ!」

気合と勝つ気十分のカンちゃんとは違い、一方のチボデーは、相性の悪い相手と、それよりなによりも、カンちゃんの天賦の才の前に、弱音が湧き出ることを禁じ得なかった。

「やはりだめなのか……? 俺ではこいつに勝てないのか……?」

彼の心がくじけかけたその時!

「チボデー、頑張つて!」

「あなたはチャンプよ! 負けるはずがないわ! 自信をもって!」

「立って、チボデー!」

「チボデー、勝つてー!!」

チボデーギャルズの応援だ。それを耳にしたチボデーは、身体と心に力が満ちてくるのを感じた。そして思う。

(そうだ！ 俺には彼女たちがいる！ 彼女たちの声援が、気持ち、俺に力を与えてくれる！ 彼女たちがいてくれる限りは、俺は無敵のチャンプでいられるんだ！)

「ちぼでー、クタバレ！ ダークホッパー・ヘルクラ……」

「うおおおおお！ 喰らえ、必殺！ 豪熱・マシンガンパアアアンツッ!!」

「カンツ!!」

飛び掛かったダークホッパーに、チボデーの新必殺技・豪熱マシンガンパンチが襲い掛かる！ 一発一発に炎をまとったそのパンチは、無数放たれ、ダークホッパーガンダムに襲い掛かる！

その威力の前に、ダークホッパーのガードは意味をなさず、次々とそのボディにヒットしていく。今や、追い詰められるのはカンちゃんのほうになった。

そして。

「吹き飛ばえ！ フィニーツシユ!!」

「ピョーンツッ!!」

炎に包まれたアッパーでフィニーツシユ！ ダークホッパーは自分が立っていた崖の上へと吹き飛ばされていった。

しばしの沈黙。だが今やチボデーの身体は、新たな力、新必殺技を身に着けた喜びと、難敵であったカンちゃんを倒した歓喜に包まれていた。

そして彼は、拳を振り上げて叫ぶ。

「アイ・アム・チャンピオンッ!!」

カンちゃんか吹き飛ばされた崖の上。

俺と、中破したダークホッパから降りてきたカンちゃんは、そこから、歓喜に沸くチボデーチームを見下ろしていた。

その様子を見て、思わず微笑みが浮かんでしまう。

「アネキ、ヒドイメニアッタ……」

「ふふ、お疲れ様でした、カンちゃん。こんな役をやらせてごめんなさいね」

「キニスルナ、アネキ。アネキノ役ニタテタラ、カンチャン、ウレシイ。カンチャン、ヤクニタテタカ?」

そのカンちゃんの質問に、俺は微笑んだまま振り向いて答えた。

「ええ。これでチボデーはさらに強くなりました。十分役に立てましたよ」

「ソレハヨカッタ。カンチャンモ、ツヨクナッタアイツトタタカウノ、タノシミ」

そう、これが俺がギアナ高地に赴いた狙い。彼らに干渉して、さらに強くして力を身に付けてもらう。

彼らの影響を受けて、ドモンがさらに力と心を磨き上げれば、きつと師匠と俺の考え

を理解してくれるはず。そうなれば、きっと師弟和解の道も開けるだろう。

その一步を築くことができたのは本当によかった。

そう思いながら、俺はチボデーギヤルズに抱き着かれるチボデーを見守っていた。

12th Fight 『恐怖から抜け出せ! 勇気の
ローゼスハリケーン!!』

「ふん、はっ! とりゃあ!!」

ギアナ高地の密林の中、ビームセイバーを振るうガンダム・ローズ。だが、その動きには、どこか精彩が欠けていた。

それを取り戻そうと、必死にビームセイバーを振るうも、戻ってくることはなかった。

「はあ……はあ……」

ガンダム・ローズのkokopittで息を切らすジオルジュ。

そこに、執事のレイモンドからの通信が入る。

『ジオルジュ様、ドローンの用意ができました』

「わかった。さっそく出してくれ」

『かしこまりました』

レイモンドの返事と同時に、ガンダム・ローズの周辺に三機のドローンMSモビルスーツが現れた。現れたそれは、すぐに戦闘態勢をとる。

だがそれより速く、ジオルジュがドローンの一機に襲い掛かる! そしてそのドロー

ンを一刀両断する！

もう一機のドローンが銃を撃つ。ガンダム・ローズはその攻撃を身をひるがえして華麗にかわすと、その頭部にビームセイバーを突き刺す！　だがそれと同時に、もう一機のドローンが、ガンダム・ローズの背中にビームを直撃させた！

「！」

そして、ガンダム・ローズが振りむいた直後！

「!?」

ジョルジュの表情が一瞬、恐怖に硬直する！　彼の目には、フェイク D G デビルガンダム 細胞を感染させようと、彼に迫るアナザー・デビルガンダムの姿が映っていた。

「あ……あ……」

『じ、ジョルジュ様!?』

レイモンドの声も、今のジョルジュには届かない。ジョルジュの中で、恐怖が膨れ上がっていく。そして、それが極限に達した瞬間！

「うわああああ!!」

ガンダム・ローズは、それまでの華麗な動きが嘘のように、荒々しくドローンに襲い掛かった！　その剣の動きは、まるで彼の目に敵が映っていない、否、彼の周囲が敵であるかのように乱暴で、まるで騎士ではなく狂戦士のように。

ドローンMSは的確に模擬弾のビームを発射する。ガンダム・ローズはその直撃を受け、時には吹き飛ばされながらも、それでもひたすら前進し、これまた荒々しい動きで、ドローンMSを破壊した。

「はあ……はあ……」

『ジョルジユ様……』

執事に心配そうな声をかけられながら、ジョルジユはただ、コクピットで恐怖に満ちた荒々しい呼吸を発していた……。

* * * * *

その修行の様子を厳しい目で見つめる二人のガンダム・ファイター。言うまでもなく、俺、ジャンヌ・エスプレツソと、チコ・ロドリゲスの二人である。

「やつぱり、ジョルジユはあの恐怖から脱し切れていないようだな……」

そう苦々しい声をかけるチコに、俺は表情を曇らせたままうなずいた。

「ええ。残念ながら、今の彼では、さらなる力を得ることは難しいでしょうね……」

本当はこの修行で、彼に新技・ローゼスハリケーンを会得してもらいたいのだが……。彼に刻まれた恐怖は、かなり深いようだ。

「これは荒療治するしかありませんね。チコ、カンちゃんに続いて、嫌な役回りをさせてすみませんが、お願いできますか?」

「ああ、気にしないでくれ。アナザーとの戦いで見た、彼の技はどれも華麗だった。それを取り戻してもらい、さらに力を得てもらうためなら、こんな貧乏くじも悪くない」
そして、チコはその場を離れて行った。俺の背後で、彼の愛機であるガンダム・ヘル
トライデントが立ち上がる機械音が聞こえた。

* * * * *

「ふうう……はあつ!! ……ダメだ……」

大木に突き刺さったままの刀を握ったままのドモンに、シュバルツのげきが飛ぶ。

「甘いぞ、ドモン! そのようなことでは、真のスーパードモードを起動させることはできない! 明鏡止水の心だ。雑念を捨てろ。大木を一刀両断することだけを考えるのだ!」
「わ、わかつている!」

そして、再び刀を構え……そして一閃! しかし、刀はやはり大木の1/3ぐらいの位置で止まってしまった。

そこに。

「ドモン! お客さんよ!」

「あ、ああ、わかった。修行は一時休憩ってことでもいいよな、シュバルツ?」

そう聞いてくるドモンに、シュバルツは真剣な表情のままうなづく。

「うむ、仕方あるまい。休憩もたまには必要だ。だが、休憩が済んだら再び修行だ!」

そしてシュバルツは、どこかへと飛び去って行った。その動きは、まさに忍者がごとし。

* * * * *

「恐怖に?」

そう心配そうに声をかけるレインに、レイモンドはうなずいて口を開いた。そう、ドモンへの来客はジョルジュ・ド・サンドの執事、レイモンドだったのだ。

「はい。フェイクDG細胞を植え付けられてからというもの、ジョルジュ様は、デビルガンダムへの恐怖にとりつかれてしまいました……」

「そうか……。旧シャッフル同盟の二人の力で、フェイクDG細胞は既に除去されたが、それによって植え付けられた恐怖は容易に拭い去ることはできないということか……」
「おそらく、そうだろうと思います。今のジョルジュ様は、何かの拍子にデビルガンダムに対する恐怖を呼び起こされてしまい、目の前のドローンMSすらデビルガンダムに見えてしまう、というありさまで……」

「むう……」

さらに、このジョルジュの乱心をネオ・フランスの委員会も問題視していて、一部では、選考をやり直そうかという声も上がってきているらしい。

「ふむ……だが、これはジョルジュの心の問題だからな。俺たちではなんとも……」

「ちよつと、ドモン……」

ドモンをたしなめようとするレイン。そこに。

「いや、ドモンの言う通りだ」

「!？」

ドモン、レイン、レイモンドが上を向くと、そこには、そばに立っている木の枝に足を引っかけて逆立ちでぶら下がるシユバルツの姿があった。

「心の問題は、己が乗り越えていくしかないこと。手助けはすれど、最終的には乗り越えるのは自分なのだ」

「はぁ……」

シユバルツの意見はともかく、その登場の仕方にも、呆然として返事を返すことしかできないレインであった。

* * * * *

そして、ドモンたちのアドバイスを基に、レイモンドは、ジオルジユが立ち直るために色々と手を尽くした。

まずは座禅。

「……」

「そう、その調子ですぞ、ジオルジユ様！ 心を静めるのです！」

「……………」

そして数分後。

「う、うわあああああ!!」

「じ、ジオルジユ様!」

座禅を組んで心を無にしたジオルジユの脳裏に、デビルガンダムが現れて失敗。

「おや、もういいのですか、ジオルジユ様……う?」

「あ、ああ……すまない……」

おいしいものを作って差し上げるも、そんな状態では、ジオルジユの食欲が戻ってくることもなく、失敗。

「で、デビルガンダムが、デビルガンダムがあああ!?!」

「ジオルジユ様!?!」

滝行をさせてみるも、今度は岩肌がデビルガンダムに見えてしまい、失敗。

ジオルジユの、デビルガンダムへの恐怖は、そう簡単にぬぐえそうもなかった。

* * * * *

前にレイモンドが、ドモンのとこりに相談に赴いてから数日後。

この日も、レイモンドは再び、ドモンに助言を受けに赴いていた。

ジオルジユが恐怖に囚われているのは相変わらずで、それどころか、今の彼の戦いか

らは、優雅さが完全に失われていた。ただ恐怖におびえ、それを振りほどき、逃れるためのだけの戦い。

その様子を見かねたのか、ネオ・フランスの委員会内部では、今一度、ジオルジュと、もう一人の候補であったミラボーとの間で、ファイトを行わせ、選考をやり直したほうがいいのではないか、という意見が大勢になっていた。

このままでは、ジオルジュはネオ・フランス代表の座をはく奪されてしまうかもしれない。それは、騎士であることを心掛けてきたジオルジュにとつては、死より辛いことだろう。

だがレイモンドは、いまだにジオルジュを立ち直らせる方法を見いだせずにいる。

そこまで考えて、彼がため息を吐いたその時だ。

彼の目に、戦闘の煙が立ち上っているように見えた。それは見間違えるはずがない。ジオルジュのいる、ネオ・フランスのキャンプからだ。

「ジオルジュ様!!」

* * * * *

ネオ・フランスのキャンプでは、ジオルジュのガンダム・ローズと、強襲を仕掛けてきたチコ・ロドリゲスのガンダム・ヘルトライデントとのファイトが繰り広げられていた。だが。

「はあはあ……」

『どうした? あの鮮やかな技は、今日はお休みか?』

「う、うわああああ!!」

ガンダム・ローズはビームセイバーで斬りかかる。だが、その攻撃は大振りかつ乱雑で、チョコにとってはそれをかわすことは造作もなかった。

『そんな攻撃で、この新生デビルガンダム四天王、チョコ・ロドリゲスを倒せると思ったか? 甘くみられたものだな』

「はあ……はあ……で、デビルガンダム……」

『……どうやら、デビルガンダムへの恐怖から立ち直れていないようだな。なら、その恐怖に、さらに華を添えてやろう!』

チョコがそう言うと、ガンダム・ヘルトライデントが変化をはじめた! よりマツシブに、そしてより凶悪に。

「あ……あ……」

『どうだ、お気に召してもらえたか?』

恐怖に表情が凍り付くジョルジュ。目の前のガンダム・ヘルトライデントは、DG細胞の変化能力で、大きさは通常のMモビルファイターFの2倍ぐらいでありながらも、デビルガンダムに酷似した姿へと変わっていたのだ。

その姿に、ジョルジュの心の中の恐怖が呼び起こされてしまい、彼は身動きがとれなくなってしまう。

変化したヘルトライデントが一步を踏み出す。それを見てとつたジョルジュは慌ててビームセイバーを構える。それは、ファイターとしての本能のようなものであった。

『いくぞー！』

ヘルトライデントが、そのトライデントを自在に操り攻撃してくる。ジョルジュはそれを防ごうとするものの、恐怖で身体が硬直してしまい、満足に防ぐことができない。

『その程度か、失望したぞー！ ガトリング・デススパアー!!』

ヘルトライデントの無数の突き、ガトリング・デススパアーがさく裂！ ジョルジュのガンダム・ローズは吹き飛ばされてしまう。

「うぐつ………！」

『俺が戦うまでもなかつたな。だが一度戦つた者への手向けだ。この俺の最強の大技でとどめを刺してやろう』

そしてチョコが槍を構えたその時！

『お待ちくださいー！』

* * * * *

「レイモンドー！」

そう、ガンダム・ローズの目前には、ジオルジュの執事、レイモンドが乗るMS、『バトラーベンスンママ』が立ちはだかつていた。

『どうしても、ジオルジュ様を倒すというのであれば、不詳、このレイモンド・ビショツプが、先にお相手いたします』

『ほう……?』

決意をみなぎらせて立ちはだかるレイモンドを、ジオルジュが止めようとする。

「ま、待て、レイモンド! お前には無理だ!」

『ご心配なく、ジオルジュ様。このレイモンド、あなたに剣を教えた身。ただでやられはしません』

『面白い。どこまでやれるか、見せてもらおうとしようか!!』

そして、チコのガンダム・ヘルトライデントは、バトラーベンスンママに襲い掛かった!

そして槍を一閃! だが、バトラーベンスンママはそれをひらりとかわし、逆に、ビームソードの一撃を見舞う! チコはそれをビームトライデントで受け止めた。そして離れて槍を横風ぎ! だが、バトラーベンスンママはそれを華麗に跳躍してかわし、ヘルトライデントの背後に降り立ち、ビームソードで一閃! ヘルトライデントはそれを紙一重でかわす。

それからも、ガンダム・ヘルトライデントと、互角の戦いを繰り広げるレイモンド。主のために必死になって戦うその姿は、ジョルジュの心の中に何かを湧き出させた。

しかし、レイモンドはやはり高齢である。いまだ青年であるチコと比べれば、体力はどうしても劣る。

体力が尽きてくれば、当然動きも鈍る。

『はあっ！』

『うわあ!!』

ガンダム・ヘルトライデントの狙いすました突き！ レイモンドはかわそうとするものの、かわしきれず、左腕を破壊されてしまう！

続いて、ビームトライデントの横風ぎ！ かるうじてかわしたものの、頭部を半壊させられてしまう！

それでも、まだレイモンドの闘志は尽きることはない。渾身のビームセイバーでの斬撃！ だが、チコはそれを槍で受け止め、バトラーベンスンマムの脚部に蹴りを放つ！ その鋭く、激しいキックに、バトラーベンスンマムの右脚は破壊！ 左足も半壊してしまい、摺座してしまう。

『俺をここまで追い詰めたのはお前がはじめてだ。ほめてやるぞ』

『はあ……はあ……』

「もういいレイモンド! やめてくれ!」

それでもレイモンドは、ガンダム・ローズの前から退こうとしなかった。そして主に言う。

『ジオルジュ様……このレイモンド、貴方様にお仕えできて、幸せでありました』

「レイモンド!」

『別れは済んだか? では……これでとどめだ!』

そしてチコは、目の前のバトラーパーンスンマムに狙いを定め、槍を構える。

それを見つめるジオルジュは、自分に対して自問自答する。

(ジオルジュ……お前はそのままでもいいのか? 恐怖に縛られ、忠実な執事をこのまま死なせても、それが騎士なのか? お前はそんな男だったのか?)

『さらばだ、古い戦士よ。ガトリング・デススピアー!!』

そして再び、摺座したMSに、無数の突き……ガトリング・デススピアーを放つ!

そこに!

カカカカカッ!!

『!?!』

大破したバトラーパーンスンマムの前に、ガンダム・ローズが躍り出て、その刺突を全て、ビームセイバーでさばききったのだ。

『おお……ジオルジュ様……!!』

「ありがとう、レイモンド。私を守ろうと戦ってくれたお前の勇気が、私に勇気を与え、恐怖を振り払ってくれた」

そして、ビームセイバーを一閃！ ヘルトライデントはそれは後方に飛んで交わすが、交わしきることができずに、脚部装甲に一筋の傷を作られてしまう。その傷も、D G細胞の自己修復能力により、すぐに消えたが。

『勇気と華麗さを取り戻したようだな。そうでなくては』

「我が執事をあそこまでもてなしてくれた礼、私の新技で返させてもらいましよう」

そう言つて、ジオルジュは身構える。今ならできそうな気がする。編み出したはいものの、今まではどうしても使うことができなかったあの技。今の自分なら発動させることができる。その確信があった。

そして、ガンダム・ローズのマントから、薔薇型の無線攻撃端末……ローゼス・ピツトが射出され、前方に展開する。

それを見て、チョコが笑みを浮かべる。

『ほう……面白い。ならば俺も、改めて必殺の大技で迎え撃たせてもらおう』

「のぞむところですよ……いざー」

そしてにらみあうガンダム・ヘルトライデントと、ガンダム・ローズ。

そして。

『ヘル・バニシング・トルネード!!』

ヘルトライデントが槍を大きく横風ぎ! それによつて大きな竜巻が生まれ、ガンダム・ローズへと向かつていく!

そしてガンダム・ローズは……!

「ローゼス・ハリケーンツツ!!」

前方に展開したローゼス・ビットたちが一齐に、竜巻ごと、ヘルトライデントを取り巻く。そして高速回転しながら、ビームを発射! 敵をビームの竜巻に閉じ込めた!!

『こ、これは……!? うおおおおお!!』

「ファイナーレ!!」

そのジョルジュの掛け声とともに爆発!!

「できた……私の新技……。勇気が私に、技を放つ力を与えてくれた……なに!」

目をむくジョルジュ。そこには、半壊状態のヘルトライデントが膝をついていた。そのボディから、DG細胞のパーツが剥がれ落ちていき、そこには元の姿のガンダム・ヘルトライデントの姿があった。

『見事だったぞ、ジョルジュ・ド・サンド。機体の上に、デビルガンダムの姿を模した増加装甲をまもっていないければ、撃破されていた……。それでも、大ダメージだったがな

……』

そしてなんとか立ち上がる。チコの言うとおり、ヘルトライデントはあちこちボロボロになっていた。

『また相まみえよう。その時まで、さらに強くなっているよー!』

そしてヘルトライデントは、彼方に飛び去って行った。ジオルジュはそれを見送って一息つくど、ビームセイバーをしまうと、ガンダム・ローズを降り、バトラーペンションに駆け寄っていった。

* * * * *

その戦いの様子を、俺……ジャンヌ・エスプレツソは、崖の上から見守っていた。

「どうやら彼も、新しい力に目覚めたようですね。もしかしたら私は、師匠と同じかそれ以上の、名伯楽なのかも……。……っ」

と、そこで立ち眩みがして俺はよろけそうになった。そして、それを支えてくれる姿があったのに気づく。

「カンちゃん……ありがとうございます……」

「ダイジョウブか、アネキ?」

「ええ。ここまでの連戦の疲れが出てきただけです……。少し休むことにします」

「ソウカ、ソレナラ……」

そう言うと、カンちゃんは、なんと俺をお姫様抱っこしたではないか! こ、これは元男の身からすると恥ずかしすぎるぞ!

「ち、ちよつと、カンちゃんっ……」

「遠慮スルナ、フカフカ布団トハイカナイガ、おれノ腕ノ中デ、ヤスンデイロ」

「は、はい、ありがとうございます……」

そして俺は、カンちゃんにお姫様抱っこされたまま、眼下にたたずむガンダム・ローズを見守っていた……。

13th Fight『中口激突！ サイ・サイシー対アルゴ!!』

夜の闇の中、最低限の警備を残し、ひっそりと眠りにについているネオ・ロシアのキャンプ。

崖の上から俺……TS転生者ガンダムファイター、ネオ・ノルウエー代表、そして新生デビルガンダム四天王ナンバー2こと、ジャンヌ・エスプレツソは見下ろしていた。

「さて……それではそろそろ行きましようか」

俺はそうつぶやくと、愛機であるガンダム・オルタセイバーに乗り込んだ。それと同じに機体の変形をはじめ。DデビルガンダムG細胞の効果だ。

後頭部の一部が細長く伸び、弁髪のようになる。両手が変形し、竜のアギトに似た形になる。

カラーリングも、緑を基調としたものに変化していく。

「……よう」

俺のオルタセイバーは、DG細胞による擬態効果により、ネオ・チャイナのドラゴンガンダムに酷似した姿に変化した。よく見ると違ふところは多いが、夜襲をしかけるの

だから、これぐらいで十分だろう。

「それではいきますか」

その夜、ネオ・ロシアのキャンプは、混乱と喧騒に包まれた。

崖の上から、モビルファイターらしき機体が飛び降りてきたのだ! 無人のトレーラーを踏みつぶしたそれを見た、ネオ・ロシアスタッフは驚愕する。それは……。

「ね、ネオ・チャイナのドラゴンガンダム!」

「ど、どうしてここに!」

そう戸惑いの声をあげるスタッフの声をよそに、ドラゴンガンダムらしき機体は、その左腕を仮設の倉庫へと向ける。中にいるスタッフたちが全員出ていくのを確認すると、その左腕の竜のアギトから火炎を発射! 倉庫を焼き尽くす。

「これ以上好きにはさせせん、ネオ・チャイナめ!」

その声とともに、別の倉庫から、ネオ・ロシアのMSモビルスーツが発進していく。そして、ドラゴンガンダムらしき機体を三機で取り囲む。

だが、三機が戦闘態勢をとる前に、侵入者はフェイロンフラッグらしき武器を構え、突進していく。そして、その先に発振したビームサーベルで、ネオ・ロシア機の一機を一刀両断! パイロットが脱出した直後、機体は爆散した。

横に回った一機が銃を撃とうとするも、ドラゴンもどきは右腕を伸ばし、竜のアギトでその機体の頭部をわしづかみにした。そしてその機体を振り回すと、もう一機に投げつけた。

そして、武器をかまえて一步踏み出す。慌てて、パイロットが脱出したところで、その二機を一刀両断！

爆散したのを見届けると、ドラゴンガンダムらしき機体は、天高く跳躍して飛びさつていったのだった。

* * * * *

その数時間後、ネオ・チャイナのキャンプでも、同じような事件があった。ボルトガンダムに酷似した機体が、キャンプを襲撃したのだ。

だが、それらの事件には不可解なところがあった。いずれも事件でも、死傷者は一人も出ていないのだ。

襲撃者は、コクピットを外して攻撃したり、スタッフが脱出したのを見届けてから、施設を攻撃するなど、極力死傷者が出ないように動いていたのだ。

とはいえ、施設自体が受けた被害は甚大であり、それはネオ・ロシアとネオ・チャイナの両者に疑心暗鬼を植え付けるに十分であった。

* * * * *

その翌日。ネオ・チャイナのキャンプは喧噪に包まれていた。

ネオ・ロシアチームを仕切る女傑、ナスターシャ・ザビコフが、ネオ・チャイナチームの恵雲に問い詰める。

「あの姿はどう見てもドラゴン・ガンダムだった! 言い逃れはできんぞ! 私たちのキャンプを襲撃したのは、ネオ・チャイナだろう!」

一方の恵雲、瑞山も負けてはいない。逆に反論し、問い返す。

「知らんものは知らん! サイ・サイシーのアリバイは完璧だ! こちらこそ、キャンプをポルト・ガンダムらしい機体に襲われたのだ! 襲撃してきたのはそなたたちであるう! 被害者は我らのほうだ!」

「なんだと!」

口論を続ける両チームのスタッフ。口論は徐々に冷静さを失い、ヒートアップしていった。このままでは、西暦時代から続いていたネオ・ロシアとネオ・チャイナの蜜月も終わりを迎えてしまうかもしれない。それほどに口論の場は、怒りの炎に包まれていた。

一方、その口論をつまらなさそうにながめるサイ・サイシーと、目を閉じたままその傍らに座り込むアルゴ・ガルスキー。ファイターである彼らには、国家間の色々は関係ないし、興味もない。何より、お互いは、相手がそんなことをする人物ではないとわかっ

ているのだ。

やがて、サイ・サイシーが口を開いた。

「つまらないことしてんなよ。白黒つけたいんなら、俺たちファイターには、ぴつたりの方法があるだろ？」

その言葉に、ナスターシャと恵雲、瑞山が、そろって言葉の主のほうを向いた。

* * * * *

「それじゃいくぜ。アルゴの兄貴、準備はいいかい？」

「おう。言うまでもない」

ネオ・チャイナキャンプの付近、そこでサイ・サイシーのドラゴン・ガンダムと、アルゴのボルト・ガンダムが対峙していた。全ては、このガンダムファイトで白黒決着をつけよう、という話になったのだ。

互いに身構える二機。そして。

「よーし、それじゃあ！ ガンダムファイトっ！」

「レディーゴー!!」

互いの掛け声が戦いの合図！ かくしてファイトははじまった！

先手をとったボルト・ガンダムがタックルを仕掛けてきた！ それに対し、サイ・サイシーは前方に構えたビーム・フラッグを地面に突き立て……。

「そーれっ!」

棒高跳びの要領で高く跳躍!

フラッグをかまえ、空中からボルトに襲い掛かる!

「甘いぞ!!」

それに対して、アルゴはパンチで迎撃! 重量級のパンチを放つ! それに対し、サイ・サイシーはフラッグを前方に構え、旗で自らをかばうようにした!

「それで俺のパンチを防げると……なに!」

パンチがフラッグを突き破った! ……しかし、その向こうにドラゴン・ガンダムの姿はない! そこにあったのは、落ちていくフラッグの柄だけであった。

そして背後から——!

「もらったぜ兄貴! ……つてうわっ!」

ボルトの背後からドラゴンクローを伸ばして放ったドラゴンガンダムだが、そのクローをアルゴにつかまれてしまう。

「この俺を甘くみるな!!」

そして、そのクローをつかんだまま、ドラゴンを一本背負いし、地面にたたきつける!

「ぐうっ……!」

衝撃に顔を歪ませるサイ・サイシー。しかしすぐに立ち上がり、飛びのいて距離を取る。

* * * * *

そのボルト・ガンダムとドラゴン・ガンダムの戦いを、俺……ジャンヌ・エスプレツソは崖の上から眺めていた。

二機ともどんどん動きが鋭く、力強くなってくる。そればかりではない。二機から感じるオーラも、パワーを増している気がする。

この調子なら、あともう一押しで、新たな力を覚醒させてくれるだろう。

俺は音なき指笛を吹いた。

* * * * *

激しいフアイトを繰り返す、アルゴとサイ・サイシー。

そこで彼らは何かに気づいたようだ。

「な、なんだ!?!」

「あ、あれは!?!」

それは、天空から舞い降りてくる、ドラゴン・ガンダムや、ボルト・ガンダムを模した、デスセラフの群れだった。

「なるほどな……。襲撃事件の裏にはジャンヌがいたってことか」

「オイラたちはあの姉ちゃんに一杯食わされたってことだね」

そう会話を交わしている間にも、デスセラフたちは舞い降り、ドラゴンとボルトを取り囲む。

だがそれでは、二人の不敵さは変わらなかった。

「それじゃ、アネキにそのお返しをしなくちやな! こいつらを全滅させることでさ!」
 「ああ。これだけの数で、俺たちを倒せると見くびつてるのを後悔させてやらないとな
 !」

そして二機は、デスセラフたちとの攻撃に突入した!

* * * * *

「うおりやあ!!」

アルゴが、組んだ両手をデスセラフに叩きつけて、叩き潰す。だが、その背後から別のデスセラフ（ドラゴン）が襲い掛かり、ドラゴンクローから炎を放つ。

「うおお! なめるなああああ!!」

だが、アルゴはそれにたじろぐことなく、その機体を焼かれながら突っ込み、その拳をデスセラフに叩きつける!

「ちっ、まだまだあ!」

ボルトを横したデスセラフのタックルで吹き飛ばされたドラゴンが、負けじと立ち上

がり、そのデスセラフの頭部をドラゴンクロウを伸ばしてわしづかみにし、そのまま振り回して放り投げる。

やはり二機の強さでも、数の暴力の前には分が悪いようだ。それでも、彼らの闘志は衰えることを知らない。いや、そればかりか、どんどん技の威力も、動きの鋭さも上がっていく。

そして……！

「うおおおおお!!」

ボルトガンダムが金色に輝くと、その拳を一機のデスセラフに叩きつけた！ その衝撃で、数機のデスセラフが一気に吹き飛ばされる。

その様子を見て、ナスターシャは唖った。

「おお、これは……！ 今までアルゴのパワーが足りなくて発動できなかった、ボルトガンダムの『パイレーツモード』!! この大量のデスセラフとの戦い、その窮地が彼に、このモードを発動させる力を開眼させたのか！ よくやったぞ、アルゴ!!」

その様子を見て、サイ・サイシーもにやりと笑った。機体には大小さまざまな損傷が刻み付けられていたが、負けるとは想像できないような威風堂々としたたたずまいで。

「へへ、やるじえねえか、兄貴！ オイラもそれにつられて……」

ドラゴンガンダムもまた、金色に輝いていた。

「なっちまったぜ!!」

ドラゴンガンダムが回転しながら両腕のドラゴンクローから炎を発射する。その炎は周囲のデスセラフたちをことごとく、焼き払っていった。

そして、焼き尽くされたデスセラフたちが倒れる中、かつこよくポーズをとる金色のドラゴン・ガンダムを見て、恵雲と瑞山の二人も、感激したように声をあげた。

「おお……!」

「あれは!」

「ドラゴン・ガンダムに内蔵された秘密のモード、フェニックスモード!」

「この激しい戦いが、彼にフェニックスモードを発動させる力を目覚めさせたのか!!」

「見事じゃ、サイ・サイシー!!」

そして新たなる力を得た二機は、そのパワーで次々と周囲のデスセラフたちを蹴散らしていく。

長きにわたる決着の末、キャンプを襲撃したデスセラフたちは一機残らず破壊されたのだった。

その戦いを見届けたナスターシャ、恵雲、瑞山の三人はそれぞれ似たようなことを口に出していた。

「今のアルゴになら使いこなせることができるかもしれない。ガンダム・ボルトクラッ

シユを」

「力に目覚めたサイ・サイシーになら任せることができよう」

「我らが決勝のために用意した、ガンダム・ダブルドラゴンを」

* * * * *

そして戦いの後、お互いへの疑いは解け、話し合いも無事にまとまった。

もつとも、今回の襲撃自体、第三勢力であるジャンヌの仕業だったので、話し合いも何もないのだが。

そして、ファイターの二人、サイ・サイシーとアルゴも、拳をぶつけあって、お互いの健闘を称えあっていた。

「見事な戦いだったぜ、アルゴの兄貴！」

「お前もな、サイ・サイシー。ネオ・チャイナの代表にふさわしいファイトだった」

そして二人同時ににやりと笑う。

「今度、ジャンヌの姉貴に会ったら、お礼しとかないとな！」

「ああ。俺たちが新たに得たこのパワーでな!!」

そう笑いあう二人の背後に立つ、二機のガンダムを、夕日が優しく照らし出していた。

* * * * *

そんな様子を、俺……ジャンヌはずっと眺めていた。彼らも新しい力に目覚めてくれ

たみたいだ。後はドモンか……。

ドモンは、いまだ明鏡止水には目覚めていないが、どうなることやら……。

と、向こうから何かが飛んできた。よく見ると、それは小鳥……いや、小鳥を模した、DG細胞で作られた通信用ドローンだ。師匠……東方不敗・マスターアジアと俺との連絡用に作り出したものである。

そのドローンは、俺の腕に止まると、師匠の声で話し始めた。

「ジャンヌよ、馬鹿弟子たちの修行のほうはどうじゃ? もう一週間ほどで決勝大会がはじまる。早く計略を終わらせ、戻ってくるがよい。待っているぞ」

そう言い終えると、ドローンは炎に包まれ、燃え尽きた。

あと一週間か……。これは、のんびりと覚醒を待っていても、いや、普通に策を施しても、間に合わないかもしれない。多少、手荒な手段をとるしかないか……。

俺はそれまで緩んでいた表情を厳しく引き締めた。

14th Fight 『決勝目前！ 迫るジャンヌ包囲陣!!』

ネオ・ホンコン。

そこのに住む少年、ホイは今日も川辺で水をくんでいた。いつもと変わらぬ日常。だが！

「うわ、な、なんだ!?!」

突然の地震にうろたえるホイ。そして彼の目に映ったものは……。

モビルホースにけん引された戦車に乗った、巨大な翼が特徴のガンダム。その名は……。

「す、すげえ！ ゼウスガンダム、ゼウスガンダムだ!」

目撃したホイが目を輝かせる。

彼の言う通り、そのガンダムは、ネオ・ギリシャ代表・マーキロット・クロノスの駆る、登録番号GF13-002NGR、ゼウスガンダムであった。

やってきたのは、それだけではない。

次に現れたのは、海を進む、人形を思わせるガンダム……。

「ね、ネオ・デーンマーク代表、マーメイドガンダム!!」

さらにその後も、ネオ・ネパール代表、マンガラ・ガンダム。ネオ・イングランド代表、ジョンブルガンダムと、次々と強豪たちのガンダムがネオ・ホンコンに到着する。

その中の一機、ネオ・マカオ代表として参戦した、クローンガンダムに乗る東方不敗・マスターアジアは、遠くギアナ高地へと目を向けてつぶやいた。

（待っておるぞ、ジャンヌ、我が新生デビルガンダム四天王、そしてドモンよ……。さらに大きくなったお主らが駆け付けける時を）

彼がそうつぶやく間も、次々とネオ・ホンコンに駆け付けける、予選を勝ち抜いた強豪たち。

そう、第13回ガンダムファイト・決勝大会がいよいよ目前に迫っていたのだ。

*** **

「ふう、ドラゴンガンダムの調整も終わったし、オイラの修行も万事OK。後はネオ・ホンコンに向かうだけだな!」

ギアナ高地にあるネオ・チャイナの臨時キャンプ。その片隅にあるハンモックで、寝っ転がりながらそうお気楽に言うサイ・サイシーは、横に来ていた恵雲、瑞山に頭をこづかれる。

「馬鹿者! 調整をしたのは我らとスタッフだ!」

「それに、フェニックスモードを発動させる力には手に入れたが、使いこなせるまでには至っておらぬであろう。修行は全然万端ではないわ！」

「何より、最後まで油断は禁物！ 決勝会場に到着するまで、いや優勝するまで油断は禁物！ そんなことでは、少林寺を継ぐなど、夢のまた夢じゃ!!」

「わ、わかっている。でも、もうするべきことも終わったんだし、これ以上何か起こるなんて……」

サイ・サイシーがそう反論したところで、周囲が薄暗くなる。

曇ってきたのか？ ……いや違う。空から何か大量に降りてきたのだ。

「な、なんだあ!？」

「ぬう……!？」

「あ、あれは!？」

彼らが見たもの、それは、墮天使の黒い翼を背に持つデスセラフたちの群れだった。

そして群れの奥にいるのは、新生デビルガンダム四天王、チコ・ロドリゲスのガンダム・ヘルトライデント！

チコに率いられたデスセラフたちは、空中からビームを発射して、あたりを焼き尽くしていく。

彼が制しているためか、近くに人がいない施設を狙って攻撃しているおかげで、犠牲

者は出ていないが、それでもあたりはたちまち炎に包まれた。

「じ、ジャンヌの姉ちゃんの違い金か!？」

「そんなことより、このままではやられる。ネオ・ジャパンのキャンプに合流するぞ!」
 「サイ・サイシー、ドラゴンガンダムに乗り込めい! わしらもキャリヤーに乗って撤退する!」

「わ、わかった!」

そしてなんとかドラゴン・ガンダムとキャリヤーに乗り込んだサイ・サイシーたちは、大急ぎでキャンプから撤退した。

* * * * *

一方、ネオ・ロシアのキャンプにも、デスセラフ軍団の襲撃があった。

そちらの群れを指揮するのは、カンちゃんちゃんのダークホッパーガンダムである。

「おのれ……! カンガルーごごときにいいようにさせるな! 迎撃せよ!」

ナスターシヤの号令一下、ネオ・ロシアの量産型MS、オビエークトが出撃し、デスセラフたちに攻撃を開始するが、やはり多勢に無勢……。

「ち、ちくしょう、吹雪にも耐えるロシア魂がこんなところで……うわあ!!」

オビエークトの一機がデスセラフのビームに貫かれて沈黙する。幸いにも、動力炉はやられなかったので爆散せず、摺座したただけだったが。また一方では、別のオプ

イエークトが、敵のビームサーベルによって両断された。その残骸から、パイロットが命からがら脱出する。

「ナスターシャ、撤退だ。このままでは全滅するぞ」

「わ、わかっている……。後退、戦略的後退だ!!」

アルゴに言われて、ナスターシャがスタッフたちに撤退を指示する。

さすがはネオ・ロシアのスタッフ。あわただしくもテキパキと撤退準備を済ませて撤退を開始する。

だが、ボルト・ガンダムとキャリアーがキャンブを後にする中……。

「!!」

爆発によって崩れ落ちたガレキが、ナスターシャたちスタッフが乗るキャリアーに落下してきた。

ガシィ!!

「アルゴー!」

間一髪、アルゴのボルト・ガンダムが身を挺してガレキからキャリアーをかばった。

パワーと耐久性が自慢のボルト・ガンダム。この程度の衝撃にはびくともしない。

「いいから早く行け。言いたいことはあとで聞く」

「わ、わかった! 感謝するぞ!」

そして撤退していくネオ・ロシアの一团。

それを見下ろしながら、カンちゃんは確認するようにつぶやいた。

「コレデOK。イヨイヨ、シアゲ」

そして、ネオ・ジャパンのキャンプ。いまだドモンがシュバルツに導かれて修行に励むこの地には、今、シャツフル同盟の四人と、その関係者が集まっていた。

そう、デスセラフ軍団の襲撃を受けたネオ・アメリカ、ネオ・ロシア、ネオ・フランス、ネオ・チャイナのファイターとそのスタッフたちは、みんなここに集まってきたのだ。

テントの中、テーブルを囲んで話し合う中、シュバルツが不審そうに唸って曰く。

「だが、解せぬ。なぜ奴らは、ネオ・ジャパンのキャンプには手を出さないのだ?」

ネオ・チャイナの恵雲、瑞山も頭をひねりながら言う。

「それに、奴らの攻撃は容赦がなかったが、不思議なことに人間には手を出すことはなかった。其れも不思議ですな」

「まあ、先の襲撃の時にも、ジャンヌ殿は人死にが出ないように立ちまわってはいましたか……」

続いてナスターシャが眉をひそめて言う。

「何よりも、奴らの攻撃は我らを追い込もうとしているようだった。そう、まるでこのネオ・ジャパンキャンプに、我らを集めるように……」

そしてみんなで顔を見合わせて唸る。

ちようどその時、ネオ・アメリカのスタッフの一人、チボデーギャルズのジャネットが飛び込んできた！

「大変よ、みんな！ あれを見てー！」

その言葉に、全員がテントの外に出ると、そこにあつたのは……。

* * * * *

「……これは……！」

彼が見たのは、陸も空も、キャンプの周囲を埋め尽くすデスセラフの群れ。

そう、ネオ・ジャパンのキャンプは、デスセラフによつて完全包囲されていたのだ。

一同が驚愕する中、上空に立体映像が映し出される。そこに映し出されたのは、金髪碧眼の少女……：ジャンヌ・エスプレッソの姿だった。

それを見て、ドモンが叫ぶ。

「ジャンヌ・エスプレッソ!!」

「ドモン・カツシユ、そしてシャツフル同盟。ついに最後の試練の時が来ました。決勝大会の会場にたどり着きたいなら、この包囲網を突破し、私の元までたどり着いてみせて

ください。そして私を倒すことができれば、デスセラフたちを撤退させましょう。もしそれができないければ……ここでデスセラフたちにやられるだけです」

そしてジャンヌの立体映像は消えた。

「これがトレーニングのラストステージってわけかい! 面白れえ、やってやるぜ!」
チボデーが面白そうに言って、ガンダム・マックスターに乗り込み、いの一歩に包囲網に突っ込んでいく。

「オイラだつて負けねえよ! ジャンヌのアネキに一泡吹かせてやらないとな!」
同じく、サイ・サイシーもドラゴン・ガンダムで出撃していく。

「あれだけの数で、この私を止められるとはなめられたものですね」
不敵な笑みを浮かべて、ジオルジュがガンダム・ローズで出陣する。

「……ふん」

ただ鼻を鳴らしただけで、アルゴが黙したまま、ボルト・ガンダムで出撃した。
そして。

「よし俺も行くぞ!」

「待て!」

ドモンも出撃しようとするが、それはシユバルツに止められる。

「なぜ止める、シユバルツ!」

「お前はまだ明鏡止水に目覚めていない。そんな状態で出て行っても、やられるだけだ！」

「くっ、だが……！」

苦渋の表情を見せるドモンを後目に、残りの四機はデスセラフとの戦いを開始した。

* * * * *

俺……ジャンヌ・エスプレッソは、高台の上から、シャッフル同盟が包囲網を突破しようとするのを眺めていた。

ある地点では、ガンダム・マックスターの豪熱マシンガンパンチで、その前方のデスセラフたちが破壊されていくのが見え、また別の地点では、ドラゴン・ガンダムの炎で、円形にデスセラフたちが薙ぎ払われていた。

また別の地点では、ビームセイバーとローゼス・ビットを使った変幻自在の攻撃で、ガンダム・ローズが次々にデスセラフを翻弄、撃破していき、さらに別の地点では、ボルト・ガンダムのグラビトン・ハンマーでドラゴン・ガンダムのように円形にデスセラフたちが薙ぎ払われていくのが見えた。

しかし、やはり多勢に無勢。どの機体も、包囲網の突破に四苦八苦しているようだ。

そんな中、ドモンのシャイニング・ガンダムはその戦列に参加していない。どうやら彼は、いまだにシユバルツのもとで明鏡止水の修行をしているのだろう。

だが、シユバルツには悪いが、俺はこのまま、のんびんだらりと修行をさせておくつもりはない。もう決勝までの残り時間は少ないのだ。

少々強引にでも、ドモンには明鏡止水に覚醒してもらわなければならない。

俺は音なき指笛で、配下のデスセラフたちに指示を出した。

* * * * *

「くっ……!」

「雑念が混じっているぞドモン! そんなことでは明鏡止水には遠いと教えたはずだ!

余計なことを考えるな! 木を切ることだけを考えるのだ!」

「わかつている! だが、みんなが必死に戦っているのに、平然としていられるか!」

シユバルツに反発しながら、明鏡止水の修行に励むドモン。そこにレインが駆け付けてきて言った。

「大変よ、ドモン、あれを見て!」

「なに? ……あれは!？」

遠くに現れたのは、邪悪で美しい、巨大な姿だった。

ドモンが見間違えるはずがない。あれは……。

「デビルガンダム! ……くそっ!」

「どこへ行く、ドモン!」

「黙れ！ デビルガンダムが現れたというのに、じつとしていられるか！ あれを倒すのは俺に与えられた任務なんだ!!」

そう言つてドモンは、シャイニング・ガンダムに乗り込んでいく。それを見送り、シユバルツは苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべた。

「ドモンの奴……!」

そして自身も、愛機であるガンダム・シユピーゲルに乗り込んでいく。

* * * * *

「キョウジイ……! デビルガンダム……!」

ドモンのシャイニング・ガンダムは、スーパモードを発動し、デビルガンダムをめぐらして一直線。進路上のデスセラフたちを一蹴しながら突き進んでいた。

その分、機体にはかなりの負担がかかっているが、デビルガンダムを倒すことに囚われたドモンはそれを意に介した様子もなかった。

デビルガンダムまでかなり接近してきたその時。

デビルガンダムが動きを見せた。まるでドモンを挑発し、あざ笑うような動きを。

それを見て、ドモンは完全に頭に血が上ってしまった!

「キョウジ! キョウジ! キョウジイイイイ!!」

そして、機体のバーニアを全開にして、その目前までジャンプ!

「俺のこの手が光って唸る! お前を倒せと輝き叫ぶっ! うおおおおっ! 必殺!

シャイニング・フィンガー・ソオオオオオ……!」

だがその時、それを制止する声があった。

「馬鹿者、ドモン! よくそれを見ろ!」

「え……なっ!?!」

* * * * *

デビルガンダムに斬りかかろうとしたドモンのシャイニング・ガンダムが驚きに動きを止める。

そう、それは実はデビルガンダムではない。

俺が支配下のデスセラフたちに命じて、集合してそっくりに擬態させた偽物なのだ。それを見抜けず、あのような無謀な突撃を行うとは……やはり彼は、まだ明鏡止水には至っていないということだろう。

デビルガンダムを構成していたデスセラフたちが一斉にビームを発射。シャイニングはそれをかわしきれず、ビームの雨を浴びて吹き飛ばされた。さらに、巨腕の一撃を受けて中破してしまう。

もつとも、あそこでシユバルツが制止してなければ、今よりさらに強烈な攻撃を受けて、大破していたかもしれないが。

俺はドモンに少し失望しながら、ガンダム・オルタセイバーをシャイニングに突進させた。

「あなたには少しがっかりしましたよ、ドモン！ それでもキング・オブ・ハートですか
！」

「!!」

そして俺がビームセイバーを一閃させようとしたとき！

「!?」

目の前から、そのシャイニングの姿が消えた。後ろを振り向くと、デビルガンダムの頭の上に、シャイニングを抱きかかえたシユバルツのシユピーゲルの姿があった。

「まだドモンを、お前たちに倒させるわけにはいかん！」

そして、ネオ・ジャパンのキャンプの方向に飛び去って行った。俺はそれを追撃しようかと思ったがやめた。

「……っ。無理はいけませんね」

また身体の不調を感じたからだ。少しではあるが、前に感じた不調より重くなっている気がする。

焦る必要はない。包囲網は重厚で、シャツフル同盟たちはそれを突破することができずにいる。ならば一日ほど決着を待っても問題はないだろう。そのぐらいなら決勝に

遅れることもあるまい。

明日だ。明日にはわかる。彼らの力が、俺たちの理想に対抗する力があるのかどうか。
が。

15th Fight 『目覚める明鏡止水！ ジャンヌ 包囲網突破作戦!!』

デスセラフたちが集まって擬態した偽デビルガンダムの攻撃で中破し、吹き飛ばされるシャイニングガンダム。そこに、ジャンヌのガンダム・オルタセイバーが追い打ちをかけようとする！

「ちよつとがっかりしましたよ、ドモン！ それでもキング・オブ・ハートですか!!」

しかし、そう言つてジャンヌが、ビームセイバーを振り下ろそうとしたその刹那、シユバルツのガンダム・シユピーゲルが、オルタセイバーの眼前からシャイニングを救いだした！

「ドモンをお前たちに倒させるわけにはいかん！ みんな、ここは一時退却だ！ 作戦を立て直すぞ！」

そして、シャイニング・ガンダムを抱えたまま、ネオ・ジャパンのキャンプに撤退していった。彼の指示を受け、残る四機のガンダムも、キャンプに引き上げていく。

ジャンヌはそれを追おうとするも……。

「……………。無理はいけませんね」

そうつぶやいて、膝をつく。そしてそのまま、シャツフル同盟が撤退していくのを見送るのだった。

* * * * *

「くそう……!」

ネオ・ジャパンのキャンプ。そこでドモンが、くやしさのあまり、地面に拳を叩きつける。

その彼に、シュバルツが冷徹に声をかける。

「だから言っただろう、ドモン。明鏡止水に目覚めていないお前では、ただやられるだけだ、と」

そう厳しい言葉をかけるものの、その瞳には、彼を心配する気持ちが宿っていた。くやしさをにじませるドモンを見守るシュバルツ。そこに、レインがやってくる。

「お待たせ、ドモン」

「レインか……。シャイニングの修理はどうだ？」

そう聞くドモンに、レインは肩をすくめて答える。

「応急処置は終わったわ。でも、あくまで応急処置ね。今までのスーパーモードの乱用に加えて、さっきの中破で、もうボロボロ。応急処置『しか』できない状態だったわ。一応戦えるようにはしたけど、いつ機能不全を起こして動けなくなるかわからない状態

ね。ドモンがあまり無茶をしすぎるから」

「むう……！」

言い返したいが、機体を酷使しまくり、おまけに自分の不注意からシャイニングを中破させてしまったのは、完全に彼の責任だったため、ドモンにはグウの音も出なかった。もつとも、それで言い返そうにも、シュバルツに生まれられて制止されただろうが。

「だが、動かせるようになっただけでも幸いだ。それでは作戦会議を開くでしょうか」

* * * * *

ネオ・ジャパンのテントには、シュバルツ、ドモン、レインのほか、ネオ・アメリカからチボデー、ネオ・チャイナから恵雲、瑞山、ネオ・ロシアからナスターシャ、ネオ・フランスからジョルジュが集まっていた。

「シャイニングは動くようになったかい！ それはよかった」

と明るく言うチボデー。それに、ジョルジュもうなずく。

「ええ。やはりガンダムが一機あるかないかでは、戦力も、戦略の幅も変わってきますから」

そこで、恵雲、瑞山が唸りながら言う。

「しかし、事態は先ほどと変わっておりませぬ。四方八方をデビルガンダムの手下どもに囲まれている状態」

「しかも、応急処置が済んだシャイニング・ガンダムも、いつ止まるかわからない状態です。すからな。あまり戦わせるわけにもいきませうまい」

それに、シユバルツが腕を組んだままうなずいて曰く。

「その通りだ。突破口を開き、さらにドモンの修行が終わるまで、それを維持する必要がある。それができなければ、待つのは全滅のみだ」

その言葉に、みんなが腕を組んでうなる。そこに、ナスターシャが不敵な笑みを浮かべて言った。

「何、戦略目的がはつきりしていれば、作戦の建てようはある。重要なのは、『ジャンヌの元へ通じる道を開くこと』と、『その道を維持すること』なのだろう?」

「うむ」

シユバルツの肯定を聞き、ナスターシャは棒鞭をびしっと鳴らした。

「よし、ならばガンダムを二手に分けよう。『道を作る』隊と、『その道を維持する』隊の二つだ」

「なるほど、前者の隊が敵陣を突破して道を作り……」

「後者の隊が、その道がふさがれないように維持する、ということですか?」

「そうだ」

恵雲、瑞山の質問に、ナスターシャはうなずいた。そこでさらに棒鞭を鳴らす。

「それが続けていき、ドモンの修行が終わったところで、一気にその道を通り、さらにその前方を切り開いて突破する。これしかあるまい」

「なるほど。それで、どう分けるんだい？」

チボデーの質問に、ナスターシャはうなずき、チボデー、ジオルジュ、そして背後にいるサイ・サイシーとアルゴを見渡した。

「まず、攻撃力のあるサイ・サイシーとアルゴに道を作る隊をやってほしい」

「うむ」

「わかった、腕がなるぜ！」

アルゴとサイ・サイシーの返事にうなずくと、今度は再びチボデーに目を向ける。

「遠距離攻撃が可能であるチボデーとジオルジュは、道を維持するチームだ。シユバルツには、作戦には参加せず、ドモンの指導をお願いしたい」

「OK！ 任せな！」

「最善を尽くしましょう」

「わかった」

作戦は決まった。ナスターシャはうなずくと、表情を引き締め、棒鞭を大きく鳴らした。

「作戦決行は明日の朝とする。各員の健闘に期待する！」

ギアナ高地の大きな高台。そこで俺……ジャンヌ・エスプレッソは休んでいた。

身体から力が抜けていくのを感じる。それと同時に、身体の内側があげられる悲鳴も。

原因はわかっている。それは――。

「大丈夫か、ジャンヌ? かなりつらそうに見えるが」

そこに、四天王の一人、チコとカンちゃんがやってきた。俺は起き上がり、表情に憂いが浮かぶのを抑えきれないまま答えた。

「ええ……。やはり、これまでのファイトで、無理をしすぎたのが響いているみたいですね……」

そう、原因。それは、ガンダムファイトの連続、さらにその中で、流派東方不敗の技、そのアレンジを何度も放っていたことだ。

ある漫画に出てくる剣術と同じように、流派東方不敗の技も、そう簡単に使えるものではない。本来は、かなり長く地味な修行を積んだうえで、しっかりと学んで、やっと使いこなせるものなのだ。

デビルガンダム

いくらD・G細胞による身体とはいえ、そんな技を下地なしでやれば、身体に小さなダメージを与え続けていくことは目に見えていた。この体なので、ある程度はダメージ

を抑えたり、ある程度回復させることはできるが、それでも限界が見えてきてしまった。今はまだその限界は遠いが……。

見えてしまったことには変わりない。

「そうか……。ならば明日は、あまり無理をしないほうがいい」

「ありがとうございます。明日は、ドモンがたどり着いた時の相手に専念することになります」

「ああ、それがいい」

「アネキ、オレタチニデキルコトハアルカ？ アネキノタメ、ガンバル」

「ありがとうございます。それでは、突破を図るシャツフル同盟たちの相手をお願いできますか？」

俺の頼みに、チコとカンちゃんの二人ともうなずいた。原作ではありえなかった、ありがたい、頼りになる四天王たちだと改めて思う。

「任せておけ。お前の出番などなくしてやろう」

「マカセロ、アネキ！」

そう快くかけあつてくれたチコたちに、俺は微笑みを向けた。

そして、夜が明ける……。

* * * * *

そして翌朝。ネオ・ジャパンのキャンプには、既にスタンバイを終えたガンダム・マツクスター、ドラゴン・ガンダム、ガンダム・ローズ、そしてボルト・ガンダムが勢ぞろいして並んでいた。

それぞれの機体に取り込んでいるシャツフル同盟のファイターたちに、ナスターシャが檄を飛ばす。

「いいか! 我らが無事に明日を勝ち取れるか、それともここで果てるかは、諸君らの力にかかっている! 油断せず全力を尽くして、無事作戦をやり遂げてほしい! 諸君らの奮闘に期待する!」

「OK!」

「へへ、わかっているって。任せなよ!」

「最善を尽くしましょう。この薔薇にかけて」

「わかった」

そして、背後のドモンとシユバルツにも目を向ける。

「いいか、お前たちは無事に明鏡止水に開眼するのが任務だ。彼らの奮闘を無にしないためにも必ず開眼しろ」

「わかっている」

「任せてもらおう」

そして棒鞭を鳴らして号令をかける！

「よし、作戦開始！」

* * * * *

ナスタシーシャの号令一下、4機のガンダムたちは包囲網に向かっていった。

「グラビトン・ハンマアアアア!!」

ボルト・ガンダムの放ったグラビトン・ハンマーが、戦闘開始の狼煙だ。遠心力で周囲のデスセラフたちをなぎ倒し、さらに前方に投げつける。遠心力で威力を増したハンマーは、その射線上にいるデスセラフたちを次々と粉碎していった。

さらに、そのボルト・ガンダムの前に、ドラゴン・ガンダムが躍り出る。

「みんな焼けてしまいなっ！ ドラゴン・ファイヤー!!」

腕が竜のアギトの形に変形。そこから放たれるドラゴン・ファイアーで、前方のデスセラフたちをさらに焼き尽くす。

デスセラフたちは、二機のガンダムの背後に回り込み、退路を断って包囲しようとするも……。

「そうはさせねえよ、ほらほら!!」

「行きなさい、ローゼス・ビット!!」

ガンダム・マックスターのギガンティック・マグナムの乱れうちと、上空からのロー

ゼス・ビットの攻撃で、たちまち撃破されていく。

一方のドモンも……。

「……」

「よし、いい具合だ、ドモン! 心を澄ませるのだ! 明鏡止水の境地に至るまで」

外の喧噪とは裏腹にドモンの心は静かだった。その心はどんどん澄んでいき、明鏡止水へと近づいていく。

作戦は万事うまくいくかと思われた。

だが!

* * * * *

「ピョーンツ!!」

「なに!? うわっ!!」

上空から強襲してきた何者かの蹴りで、マックスターが蹴り飛ばされた!

なんとか態勢を立て直したガンダム・マックスターの前に立ちはだかったもの、それは……。

「カンガルー野郎!」

「イクゾ、チボデー! 第二回戦! オマエモ作戦モブチノメス!!」

そう、カンちゃんの操る、ダークホッパーガンダムだった!

そして、突破口を開いていく、ボルト・ガンダムとドラゴン・ガンダムの前にも……!!

「む、よけろ、サイ・サイシー!」

「え……うわつと!?!」

アルゴの警告を受け、サイ・サイシーがとつさに飛びのいた後に、無数の槍の刺突が突き刺さっていった。

「お前は、新生デビルガンダム四天王、チコ・ロドリゲス!」

「ジャンヌの頼みなんぞな。彼女のためにも、この作戦、ぶち壊させてもらおう!」

チコのガンダム・ヘルトライデントが二機の前に着地し、トライデントを構える。

突破組、維持組、両方でデビルガンダム四天王の攻撃を受け、バトルがはじまる。

しかし、それによって戦力バランスは崩れてしまった!

「くられ、ガトリング・デススピアー!!」

チコがガトリング・デススピアーを放つ! アルゴはその攻撃にひるむことなく……。

「そのような攻撃で、このボルト・ガンダムを貫けると思うか……ぐわあつ!!」

ヘルトライデントにタックルをしかけようとしたところに、デスセラフの攻撃を受けてよろめいてしまう!

「アルゴの兄貴! うわあ!!」

それを援護しようとしたサイ・サイシーも、別のデスセラフのビームを受けて、吹き飛ばされてしまった。

また別の場所では……。

「ソレ、ソレ! キック、キック!」

「くっ、このお!」

「チボデー! お助けします!」

ダークホッパーガンダム蹴りの連打に苦しめられるチボデーに助太刀しようとするジオルジュ。しかし。

「うわあ!」

「ジオルジュ!」

その隙を突かれ、別のデスセラフのビームを喰らって吹き飛ばされる。そこに。

「ヨソミヲシテイルヒマハナイゾ!」

「うおお!!」

吹き飛ばされたジオルジュに気を取られた隙を突かれ、チボデーもカンちゃん蹴りを受けてしまった!

四天王の介入で苦戦を強いられ、突破口がふさがりつつあるのを見て、ナスターシャ

は危機を感じ、次の指令をくだした！

「いかん、このままでは突破口がふさがれるばかりか、先行したボルトとドラゴンが孤立してしまふぞ！ 我々もオブイェークトに乗って加勢するのだ！」

「おう！」

「任されよ！」

「かしこまりました！」

『わかったわ！』

「はい！」

ナスターシヤの号令一下、恵雲、瑞山、レイモンド、チボデーギャルズ、そしてレインがうなずき、ネオ・ロシアの量産型 M モビルスーツ S、オブイェークトに乗り込んでいく。

その気配を感じ、一瞬ドモンの表情が動くが……。

「ならんぞ、ドモン！ この作戦は、お前が明鏡止水に至るかどうかがカギだ。ここは彼らを信じるのだ！」

「……………」

* * * * *

ガンダムたちは大苦戦の中にいた。その中、ジョルジュはデスセラフをサーベルで切り裂く。だが、その背後から別のデスセラフが！

「!!」

そこで間一髪、そのデスセラフは別の方向からのビームで撃破される。

「皆さん!」

「我々も加勢する。なんととしても、この突破口を守り切るのだ!」

「わかりました!」

そしてナスターシャたちスタツフも加勢して奮闘する。だが、やはり多勢に無勢なうえに、デスセラフと量産型MSでは性能差がありすぎる。

「きゃあ!」

チボデーギャルズのキャスの乗ったオブイェークトがデスセラフのビームで左腕を破壊されてしまう!

「キャス殿! うわあ!!」

声をかけたレイモンドの機体も、別のデスセラフの攻撃で吹き飛ばされた。

そして、レインも。

「ドモンが明鏡止水に至るまで、なんととしても……きゃつ!」

デスセラフのビームで、レインのオブイェークトは頭部を破壊された!

「ドモーンツツ!!」

* * * * *

レインの心の叫びが届いたのか、突然、ドモンは目を見開いた。そして立ち上がる。「何をする、ドモン！ まだ明鏡止水には至っていないぞ！」

「レインやみんなの叫びが聞こえたんだ！ みんなが窮地に陥っているのに、俺だけがこんなところで修業してはいられん！ みんなを見殺しにしなきゃ得られない明鏡止水なら、ないほうがましだ！」

そう言つて、シャイニングに走つていく。シュバルツは、それを渋い顔をして見送つていたが、やがて苦笑を浮かべた。

「ドモンの奴め……。だが今回の暴走は、デビルガンダムを倒すという彼の勝手な執着ではなく、仲間を助けるためというより前向きなもの。悪いものではない」

そして表情を引き締める。

「ならば私のすることは、せめて彼を助けてやることのみ。この戦いの中で、彼が明鏡止水に至ることを祈ろう」

そう言つと、シュバルツは、自らの愛機、ガンダム・シユピーゲルに走つていった。

* * * * *

レインのオブジェクトは頭部を失いながらも奮戦していた。だがそのうち、デスセラフの攻撃を受け、右腕と左足を破壊され擱座してしまふ。

「きやつ………!!」

そのオブイェークトに、デスセラフがビームライフルの狙いを定める。サブカメラのスクリーンに映るその様子に、レインが恐怖に震えた、その時!

「レイーンツツ!!」

ドモンのシャイニングが突撃してきて、そのデスセラフを一刀両断した!

「ドモン! 修行のほうはいいの!?!」

「まだだ! だが、みんなを見捨てるわけにはいかん!」

「もう……ドモンの馬鹿……」

「馬鹿で結構!!」

そう言い残すと、ドモンは包囲陣のほうへと突進していった。

それをレインは涙目で見送っていた。

* * * * *

道を阻むデスセラフたちを斬り捨てていくシャイニング・ガンダム。だがそこに、飛行型デスセラフが上空から不意打ちをしてきた!

「!!」

「させん!」

襲い掛かろうとした一瞬、デスセラフはずんばらりと両断された。その向こうに浮遊するシユピーゲル。

「シュバルツ！」

「お前の横と背後は、私に任せておけ！ お前はひたすらに前に進むのだ！」

「おう！ 恩に着るぞ！」

そしてさらに突進していく。そして。

「超級！ 霸王！ 電影だあああああんつつ！！」

流派・東方不敗の奥義の一つ、超級霸王電影弾で一気に前方の敵機を薙ぎ払いながら、ひたすら前方に突進していく。

スクリーンの各所にエラー表示が映るが、ドモンの目には映らない。ただひたすら前に、ジャンヌの元に——！！

* * * * *

「……来ましたか」

ドモンのシャイニング・ガンダムがデスセラフたちを薙ぎ払いつつ、俺……ジャンヌがいるここまですぐに一直線に突き進んでくる。

俺はそれを直立したまま眺め、待ち受けていた。

そしてついに、彼は俺の眼前までたどり着いたのだ！

「……来ましたか、ドモン・カッシュ」

『おう。約束は守ってもらおうぞ、ジャンヌ・エスプレッソ。俺がお前に勝ったら、道を開

けてもらおう!』

「いいでしょう。構えなさい、ドモン」

そう言つて俺は、ビームセイバーを抜いて構える。

それに呼応して、ドモンのシャイニングも構えようとするが……!

『……!?!』

『……』

突然、膝を突き、両手をついて、いわゆるOTLの形に崩れ落ちたのだ。

俺はただ、無言のまま、それを見つめ続ける。

『くそ、どうした!?! 動け、シャイニング……っ!』

『……』

どうやら、先の戦いで大ダメージを負つたうえ、ここまで来るのに無理をさせたせいで、ついに機能不全を起こしたのだろう。

……やむを得ない。

「あなたは所詮、ここまでが限界の人でしたか。残念です」

『……!』

「ですが、悔やむことはありません。あなたの散華も、私たちの理想、計画の糧となるのですから」

俺はただ冷徹に、ビームセイバーを振り上げる。振り下ろす先はただ一つ。シャイニング・ガンダム。その肩口から袈裟斬りに一直線。ドモンのいるコクピットごと両断する。

冷ややかな声で宣告する。

「……散りなさい」

そして俺はビームセイバーを振り下ろした。

その時だ。

なんと、シャイニング・ガンダムは流れるような動きで、そのビームセイバーをかわしたのだ。そして、またも流れる動きで、俺の背後に回り込む。

「この動きは……」

そう、この動き、これができる境地はまさに……。

明鏡止水——。

16th Fight 『運命の対決再び! ドモンの選択!!』

『あなたは所詮、ここまでが限界の人でしたか。残念です』

ジャンヌがそう言うと、彼女が乗るガンダム・オルタセイバーはビームセイバーを振り上げた。

そして、感情を押し殺した、冷たい声で言い放つ。

『ですが、悔やむことはありません。あなたの散華も、私たちの理想、計画の糧となるのですから』

その声、その口調にドモンは悟る。彼女は自分を見限り、抹殺するつもりだと。

そして自分のシャイニング・ガンダムは、ここまでの無理が祟り、機能不全を起こし、一歩も動けない状態。彼女の刃をかわすか防ぐ術はない。

目の前に待ち受ける死を受け入れるしか、彼の選択はなかったかに思われた。

『……散りなさい』

彼女の剣が振り下ろされる。

目の前に迫る死。その死の前に、ドモンの心は今までになく透き通り、無となってい

く。何も聞こえず、全てが止まって見える。

シャイニングの機能が、彼の変化に反応して再起動する音が鳴っていたが、それすらもドモンの耳に届くことはなかった。

そして。

振り下ろされたジャンヌの剣。それはシャイニング・ガンダムを切り裂くことはなかった。ドモンが流れるような動きで、それを回避したからである。

「この動きは……」

ジャンヌがそうつぶやく。

さらにシャイニングは流れる動きで、ガンダム・オルタセイバーに迫り、次の瞬間には、オルタセイバーの手からビームセイバーが落ちていた。ドモンの一撃が、ジャンヌが攻撃されたと認識する間もなく、彼女の手からビームセイバーを弾き飛ばしていたのだ。

そして、シャイニングは彼女の背後で止まった。ジャンヌもそちらに向きなおる。

* * * * *

シャイニングのコクピットで、ドモンは自らの変化に驚いていた。

荒々しいファイトしかできない自分。そんな自分がこんな戦いができるとは。

だが、この動き、この境地。それが何か、今の自分にはわかる。これこそ、自分が身

に着けるべきだったもの――。

「これが……明鏡止水……」

そうつぶやくドモンに、ジャンヌからの通信が届く。

『まさか、あそこで明鏡止水に覚醒するとは……私はあなたを見くびっていたようですね』

「ジャンヌ……」

そこでジャンヌは表情を引き締めた。その顔から熱き闘志が感じられる。

『では改めてファイトをはじめましょう。手加減はしません』

「……おうー!」

そして二機とも動き出す。初手は、ジャンヌが得意とする技……。

『スプラッシュソード!!』

無数の突きがシャイニング・ガンダムを襲う! だが、明鏡止水に目覚めたドモンには、その剣を見切るなど造作もない。流れるような動きで、その突きをことごとくかわしていく。

『!!』

ジャンヌが気が付いた時には、目の前にシャイニングの拳が迫っていた! 彼のパンチが放たれたことにさえ、気が付いていなかったのだ。

慌ててそれをなんとかかわす。だが交わしきることはできず、頭部のアンテナの先が折られてしまった。

『それなら、これはどうです!?』

その状態からビームセイバーの横風ぎを放つ！ シャイニングはそれも流れるようにかわすが、その瞬間、ジャンヌは剣を持ち替え、横風ぎから突きへと派生させた！

「!!」

さすがにこれにはドモンもとっさに反応できず、なんとか明鏡止水の動きで回避するが、胸部装甲に一筋の傷ができてしまった。

* * * * *

その後も、バトルは続いた。

俺……ジャンヌが鮮やかな剣さばきで攻めるも、ドモンがそれを流れるようにかわす。

ドモンの烈火のように激しい攻めを、俺が剣を自由自在に操って防ぐ。

俺の突きを紙一重でかわし、ドモンがその懐に飛び込んで背負い投げを決める。倒れた俺に追撃しようと、上空から襲い掛かったドモンを、俺は上空へのスプラッシュ・ソーで迎撃。

そして激突！

ドモンが着地した時。

「……………」

俺の左肩に激痛が走る。オルタセイバーの左肩が今の攻撃で破損した。一方のドモンも……………」

『ぐうっ…………』

同じく膝をつく。シャイニングの右肩の肩当てにはひびが入っていた。

だが、戦いはまだ終わらない。

シャイニングは、立ち上がると、こちらに向けて突進してきた!

『必殺! シャイニング・フィンガアアアア!!』

「スプラッシュソードオオオオオ!!」

お互いの必殺技がぶつかり合った! そして閃光が走る。

* * * * *

次に気が付いた時、俺とドモンは一糸まとわぬまま、白い空間にいた。今の技のぶつかり合いで、交感が発生したのか。

その白い空間の中で、俺たちは原作での出来事を垣間見る。

「デビルガンダムを地球にやさしいガンダムに作り替える」と戯言を言うウオンを、師匠が一喝する。

『笑わせるな！ 優しいという言葉を勘違いしているのではないか、この政治屋め！
よいか、わしの目的はな。この地球人類の抹殺なのだぞっ!!』

その師匠の真意に、原作のドモンも、そしてこちら側のドモンも絶句している。

そして、原作ドモンの怒りに、師匠はさらに言葉を返す。

『わからぬか？ 地球を汚す人類そのものがいなければ、自然は自ずから蘇る！ それで最強の力を持ったデビルガンダムがあれば、もう誰も地球に降りられなくなる。それがいい、それが一番だ！ そのためならば、人類など滅びてしまえ!!』

「師匠がこんなことを……!」

震える声でそうつぶやくこちら側のドモンに、俺は諭すように返す。

「いいえ。師匠がこんな狂人じみた考えを持たなければならぬほど、ガンダムファイトと人類の営みによる自然の破壊は進んでいた、ということですよ。この結論に至ったことに一番絶望していたのは、誰よりも彼だったでしょう……」

「……」

そして次に浮かんだのは、二人の最後のぶつかり合いのシーン。

『東方不敗！ あんたは間違っている!』

『なにい!?!』

『なぜならあんたが抹殺しようとしている人類もまた自然の中から生まれたもの。いわ

ば自然の一部!』

『…………』

『それを抹殺して、何が地球の、自然の再生だ! そう、共に生きる人類を抹殺しての理想郷など、愚の骨頂!』

そして、師匠とドモン、二人の石破天驚拳がぶつかりあった。そしてシーンは、最後の別れのシーンに変わる。

『なあ、ドモン…………お前には教えられたよ…………。人類もまた自然の一部、それを抹殺するも、地球を破壊するも同じ。わしはまた、同じ過ちを繰り返すところであった…………』

『師匠…………』

俺とこちら側のドモンも、その光景を静かに見守っている。

『なあ、ドモンよ…………。お前と新宿で出会わなければ、お前がガンダムファイターになどならなければ、こんなことにはならなんだのに…………!』

そして再び、視界が白く染め上げられる。

* * * * *

気が付くと、俺たちはお互いの機体のコクピットにいた。

『ジャンヌ、それならお前たちも、あの時間軸の師匠と同じように…………!』

「いいえ。私たちはそれとは少し違う道を歩んでいます。師匠、そして私も人類の抹殺

までは考えていません。人類を生かしたまま宇宙に追いやり、デビルガンダムの力で地球を閉ざし、自然の再生を促す。それが私たちの目的」

『なんと!?!』

会話を交わしながらも、俺たちの力、ぶつかり合いは緩むことはない。

「あなたも見たはずですよ。ガンダムファイトと人類の環境破壊により各地が荒れ果てていくのを。人類が地球にいては、やがて地球は、自然は、人類に食い荒らされていくのは必定。人類は地球を出て、地球自らの手に地球を返すべきなのです。私たちはそれを強制的に行っているだけ」

『ジャンヌ……!』

「ドモン、あなたはそれでも私たちに敵対するのですか? いまだに人類の地球破壊を見逃すのですか? はあっ!!」

そして、お互いのぶつかりあったパワーがはじけ、俺たちは互いに大きく飛びのいた。そこから少しの沈黙。そして。

『ああ! 俺はそれでもあんたたちを認めることはできん!』

『!?!』

直立したまま、ドモンは続ける。

『あんたの言うこともわかる。確かに人類はこれまでずっと地球を傷つけてきた。あん

たや師匠がそれを憂う気持ちもわかる。だが! 人類を抹殺することと、人類を無理やり追い出すことの、どこが違うんだ!」

「……」

『向こう側の俺は言っていた。『人類を抹殺しての理想郷など愚の骨頂』と。ならば、人類を追い出しても同じこと! 人類を排除しての理想郷作りなど愚の骨頂以外の何物でもない!』

「……」

『どうすればいいかはまだわからない。だが、少なくともあんたたちのやろうとしていくことは短絡的で誤った道であることは確かだ! 他にも、地球を救う道はあるはず!』

「……ふん」

思わず笑みが漏れ出てしまう。ドモンがこの時点でここまで成長するとは。しかも、こちら側のドモンは、向こう側とは違い、これまでのこと、そして俺たちの憂いも理解したうえで、それでも違っていると断じてきたのだ。彼は、俺が思っていたよりも大きく成長していた。

「見事です。よくぞそこまで答えを導き出しました。ですが、こちらにも譲れないものがあります。これ以上は議論しても詮無いことでしょう」

『最後はこの拳で、ということか……いいだろう』

そしてお互いに再び構える。

* * * * *

崖の上、そこで俺のガンダム・オルタセイバーと、ドモンのシャイニング・ガンダムは向かい合い、気を高めあっていた。

この戦いは、ただのぶつかり合いではない。互いの想いを、考えを、意思をぶつけ合う戦いだ。手抜きは許されない。

俺の身体が熱い気で満たされてゆく。それは向こうも同じようだ。シャイニングからも激しくも静かな気を感じる。

そして。

「必殺！ 絶対勝利・エクスカリバーンツ!!」

『必殺！ シャイニングフィンガーソード・夢幻剣つつ!!』

そしてお互いの剣技がぶつかりあう。すれ違う二機。

そして二機とも同時に膝をついた。

「相打ちだと言いたいところですが……私の負けですね」

『ジャンヌ……』

そう、俺のガンダム・オルタセイバーは首を斬り落とされていた。ガンダムファイト

のルールに従っても、それ抜きでも、俺の負けなのは一目瞭然だろう。

だが、デビルガンダム細胞で強化された俺のガンダムは、それぐらいの損傷でも問題ない。すぐに細胞の再生が始まり、新たな頭部が形成される。

「約束です。デスセラフたちを撤退させましょう」

そして俺は、音無き指笛を吹いた。

* * * * *

自分たちが戦っていたデスセラフたちが撤退していく。その様を、恵雲、瑞山の二人は互いに背中を向けあいながら見ていた。

「おお……」

「デスセラフたちが撤退していく……」

それは、シャッフル同盟の四人も。

「奴らが撤退していく……」

「ということとは、アニキが勝ったんだな! やったなアニキ!」

「やれやれ、なんとか助かりましたね」

「うむ……」

デスセラフ軍団が引き上げた後の空は、美しい青に彩られていた。

* * * * *

「あなたたちの勝ちです。さあ、行きなさい、決勝の会場へ」
『ああ』

「ですが、勘違いしないように。あなたたちの理の一部を認めただけです。全てを認め
たわけではありません。私たちはこれからも活動を続けます」

『ジャンヌ……』

「地球が人類の営みとファイトで破壊されるか、それとも私たちによって閉ざされるか、
別の道が開けるか、それはこれからのあなたたち次第です。せいぜい励むことですね」

『……』

「さあ、行ってください。決勝で会いましょう」

『……ああ！』

そしてシャイニングは、仲間たちの元へ飛び立っていった。それを俺は、静かな目で
見守り続けていた。

決勝編

17th Fight 『決勝開幕! 緊急事態ゴッドフィンガー発動せず!?!』

俺……ジャンヌ・エスプレッソと、師匠こと、東方不敗・マスターアジアは、ここネオ・ホンコンの地に立っていた。

これからここで、ガンダムファイト13回大会、決勝大会が行われるのである。決勝大会では、ある程度、前回優勝国の意向が反映されることになっている。

現に原作でも、決勝大会はルール変更などの、ウオンのさまざまな策略が展開されていた。きつと現世でも、ウオンは色々な手を使ってくるだろう。俺たち新生デビルガンダム四天王やシャツフル同盟を叩き潰すために。

だが、そのことに恐れはない。来るなら来いだ。どんな陰謀が来ても、それを叩き潰すのみ。

俺がそう決意を固めたところに。

「師匠!」

聞き覚えのある声。俺と師匠が振り向くとそこには……。

「おお、ドモン。無事にたどり着けたようだな」

「はいー」

ドモン他、シャツフル同盟の面々がいた。みな、その表情には覇気がみなぎっている。「アネゴ、ギアナ高地ではやってくれたね！ 決勝でその借り、一杯返してやるからね！

覚悟しときなよ！」

「……」

サイ・サイシーが挑戦的な表情でそう言ってきた。アルゴも不敵な笑みを浮かべてうなずいてくる。

「確かこの大会には、あのカンガルー野郎も出るんだろ？」

「ええ。二人とも、仮名を用いて、個人資格でエントリーすると言っていました。ちなみに

私は従来通り、ネオ・ノルウェー代表、師匠はネオ・マカオ代表として参加します」

「うむ。ウオンのネズミめが、なぜかわしのネオ・ホンコン代表での決勝参加は許さんとはぎきおつてな」

それを聞き、チボデーが嬉しそうな表情を浮かべる。その横では、ジオルジユも微笑みを浮かべている。

「そうかい。そいつは、またやりあう時が楽しみだぜ！」

「ええ。私もです」

そこで気が付いた。ドモンと師匠が真剣なまなざしで見つめあっている。そして、師匠が口を開いた。

「ふむ、ドモン。お主、自分の道を見つけ出せたようだな」

「はい。師匠やジャンヌが何を憂い、何を考えているのかも。ですが俺には、師匠たちの道が正しいものとは思えません。俺は必ず戦いの中で、その答えを見つけ、そして師匠やジャンヌを止めてみせます」

「そうか。ならば見事、止めてみせい。お主の成長、お主の道、答え、この決勝大会の中で、しかと見せてもらおうとしようぞ」

「はい………」

と、そこで、開会セレモニーが始まった。

* * * * *

壇上に立つ、サングラスをかけたいかにも怪しそうな男。彼がネオ・ホンコン首相にして、この話の黒幕、ウオンである。下の名前など知らん。知りたくもない。

そのウオンは胡散臭い笑顔を浮かべたまま、「この決勝大会を輝かしいものにしたと思う」などと白々しいことを言う。よく言うよ。原作でさんざん俺ルールぶちかましてたけに。原作でお前がやらかした色々なこと、忘れてないぞ。

だが、驚きはそこからだった。なんと彼はそこで、「ではここで、我がネオ・ホンコン代表の特別シード選手を紹介しましょう」とのたまったのだ！

あれ？ どういうことだ？ だって、偽物の師匠は倒したんだぞ、二度も。まさか三体目も作ったのか？ 「だって私は三人目なもの」ってやつか？

その通りだった。ウオンに紹介されて壇上に上がったのは、まさに俺の隣にいる人そのものだった！

「わしがネオ・ホンコン代表、東方不敗・マスターアジアである！ 参加する者どもよ！ 見事わしを倒し、ガンダム・ザ・ガンダムの称号をつかんでみせよ！ できるものならな！ ふはははは!!」

しかも、そんな、師匠が言いそうでも言いそうにない台詞まで言う始末。やめてくれ、師匠に風評被害が出たらどうするんだ。

そしてやはり、師匠は偽物を見て、不敵に笑みを浮かべている。しかしよく見ると、その額に青筋が浮かんでいた。

「ふふふ、あの小物め。面白い余興を用意してくれておるわ。よかろう。最下層から這い上がるのもまた面白い……ドモン！」

「は、は、は……」

急に呼ばれて驚いた様子のドモンに、師匠はその表情のまま続ける。

「わしはあの偽物を倒し、一足先に頂きにて待つておる。お主も負けずに、頂きにたどり着くがいい。その時を信じて待つておるぞ」

「はいっ!」

そう力強くうなづくドモンを見て、師匠は満足そうにうなづく。だがその一瞬、師匠の表情が一瞬憂いを浮かべていたのが、少し気になった……。

* * * * *

そしていよいよ、試合が始まった!

ドモンの緒戦の相手は、ネオ・モンゴル代表のキル・カーン。モビルファイターMF はテムジン・ガンダム。

国内予選を苦戦することなく勝ち進んで、サバイバル・イレブンも快勝を繰り返して決勝に進出したという剛の者だが、やはりドモンと比べると、格の差を感じる。しかも今回、ドモンは決勝用のガンダム、ゴッド・ガンダムに乗つての出場だ。苦戦する要素はどこにもないと俺には思われた。

だが、師匠は相変わらず、厳しい表情をリングへと向け続けている。何か不安要素があるのだろうか?

そして試合が始まった。

俺の予想通り、ドモンは明鏡止水の動きをもって、キルの攻撃を流れるようにさばき

続け、逆に激しい攻めを彼のテムジン・ガンダムに繰り出している。

やはり、彼の勝利は間違いないように思えた。だが……！

* * * * *

「よし、これで決めるぞー！」

そう叫び、ドモンはかつての愛機、シャイニング・ガンダムの必殺技、シャイニング・フィンガーの態勢を取った。

「俺のこの手が真つ赤に燃える！ 勝利をつかめと、轟き叫ぶ!!」

彼のボイスコマンドに反応し、ゴッドガンダムの制御システムがゴッド・フィンガーの発動プログラムを起動させようとする。

「喰らえー！ ひいひいさつ！ ゴオオツド!!」

そして技を放とうとしたその時！ コクピットをエラーのアラーム音が包んだ！
「な!!」

そして全天周モニターに表示される、『ERROR』の文字。

そう、何かの理由で、ゴッド・フィンガーが発動しなかったのだ！

その事態に、動揺を隠せないドモン。

その隙を、キルが見逃すはずがなかった！

彼の刀が、ドモンに迫る——!!

18th Fight 『前進のためのケジメ! 沈黙のボルトクラッシュ』

「な!？」

エラー音が鳴り響くコクピットの中で、ドモンは戸惑っていた。

彼が発動させようとしていた新必殺技・爆熱ゴッドフィンガーは発動することができなかつたのだ。この異常事態に、ドモンは混乱していた。明鏡止水の境地を忘れてしまふほどに。

どうにか、その戸惑いを振り切って我に返ったその時!!

「!!」

目の前に、テムジンガンダムの刀の刃が迫っていた! そして!!

「うわあ!!」

とつさのことで明鏡止水の境地でかわすことができず、彼はその刃の直撃を受けてしまった! とつさに後ろにスウエーバックしたことで、一刀両断されることは避けられなかったが、吹き飛ばされ、腹部に損傷を受けてしまう!

* * * * *

一体、どうしたというのだろうか？　俺……ジャンヌ・エスプレッソも、目の前の状況に戸惑いを禁じ得なかった。

ドモンが優位に戦っていた相手に、必殺技でとどめを刺そうとした。

だが、なぜかそこで、その必殺技が発動せずに、逆に敵の反撃を許してしまったのだ。そこから逆転。ドモンは、対戦相手であるテムジン・ガンダムへの攻撃の前に防戦一方となっている。やはり、必殺技が発動しなかったのが、シヨックだったのだろうか。

そしてその様子を見て、師匠……東方不敗・マスターアジアは、厳しい表情を浮かべている。師匠はこの事態が起こることを予期していたのだろうか？

師匠はただ、厳しい視線を弟子に向け続けている。

俺にはそれが、師匠がドモンに向けた、無言の激励のような気がした。

* * * * *

テムジン・ガンダムのファイター、ネオ・モンゴル代表のキル・ハーンの猛攻に、それを防ぐのが精いっぱいのだモン。彼の頭は、必殺技であるゴッド・フィンガーが発動しなかったことの衝撃で混乱していた。とても明鏡止水の境地に至れる状態ではない。

そして、テムジン・ガンダムの一撃がまたゴッド・ガンダムにヒット！　彼はまた吹き飛ばされてしまう。

その時。彼は見た。

師匠、東方不敗・マスターアジアが自分に厳しい視線に向けているのを。それがドモンに、戦う気迫と、冷静さと、そして自分が為すべきことを教えてくれた。

彼には聞こえたのだ。視線に秘められた、師匠の声が。

声は言った。

『目の前の些事に囚われるな! それで負けるなど、流派・東方不敗の面汚しよ! お前も我が流派の者なら、惑わされず、自分の目指すもの、勝利をしっかりと見据えよ!』と。

そしてドモンはあえて、テムジン・ガンダム of 攻撃を受ける。スウエーバックしながら受けたので、ダメージはほとんどない。その吹き飛ばされる間に、呼吸を整え、再び明鏡止水の境地に至る。

地面に叩きつけられたゴッド・ガンダムは再び軽やかに立ち上がり、二本のビーム・ソードを構えた。その様子から、先ほどまでのような動揺はまるで感じられない。

その様子に、ハーンも感じ取ったようだ。改めて刀を構えなおし、ゴッド・ガンダムと対峙する。

だが、ゴッド・ガンダムの放つ静かな気迫は、容赦なくハーンに襲い掛かる。まるで、気迫の拳に握りつぶされるかのようだ。

それに耐え切れず……。

『うおおおおお!!』

テムジン・ガンダムは猛烈な勢いで突進してきた。しかしそれでも、ドモンは揺らぐことはなかった。そして。

「うおおおお！ 必殺、爆熱ゴッド・スラッシュユ!!」

そして突っ込んでいく！ 両手のビーム・ソードがさらに太く、長くなる。そして一閃!! 見事、テムジン・ガンダムの頭部を切断した！

膝をつくテムジン・ガンダム。レフェリーが試合終了を宣言し、ドモンの勝利が確定した。

会場を包み込む歓声。その中で東方不敗・マスターアジアは相変わらず、厳しい表情を浮かべていた。

* * * * *

「ドモン、どうしたの!?! ヒヤヒヤしたのよ!」

ゴッド・ガンダムを降りたドモンに、レインがそう声をかけた。それに鋭い目を向けてドモンがいらだちを隠しきれない大声で返す。

「それはこっちの台詞だ！ 俺は明鏡止水の境地に達していたのに、ゴッド・フィンガーがエラーで発動しなかったぞ！ システム調整か何かにミスがあつたんじゃないのか!?!」

「本当!? でもそんなはずはないわ。試合前のチェックでは、制御システムに問題は無かったのよ」

と、そこに。

「その通りだ、ドモン。エラーログを見なければ詳しいことはわからんが、発動しなかった原因はガンダムの子供のせいではない」

その声とともにやってきたのは、ドモンの師である東方不敗・マスターアジアと、彼の二番弟子のような存在のジャンヌの二人だった。

「お嬢さん。聞いておきたいのだが、その制御システムは、ファイターの明鏡止水があるレベルに達しないと、技を発動できないようになっていないかな?」

「は、はい。明鏡止水なのはわかりませんが、ファイターの心の動揺を検知すると、セーフティが働いて発動しないように……」

「なるほどな」

そして、再びドモンに目を向ける。

「ドモン、ギアナ高地で明鏡止水に至ったのは見事だとほめてやるが、その明鏡止水はまだ不完全ということだ」

「でも師匠、ギアナ高地でのドモンの動きは、本当に流れる水のように、静かで間違いなく明鏡止水という感じでしたが……」

そう異を唱えるジャンヌに、師匠はうなずいて続ける。

「うむ。だが、それでも心にかすかな迷いがあれば、それは心という水面に少しだが波紋を生じてしまう。それをシステムが感知してエラーを起こしたのであろう。ドモン。お主、心の中にわずかながら迷いがあるのではないか？」

「……はい」

マスターアジアの質問に、ドモンは素直に認めた。師匠との修行時代から、心技体の問題に対しては言い訳せず素直に認めるように、厳しくしつけられていた。嘘をついてしまい、吹き飛ばされてしまったことは数知れない。

「やはりな。察するに、わしらの行いや理想が誤りだとわかっているが、ならばどうするかという答えが出ていないということであろう」

「……はい、おっしゃる通りです」

そのドモンの答えに、腕を組んで考え込むマスターアジア。そして少しして、腕を解き、厳しくも優しい視線を弟子に向けた。

「わかっておろう？ その答えを出すのは最後には自分じゃ。これまでの戦いを思い返し、これからの戦いを見て、自分なりに答えを導き出すがよい。そして答えを見いだせた時こそ、お主は真なる明鏡止水に至れるであろう」

「師匠……はい」

「先にも言ったが、わしは一足先にあの偽物を打ち倒し、頂で待つておる。答えはお主がわしの元までたどり着いた時に聞かせてもらう。その時が来るのを信じているぞ」

そこまで言ったところで、再び会場を喧噪が包んだ。次の試合が始まったのだ。

『アルゴ、ボルトクラッシュの調子はどうだ?』

モニターに映るネオ・ロシアチームのチーフ、ナスターシャの問いに、アルゴ・ガルスキーは不敵な笑みを浮かべて応える。

「ああ。制御システムと動力システムも、すべて絶好調だ。むろん俺もな」

『そうか。お前の決勝大会での緒戦の相手は、ネオ・カナダ代表だそうだ。くれぐれも油断するなよ』

「わかつてる。このパワーで蹴散らしてきてやろう。ガンダム・ボルトクラッシュ、出ろぞー!」

彼の気合の入った声に応じて、乗機であるガンダム・ボルトクラッシュのシステムが起動していく。メイン動力システムであるピクトル・エンジンを発動し、ボルトクラッシュはゆつくりと立ち上がった。そして、力強く、リングに向かっていく。

そして対峙する、アルゴのガンダム・ボルトクラッシュと、対戦相手であるネオ・カ

ナダのガンダム。

それらを前に、レフェリーがコールする。

「赤コーナー！ ネオ・ロシア代表アルゴ・ガルスキー！ 搭乗するのはガンダム・ボルトクラッシュュ!!」

会場を喧噪が包む。その中、アルゴのボルトクラッシュュはただただむだけである。だが、その姿はとても雄々しく、力強い。

「青コーナー！ ネオ・カナダ代表アンドリユー・グラハム！ 乗機はランバーガンダム！」

再び会場に喧噪がとどろく中、アルゴの眉がかすかに動いた。対戦相手の『グラハム』という名前に引っかかりがあつたのだ。どこでだろうか……？

「それではガンダムファイト、レディーゴー!!」

その彼のかすかな戸惑いを無視するかのように、レフェリーの試合開始の声が響き、アルゴは気持ち切り替え、前方の敵を見据えた。

ランバーガンダムが強烈なショルダータックルを仕掛けてくる！ だがボルトクラッシュュはそれをがっしりと受け止めた。そのタックルの勢いに、少し後ずさってしまつたが、その態勢がみじんを揺らぐことはない。

「はいっ……！」

だが、アルゴはその攻撃に、相手のすさまじい闘志を感じ取っていた。並みの相手のタツクルとは違う。それは重く、激しい。まるで、巨大な岩に何度も襲い掛かり、必ずや砕こうと荒れ狂う波のように。

「うおおおお!!」

むろん、アルゴとて、このままやられるつもりはない。ボルトクラッシュの二機のビクトル・エンジンをフル稼働。そのパワーで、ランバーガンダムを抱え上げた。そして地面に叩きつける!

そして、その地面に倒れ伏したランバーガンダムに襲い掛かるが、そのランバーガンダムの蹴りを喰らい、態勢を崩してしまふ。そこに、立ち上がったランバーガンダムが襲い掛かり、がっしりと組み合う。

そこに、そのランバーガンダムから通信が入る。

『この時を待っていたぞ、アルゴ・ガルスキー! 例えお前が忘れても、俺は忘れはせんぞ! 俺の大切な人を奪ったお前のことはな!!』

「なに!?!」

『俺はアンドリユー・グラハム! お前と手下どもに殺された、ノーマ・グラハムの夫だ

!!』

「な……!!?」

絶句するアルゴ。彼も思い出したのだ。彼が死なせてしまった、ある女性のことを。それは故意ではなく事故であったが、それはアンドリユーには関係のないことだろう。アルゴと仲間たちに、最愛の人の命を奪われたのは確かなのだから。

「うおっ!?!」

動揺するアルゴのボルトクラッシュに、ランバーガンダムがタツクル! ボルトクラッシュを押し倒してしまおう! マウントを取ったランバーガンダムが、マウントパンチを食らわせるが、その拳をボルトクラッシュが受け止め、さらにその腕を取り、形勢逆転! マウントパンチを浴びせようとするが、膝蹴りを喰らい、吹き飛ばされる。

その後も激闘を繰り広げるアルゴのボルトクラッシュと、アンドリユーのランバーガンダム。

自分を仇と狙う相手を前に動揺するアルゴと、妻の復讐も猛るアンドリユー。二人の実力差は互角になり、バトルはどちらが勝つかわからないご激戦となっていた。

だが、そこで異変が起こった。突然ボルトクラッシュが戦闘態勢を解いたのだ。そのボルトクラッシュに、ランバーガンダムの攻撃がヒットする。

* * * * *

戦いをやめ、ただランバーガンダムの攻撃を受けるためになったボルトクラッシュに、ナスターシャは驚きと危惧を感じていた。

アルゴとアンドリユーの会話は、ネオ・ロシアスタッフの本部にも届いている。まさかアルゴは……?」

ナスターシャは急いで、ボルトクラッシュのアルゴに通信を入れた。

「何をしているアルゴ! まさかお前、わざとアンドリユーの妻の仇としてやられるつもりか!?!」

だが、アルゴの答えは意外なものだった。

『馬鹿なことを言うな!』

「!?!」

アルゴは、アンドリユーの攻撃を受けながら続けた。

『俺は、勝ち続け、仲間たちを釈放してもらわなければならん。ここで負けるつもりはない。だが、そのためにも、俺なりのケジメとして、彼の怒りと憎しみを全て受け止めなければならんのだ。そうしなければ、俺は前に進み、勝ち続けることはできない。俺はそんな不器用な男なのだ』

「アルゴ……」

『心配するな。ちゃんと、奴の怒りを受け止め切ってから勝つてやる。黙ってみていろ』
「だ、誰が心配してなど!」

そうムキになって言い返すナスターシャだが、その頬が赤く染まることを隠すことは

できなかった。

ナスターシヤはキュンとなつてしまったのだ。前に進むために、自分がやったことに對してのケジメをつけようとするアルゴの男らしさに。

そのナスターシヤの目の前で、ランバーガンダムは背中にマウントされた斧を抜いて構えた。

「妻の仇だ！ サウザント・アークスッ!!」

ランバーガンダムの手から放たれた斧は変幻自在な軌道を描いて飛ぶ。そしてその速さから残像が生まれ、無数の斧がボルトクラッシュに迫る！

そして斧が次々と、ボルトクラッシュに炸裂！ 屈強な機体が爆炎に包まれた！

「アルゴー!!」

* * * * *

「はあ……はあ……やったか……？」

荒い息をつきながら、爆炎を見つめるアンドリュウ。妻の仇を討てたのだろうか？

彼はこのファイトに、そして今の攻撃に全身全霊をかけてきた。彼は、この時のために全てを捧げてきたのだ。

だが。

『お前の怒りと憎しみ、無念、全て受け止めた。良い一撃だった』

「!?」

その声に、驚愕の表情を浮かべるアンドリユー。まさか、そんなはずは……!?」

その彼の前にボルトクラッシュが、爆炎の中から現れた。その身体は黄金に輝いている。ボルトクラッシュのパイレーツモードと、ツインビクトルエンジンのフルパワーを合わせた最強のモード、ゴールデン・パイレーツ・モードである。

『だが俺はそれでも、勝ち進み、前に進まなければならぬのだ!!』

そしてボルトクラッシュは構え、その拳を大地に叩き込んだ!

『炸裂! ガイアクラッシュャー!!』

ゴールデン・パイレーツ・モードのエネルギーを拳を通して、リングに、そして大地へと叩きつける。すると、突然あたりが大きく揺れ始め、リングが大きく盛り上がり、そして裂け、ランバーガンダムを天高く跳ね上げた!

そしてそのまま落下したランバーガンダムは、剣先のように鋭くそそり立つ岩塊が生えた地面へと叩きつけられた!!

「ぐああああ!!」

そのダメージで、アンドリユーは絶叫をあげ、ランバーガンダムは機能を停止した。レフェリーが、アルゴの勝利を宣言する。

それを聞き届けたボルトクラッシュは、各所からスパークを出しながら膝をついた。

ガイアクラッシュャーは、ボルトクラッシュユの機体にもかなりの負荷をかけるもろ刃の剣でもあるのだ。

そのコクピットでアルゴは荒い息をつきながら、ランバーガンダムを見やる。

「お前の怒り、憎しみ、俺に感じた全てのもの、全て、お前の攻撃の痛みとともに、この胸に刻み付けて進もう。それが、お前とお前の妻への償いになるかどうかはわからないが、それが今の俺にできる精いっぱいのことだ」

そして再びガンダム・ボルトクラッシュユは立ち上がる。その姿は、試合前によりはるかに雄々しかった。

その様子を、ドモンはただ見上げ続けている。

19th Fight 『苦戦の初陣! 帰ってきたミケロ!』

俺……ジャンヌ・エスプレッソは、青コーナーのバンカーにて、ガンダム・オルタセイバーに乗り込み、試合の準備をしていた。

その足元では、ネオ・ノルウエーのスタッフが、出撃のための準備をしてくれている。もつとも、俺のオルタセイバーはD^{デビルガンダム}G細胞によって強化された機体のため、メンテナンスはその自己修復機能で自動的にやってくれるのだが……。だがまあ、それでも人手によるメンテナンスも加わると、さらに万全になるのでありがたいのだが。

なお、スタッフには、損傷したガンダム・ピュセルを現地改修したと話してある。さすがに、DG細胞によって強化されたとは言えないからな。

「……………」

準備をしている最中、軽いめまいが俺を襲った。幸いにも、試合に影響を与えるようなひどいものではなかったが。

「………」

「少しずつ限界が近づいているのかもしれない………」

DG細胞によって作られたこの体に刻まれた、これまでの戦いで小さな傷。それに身体が悲鳴をあげているのかもしれない。

せめて、ことを成すまでもってほしいのだが……。

俺はそつと、自分の胸を撫でた。

「一緒に頑張りましたよね、私の身体」

そこで、レフェリーによるコールが為された。俺は、スタツフが周囲から退避したのを見届けると、オルタセイバーを起動させ、リングへ一步を踏み出した。

* * * * *

リングに出た俺は驚いた。俺の対戦相手は……とどころ違うが、ミケロ・チャリオットのネロス・ガンダムじゃないか！ というか彼は、ウオンの手下になって、とうにヘブンスゾードに乗ってると思っていたのだが。

「ミケロ、あなたも決勝大会に出ていたのですね」

「ああ。幸いにも、ネオ・メキシコの市民権を取れたんでな。チョコ・ロドリゲスの代わりにネオ・メキシコのファイターになったのさ！ 今度こそお前をぶち倒してみせるぜ。このガンダム・ルチャリブレでな！」

「それは楽しみです。でも、私もただでは負けませんよ」

二人同時に笑みを浮かべる。

そして、レフェリーの試合開始のコール。

「ガンダムファイト・レディーゴオオオオオ!!」

*** **

そして試合が始まった!

先手は俺がとらせてもらう! 俺のガンダム・オルタセイバーがビームセイバーを横風ぎにふるった! だが、ミケロのルチャリブレはそれを軽やかなステップでかわした。そして反撃でキックを返してきた。速い!?

かわせないと思った俺は、ビームセイバーでその蹴りを受け止めた! かなりの衝撃が伝わり、思わず吹き飛ばされそうになる。足回りだけでなく、そのパワーも強化されているようだ。

「くっ……!」

俺は後方に飛んで、その衝撃を逃がすようにした。そして態勢を立て直す。しかし、ルチャリブレは逃さず、俺に突進してきた! 俺は立ち上がると、ビームセイバーの斬撃を、カウンターでルチャリブレの顔面目掛けてはなった!

それをよけようと、ミケロが態勢を崩したところで。

「お返しです、スプラッシュソード!」

スプラッシュソードで追撃! だがなんと、ルチャリブレは、あの銀幻の脚でそれを

迎撃した！

俺のビームセイバーと、ミケロの蹴りが激しく何度もぶつかり合う！

そして、二機が交差！ 二機同時に膝をつく。

でも、まだまだ終わらない！ 俺は縦横無尽にビームセイバーを振るい、ミケロのルチャリブレを攻撃する！ しかし、ミケロも負けてはいない。ルチャリブレの拳や蹴りで、それをさばいていく。

それからも続く激しいバトル。俺のビームセイバーと、ミケロの蹴りと拳が激しくぶつかりあう。

そのファイトに、周囲からは歓声が聞こえてくる。

そして。俺のビームセイバーの突きが、ルチャリブレの頭部をかすめ、ミケロの蹴りがオルタセイバーの左肩をかすめた！ そして、またも同時に飛びのく。

わああああああ!!

周囲から湧き上がる、熱狂に満ちた歓声を聞き、俺は思わず笑みを浮かべる。それはミケロも同じだろう。

その彼から通信が入る。

『楽しいなあ……。メキシコでお前とやりあった時を思い出すぜ』

「奇遇ですね、私もです」

『さあ、ここからは本気でいくぜ!』

「のぞむところですよ!」

そして、ミケロのルチャリブレは勢いよく突進してくる! 俺も、闘争本能の赴くま

まに、突進する。しかし!

「……!?!」

突然、激しいめまいが俺を襲った!

* * * * *

「……!?!」

突如、激しいめまいが俺を襲った! そして態勢を崩したところに、ミケロの蹴りが

さく裂! 俺は吹き飛ばされてしまった。

「くっ……」

ふらふらしつつもなんとか態勢を立て直すか、めまいは続いたまま。ミケロは一瞬、

戸惑った動きを見せたが、すぐに立ち上がった俺に襲い掛かった!

そして激しい蹴りを浴びせてくる!

「……っ」

「オラオラ、どうしたどうしたあ!!」

そう言いながら襲い来るミケロの蹴り。まさに銀幻の脚というにふさわしい無数の

蹴りが俺を襲う。俺はそれをガードして防ぐのが精いっぱいだ。その激しさに、ついに俺のガードが弾かれてしまう！

「オラア!!」

そこに強烈な一撃を喰らい、またも吹き飛ばされる。だが、その時。

「……………」

俺の心に響いてくるものがあつた。それは…………蹴りに秘められた彼の、俺への失望、そして激…………？

また立ち上がった俺に、またもミケロは俺に猛攻を仕掛けてきた！ その一発一発は重く、激しく、そして熱い。

『どうしたどうした!? まさか、これで終わりなんてことはないよなあ!?』

「……………」

『俺はあんたを超えようと思って、ここまで頑張つて、力と技を磨き上げてきたんだ。そんな俺の歩みを、想いを、こんな下らない試合で終わらせてくれるわけではないよなあ!?』

「ミケロ……………」

彼が、俺を目標して、ここまで力と技を高め続けてきたとは…………。これは確かに、こんな無様な姿を見せるわけにはいかないな！

俺はガードしながら大きく深呼吸をして、気合を入れなおす。気をみなぎらせると、

それに全身のDG細胞が反応し、先ほどまでの不調はほとんど和らいでいく。これで、また寿命がいくら縮んでしまったかしれないが、そうなったとしても悔いはない。

「心配をおかけしましたね、ミケロ。もう大丈夫です」

『心配なんかしちやいねえよ。万全なお前をぶちのめさなきや、俺の気がすまねえってだけだ』

そして拳を交えあいながら、互いに微笑む。そして両者とも大きくバックステップして距離をとった。

* * * * *

互いに対峙したまま、構えを取り、気を高めあう俺とミケロ。

俺のために、ファイターとして自分を高め続けてきたミケロのためというわけではないが、ここで手を抜くことはできない!

一分とも一時間とも、一日とも感じられる時間が過ぎて、そして!

『行くぜえええええ!!』

オーラをまとったミケロのルチャリブレが突っ込んできた! それに対して俺は……。

「行きます!! はああああああ!!」

全身に稲妻の竜巻をまとい、同じく突撃した! 以前、ネオ・オランダのネーデル・ガ

ンダムとの対決で使ったぶち超級霸王電影弾だ。いや、これはもうそんな名前ではない。

互いに回避もせず、相手に向かってぶつかっていく。そして。

『喰らええええええ！ 必殺、黄金の脚アルティモオオオオ!!』

オーラに身を包んだルチャリブレの金色を越えた金色の蹴りと。

「流派・東方不敗亜流、リントーネード・ブラストオオオオ!!」

ぶち超級霸王電影弾改め、リントーネード・ブラストがぶつかりあう!! その激しい衝撃に、全身が悲鳴をあげ、思わず膝が折れそうになるが、気合を入れて耐え続ける。

そして激しいぶつかり合いの末、ついに俺のリントーネード・ブラストが打ち勝ち、ルチャリブレが大きくのけぞった! これを逃す俺ではない!

「必殺、絶対勝利、エクスカリバーンっ!!」

エクスカリバーンの一撃で、ルチャリブレの頭部を切断し、俺はなんとか勝利を得たのだった。

* * * * *

戦いを終えたミケロは会場を立ち去った。会場では、勝者であるジャンヌのファイトを褒めたたえる声がとどろいている。そんな場に水を差す彼ではなかった。そもそも、裏社会に生き、傭兵まで堕ちた自分が、あのような輝かしい場にいられ、あんな素晴ら

しいファイトができただけでも奇跡なのだ。

そう、今の彼は、そんな奇跡を得られることができた充実感と幸福感でいっぱいだった。裏社会から足を洗って、格闘技の世界に生きるのも悪くないと思えていた。

だが。

そんな彼だからなのか。背後から迫る、彼を狙う気配に気づくことはなかった……。

20th Fight『恋か勝利か!? 迷いのサイ・サイ シー』

あの不調もどうか回復し、とりあえずは元の健康体に戻った俺は、リハビリというわけではないが、ウオン一味のたくらみを探る意味もこめて、ネオ・ホンコンの市街地を歩いていた。

ガンダムファイト決勝大会が開かれているとあって、街はどこにもぎわい、活気に満ち溢れている。ネオ・ホンコン自体が輝いているかのようだ。その一方で、ガンダムファイトの弊害や、人類の営みで、他の地域が荒れ果て、傷ついているのだが。

それに、このネオ・ホンコン自体も、やはりガンダムファイトでどこどころ荒れ果て、そこに貧しい人々がスラムを作って住んでいる。その貧しさが、傷つき、荒れ果てていく地球を表しているかのようだ。

しかも、そんな中でも、ウオンは地球圏をわが物にする陰謀を企てている。人類の営みやガンダムファイトによる荒廃もさることながら、奴の陰謀で地球が傷つくことは許してはならない！ 俺がそう決意を新たにしていると……。

「んっ。」

向こうの交差点を、二人の若者が歩いていくのが見えた。あれは……ネオ・チャイナのサイ・サイシーじゃないか? ということはもう一人は、セシルって女の子だろう。これからデートだろうか。

本当に若くてうらやましい。いや、俺も若いんだが、やっぱり中身は男だし、それに俺には、地球を救い、師匠の悲劇を回避するという俺的使命がある。恋はまだまだ後でいい。最悪、恋がないまま人生終わってもかまわない。

さて、そうして暖かく見守っている俺だが、やはり一抹の不安を感じずにはいられなかった。確か原作では、恋か勝負かに迷って……。

見てみると、いつけん楽しそうにしていながらも、やはり時折迷いを感じさせる陰りのある表情を浮かべていた。これはやはり……。

師匠に相談してみるか。

* * * * *

そしてある日、サイ・サイシーサイドから俺たちに依頼が来た。「互いの立場抜きで、練習試合を頼みたい」とのことだ。当然、断る理由もないので、引き受けることにした。考えてることもあるし。

ということ、さっそく行ってみることにした。

「おー、待ってたぜ、アネキ! ……あれ、マスター・アジアのおっちゃん?」

「うむ。ジャンヌからの頼みでな。今回はわしが、お主の相手をする事になった」

そう、今回、思うところあって、師匠にサイ・サイシーの稽古の相手をお願いしたのだ。それを知って、彼の付き人、恵雲、瑞山は感慨深い様子。

「おお……」

「武術の極みともいうべき、流派・東方不敗……」

「その創始者である東方不敗・マスターアジアに稽古をつけてもらえるとは……」

「なんとたる武道家の誉れ！」

「きつと、サイ・サイシーも、得るものが多いであろう！」

「ぜひお願いいたす！」

その二人の言葉に、師匠が大きくうなずく。

「よかろう。では、さっそくはじめるとしようか」

そう言うと、師匠はサイ・サイシーに向かい合って構えた。一方のサイ・サイシーも構えをとる。そして。

「いくぞぞお！」

「おうー！」

* * * * *

かくして、師匠とサイ・サイシーの稽古試合が始まった。

「せやつー！」

師匠の突きを、ジャンプでかわし、さらにその拳に飛び乗り、それを踏み台にしてさらにジャンプ！　そして空中から急襲！　師匠は迎撃しようとするも、次の瞬間にはサイ・サイシーの姿は既に宙から消えていた。そして次の瞬間には。

「(っ)だいつー！」

なんと、師匠の足元に現れていた。そして足払いを放つ！　だがさすが師匠。その足払いをかわして蹴りを放つ！　と思いきや、すかさず続けて後方に肘打ちを放った！

「うわつと!？」

「その程度で、わしを翻弄できると思っておるのか、たわけめ！」

それは見事に、師匠の背後に現れていたサイ・サイシーにヒット！　ガードしたものの、サイ・サイシーは大きく吹き飛ばされた。

それから、師匠とサイ・サイシーのバトルは続いた。正面からながらも激しい攻めを繰り返す師匠に対し、サイ・サイシーは硬軟使い分けるトリッキーな戦いで迎え撃つ。

だが、観戦して思ったのだが、どうもサイ・サイシーの動きに精彩がないような気がする。彼のトリッキーな動きは見事ながら、どこか雑な感じがしたのだ。表情も、いつもの闊達とした様子は、少し鳴りを潜め、迷いがあるような顔をしている。

それを師匠も感じたのだろう。彼の蹴りを受け止め、はねのけると、くるりと背を向

けた。

「お、おっちゃん？」

「ここまでだ。正直、がっかりしたぞ。少林寺がこの程度だとはな」

その言葉に、恵雲と瑞山の二人が立ち上がる。

「なんと!？」

「我らの少林寺を『この程度』と言われるか？」

場はたちまち、一触即発の雰囲気にも包まれた。

* * * * *

師匠……東方不敗・マスターアジアに、怒りを隠さずにぶつけてくる、サイ・サイシーの付き人、恵雲と瑞山。だが師匠はそれを受け止めながらも、面白くなさそうに鼻を鳴らして口を開いた。

「その通りよ。はつきり言ってやろうか？　こんな腑抜けたガキを、再興のための跡継ぎに頂くとはい、かの少林寺も落ちたものよ」

「なんと!？」

「その発言、許さぬ！」

二人が戦いの構えをとる。おいおい、まさか師匠とやりあう気か？

だが、師匠はそれでも動じることはなかった。その瞳に宿るのは、憂いと怒り。もしかして師匠は……?」

「ならばどうする気だ?」

「無論!」

「我らが力をもつてして、その発言を改めさせてもらいまする!」

「ふん、うぬらとやつても面白くはないが……まあよい。降りかかってきた火の粉は払うのみ。かかってくるがよいわ」

「いざ!」

かくして、師匠と恵雲、瑞山との一对二のバトルがはじまった。だが、その力の差は歴然。二人の攻撃を軽くいなし、それに倍する反撃を返す。まさに大人と子供だ。

恵雲の突きを軽く左手で受け止め、動きがとまったところで鋭い突きを飛ばして吹き飛ばす。その背後から瑞山が飛び蹴りで襲い掛かるが、師匠は持っていた布を飛ばして、彼の脚からめとって態勢を崩し、さらに引き寄せて、カウンターでパンチを放つて吹き飛ばす。

もうやりたい放題の師匠だが、良く見ると、確かに吹き飛び方はすごいが、師匠はあえて、相手を傷つけない打ち方をしていた。あの打ち方であれば、多少怪我こそすれど、命に関わるようなことはないだろう。

* * * * *

そして戦うこと数時間。地面には師匠に完膚なきまでに叩きのめされた惠雲と瑞山の二人が倒れ伏していた。

彼らを見下ろしながら、師匠はいかにも悪役というような悪い笑顔で言い放った。

「所詮、この程度か。少林寺など、我が流派の足元にも及ばぬわ」

「ぐぬぬ……その言葉、取り消されよ……」

「取り消すも何も、これが真実よ。女と再興の二つで迷う小童を再興の旗頭に載してる時点で、少林寺は終わっておるのだ」

そして、邪悪な目つきでサイ・サイシーをにらみつける。それにしてもこの師匠、ノリノリである。

「再興のために進むもよし、再興を捨てて女に走ることも、武道家としては許せぬが、選んだ選択ならばそれもよし。だが、どちらも選ぶことができず、迷える小童など、ただの坊主も同然。こんなガキを好きになるなど、どんな女かは知らぬが、よほど愚かな女であろうな」

「……！ 今の言葉……取り消しやがれえええええ!!」

師匠の言葉に激昂したサイ・サイシーが師匠に飛び掛かり、飛び蹴りを放った！ 師匠はそれを軽く腕で防御するが、かすかにその顔がゆがむ。

「むう、少しは魂が入ったか。お主に気合を入れさせるとは、その娘、ただのアバズレではないようだ。だが、道に迷っている限り、結局は同じこと。つかみとれることは何一つない」

「うるせえ！ 俺は欲張りなんぞな！ 少林寺の再興もセシルとの恋も、どちらもつかんでみせる!!」

「なに？ ふふふ……はっはっはっ!!」

そのサイ・サイシーの答えを聞いた師匠は戦う構えを解き、大声をあげて愉快そうに笑った。その様子からは、先ほどまでの邪悪さは感じられない。いつも通りの師匠だ。

「選ぶことなく、両方ともつかみ取るとな。痛快な道を選んだものよ。だがその顔つき、それなら問題はなからう。お主のその挑戦がどのような結果になるか、高みの見物とさせてもらおうぞ」

「へっ、言いやがれ。今度戦う時には、恵雲と瑞山をいたぶってくれた借り、一杯返させてもらうからな！」

「ふふ、楽しみに待っているよう」

そう言って、師匠は俺と合流し、去っていった。

* * * * *

そして、サイ・サイシーの緒戦がやってきた。相手は原作通りのネオ・デンマークの

マーメイドガンダム。

決勝用の新型、ガンダム・ダブルドラゴンを駆るサイ・サイシーの動きは、稽古試合までにあつた迷いは感じられず、どんな刃物よりも鋭利な鋭さと激しさが感じられた。やはり、師匠との戦いで答えを導いたのが大きいのだろう。

だが、それでもやはりマーメイドガンダムは強敵。そのサイ・サイシーの実力をもつてしても、苦戦は免れ得なかつた。

『ちつ、なかなかやるじゃねえか……。このままじゃやばいな……。なら、一か八か、勝負といくか!』

そう叫ぶと、ガンダム・ダブルドラゴンは高く飛び上がった! 全身が、蝶の形を作る。もしや……。?

それを見て、恵雲と瑞山の二人が立ち上がる。血相を変えて。

「その技は……!」

「いかん!」

「その技は、少林寺の秘伝、真・流星胡蝶剣!」

「我が少林寺に伝わる奥義にして、使った者の命を奪うという非情なる技!」

「いかにぞ、サイ・サイシー! その技だけは!!」

やはりか……。だが、サイ・サイシーは、勝気に答える。

『心配すんな！ 俺は欲張りな男だからな！ 優勝して再興をつかみ取り、セシルとの恋もつかむまで、死んだりしやしねえよ！』

「サイ・サイシー!!」

『まあ、黙ってみてな。いくぜ!!』

そしてダブルドラゴンは、炎を超え、光の蝶へと変化した！

『喰らえ！ 極・流星胡蝶剣—————!!』

ガンダム・ダブルドラゴンが変化した閃光の蝶は周辺に展開した炎の蝶たちとともに、怒涛の勢いでマーメイドガンダムに向かって突進していく！

そして激突!! リングは爆炎に包まれた!!

* * * * *

あの戦いの後。俺と師匠はネオ・ホンコンの街角を歩いている最中、サイ・サイシーとセシルの二人が談笑しているところを目撃した。

あ、サイ・サイシーが調子のいいことを言っているとところに、恵雲と瑞山の二人がやってきて、彼の頭をこづいた。

その様子を見て、師匠が微笑む。

「まさか、本当に両方ともつかみ取るとはの。大した男よ」

「そうですね。でもそれも、師匠のおかげだと思います。本当にありがとうございます」

た。そして、憎まれ役を任せてしまつてすみません」

「謝る必要はない。道に迷う武道家を導くのも、我ら流派・東方不敗の者の役目。それに、悪役を演じるのも面白かつたしな」

ん？ ということはもしかして、原作の新宿編からギアナ編で師匠が小物の悪役をやつてたのも、もしかしてノリノリ……？

俺の脳裏にそんな疑問が浮かんたところで、師匠はキツと鋭く俺をにらみつけてきた。どうやら見抜かれたらしい。

「ジャンヌ、お主、失礼なことを考えておらぬか？」

「い、いえいえ、そんなことはありません」

「ふん、まあよい」

そんな言葉を交わしながら、俺はネオ・チャイナの三人とセシルの様子を暖かく見守っていた――。

21th Fight 『社長の大逆襲! 危うしガンダム・マックスリボルバー!!』

ネオ・ホンコンのスラム街のその片隅。そこに、みずぼらしい男がさまよっていた。その姿を見た者は、誰もこの男がかつては世界有数の大富豪だとは思うまい。

「おのれ……おのれ、ジャンヌ・エスプレッソ。あの娘がいなければ、わしがこんなことになることもなかったのに……!」

男の名はモッチー・オーガネ。先述の通り、世界有数の大富豪で、とある島を、以前の持ち主を暗殺して手に入れ、リゾート地にしていた男だ。だが、TS転生者ガンダムファイター、ジャンヌ・エスプレッソと、リゾート開発を阻止していたカンちゃんを共倒れさせようと陰謀を巡らせていたのが運のつき。一人と一匹の逆襲を受け、今ではこんな姿に。大金持ちから大貧民へ大転落である。

自業自得ではあるが、そんなことは当人は考えない。彼の頭の中は、自分をこんな境遇に陥れた、ジャンヌへの復讐心でいっぱいであった。

そのモッチー・オーガネの向こう側から、一人の怪しそうな中国人がやってきた。

「お前サンも、ジャンヌ・エスプレッソに恨みがあるアルか? 実は私も、彼女とチボ

デー・クロケットに恨みがあるアルよ。よかったら、手を貸してやってもいいアルよ？」

中国人のアジトで、たらふく食事をごちそうになったモッチーは一息ついた。

「ありがとう。こんなおいしいごはんを食べたのは久しぶりだ。しかし、まさかネオ・チャイナの高官のあなたが、マフィアのボスになっていたとは……リ・エイケツ氏」

「いやいや、ただの乞食からここまで這い上がるのは大変だったアルよ。ジャンヌ・エスプレッソとチボデー・クロケットがいなければ、私がネオ・チャイナ政府から切り捨てられて、あんな苦勞をすることもなかったのにアル！」

そう吐き捨てて、元ネオ・チャイナ高官ことリ・エイケツは飲んでいたビールのジョッキをテーブルに叩きつけた。その衝撃で、皿は大きく揺れる。

彼が言う通り、リ・エイケツは、ネオ・ケニア担当の高官だった。その任務は、ネオ・チャイナとネオ・ケニアの密約を成功させ、ネオ・ケニアのデイマリウム鉱石採掘の利権を確保すること。彼の策謀によってその任務は八割ほど達成できていた。さらに、ネオ・ケニアのコンタ・ン・ドゥールを傭兵にすることもできていたのである。この任務の成功、そして自らの栄達は目前まで迫っていたのだ。

それがあの一件で一気に崩れた。チボデーとジャンヌに陰謀を暴かれ、さらにこんな時のために傭兵にしていたコンタ・ン・ドゥールを倒され、拳銃の果てには、ガンダム

ファイト監査委員会に、これまでの策謀で行ってきた不正を突き止められた。

彼は、ネオ・チャイナ政府が圧力をかけて、この事件をもみ消すことを期待したが、逆にネオ・チャイナ政府は彼を切り捨て、エイケツは哀れ投獄されることになってしまったのである。

その後は、語るも涙、聞くも涙の物語。色々手を尽くして脱獄し、ネオ・ホンコンに流れ着き、一人のごろつきからその才覚を活かしてそこそこの規模のマフィアのボスにまで成り上がることができたのだった。

だが、そこまでに成り上がってもなお、リ・エイケツの心には、自分を一時はごろつきの身に叩き落したジャンヌとチボデーに対する憎しみに満ちていたのである。自業自得だろうというツツコミは、彼の心には届くことはなかった。

「さて。モッチー氏はM^{モビルスーツ}S 操縦の心得があると聞いたアル。そこで、モッチー氏さえよければ、ガンダムファイトへの参加の権利と、そのためのM^{モビルファイター}F を用意してもいいアルよ。それで勝ち進み、あの小娘をぶちのめせばいいアル」

「おお、本当か! それでそちらからの条件は?」

「物分かりがよくて助かるアル。こちらからの条件は、モッチー氏の緒戦にて、対戦相手のチボデー・クロケツトをぶちのめすことアル。もちろん、そのためのサポートもするアルし、ネオ・ホンコンとのパイプを活かして、チボデーと対戦できるようにカードを

組むアルよ」

「わかった！ あなたの仇敵であるチボデー・クロケット、そしてわしにつくき相手であるジャンヌ、二人ともぶち倒してやろうではないか！」

こうして、まさかのこの二人のコラボ……もとい結託がなされたのであった！

* * * * *

俺……ジャンヌ・エスプレッツォは、ネオ・ホンコンのスラム街を歩いていた。この大会の裏で、ウオンが企んでいるかもしれない陰謀を探るためだ。

だが、まだ企ててはいないのか、手がかりは得られなかった。

そして、その日の調査を終えた俺が帰途についていると……？

「ん、あれは……？」

複数の黒服の男に囲まれている、一人のファイターらしき男……あれは、チボデーじゃないか？

何かただ事ではないものを感じた俺は、黒服たちに気づかれないように、そっちの方に接近していった。

* * * * *

「Hey！ あんたら、どいつからの差し金だい？ 俺へのサインだったら、事務所を通してくれないと困るぜ」

「問答無用!」

チボデーの軽口にこたえることなく、黒服たちは彼に襲い掛かった!

男たちは、ある者は鎖鎌で。またある者はナイフで。またある者は徒手空拳でチボデーに襲い掛かるが、やはりチボデーのほうが上手であった。

鎖鎌をはねのけ、その隙に懐に飛び込み、パンチを叩きこむ! ナイフで襲い掛かってきた男をかわし、膝蹴りをみぞおちに叩き込む。中国拳法をガードし、隙についてパンチで吹き飛ばす!

十数人もいた男たちは、一人、また一人と数を減らし、残り数人となっていた。その一人が、物陰で銃を抜く。

「ちきしょう……。だが奴も、銃による不意打ちには……」

そうつぶやく彼は、背後から近づくと少女騎士に気づくことはなかった。

* * * * *

「とりやつ!!」

「うがあ!!」

チボデー渾身のストレートがさく裂し、男が倒れこむ。そしてそれより遅れて、別の人が倒れる音が響く。

彼が音の方を向くと、ちょうどジャンヌが銃を持った男を倒したところだった。

「さすがですね、チボデー・クロケット。あれだけの数の敵を倒すなんて。私の助けはいらなかったかもしれないね」

ジャンヌにそう言われて、チボデーは表情を緩めて返した。

「いや、そんなことはないさ。そいつには気づかなかったからな。本当に助かった」「ならよかったです」

そう言われて、ジャンヌも微笑む。そこに。

「くくく……。そう微笑んでいられるのも今のうちだ」

ジャンヌに打ち倒された黒服が、そう苦しそうに言葉を紡いだ。それにチボデーがいぶかし気な視線を向ける。

「なんだと?」

「お前『たち』を襲ったのが俺たちだけだと思うか? 今頃は他の奴らが……ぐふ」

そう言い残して、黒服は血を吐いて気を失った。その言葉を聞いたチボデーの表情がたちまち変わる。

「まさか、ギャルズたちにもこいつらの仲間が!? なんてこった!」

「急ぎましょう、チボデー!」

「おう!」

そして、ネオ・アメリカのハンガーへと、二人は走っていった。

* * * * *

チボデーと俺……ジャンヌの二人がハンガーにたどり着くと、黒服の言ったとおりであつた。

チボデーの乗る決勝用の新型、ガンダム・マックスリボルバーは無事だったが、コンピュータ室は荒らされ、チボデー・ギヤルズの五人が倒れ伏している。

「これは……おい、しつかりしろ!」

「大丈夫です。当身で気絶させられているだけのようですね」

ギヤルズの一人、ジャネットを抱き起して声をかけるチボデー。一方の俺は、キャスに駆け寄り、様子を見ていた。

そうしているうちに、ジャネットが目を覚ましたようだ。

「あ、チボデー……」

「よかつた。いったいどうしたんだ!」

「黒服が……怪しい黒服の男たちがここに侵入してきて……あつ!」

そこでジャネットは重大なことを思い出したように飛び起きた。

「おい、無理しちやダメだ。どうしたんだよ?」

「あの男たち……あの男たちが、PWシステムのシステムディスクを奪っていったの!」

システムのインストール前だったから、早く取り返さないと」

「なんだって……!?!」

そのジャンネットの言葉を聞いた、チボデーの目が大きく見開かれる。よほど重大なことのようだ。聞いてみることにする。

「PWシステム?」

「ええ……。マックスリボルバーのスーパーモード、『ロッキーモード』を起動させるためのシステムなの」

「マックスリボルバーの装甲をパージし、さらにジェネレーターをフル出力稼働させて、通常の数倍のパワーとスピードを発揮させるマックスリボルバーの切り札だ。あれがないと決勝はきついことになる……」

確か、原作『超級!』でのマックスリボルバーの強化モードは『減量モード』だったが、それをさらにパワーアップした感じか。そんなすごいモードを用意していたとは。いや、今はそんなことを言ってる場合ではないな。

「早く取り返しに行かなくちゃな……!」

「待って。チボデーは、マックスリボルバーの調整があるでしょ? チボデーの試合まで残り一日。取り返しに行つて、調整して……では間に合わないわ」

「だが……」

苦渋の表情を浮かべるチボデーに、ジャンネットが口を開く。その近くには、残りの

ギャルズも集まってきていた。

「私たちがディスクを取り返しに行くわ。黒服の一人に、かろうじて発信機をつけることはできたから。チボデーは調整に専念して」

「しかし、お前たちをそんな危険な目にあわせるわけには……」

うーん、ここは俺の出番のようだな。

「それでは、私も、彼女たちと一緒にいきます。そうすれば、取り返せる可能性も高くなるでしょう」

「ジャンヌ……いいのか?」

「ええ」

ここまでかかわった以上、見過ごすわけにはいかないしな。

* * * * *

そして俺とチボデー・ギャルズがやってきたのは、スラム街のさらに片隅にある廃ビルだった。ここが、奴らのアジトらしい。

入口には二人の守衛がいたが、俺が気づかれずに忍び寄って無力化した。そんな俺を見て、ギャルズの一人、シャリーが声をかけてきた。

「さすがね。あの二人、結構強そうだったのに、いとも簡単に……」

「ありがとうございます。これでもファイターですから……」

ファイターだからって、隠密に優れてるわけでもないんだがな。俺が優れてるのは、ファイターとしての技術以上に、この体がDデビルガンダムG細胞でできていることも大きいのかも
しれない。多分。

そして俺たちは薄暗い通路を進んでいく。そこに！

「ねえねえ、このボタン、なんだろう？」

バニーが壁にあるボタンに気が付いたようだ。いかにも怪しい……。

これは押しではいけないと、ボタンのまどつている空気がそう警告しているような気が
するぞ。それに気が付いたのか。

「ちよつと、バニー、余計なことほしないほうが……」

「ぼちつとな」

キヤスが止めることなく、バニーはそのボタンを押してしまった！　すると。

ガツシャーン!!

やつぱりというべきか、突然上から鉄格子が落ちてきて、バニーとキヤスの二人を閉
じ込めてしまった！

なんというパターンな……。というか、どうして廢ビルにこんなものが仕掛けてある
んだよ。

「もう！　だから余計なことはするな、と言ったのに！」

「ご、ごめんなさい……」

俺たちは二人の閉じ込められた檻に駆け寄るも、それとほぼ同時にジリリリとアラームが鳴り響いた!

檻そのものはとも頑丈そうで重そうで、動かすことはできなさそうだ。

さらに悪いことに、出口のほうから男たちがやってきた! どうするべきか……。

そこで、キヤスが懐から拳銃を取り出して構えた。

「ここは私たちが食い止めるわ。だから、三人は先に行つて!」

「でも……」

ためらうジャネットに、キヤスが続ける。

「大丈夫。そう簡単にやられはしないわ。このミッションは、ディスクを取り戻すことが大切。さあ!」

「わ、わかったわ!」

そして俺たちは鉄格子の中から黒服たちに応戦する二人を残して先に進んだ。

* * * * *

そしてさらに進むと……。勘というべきか、足元に違和感を感じた。すぐさま警告する。

「いけない、離れて!」

「え？」

ガコンツ!!

突然、足元に落とし穴が開いた。俺はなんとか飛びのけたが、俺の隣を歩いていたジャネットがその餌食となつてしまった。

すぐに駆け寄る。穴はそれほど深くはなさそうだが、簡単に這い上がれるほど浅くもないようだ。だから、どうして廃ビルにこんなものがあるんだよ。

「私のことは気にしないで！ シャリーとジャンヌさんは先に進んで！」

「ジャネット……」

「大丈夫！ 必ず這い上がって追いかけるから！」

あの、ジャネット、それは死亡フラグ……。それはともかく、しばらく見つめあうシャリーとジャネット。そして。

「わかったわ！ 必ず、ディスクを取り戻して、チボデーに勝利を与えてみせるわ！ ジャネット、かなり追いついてきてね！」

「ええ！」

そして俺たちは、落とし穴に堕ちたジャネットを残して、さらに先に進んでいった。

* * * * *

そしてなんとか奥までたどり着いた俺とジャネットだが、そこはまさに窮地だった！

奥にあるホールには、あの男と、たくさんの黒服たちが待ち構えていたのだ。

「まさかあなたがディスク強奪の黒幕だったとは……。元ネオ・チャイナ高官!」

「その通りアルよ。よくここまで来たアルな。でも、それもこれで終わりアル。さすがにこの数、お前たちでは勝てないアルね」

「くっ……」

周囲から、銃を構える音が鳴り響く。

「私も、お前には恨みがあるアルからね。モッチーにはすまんが、ここで恨みを晴らさせてもらうアルよ」

だがその時!

「ふふふ……だが、そううまくいくかな?」

「アル!」

その声とともに、ホールの一部が爆発し、黒服たちの一部が吹き飛ばされた。

「ななな……アル。ど、どこアルか!」

「ここよ。この盲目の、中国の恥さらしめが!」

「!」

声が出たほうを見ると、なんと、天井近くに張られた鉄骨の上。そこに声の主が立っていた。それは……!

「師匠！」

「東方不敗・マスターアジア……。どうして……。？」

「わしも、ジャンヌと同じく、ウオンの陰謀を探っていたのでな。その過程で、まさかこのような小物の陰謀に出会うとは思わなんだぞ。そうだ。鉄格子に囚われた娘たちや、落とし穴に堕ちた娘は既に助けておいたから安心するがよい」

「ありがとうございます……師匠」

俺がそう礼を述べると、師匠はうなずくと、元高官に鋭い目を向けた。

「さて、この小物どもを叩き潰す前に……。はあっ!!」

「アルツ!」

師匠の手から布の帯が放たれると、それはたちまち高官の胸元に忍ばされていたデイスクに巻き付き、するりと奪い取った! 師匠はそれを手に取ると、それをシャリーに投げ渡した。

「さあ、これで後顧の憂いはないな。ジャンヌ、この場はわしに任せ、お嬢さんとともにチボデーとやらのところへ駆けつけるがよい」

「わかりました!」

「あ、ありがとうございます!」

そして俺は、シャリーをガードしながら、ホールを後にした。師匠が暴れまわる音を

聞きながら。

* * * * *

さて、一方そのころ。チボデーとモッチー・オーガネのファイトははじまっていた！
試合の内容は電磁バリアー金網デスマッチ。リングを取り囲む、あらゆるものを防ぐ
バリアーに囲まれた中で行われるデスマッチだ。

そのファイトで、チボデーのガンダム・マックスリボルバーは苦戦の中にいた。

「ほらほら、どうしたどうした！ アメリカンドリームを叶えた男が情けないものだ
なあ!!」

「くっ……好き勝手いいやがって!」

いくら暴れても、リングの外への被害がないのをいいことに、モッチーの社長ガンダ
ムMk-IIは、全身のビームやミサイルを乱れうちしてくるのだ。ロッキーモードが発
動できないマックスリボルバーはそれをかわしたり、防いだりするのが精いっぱい、
とても攻撃する余裕はない。

そうしているうちに、ミサイルの一発がマックスリボルバーの胸部に直撃！ 吹き飛
ばされてしまう。

「うわあー!!」

「どうだ、思い知ったかわしの恨みを！ はっはっはっ!!」

「くそう……」

その苦戦の様子を、汗を流しながら見つめているネオ・アメリカスタッフ一同。その彼らがいるスタツフルームに、五人の女性たちが飛び込んできた！

「ディスクを取り返してきたわ！ インストールをはじめめるわよ！」

* * * * *

「所詮、ガンダムファイトとは……！」

モッチーが勝利を確信して、仁王立ちして演説をぶちまけている中、チボデーはかろうじて立ち上がった。そこに通信が入る！ 待ち望んでいた通信が！

『チボデー、大丈夫!?!』

「おお、シャリーー！ みんな！ 無事だったか！」

『ええー！ ディスクを取り返してきたわ！ これからマックスリボルバーのシステムにインストールする!』

「よっしゃ、任せませ！」

そしてそれと同時に。

「さあて、これとどめだ！ あの娘を倒す前の前祝いだ！ ただの鉄クズとなるがいいー！」

そして、全身からビームやミサイルを展開！ マックスリボルバーにフルファイア一斉射撃を放つ

! たちまち、バリアーで囲まれたリング内は爆炎に包まれる!

「はははは! どうだファイターども! 所詮ガンダムファイターなど……!」

「ガンダムファイターが……なんだって?」

「はい!」

社長ガンダムMk-IIがその声に振り向くと、そこには装甲をパージし、全身を金色に輝かせたマックスリボルバーが立っていた! PWシステムのインストール、そして、ロッキーモードの起動は間一髪間に合ったのだ。

「これが起動できたら、もうお前など敵じゃねえ! 今まで好き勝手やって、好き勝手に俺たちファイターを侮辱した罪、償ってもらうぜ!」

「お、おのれ!!」

社長ガンダムMk-IIはビームやミサイルで応戦するが、マックスリボルバーはそれを目にも留まらぬ機動でかわしつつ、モッチーに迫る!

「おーららららっ!!」

「はうっへぶつごふあうごつぐふっ!!」

そして、社長ガンダムMk-IIの目前まで迫ると、これまた目にもとまらぬ速さで、パンチを繰り出す。フック、ジャブ、アッパー、そしてストレート。無数のありとあらゆるパンチが、社長ガンダムMk-IIに襲い掛かる!

そして社長ガンダムMk-IIは吹き飛ばされ、電磁ロープに叩きつけられた！ それに迫るマックスリボルバーはさらにその金色のオーラを増していた！ それがチボデーの怒りを如実に表していた。

「さあ、とどめだ……覚悟はいいか？」

「ひ、ひいいい、許してくれええええええ！」

そのモツチーは命乞いをするが、それで許してくれるようなチボデーではない。

「地獄の悪魔に頼むんだなあああ!!」

そして、社長ガンダムMk-IIに猛突進！

「必殺！ 豪熱、マシンガンペアアアアンチツツツ!!」

チボデーの豪熱・マシンガンパンチが炸裂!! 先ほどの連打をも超えるパンチが社長

ガンダムMk-IIを破壊していく。

「フィニイイイイイッschuss!!」

そしてとどめのアツパーで、社長ガンダムMk-IIは中のモツチーごと高く打ち上げられた！ そして、天井の電磁バリアーに激突！ スパークが機体を駆け巡り、哀れ、社長ガンダムMk-IIはモツチーごと大爆発、砕け散って果てたのだった。

* * * * *

フアイトの後。

「世話になったな、ジャンヌ・エスプレッソ。敵同士の立場であるアンタに助けられるとは複雑な気分だが」

俺は、チボデーからそう礼を言われていた。なんかこそばゆいな。

「いえ、いいんですよ。それに、ギャルズの皆さんを助けてくれたのは師匠ですし。何より、地球を想う気持ちそのものは私たちもあなたたちも同じです」

「そうだな。でも言わせてくれ。本当にありがとう。この借りは必ず返させてもらおうぜ」

「はい、その時はよろしくお願いします」

そうして今回の一件は一件落着いたのだった。しかし、まさかあのネオ・チャイナの高官とモッチーが裏で手を組んでいたとは。まあでも、高官は再び獄中の人となったし、モッチーはあの大爆発で果てた。もうこんなことはないだろう。

そのことに、ささやかな安堵を感じつつ、俺はネオ・アメリカのハンガーを後にしたのだった。

22th Fight 『四天王激突！ ヘルトライデント対ダークホツパー!!』

「ガトリング・デスピアアアアアアア!!」

チコ・ロドリゲスのガンダム・ヘルトライデントが繰り出す必殺技、ガトリング・デスピアアを受けて、対戦相手のガンダムは一瞬にして、ただのスクラップと化してしまった。

「試合終了！ 勝者は個人資格での出場ホアキン・ムニスのガンダム・ヘルトライデント!!」

わあああああああ!!

会場を熱狂の声が包み込む。偽名を使い、個人資格で出場していたチコ・ロドリゲスは、その実力で、順調に勝ち星を挙げていた。

そしてもう一匹も……。

「ピョーンツ!!」

「ぐはああっ!!」

カンちゃんのダークホツパーガンダムの蹴りが炸裂!! 相手は遠く吹き飛ばされ、地

面に叩きつけられた。

「ノックアウト! ノックアウトです! ガルーちゃんのダークホッパーガンダムの勝利です!」

わあああああ!!

ガルーちゃんという偽名を名乗っているカンちゃんも、チコに負けず勝ち星を重ねていく。

なお一人と一匹とも、デビルガンダムD・G細胞によるチートは受けていない。それは俺……ジャヌ・エスプレッツソも確認済みだし、参加手続き時のメデイカルチェックでも問題は確認されなかった。

どちらも、純粋な実力で勝利を重ねてきたのだ。

* * * * *

勝ち星に順調に重ねていくホアキン（チコ）とガルーちゃん（カンちゃん）を、快くない目で見ている者がいた。

ネオ・ホンコン首相、ウォン・ユンファである。

情報部からの知らせで、二人は、ジャンヌとマスター・アジアの仲間だということ突き留めている。そんな彼らが快勝を重ねていることは、この男には不快極まりなかったのである。

「これはよくありませんねえ……。いつそ、彼らがデビルガンダムの手先であることをばらしてしまいませんか？ いえ、それは面白くありませんね。それなら……」

* * * * *

そして、一週間後に控えた次のファイトのカードが発表された。それを見て、俺は目を剥いて驚愕してしまう。

なぜなら、カードが発表される立体映像掲示板にはこう書かれていたからだ。

『ホアキン・ムニス（個人資格・ガンダム・ヘルトライデント）vs ガルーちゃん（個人資格・ダークホッパーガンダム）』

なんと、我が新生デビルガンダム四天王の二人が対決することになってしまったのだ！ いつかはあるかと思っていたのに、こんなに早く。

これは十中八九、ウォンの仕業だろう。カードを決める権限を持つのは彼しかないからな。

野望の邪魔をしてきた俺たちへの当てつけか。それとも、俺たち四天王の仲を引き裂こうという意図か、あるいは……そのファイトの中で、四天王のうち一人でもいなくなればいいという腹積もりか。

俺がそんなことを考えている横で、チコもカンちゃんも、不敵な笑みを浮かべている。「カンちゃんとファイトか。彼とは戦ってみたいと思っていたんだ……面白い」

「アア。カンチャンモ才前と戦ウノ、楽シミ」

「二人とも、仲間と戦うのに抵抗は感じないんですか? 相手を倒す……最悪の場合死なせることになるかもしれないのに」

俺がそう戸惑いながら聞くと、二人（一人と一匹）とも、愚問とでも言いたげにうなずいた。

「ああ。そのことにためらいを感じないといえばウソになるが、これまで共に戦ってきた相手と拳を交えるのが楽しみでないと言っても嘘になる。なぜなら俺たちは……」

「ガンダムファイターダカラナ!」

そして二人とも、俺に向けて拳を突き出してきた。本当に二人とも馬鹿……格闘馬鹿だ。その馬鹿さがまばゆくて、涙がにじんでくる。なぜなら俺も、その馬鹿の一人だから。

だから俺には二人のファイトを止めることはできない。俺にできることは、二人が無駄に命を失うことがないよう、できることをするだけ。そして、二人が悔いのないファイトができることを祈ることでだけだ。

* * * * *

そしてファイトの日がやってきた!

リングには、既にホアキン・ムニスことチョコのガンダム・ヘルトライデントと、ガルー

ちゃんことカンちゃんのダークホッパーガンダムがスタンバイして向かいあっている。二機とも、気合に満ち満ちていて、いつでもはじめられる、という感じだ。

その様子を、俺は不安を胸に秘めながら見守っていた。このまま、何も起こらずファイトが終わればいいのだが……。

そして、試合が始まる。

『よし、行くぞ！ ガンダムファイトッ！』

『レディイイイイゴオオオオオオオ!!』

先手を取ったのはチコだ。突進し、鋭いトライデントの一撃をカンちゃんに放つ！

カンちゃんのダークホッパーはそれをかわすとチコのヘルトライデントに強烈なカウンターパンチを放った！

しかし、チコも伊達で四天王を名乗ってはいない。かろうじてそのパンチをかわし、ダークホッパーと激突！ その機体を蹴るようにして、後方へ飛びさった。

わああああああ!!

その一瞬の攻防に、観客席の観客たちが沸く。

『楽シイナ、チコ!』

『ああ。まさか俺たちがこんな観客を沸かせるファイトをさせてもらえるとは思っていなかった。これもジャンヌのおかげだな!』

『オレモ、じゃんぬニハ大感謝。サア、続キイクゾ!』

『おう!』

カンちゃんのパンチと蹴りのラッシュが、チョコのヘルトライデントを襲う! チコはそれをトライデントで巧みに受けとめ、さばいていった。そして隙をつき、ダークホッパーに突進! カンちゃんはそれを紙一重でかわし、二機は再び密着に近い間合いまで近づいた。そこで!

『!!』

何かに気づいたチョコのヘルトライデントがとっさに後方にとびずさった。よく見ると、そのV字アンテナの端が折れている。何があつたんだ?

よく見ると、ダークホッパーガンダムモビルファイターの腹の部分からちよこんと、小さなカンガルー型のM Fモビルファイターが顔を出していた。その不意打ちをかわしたんだろう。確か、ダークホッパーの元になったジャンピングには、そんな奥の手があつたと聞いたことがある。

『ヤルナ、チョコ。カンチャンノ奥ノ手ヲカワストハ!』

『正直、驚いたし、少し危なかったけどな。だがこんなに早く終わったら、お前に申し訳ないだろう?』

『ダナ!』

* * * * *

それからも二人のファイトは続いた。

チコのガンダム・ヘルトライデントが放つ突きを、カンちゃんのダークホッパーが軽やかなステップでかわしながら反撃を放ち、カンちゃんのダークホッパーガンダムのラッシュを、チコが槍を自在を動きながらさばき、防いでいき、ラッシュがとまったところで反撃を返す。

そのたびに観客から歓声上がる。

そして。

『イクゾ、チコ！ カンちゃんのトツテオキ！』

『おう！ 俺も奥の手を出してやろう！』

構えを取り、にらみ合う二機。そして、カンちゃんが先に動いた。

『ダークホッパー・ヘルクラッシュャー!!』

炎をまとったダークホッパーガンダムが、炎の矢となって、ヘルトライデントに突撃する！

『ヘル・バニシング・トルネード!!』

チコのヘルトライデントが槍を一閃！ 巨大な竜巻が生まれ、それはダークホッパーに突撃する！

そして炎の矢と竜巻が激突!! だが、ダークホッパーガンダムはあえて技を解除、そ

のまま竜巻に吞まれた!

しかしカンちゃんんは試合を捨てたわけではなかった! その渦の回転を利用して、天高く飛び上がったのだ!!

『ウオオオオオオオオ!!』

『ハアアアアア!!』

上空からヘルトライデントに襲い掛かるダークホッパーと、そのダークホッパーを迎撃しようとするヘルトライデント。

二機の攻撃が交差した!

一瞬の沈黙。膝をついたのは、ダークホッパーガンダムだった。見ると、その頭部がヘルトライデントの三又槍の一撃で大きくえぐられている。

『見事ダ、チコ。カンチャンノマケ』

『……』

そして湧き上がる拍手、レフェリーが上がり、勝ち名乗りをしようとしたところで……。

爆発が起こり、ダークホッパーが吹き飛ばされた!

* * * * *

ファイトが終わったところで、カンちゃんのダークホッパーガンダムが爆発に巻き込

まれて吹き飛ばされた。

よく見ると、スタジアムの上空にガンダムらしき機体が！

「あ、あれはいつたい……？」

それはGガンダムファンの俺でさえ知らないガンダムだった。師匠のマスターガンダムのように、黒いマントのような装甲をまとっているが、その形状はマスターガンダムより鋭利で、まるで、ガンダムWに出てきたデスサイズヘル（EW版）のアクティブクロークのような感じ。

そして。俺でさえ知らないといったが、一つだけ見覚えがあった。それは奴の頭部。それは、ドモンのゴッドガンダムに酷似していたのだ。ただし、そのカラーは白系ではなく漆黒であったが。

突然の乱入者に、観客たちは息をのみ、沈黙したまま見守っている。その中、謎のガンダムは装甲を開き、いかにも漆黒の翼をもった漆黒のゴッドガンダムのような姿をもつて、ダークホッパーに襲い掛かった！

『滅べ……。必滅、カオシツク・フィンガー……!!』

謎のガンダムは、闇よりもさらに深き黒く輝く掌による一撃でもつて、倒れ伏したままのダークホッパーにとどめを刺そうとした！

ガシツ!!

だが、それはなされなかった。ダークホッパーガンダムの前に、チコのガンダム・ヘルトライデントが割って入り、黒ゴッドガンダムの必滅カオシック・フィンガーを槍で受け止めたからだ。

『誰の差し金かは知らんが、同胞を倒させはしない!』

『……どうしようがかまわん。ここでお前たち二人を滅ぼすことができれば手間が省けるといふもの』

『なんだと!? ……なっ!?』

チコの驚いたような声。なんと、カオシック・フィンガーを受け止めていた槍の柄が、そのエネルギーの前に溶けて行つたのだ。

槍が折れると同時に、カオシック・フィンガーの光は消えた。だがそこで黒ゴッドはすかさず蹴りを放ち、ヘルトライデントを吹き飛ばした!

『うぐっ!!』

『さあ……滅べ……!』

奴の手が再び黒き光を放ちだした! 今度こそとどめを刺す気だ! あのカオシック・フィンガーで。

俺はいてもたまたまず、ネオ・ノルウェーのハンガーに走り出そうとした。その時!

『待てっ!』

『栄光ある戦いの場に、しかも戦いを終えた奴らを始末しようと乱入してくるなんて、味な真似をしてくれるじゃないか!』

『そのような卑劣な真似、許すわけにはいきません! どうしてもというなら、正しき戦いの守護者、シャッフル同盟の一員である私たちがお相手いたしましょう』

ドモンのゴッドガンダムとチボデーのガンダム・マックスリボルバー、そしてジョルジュの乗る新型・ガンダムヴェルサイユがリングの外に立っていた。

三機と、黒ゴッドがにらみあい続ける。

そして。

『シャッフル同盟が三機……これはこちらが不利か……。命拾いしたな』

黒ゴッドのファイターはそう言うのと、そのマント状の装甲を閉じ、漆黒の光の矢となつて飛び去っていったのだつた。

しかし、奴は一体何者なんだ……? 声はボイスチェンジャーで変えられていたが、どこことなくドモンに似ていた感じがするが……。

* * * * *

「カンちゃん、具合のほうはどうですか?」

「カンチャンノ体ハ、チコトノ戦イノだめーじ以外、ナントモナイ。デモ、だーくほつばーノホウハ、アノがんだむノ攻撃デカナリノだめーじ受ケタ。シバラクハ戦エナイ」

「そうか……。でも、お前の体にもしものことがなくてよかった」

「本当ですね、ありがとうございます。ドモン、チボデー、ジョルジュ」

戦いの後の、個人参加枠用のハンガー。そこで、俺、チコ、カンちゃんの三人は、ドモン、チボデー、ジョルジュの三人と言葉をかわしていた。

俺に頭を下げられたチボデーが明るく笑って返した。

「いいつてことよ。お嬢ちゃんには、ギャルズを助けてもらった借りがあるしな!」

「ええ。それに、卑劣なことをする輩を放っておくわけにはいきませんから」

「その通りだ。そのような奴らを成敗し、戦いの秩序を守るのが俺たちシヤツフル同盟の務め。礼には及ばん」

と、そこに師匠こと、東方不敗・マスターアジアがハンガーに入ってきた。

「あ、師匠。どうでしたか?」

「探ってみたが、手がかりは見つかからずしまいであったわ。謎の黒きガンダム……厄介な難敵が現れたものよ」

「そうですか……」

「じゃが一つだけ言えることがある。あやつは、明らかに、我ら新生デビルガンダム四天王の抹殺を狙っておった。つまりは……」

「ウォンの仕業、ということですね」

俺の答えに、師匠は真剣な顔でうなずいた。

「その通りだ。奴の差し金という確証はないがな」

「ウオンも、俺たちの排除に本気になってきたってことか……」

「これからの戦いは厳しいものになるかもしれないね。でも、私たちはやるべきことをやるだけです」

俺がそう言ったところで、チボデーがにと笑って返した。

「その意気だ！ お前たちにあっけなくやられてもらったら困るぜ。お前たちを倒すのは、俺たちシヤツフル同盟なんだからな！」

「ええ。正当なる戦いをもって、私たちの理想が、あなたたちの理想より上ということを思い知らせてあげましょう！」

「ふふ、私たちも負けませんよ」

そう笑顔で言葉を交わしながら、俺はこれから訪れるであろう、さらなる激しい戦いの予感が全身を駆け巡るのを感じていた。

23th Fight 『暗い謀略! 危険なアレンビー!』

「やはり、手がかりはつかめませんでしたか……」

ネオ・ホンコンに片隅にある場末の酒場。そこで俺……ジャンヌ・エスプレッソたち新生デビルガンダム四天王と、ドモンたちシャッフル同盟は、師匠こと東方不敗・マスタージャアから、その後の調査の説明を受けてみた。

「うむ。色々探ってみたが、あの黒いガンダムと、ウォンの奴めのつながりを示す手がかりを見つけることはできなかった。あの小物め、こういうところはこざかしい」

師匠はそう忌々しい口調で吐き捨てた。でも俺も同じ気持ちだ。

もしつながりがわかれば、もつとウォンや黒いガンダムへの対処の選択肢もあっただろうに。

「とりあえず今のところは、黒いガンダムに警戒をするしかないということですね。気を付けましょう、チコ、カンちゃん」

俺の言葉に、チコと、乗機であるダークホッパー・ガンダムの中破で決勝リーグから脱落したカンちゃんがうなづく。

「ああ、もちろんだ」

「任せてオケ。シツカリト、目ヲミハラセル」

「ドモン、うぬらも気をつける。うぬらシャツフル同盟は、ウオンからすれば目障りな存在。黒いガンダムがお前たちに襲い掛からないという保証はないぞ」

「はい」

ドモンはそう力強くうなずくも、何か声のどこかにかすかな弱さを感じた。そしてそれは、師匠も同じようだ。

「ドモン。お主、まだ答えを見つけてられないようだな？」

「はい……。情けない話ですが」

ドモンが、まるで叱られた子供のようになんか答えると、師匠は苦笑を浮かべて言った。「それでよい。答えとはそのようなもの。そう簡単に答えを見出すことができれば、誰も苦労などせん。とことんまで悩むのだ。悩み、苦しみ、あがき、そして見出したものこそ、お主にとつては真実で大切なものとなる」

「はい……」

そこで師匠は、ふと再び苦笑をもらした。

「ふふ、今や袂を分かちあい敵となつたわしが、お主に説教するのもおかしな話だがな」
「そんなことはありません。例え敵味方に別れても、師匠は師匠です」

「ふ……ありがとうよ」

そんなドモンと師匠の様子には、何か敵味方を超えた、いや、親子の絆すらも超えた何かを感じた。

これが本当の絆という奴かな。とてもうらやましい。そう思った。

* * * * *

その次の日、俺はドモンに頼まれて、組手をしていた。

デビルガンダムの側の俺たちと、そのデビルガンダムと敵対する側のドモンたち。その俺たちが協力しあっているのかと思っただが、

アナザー・デビルガンダムを作り出した黒幕と、謎の黒いガンダムという共通の敵が現れた現在、敵対しあってもいられない、ということだろう。

今は協力しあうが、雌雄を決する時が来たら、その時はそれまでの縁は抜きにして全力で戦う。それでいいのかもしれない。

さて、俺とドモンは、ひとしきり組手を行ったが、やはり彼の拳にはわずかとは言えないほどの迷いが感じられた。

「ドモン、やはり迷いがあるんですね？」

「やつぱり感じたか。ああ、こればかりはどうにもならん。ゴッドスラッシュでも倒せないような強敵と相まみえる前に、迷いを打ち消し、完全な明鏡止水を会得したいんだ

が……くそっ」

「焦つてもどうにもなりませんよドモン。ここは……」

と、そこで。

「一緒にゲーセンで弾けようよ!」

「そうそう、一緒にゲーセンで弾けるのが一番……え!?」

どこかで聞いたような凜々しくも透き通るような声。その声に俺とドモンが振り向くと、そこには、水色の髪をした、ハイティーンとおぼしき少女がいた。もちろん、俺は彼女のことを良く知っている。

「ええと、あんたは……」

「ネオ・スウェーデン代表、アレンビー・ピアズリー!!」

「そうだよ! 良く知ってるね!」

「……よく知ってるな」

ぎくうっ!!

ドモンにいぶかし気な視線を送られ、俺は思わず慌ててしまう。

「い、いえ、ネオ・ノルウェーとネオ・スウェーデンは隣同士ですし、グリペンも好きですし」

いかん、自分でも何を言ってるかわからなくなってきた。

「しかし、ネオ・スウェーデンといえば、俺の次の対戦相手じゃないか。そのお前がなぜ
うんぬん。」

「うん。だから、その相手がどんな人なのかと気になってさ。こうして来てみたってわけ。あとそれと、本番前の前哨戦も兼ねて……ってね」

「手合わせか……いいだろう」

なんか意気投合したっぽい。ドモンとアレンビーは連れ立って、ゲーセンへと歩いていく。その後に俺も続いた。

* * * * *

「たあああああああー!」

「うおおおおおおー!」

ドモンとアレンビーの叫びとともに、ゲームスクリーン上の二人のキャラが突進する。そして激突!

『YOU WIN!!』

画面に表示される結果を表す文字。倒れ伏したのはドモンのキャラだった。

そしてそれと同時に画面がブラックアウトし、筐体から白煙が噴き出す。二人のあまりの動きに、マシンがオーバーヒートを起こしたのだ。

「むう………これは………」

「……逃げよつか？」

「……待ちなさい、二人とも」

逃げ出そうとする二人の肩を、俺は『がっしりと』つかんだ。それでいいのか、ネオ・ジャパン代表とネオ・スウェーデン代表。

* * * * *

「大変な目にあつたー」

「自業自得でしょうが。少しは反省してください」

夕方。ゲーセンの店員さんに絞られた俺たちは、公園で休憩していた。(なお、弁償代は、それぞれの国の委員会に頼んで出してもらった)

そこで俺にたしなめられたアレンビーが、バツが悪そうに笑う。

「えへへ……でも、こんなに遊んだのは久しぶりだよ！ 本当にありがとうね！」

「いや、こつちもいい気晴らしになった」

「右に同じくです」

「いやいや、礼を言わなきゃいけないのは私のほうだよ！ 二人のおかげで、明日ははじめて、心から楽しんでフアイトを楽しめると思う」

その彼女からは、出会った時に感じられた、やさぐれていた感じはなくなっていた。

そういえばそうだった。彼女は幼いころから軍の施設に引き取られ、フアイターとし

ての英才教育を受けていたのだった。しかし、軍の栄光のための道具として扱われているのが嫌で、そのせいでやさぐれていたんだ。でも、原作と同じように俺たちとの触れ合いでそれが解消できてよかった。

「それならよかった。明日はお互い、悔いが残らないように頑張ろう」
「うん!」

そしてがっちり握手を交わして俺たちは別れた。

そして試合の日がやってくる!

* * * * *

そしてその翌日。ネオ・ジャパン代表ドモン・カッシュと、ネオ・スウェーデン代表アレンビー・ピアズリーのファイトの日。

リングの上で、ドモンのゴッド・ガンダムと、アレンビーのノーベル・ガンダムは向かい合っていた。

『それじゃ行くよ、ドモン! 今日正々堂々ファイトしようね!』

『おう、もちろんだ! ガンダムファイトツツ!』

『レディイイイイ・ゴオオオオオオ!!』

かくして二人のファイトがはじまった!

先手をとつたのはドモン! ノーベルガンダムに対して、怒涛の突きの連打を放つ!

しかし、アレンビーはそれを華麗でしなやかな攻撃でかわし続ける！

『はあっ!!』

『たあーっ!』

そして、最後の強烈な突きを、ノーベルガンダムは華麗に跳躍してかわし……

『えいっ!』

フラフープのようなビームリングを放った!

『そのような見え透いた攻撃に当たると……ぐあっ!!』

ゴッド・ガンダムはそれを簡単にかわすが、背後から戻ってきたビームリングに気づくのが遅れ、直撃を受けてしまう! それで態勢が崩れたゴッド・ガンダムに追撃しよう、アレンビーが突進するが……。

『甘いぞっ!』

『きやつ!』

態勢を崩した中で放ったゴッドのキックが、ノーベル・ガンダムに直撃! 吹き飛ばされてしまう。

そして両者、態勢を立て直して仕切り直し。再び激突をはじめ。

猛攻撃を仕掛けるドモンに対して、『蝶のように舞い、蜂のように刺す』という例えのように、華麗にかわしながら反撃をかわすアレンビー。二人の実力はまさに伯仲してい

た。

そして二人の拳が激突! そのパワーの反動に二体のガンダムが大きくよろめく。だが、そのよろめきはノーベルのほうが大きく、損傷も彼女の機体のほうが大きいようだ。

それでも、アレンビーは心底楽しそうに微笑んでドモンに言葉を投げかける。

『楽しいね、ドモン!』

『ああ!』

楽しそうな二人の雰囲気。だが、それを快く思わないものがいた。ほかならぬ、ネオ・スウェーデンの上層部である。

* * * * *

「やはり男と女……。このままではアレンビーの負けは確実だ! アレを発動しろ!」

ネオ・スウェーデンのホルベイン少将は、試合の内容を見て、危機感からくる焦りから、部下のベルイマン博士にそう命じた。だが、ベルイマンはそれが何かわかっていからか、すぐさま反論する。

「いけません、少将! バースーカーシステムは、ファイターへの負担が……」

だが、ホルベインは聞く耳持たず、銃を抜いて、ベルイマンに突き付けた。

「いいからやれ。それとも、ここで死ぬか?」

そう脅されては反抗することもできず、博士はついにそのシステム……バーサーカーシステムのスイッチをいれた……!

* * * * *

そのとたん、アレンビーの動きが豹変した!

それまでの優雅な動きはどこへやら。まるで野獣のような動きでもって、ドモンのゴッド・ガンダムに襲い掛かる!

その豹変ぶりに、ドモンも戸惑いを隠せない。

「ど、どうしてしまったんだ、アレンビー!? うおっ!?」

アレンビーの強力なパンチがゴッド・ガンダムを襲う! なんとかドモンはそれをかわすが、そこからの後ろ蹴りを受けて、吹き飛ばされてしまう!

「本当にどうしてしまったんだ……? あれはまるで野獣だ……!」

戸惑いながらも、ドモンは未完成の明鏡止水を発動し、アレンビーの攻撃をなんとか防ぎ続ける。だが、その攻撃の激しさに、明鏡止水を発動していても、攻撃の隙を見出すことはできそうになかった。

「ドモオオオオオンツッ!」

「ぐあっ!!」

そこに、再び、アレンビーの蹴りが炸裂! ゴッド・ガンダムの機体が大きくよろめ

いた。

*** **

一方、ネオ・スウエーデンのスタッフルーム。バーサーカーシステムをもつてしても、いまだ倒すことのできないこの戦況に、ホルベインは博士に再び命じた。

「おのれ……バーサーカーシステムの出力をあげろ！」

「し、しかし、これ以上の出力アップは……」

「いいからやれ！ その脳天に鉛の弾を……」

そう言つて、博士の頭に銃を突きつけるホルベイン。そこに。

「いいえ、鉛の弾を受けるのはあなたのほうです」

「なんだと!？」

さすがはネオ・スウエーデンの軍人。声がすると同時に、声が出たほう……ドアに向けて銃を発射する。だが、そこには誰もいない。

そしてその次の瞬間には、博士を気絶させた謎の人影が、少将の背後にとりつき、彼を羽交い絞めにしていた。

「バーサーカーシステム、そんな非道なシステムを使うなんて、見過ごすことはできませんね」

「わ、私を殺す気か……。頼む、助けてくれ……」

「その言葉、博士とアレンビーに言うんでしたね。おさらばです」
 ……。

そして、少将を暗殺した人影……俺ことジャンヌは、あの博士の記憶を書き換えるため、D G 細胞を植え付けた後、バーサーカーシステムのスイッチを切ると、さらにそのコンソールに手を突いた。そして数秒。

「……これでよし」

コンソールには、『ERROR! SYSTEM IS EMERGENCY STOP』の文字が映し出されている。D G細胞をシステムに感染させ、その力でシステムを書き換え、二度とシステムを発動できないようにしたのだ。これでアレンビーも、システムの呪縛から解放されるだろう。

さて、それではとんずらするのでしょうか。

* * * * *

ノーベル・ガンダムが一瞬動きを止めた。そして、元の可憐に舞うスタイルの構えに戻った。

アレンビーが元に戻ったということは、ドモンの目にも明らかにわかった。

『はあはあ……。心配かけてごめんね。もう元に戻ったから』

『心配などしてはいない。無理やり戦わされているお前に勝っても、嬉しくないだけだ』

『えへへ……ありがとう。それじゃ、続きをやろう!』

『おう!』

そして再び、ドモンのゴッド・ガンダムと、アレンビーのノーベル・ガンダムのファイトが始まった。

ドモンの激しい攻めに対して、アレンビーはそれを可憐にかわしながら反撃を返す。一見激しい戦いだが、先ほどまでと違い、どちらも戦いを心から楽しんでいるように見えた。

そして、ビームリボンを構えたノーベル・ガンダムと、ビームソードを構えたゴッド・ガンダムが激突! そしてすれ違う。両者とも膝をついた。

『なかなかやるな。だが、まだまだだ!』

『そうだね。……でもごめん、私、もう限界……』

アレンビーがそう言うと、ノーベル・ガンダムは、両手について崩れ落ちた。

『お、おい、アレンビー……?』

『もつと戦っていたかったけど、さっきのシステムのせいで、もう体が悲鳴をあげてて、これ以上は無理なの……。ドモンとこれ以上ファイトできないのは悔しいけど……』

ノーベル・ガンダムから降参シグナルが発信され、レフェリーがアレンビーの敗北を宣言して、ファイトは終わった。

* * * * *

そして戦いの後。

ドモンとレインは、担架に乗せられたアレンビーを見守っていた。

「具合はどうだった？」

「うん。途中で何等かの原因でシステムがとまったおかげもあって、再起不能の一步前で助かったみたい……。数日ゆっくり休めば、またファイトに戻るって」

「そうか……。それはよかった」

そこでアレンビーは拳を突き出した。

「待っててね、ドモン。必ず体を治して、またファイトに戻ってくるから。そしたらまた、一緒にファイトしようね」

「ああ、約束だ」

そして、突き出された拳に、拳をつき合わせる。そしてアレンビーは救急車に運ばれていった。

「アレンビーさん、元気になるといいわね……」

「……」

「ドモン？」

「……」

そこでレインがドモンのほっぺたを引っ張った。

「な、なにをするんだレイン!?!」

「なんでもない。ドモンの馬鹿!」

そしてふくれて去っていくレインを、ドモンはちよつと情けなく追いかけるのであった。

24th Fight 『騎士対紳士! チヤップマン最後の挑戦』

「はあはあ……」

荒い息を突きながら、そのガンダムファイターは、敵のガンダムとにらみ合っていた。その彼の名は、ラセツ・ダガツツ。ネオシンガポール代表のガンダムファイターである。彼は今、窮地にあつた。周囲は霧に包まれ、どこから撃ってくるかわからない攻撃に苦しめられていたのだ。ラセツは決して弱いファイターではなく、むしろ強豪に分類されるファイターである。だが、その彼をしても、この謎の敵への打開策は見いだせずいた。

また周囲から銃弾が放たれる! ラセツはそれをファイターならではの勘で、なんとか回避する。

しかし、例えかわすことができても、敵の位置をつかんで反撃することができなくては、どうにもならない。

「くそつ、なんで俺様がこんな目に……!」

こんなはずではなかったのだ。彼はただ、小生意気そうな参加者をちよいと痛めつけ

ようと、獲物を探していただけたのだ。それが今は、自分が獲物になってしまっている。

その時!

「ぐわあ!」

ラセツの左腕に激痛が走る。銃弾の一撃が、ラセツのガンダム、アシュラガンダムの左腕の一本を撃ち貫いたのだ! さらに銃音。右腕の一本を砕かれた。

だがその一瞬、霧が晴れ、敵の位置が明らかになった。ラセツは決して雑魚ではない。人格に問題はあがあるが、それでも腕は確かなのだ。その彼の勘が告げた。敵に勝つには今しかない、と。

彼のアシュラガンダムは大地を蹴り、高く跳躍した。そして、銃弾をかわし、時には右腕、左腕を破壊されながらも、なんとか敵のガンダムの目前に降り立った。

「ぐへへ、よくもやって……なっ!? ぐわあ!!」

だが、それすらも、敵ガンダムの予測のうちだったらしい。その瞬間を狙って別方向から銃弾が放たれ、アシュラガンダムの残りの腕と右脚が破壊され、摺座してしまう。

そして雲が晴れ、月明かりのもとに敵ガンダムの姿があらわになる。

「お、お前は……ぐあああああ!!」

* * * * *

「ジオルジユの対戦相手が、謎の敵の襲撃を受けて棄権か……。なんかおつかないねえ」
ある日のカフェテラス。そこで俺……TS転生者ガンダムファイター、ジャンヌ・エスプレツツと、ドモン・カッシュ、チボデー・クロケット、ジオルジユ・ド・サンドは集まって、ティータイムを過ごしていた。

そんな中、チボデーが新聞を読みながら言っているのは、昨日起こった事件。ジオルジユの次の対戦相手、ネオ・シンガポール代表のラセツが、謎の敵の襲撃を受けて重傷を負い、棄権したというニュースのことだ。

そのことで、ふとある懸念を抱いた俺は、それをジオルジユに聞いてみることにした。
「ジオルジユは大丈夫だったのですか？　ネオ・フランスに容疑がかけられそうな気が……」

そう聞くと、ジオルジユは苦笑しながら答えてくれた。

「ええ。私のアリバイの裏は取れましたし、疑いはすぐに晴れました。ですが……」
「ですが、なんだい？」

チボデーの問いかけに、ジオルジユは真顔で答えた。

「ラセツが気になる証言をしたらいいんです。『霧』と『紳士なガンダム』と」

「……」

「……」

ジョルジュの言葉に、俺とドモンが二人そろって顔をしかめた。その証言から、ある相手のことが思い浮かんだからだ。

「まさか、ネオ・イングランドのジェントル・チャップマンか？　だが彼は、俺とのフアイトに敗れ、そして果てたはずだが……」

その通りだ。ネオ・イングランド代表のチャップマンは、サバイバル11の中でドモンと戦い、敗れ、最後は力尽き、妻であるマノンに看取られて亡くなつたはずだ。原作ではそうだったが、ドモンの話からすると、こちらでも同じ顛末だったらしい。

だが……。

「でも、もしかしたら……」

「なんです？」

「もしかしたら彼は、ウォンにフェイク D デビルガンダム G 細胞を植え付けられて蘇つたのかもしれない」

そう、原作において、一度は果てた彼だったが、ウォンに D G 細胞を植え付けられ、グランドガンダムのファイターとなって再登場してきたのだ。もしかしたら、それと同じようなことがこちらでも起こっているのかもしれない。

「それでも、ラセツを狙う理由まではわかりませんが……」

「あれ以来、同じ事件が起こってないことは、通り魔的な犯行ではなさそうだしなあ

……」

そしてまた四人で唸る。そこに。

「ただいま戻ったぞ」

俺たち新生デビルガンダム四天王の、師匠こと東方不敗マスター・アジア、チコ・ロドリゲス、そしてカンちゃんの三人が戻ってきた。

「お帰りなさい、師匠。いかがでしたか？」

「うむ。色々探ってみたが、やはり今回の通り魔事件と、ウオンの奴とをつなぐ手がかりは見つけることはできなんだ」

「そうですか……」

再び考え込む、俺とチボデー、ドモン、ジオルジュ。だがそこで。

「じゃが、狙われているのがジオルジュの対戦相手だということで、一つだけ目星がついていることはある」

「それは？」

ジオルジュの質問に答えたのは、チコとカンちゃんだ。

「ああ。奴はジオルジュと戦う予定の相手を消している……つまり、お前との戦いに持ち込むのが目的ではないか、という推論が浮かんだ」

「トハイツテモ、ネラワレタノガラセツダケダカラ、ナントモイエナイガナ」

「なるほど……もし、それが当たっているとしたら……」

ジョルジュの言葉に、師匠がうなずいて返した。

「うむ。お主の周囲にも何かアクションを起こす可能性がある。くれぐれも気を付けよ」

そしてその夜、実際にそれは起ったのだ！

* * * * *

「もう！ ジョルジュ、どうしてですの！ どうして一緒にいてはいけないんですの!？」
「だから言ってるではありませんか。私は狙われているので、危険なのです」

その翌日、トレーニンングに励むジョルジュは、犬のように噛みついてくる姫、マリアルイゼの苦情に苦慮していた。

チョコ・ロドリゲスの推測が必要なら、チャップマンの目標は自分である。ならばその自分のそばにいれば、守るべき主君であるマリアルイゼにも害が及んでしまう。なので遠ざけようとしているのだが……。

「大丈夫ですわ。危険なんて、私の愛の前には……」

「いいかげんにしてください、マリアルイゼ様！ ふざけている場合ではないのです！」
そこまで言って、ジョルジュははつとなつた。主君であるマリアルイゼが涙を浮かべている。

「私の愛を、おふぎけというなんて……。ひどいわ、ジョルジュの馬鹿——!!」
そして走り去ってしまおう。

「マリアルイゼ様……」

呆然とつぶやくジョルジュ。そこに。

「いかん、いかなで、ジョルジュ・ド・サンド！」

「!？」

どこかで聞いたような声。彼が声をしたほうに目を向けるとそこには……。

城の頂に直立したシユバルツがいた。驚きに絶句するジョルジュをよそに、シユバルツは彼を叱責する。

「娘の心は、何ごときにも代えがたき宝！ それを『おふぎけ』と切り捨てるなど、騎士としてあるまじき行い！」

「そ、それは……」

「それに、お前の護るべき主君を遠ざけて、それで主君が襲われたらどうするつもりだ！
『お前の周囲にもアクシオンを起こす可能性がある』という、マスター・アジアの警告を忘れたか！」

「!!」

そこに。

「きゃーーーーー!!」

マリアルイゼの悲鳴が響いた。

「マリアルイゼ様!」

「ぬう、いかん。やはり私が危惧した通りになったか!」

ジオルジュとシュバルツは、声のした方向に急いで走る。

そして駆け付けた彼らが見たものは……。

* * * * *

「えーい、放しなさい、この無礼者!」

「マリアルイゼ様!」

一機のガンダムに、ジオルジュの護るべき存在、マリアルイゼ姫が握られ、捕まっている、という様であった。そのガンダムは、話にも出てきた……。

「ジオンブル・ガンダム! チャップマン、あなたがそんな狼藉を行うとは!」

「なんとでも言うがいい。今この私の手に、お前の護るべき姫が捕まっていることを忘れるな!」

「くっ……」

そして、ジオンブル・ガンダムに乗り込んだチャップマンが続ける。

『ジオルジュ・ド・サンド。お前に、非公式のファイトを申し込む! 今日夜10時に、

フェイクロンドン・タウンに来るのだ！　もし来なかったり、変なことをしたら、この姫の命はない！』

「なんですって……？　くっ……！」

チャップマンがそう言ったところで、ジョンプル・ガンダムから霧が放出された。霧はたちまち辺りに満ち、白く染める。

そして気が付いたころには、ジョンプル・ガンダムの姿はここにはなかった。

「なんてことだ……」

「リアルイゼ姫が捕まった以上、彼の誘いに乗るしかあるまい。我々も、姫の身に危機が及ばぬよう手を尽くそう」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

ジョルジュはそう礼を言っとうなずくと……。

「来なさい、ガンダム・ベルサイユ!!」

* * * * *

そして、新型であるガンダム・ベルサイユに乗り込んだジョルジュは、チャップマンとのファイトに挑むため、霧に包まれたフェイク・ロンドンタウンへとやってきた。

「やってきましたよ！　姿を現しなさい、チャップマン！」

ジョルジュの叫びにこたえるかのように、霧の奥から一機のガンダムが現れた。ジョ

ンブル・ガンダムだ。

「よく来たな、ジオルジュ・ド・サンド。決着、今ここで果たさん!」

「望むところです。あなたを倒し、姫を返していただきます。行きますよ! ガンダム
ファイトツ!」

「レデイイイイイイ・ゴオオオオオ!!」

かくして、騎士と紳士のガンダムファイトが始まった!

ジヨンブル・ガンダムは、ガンダム・ベルサイユのビームセイバーの斬撃をかわしながら後退し、銃撃を放つ。ジオルジュはそれをかわすと、ローゼス・ビットを射出した。ローゼス・ビットから変幻自在の攻撃を放つジオルジュ。そのビームの一発が、ジヨンブル・ガンダムの左腕を破壊した。

だが!

「なっ!?!」

破壊された左腕から細胞のようなものがあふれ出し、その左腕を再構成したのだ。

それは間違いない……。

「それは、DG細胞……いえ、フェイクDG細胞!」

「その通り。私はこの身に、フェイクDG細胞を宿して復活したのだ!」

そう言うと、チャップマンは、不意打ち気味に、ライフルから散弾を放った! とつ

さにジョルジュはマント上のシールドでそれを防ぐ。

「なぜです、なぜあなたほどの方が、フェイクDG細胞に!? ドモン・カツシュとのファイトに満足して果てたのではないのですか!？」

「ああ、満足した。だが、それでも一つの悔いがあったのだ。それは、我が祖国ネオ・イングランドと、ネオ・フランスとの決着!」

「なんですつて?!」

ジョンブル・ガンダムは縦横無尽に飛び回りながら、ビームを浴びせていく。その狙いはとても的確で、ジョルジュを持ってしても、反撃の隙を与えないほどだ。

「ネオ・イングランドを代表する紳士として、この決着を果たすまでは死んでも死に切れん! だから私は、あえてフェイクDG細胞を受け入れて復活したのだ! 黒幕どもの傀儡になってまで!」

「そこまでして決着をつけようとする覚悟……感服しました。しかし、私もリアルイゼ様の騎士。負けるつもりはありません!」

「よくぞ言った、ネオ・フランスの騎士よ!」

そう叫びながら戦いを続けるチャップマンに通信が入る。彼の妻、マノンからだ。

『チャップマン、なぜドローンを使わないの!? あれを使えば……』

「黙れマノン! これは我がネオ・イングランドとネオ・フランスとの由緒ある対決!

あくまで一対一。他の介入は許さん!」

『チャップマン……!』

そしてチャップマンは、さらに縦横無尽に動き回りながらライフルを撃ち続ける。その攻撃に、ジオルジユは防戦一方だ。

「このままでは……。そうだ!」

ガンダム・ベルサイユはそこで立ち止まり、回避をやめた。そしてチャップマンも決着をつけるべく、さらに動きを速めた。

「いくぞ、ジオルジユ・ド・サンド! 必殺、ミラージユ・レインボー・ショット!!」

なんとその動きの速さに、ガンダム・ベルサイユの前方に無数のジョンブル・ガンダムの残像が現れた! それらが一斉に、敵に対してビームを放つ!

そして一方のジオルジユも……!」

「護りなさい、ローゼス・リフレクター・ビット!」

マント状のシールドから、花びらが鏡となつたローゼス・ビットを何十機も射出し、ベルサイユの前面に展開する!

そのビットたちに、ジョンブルのビームが直撃した!

* * * * *

「勝ったわね、いくら反射能力を持ったビットでも、チャップマンの必殺技は防ぎきれな

いはず。これであの人の戦いも……」

そう安心したようにつぶやくマノンだが、彼女の傍らのマリアルイゼは、崩れ落ちることも泣くこともなく、気丈に窓の外を見つめ続けている。

「哀しくないの？ あなたの騎士が倒れたのに」

そう聞くマノンに、マリアルイゼは、前方を見据えたまま、気丈に答える。

「はい。私の知っているジョルジュは、決して負けるような人ではないと信じていますから」

「どこまでも信じてるのね。でも、あれだけのビームを喰らえば……えっ!？」

マノンは目をむいた。視線の先には、無傷のガンダム・ベルサイユと、主を守り切ったりフレクター・ローゼス・ビットたちがあつたのだ。

* * * * *

「私の最強の技を耐えるか……さすがだ」

「いえ、一か八かでしたよ。もしマリアルイゼ様を助けるための戦いでなければ、私の負けだったでしょうね」

「そうか……さすがはネオ・フランスの騎士だ……」

「それではこちらの番です。この私の技、受けていただきましょう!」

彼の声とともに、無数のビットたちがジョンブル・ガンダムの周囲を取り巻く。

* * * * *

「チャップマン……!」

チャップマンの敗北を感じ取ったマノンには、リアルイゼを羽交い絞めにして、懐から銃を抜こうとした。彼女を人質にして、ジョルジュを負けさせようというのか。だが。

「っ!」

銃を抜いたところで、どこかから飛んできた手裏剣が、彼女の手からその銃を弾き飛ばした。

「どうにか間に合ったな」

「ええ、よかったです」

部屋の天井からシユバルツとジャンヌが飛び降りてきた。彼らが、リアルイゼが人質にされるのを阻止したのは想像に難くない。

「これで終わりね……ふふふ……。……っ」

そこで、シユバルツたちが止める間もなく、マノンは何かをかみ砕いた。途端に彼女は、口から血を吐いて倒れこむ。

「これは……毒を飲んで自決したのか……」

「なぜ……?」

死にゆくマノンを見守るシュバルツたちに、彼女は、解放されたような笑みを浮かべて言った。

「決めていたの……。あの人が勝つためなら何でもする。そして、勝っても負けても、私はチャップマンと共に散るって……」

そしてこと切れた。シュバルツはそつと、彼女の瞼を閉じてやる。それが彼なりの、夫への愛に生きた女への手向けであつた。

* * * * *

「ローゼスハリケーン！」

ジョルジュの号令とともに、ローゼス・ビットたちがビームを放ちながら、ジョンブル・ガンダムを周囲を回り始める。

その光の檻の中、チャップマンは何か気づいた。それは愛する妻の散華。

「マノン……そうか……」

そしてつきものが落ちたかのように、安らかな表情で目を閉じた。そして。

「ファイナーレ!!」

ジョルジュの叫びとともに、ジョンブル・ガンダムは爆炎に包まれた。ポロポロになったジョンブル・ガンダムは力尽きたかのように、崩れ落ちていく。

そのジョンブルから通信が届く。

「見事だ……さあ、とどめをさすがいい。ネオ・フランスとの決着がついた今、思い残すことはない……」

「チャップマン……わかりました」

だが、ジョンブル・ガンダムにとどめを刺そうと、ガンダム・ベルサイユが前に一歩踏み出したその時!

「!!」

「!?!」

ジョンブルの様子が一変した。まるでもがき苦しむかのような動きを見せ、身体のあちこちが怪しく蠢く。

「……これは……!?!」

「うおおおお!!」

苦しむチャップマンに、目の前の惨状に戸惑うジョルジュ。そこに投げかけられた声があった。

「……お前の願いはかなえてやった。次は、我らの番だ」

「!?! 謎の黒いガンダム!!」

そう、以前のファイトで、会場を襲撃したあの黒いガンダムだった。

「あなた方が、チャップマンを蘇らせた黒幕だったのですね!」

「……お前に答えてやる義理はない。さあ、今こそ目覚めよ、グラントガンダム……！」
その黒いガンダムの言葉に、あわててジオンブルのほうを振り返るジオルジュ。その彼の目の前で、ジオンブルガンダムは蠢き、まがまがしく変形している。

「ぐおおお！ 頼む、ジオルジュ、早く介錯を……！ 私は醜い異形の姿になってまで生きたくはない……！」

「チャップマン……はい！」

そして、ジオルジュは、チャップマンの願いをかなえるべく、改めてビームセイバーを構えてとどめを刺そうとするも……。

「させないと言っている……！」

その背後から、黒いガンダムが襲撃！ ビームソードの一撃を放つ。ジオルジュは一髪、振り向きざまにその斬撃を受け止めることができた。だが、その一瞬が致命的な一瞬となった！

「ぐああああああ!!」

「チャップマン！」

ジオンブル・ガンダムは巨大な醜い姿に変形を完了していた。四足獣を思わせる姿に、その巨体に似合うほどの四門の巨大な主砲。背中に生える、長大で鋭い二本の牙。それはまさに、神話に出てくる巨獣、ベヒーモスがごとし。

ジョンプル・ガンダムは新たな姿、グラント・ガンダムとなっていた。

* * * * *

俺……ジャンヌたちが、マリアルイゼ姫を連れてビルを出ると、そこでは状況が急転していた!

ジョンプル・ガンダムがグラント・ガンダムに変形し、ジョルジユのガンダム・ベルサイユと対峙していたのだ! 俺たちは、マリアルイゼを追って来ていたレイモンドにマリアルイゼ姫を託すと、自分たちのガンダムを呼び出した。

そしてその間にも、戦いは続いている。

「ううう……ウガアアアア!!」

「ぐわあ!!」

グラント・ガンダムは動揺しているジョルジユのガンダム・ベルサイユに猛突撃!

敵を吹き飛ばした!

「ぐっ……!!」

さらに、その巨大な脚でベルサイユを踏みつぶそうとする。ジョルジユはかろうじてそれを回避、上空から反撃しようとした。だが!

「!!」

背中の巨大な角、グラント・ホーンが勢いよく伸びだし、ベルサイユを襲う! ガン

ダム・ベルサイユは角をシールドで防ごうとするが、グランド・ホーンはそのシールドを簡単に貫き、ベルサイユの左胸を貫いた！

「ぐああああ!!」

「ジョルジュー!!」

建物の外で悲鳴をあげるマリアルイゼ。その悲鳴を意に介せず、グランド・ガンダムはジョルジユにとどめを刺そうとする！

そこに、シユバルツのガンダム・シユピーゲルと、俺のガンダム・オルタセイバーが背後から襲い掛かる！

それを察知したチャップマンは、こちらへと振り返り、俺たちに砲門を向けた。

そして射出されたのは、電撃に包まれた二本のアーム！ それは二機を捉え、ビルへと叩きつけた！

「ぐうっ……!!」

「ううっ……!!」

補助アームとはいえ、そのパワーはかなりのもの。ちよつとやそつとでは振り払えそうにない。さらに電撃が俺たちを苦しめる。

二機の動きを封じ、あらためてガンダム・ベルサイユにとどめを刺そうとするグランド・ガンダム。だがその時、グランドの動きが変わった！ まるで何かに苦しむかのよ

うに悶え始めたのだ。

まだ、チャップマンの意識が残っているのだろうか。

それを見ていた黒ゴッドが忌々しく言う。

「まだチャップマンの洗脳が十分ではないのか……。ここはいったん引き上げるとするか……。命拾いしたな。それと、ドモン・カッシュに伝えておけ。必ずお前の首をいただくとな」

そう言つて黒ゴッドは飛び去り、グラウンドも地面に潜つて姿を消した。

俺たちはその様子をただ見守るだけだった……。

25th Fight 『ついに見出した光明！ 発動
ゴツドフィンガー!!』

「くそつ、こんな闇夜の中では……!」

ネオ・ホンコンの貧民街。周囲を暗闇が包むその場所で、ドモンは窮地に立たされていた。

ウオンの陰謀の調査のためにここを訪れた彼は、突然謎の暗殺者の襲撃を受けたのだ。

さすがのドモンでも、暗闇の中では満足に戦うことはできない。いくらキング・オブ・ハート、流派・東方不敗の使い手といえど、闇夜に紛れての暗殺者相手では、かわすのが精いっぱいであった。

「どこだ! 出てこい。姿を現せ!」

「ふふふ……。私は暗殺者。それはできぬ。ドモン・カッシュ、貴殿が首、ここでもらい受ける」

その声とともに、再び斬撃が放たれる! それをまた間一髪でかわし、放たれた方向に、反撃の斬撃を放つ。しかし、そこに手ごたえは全くなかった。

そしてドモンの背後に暗殺者の気配が! 彼はそれに気が付いていない! そこに。

「はあっ!」

「うおっ!」

何者かが、暗殺者を撃退したようだ。

「その声は……シユバルツ!」

「うむ。今のお前では、彼には勝てない。ここは逃げろ! そして、心眼を会得するのだ!」

「しかし、敵に後ろを見せるなど……!」

ためらいを見せるドモンを、シユバルツが一喝する。

「馬鹿者! 勝てぬ相手に無理に挑むのを、勇気とはいわん! 勝つ術を得るために、一時的に負けを受け入れることこそ、真実の勇気! 武闘家……いや男なら身に着けねばならないものだ! それをわからぬとは、兄として情けないぞ! ……はっ」

「え、兄……?」

「な、なんでもない! とにかく、ドモン、ここは私に任せて退くのだ! 心眼を会得すれば負けることはない!」

「わ、わかった! 恩に着るぞ!」

そしてドモンは、剣戟の音を背後に聞きながら、その場を走り去ったのであった。

暗殺者からの襲撃からなんとか逃れたドモンは、背後を振り返った。剣戟の音は、もう聞こえない。

「シユバルツ、大丈夫だろうか……？ 彼の助力を無駄にしないためにも、なんとか心眼を会得しなくては……」

先ほどシユバルツがこぼした「兄」という言葉は、既にドモンの頭からは抜け落ちていた。だが彼をボケと馬鹿にすることはできまい。忘れるくらいに必死に逃れてきたのだ。

そこに、声をかける者があった。

「おや、こんなところでどうなさった？」

背後からかけられた声に驚くドモン。彼は思わず刀を抜き、背後の人影に突き付けた。

「気づかれずに俺の背後に現れるとは！ お前が俺を狙っていた暗殺者か!」

「ひゃあ！ な、なにをなさる!?! わしはただの老人じゃぞい！」

見ると、そこにはみずぼらしい姿の老人が。その姿は、とても暗殺者に過ぎない。それを確認したドモンは、刀を納めると頭を下げた。

「そ、そうか。すまない。命を狙われていたので、誤解してしまった……」

「い、いや、いいんじゃないよ。そういう事情があるなら仕方ない。ところでお前さん、こんなところまで来てしまったが、大丈夫かろう?」

「こんなところ?」

と、そこで周囲を見ると、そこは迷宮のように入り組んだ貧民街の奥。どこに行けば帰れるか、どころか、自分はどこから来たかもわからない。

とたんに、ドモンの顔が曇る。

「こ、これは……。俺は今、どこにいるんだ……。? 帰るには……」

「やつぱり迷子になってしまったようじゃのう。どうじゃ? 帰り道がわかるか迎えが来るまで、わしの家に泊まっては?」

「いいのか?」

「はい。たいしたおもてなしはできませんが」

老人がそう言ったところで、ドモンは頭を下げた。

「ありがとう。それではありがたくお世話にならせてもらおう」

* * * * *

そしてドモンは、老人……ハンの家で夜を過ごした。

翌日、ドモンは目を閉じ、座禅を組んで過ごした。言うまでもなく、暗殺者対策となる心眼の修行のためである。

だが、かすかな物音を聞くことができるほどまでにはなつたものの、なかなかそれ上には進まなかった。早く会得しなければならぬという焦りと、やはり『答え』が見いだせないことへの焦りのせいである。

おまけに、迎えもなかなか来ないうえに、周囲を探索しても、戻る道が全然わからぬ。自分は方向音痴ではないはずなのだが……。

そして数日が経ち、次の自分の試合まであと二日、という時。

探索から帰ってきたドモンは、ハンが鉢に植えられた弱々しい草花の世話をしているところを目撃した。

「ハン、どうして草花の世話なんかを？ 汚れ、傷ついた今の地球の環境ではすぐに

……」

枯れてしまうのでは……と言おうとしたドモンの言葉がわかっていたかのように、ハンは諭すように口を開いた。

「そうかもしれない。だが、やらなければ可能性は0じゃよ。それに、やっていることは無駄ではない。どんな小さな、無駄と思えることでも続けければ、必ずそれは花を咲かせることになる。何粒も落ちた雨粒が、やがては岩を砕くようになる」

その言葉は、ドモンに感銘を与えた。そして『答え』を見出すきっかけをも。

(……そうか！)

『答え』を見出したドモンの修行は。それまでの遅滞が嘘のように進み、翌日にはついにドモンは。

「はあっ……! できた……!」

ついに、心眼に開眼したのであった。

「ほほう、見事なものじゃ」

「ハンのおかげです。ありがとうございます」

そう言つて頭を下げるドモン。そこにシユバルツが迎えに来てくれた。

* * * * *

そしてついに、ドモンのファイトの日がやってきた!

今回のファイトは特別ルール、防弾・防ビームガラスケース内で行われるガラスケース・デスマッチである。

対峙するドモンのゴッド・ガンダムと、対戦相手である、ネオ・ネパール代表、キラル・メキレルのマンダラ・ガンダム。

そして、レフェリーが試合開始のコールを叫ぶ!

「ガンダムファイト・レディーゴー!!」

とたんにリングの周囲は暗闇に包まれた。リングの各所から流れ出した黒煙がケース内を満たしたのだ。

「ぬう……これは!? ウォンめ、どうしても俺を負けさせるつもりか!」

「ふふふ……これはありがたいことだ……」

暗闇の中、周囲を見回すゴッド・ガンダムの後ろから、マンダラ・ガンダムが迫る! そして斬撃! ゴッド・ガンダムはなんとかそれをビーム・ソードで受け止める。

「この剣さばき……もしやお前が!」

「いかにも。あの時仕留め損ねたが、今度こそ貴殿の首、このキラルがもらい受ける!」
あの時、ドモンを襲ったのは、この対戦相手、キラルだったのだ! そのキラルのマ
ンダラ・ガンダムはドモンの斬撃をかわすと、再び暗闇の中に溶け込み、姿と気配を消
した。

「あの時と同じように仕留めに来る気か……。だが、あの時と同じだと思うなよ!」

そう言うと、ドモンは目を閉じて、動きを止めた。明鏡止水の境地に至り、彼の心眼
が研ぎ澄まされる。

そして!

「そこだ!」

「!?!」

ドモンの斬撃が、暗闇の中迫っていたマンダラ・ガンダムを捉えた! キラルはなん
とかそれを持っていた仕込みビームサーベルで受け止める。

「なかなかやるな。だが、そんなにわか仕込みの心眼で、私をいつまでもとらえ続けられると思わぬことだ」

「お前こそ、あの時と同じ手が、俺に何度も通じると思うな!」

「ほぎけ!」

そして再び、マンダラ・ガンダムが闇に溶け込み、姿を消した。そして闇の中を変幻自在に動き回る。だが、心眼を得た今のドモンには、その動きはお見通しだった。

「同じ手を通じると思うなど言っただははずだ!」

「ぬう!」

再び、ドモンの斬撃が正確にマンダラ・ガンダムを捉えた。なんとかかわすが、マンダラ・ガンダムの腹部に一筋の傷が刻まれた。

それから暗闇でのファイトは続いた。暗闇の中ながら、ドモンはまるで暗闇などないかのように、キラルと互角の戦いを繰り広げる。そして、そのファイトはキラルの心境にも変化をもたらしていた。彼はその胸の中に熱いものがたぎるのを感じていたのだ。

「ふふふ……はーはっはっはっ!」

「?」

暗闇の中、キラルは愉快そうな笑いをあげ、マンダラ・ガンダムの腕から光弾を放ち、

ガラスケースの一部を砕き割った。そこから黒煙が流れ出し、暗闇はたちまち晴れる。「なぜ？」

「ドモン・カツシユ、貴殿の戦いは見事であった。貴殿の戦いはこの暗殺者の心を熱くしてしまった！ ファイトがこんなに楽しいものだとはな！」

そしてキラルのマンダラ・ガンダムは仕込みビームサーベルを構えた。そこから感じられるのは、殺気ではなく闘気。

「ここからは正々堂々の戦い！ いざ、勝負！」

そのキラルの気概を感じたドモンも返す。

「おう！」

* * * * *

暗闇が晴れたリングで、激しいバトルを繰り広げるドモンとキラル。ドモンの拳をキラルが仕込みビームサーベルで受け止め、キラルの反撃を、ドモンが明鏡止水の動きでかわす。

「はあっ！」

「ぬおおおおっ！」

二人の技が炸裂し、その衝突のエネルギーでゴッド・ガンダムとマンダラ・ガンダムが弾き飛ばされる。なんとか着地し、再び激突。

「……強い……強い……」

キラルの攻撃を受け止めたドモンが唸る。彼の言う通り、キラルは強かった。その強さは、先ほどまでの暗殺に徹していた時とは段違いである。元から強かったのか、ドモンのファイトに触発された結果なのかはわからない。だがそれは、今は大した問題ではないだろう。

マンダラ・ガンダムが無数の仕込みビーム・サーベルの突きを放つ! それをなんとかかわすドモンだが、ゴッド・ガンダムの側頭部に一筋の傷が刻まれた。

「この強さ……今まで俺が戦ったファイターたち以上かもしれない……!」

「その言葉、そのまま貴殿に返すぞ、ドモン・カツシユ。私の攻撃をここまでかわしたのは貴殿がはじめてだ。だが、これで終わりにさせてもらおう!」

一度離れたマンダラ・ガンダムが構える。その背後からオーラが立ち上り、マンダラを形成する。必殺技で決める気なのだろう。それを感じ取ったドモンもまたこたえる。

「奥義で決着をつける気か。ならば俺も、奥義で応えさせてもらおう! ぬあああ……!」

唸り声とともに、ドモンも心を静かに、そして鋭くさせる。彼の心は深く沈み、明鏡止水へと近づいていく。そして。

『Hyper Mode is Booted』

電子音声とともに、その機体が金色に輝く。胸のカバーが開き、背中の羽が展開する。『答え』のきつかけを得たドモンは、ついに真の明鏡止水に到達し、ゴッドガンダムのハイパーモードを起動させることに成功したのだ！

気迫をみなぎらせて対峙する二人。そして。

「いくぞお！ キラル殺法・地獄曼陀羅!!」

マンダラ・ガンダムの背後の炎の曼陀羅から無数の炎弾が放たれる！

そしてドモンも、必殺の技を放つ！

「俺のこの手が真つ赤に燃える！ 勝利をつかめと、轟き叫ぶー!」

ドモンのボイスコマンドに反応して、ゴッド・ガンダムの精神エネルギー変換ジェネレーターがフル稼働し、ドモンの無尽蔵に湧き出る闘志をエネルギーに変換していく。そのエネルギーは右拳に注がれ、拳が真つ赤に染まった。

「うおおお！ 爆熱!」

そしてゴッド・ガンダムが突進！ マンダラ・ガンダムの地獄曼陀羅の炎弾をはじきながら、キラルに迫る！ そして！

「ゴオオオッド！ フィンガアアアア!!」

ゴッド・ガンダムの赤熱する貫き手がマンダラ・ガンダムの腹部に突き刺さる！ ドモンはそのままマンダラ・ガンダムを貫いた腕を抱え上げ、そして叫ぶ。

「ヒイイイト・エンドッ!!」

その叫びと同時に、拳にチャージされたエネルギーが炸裂し、大爆発! マンダラ・ガンダムをその爆炎に包み込んだっ!! その爆炎で、リングを覆っていたガラスケースが砕け散った! 防弾、防ビーム処理が施されたガラスケースを、である。

その後に残ったのは、雄々しく直立するゴッド・ガンダムと大破したマンダラ・ガンダムのみであった。

「ぐふ……見事であった、ドモン・カッシュ……」

そう褒めたたえ、キラルは意識を失った。それを見届けたドモンに、レフェリーが彼の勝利をコールする。

* * * * *

勝利をおさめ、ゴッド・ガンダムから降りたドモンを、彼の師匠である東方不敗・マスターアジアが出迎えた。

「見事であったぞドモン。お主、答えを見いだせたようだな」

そのマスターアジアに、ドモンは苦笑して首を振った。

「いいえ。答えまではまだ……。ですが、そのきつかけはつかめたような気がします」

「そうか。だが、その顔。それには一切の迷いがないように見受けられる。見事じゃ。

お主が答えを見つけ、我が前に立ちはだかる時が楽しみよ」

「ありがとうございます。その時のために、精進を続けます」

そう言葉を交わす師弟を、雄々しく立つゴッド・ガンダムが見下ろしていた――。

* * * * *

一方そのころ。ネオ・ジャパニコロニー。

仮面をつけた軍人……ウルベ・イシカワ大尉が、ミカムラ博士からの報告を受けていた。

「ドモン・カッシュは、ついに明鏡止水に開眼し、三戦目に勝ち抜いたか。順調なようだな」

「ええ。この分ではいけば、我がネオ・ジャパンに覇権がもたらされるのも夢ではないでしょう」

「そうなれば、シユウジ・クロス以来の快挙だな。かの人は今はどこにいるのか定かではないが……」

そこに、ネオ・ジャパンの軍人が入ってきた。

「大尉、秘密調査員からの報告が入りました。こちらです」

「うむ」

軍人から手渡されたレポートに目を通すウルベ。その口元がかすかに歪む。

「よし。ではさっそくそちらに向かおう。シャトルの準備をしてくれ」

「はっ」

「本当に行かれるのですか?」

ウルベにそう声をかけるミカムラ博士。ウルベは博士に顔を向けてこたえた。

「ああ。この目で確かめておきたいのだよ。それに、報告が正しければ、仕上げをしてしまいたい」

「仕上げ?」

博士はそう聞き返すが、ウルベはそれ以上話すことはないとはばかりに、正面へと顔を向けた。

その胸はかすかにふくらんでいた。

26th Fight 『奥義炸裂！ 石破り天驚す拳!!』

師匠こと、東方不敗マスター・アジアのファイトの日が近づいてきた。

そんなある日、師匠と俺は、あるサーカスを訪れていた。もちろん師匠は変装して。

師匠の相手であるネオ・ポルトガル代表ロマニオ・モニーニはピエロをやっているというので、彼が働いているこのサーカスに偵察に来た、というわけだ。

サーカスは、かなりの人が詰めかけている。よほどの人気なのだろうか。

席につくと、さっそくサーカスがはじまった。まずは空中ブランコ。それで男女が華麗に宙を舞った後は、猛獣を自在に扱う猛獣ショー。どれを見ても、見事なショーだ。これは、人気が出るのもわかるな。

そして最後に、ロマニオらしきピエロが現れた。彼の芸もなかなかのものだ。玉乗りやパントマイムを華麗にこなしていく。

だが！ そこで彼は驚くべきことをした！

なんと、激しくパンチを連打したところまである。あれは……流派・東方不敗の演武？ そして、最後に拳をつき合わせるところまでも完全に再現。

それを皮切りに、彼は次々と流派・東方不敗の技を鮮やかに演舞していく。

そこで俺は気が付いた。師匠の顔色が明らかに変わったことに。不快を通り越して、怒りに差し掛かっているかのような色。

そんな師匠に気が付いているのかいないのか、一通りの演武を終えたロマニオは挑発するように言い放ったのだ!

「皆さん! 私は数日後、かの流派・東方不敗の使い手の一人だというシユウジ・クロス(ネオ・マカオ代表としてエントリーするにあたり、この偽名で登録していたのだ)とファイトを行います。しかし、彼の技など私にとっては簡単に模倣できるもの! 見ていてください。私は次のファイトで、彼の技を見事に模倣し、そしてシユウジ・クロスに完勝してみせましょう!」

そこで拍手が沸き上がる。多分、ファンへのリップサービスもあるのだろうが、その話し方にはあきらかな挑発の意思と悪意に満ちていた。こいつは完全に師匠をなめてやがる。

ここにドモンがいなくて本当によかった。あれだけ師匠を慕っている彼のことだ。この現場に居合わせたら、まず間違いなく飛び掛かっていったらうからな。

そこでふと感じる、横からの気配……いや殺気。殺気を感じるほうを見てみると、師匠が笑顔で、ロマニオのほうをむいている。しかし俺は見逃さなかった。その顔に青筋が浮かんでいるのを。これが漫画なら、背後に炎が浮かんでいそうだ。

「し、師匠、怒りはわかりますが、落ち着いてください……」

「何を言う。わしは怒っておらぬぞ。なかなか楽しいショーではないか」

そうすごみのある笑顔を浮かべている師匠の手元から、くるみが砕ける音が聞こえた。

* * * * *

そしてファイトの目がやってきた！

リングには既に、師匠のヤマトガンダム（に偽装したマスターガンダム）と、ロマニオのジェスター・ガンダムが対峙している。

師匠があたかも闘志どころか殺気満々なのに対し、ロマニオは余裕があるかのよう
に、茶化すような態度をとっている。

「話は聞いたぞ。わしの使う流派・東方不敗をコケにしてくれたそうじゃな」

「コケにしたわけではありませんよ。本当のことです」

「ほう……」

それからさらににらみ合う。いや、にらみつけているのはむしろ、師匠のほうだが。

「おや？ 今、『こやつ、五体バラバラにしても飽き足らぬ』と思いませんでしたかな？」

「なっ……！」

驚きの声をあげたのは師匠ではなく俺だ。まさかこいつ、相手の心を読むことができ

るのか!?

これはもしかしたら難敵かもしれない……。

だが師匠はそれを面白いと思ったのか、その殺気がいくらか和らいだ感じがした。

「ほう、こやつ……」

『面白い。どれだけ芸を見せてくれるか』

「見せてもらおうとしようぞ」

そしてまた沈黙。

「くくくくく……」

「ふふふ……」

にらみあつたまま、笑みを浮かべる師匠とロマニオ。怖い、怖すぎるよ。

それから数秒後。レフェリーが試合の開始を宣言する。

二人が一步を踏み出すのはまったく同時だった。

「ガンダムファイトオオ！」

「レディ〜ゴ〜！」

* * * * *

先手を取つたのは師匠のほうだ。鋭い拳や蹴りを連続で次々と放つ。

だが、ジエスター・ガンダムはそれを見事にかわしていく。師匠の技を模倣できるだ

けあって、拳筋も熟知してるのか。

そして師匠の蹴りを後方にとんでかわすと。さっそく師匠の技を繰り出してきた！

「まずはこれからでございませう。十二王方牌大車併〜！」

ジェスター・ガンダムから12体の、エネルギーでできた小さなジェスターが放たれて、師匠のヤマトガンダムに襲い掛かった！

さすが師匠、それらを巧みに防ぎ、はねのけていくが、それでもそのうちの一体が師匠に蹴りを直撃させた！

「うおっ……………」

それで師匠が体勢を崩したところで、残り11体も蹴りを命中させ、ヤマトガンダムは吹き飛ばされた！

「うおお〜！」

「そ〜れ、帰山笑紅塵〜！」

しかも、ご丁寧に帰山笑紅塵まで使ってきた。もしかしたらこいつの模倣の腕はすごいのかもれない。

吹き飛ばされた師匠はなんとか着地したが、ロマニオの攻めは止まらない！

「次は酔舞・再現江湖 デッドリーウェイブでござい〜！」

「うぬっ……………」

「どうなさいました? もしかしたら、『こいつ、必ず地獄の底に落としてくれるわ!』と
思っているのですか?」

「……」

そう言いながら、デッドリーウェイブの連打を放つロマニオ。そして、一気に突き抜けた。

「爆発でございます!」

「うおお!!」

爆発に吹き飛ばされる師匠。こいつ……かなり強い!? だが。

「いかがですか? 所詮、流派・東方不敗などこの程度のもの……」

「ふふふ……おめでたい奴じやな」

「なんですと……? ……っ」

師匠の言葉とともに、ジエスター・ガンダムの頭部の一部が砕けた!

* * * * *

ダメージを受けて、少しよろめくロマニオに、師匠は堂々に直立したまま言い放つ。

「お主は今、『こいつ、必ず地獄の底に落としてくれるわ』とわしの心を読んだようなこととをほざいたな。それは間違いよ。わしは今、喜び、充実しておるのだ。このような奴と戦い、打ち負かすことができる喜びにな! お主の読心術などその程度よ」

「な、なんですと……?」

「お主はあくまで、相手を煽り、読みやすい状況下に持ち込むことで、『この状況なら相手はこう考えているはず』と、相手が考えることを予想しているにすぎぬ。そのようなこと、そのへんの小童でもできるわ」

「わ……」

「『私の読心術を、模倣の術を馬鹿にするのですか?』か?」

「なっ……!」

今度は師匠がお返しとばかりに、ロマニオの考えを読み返した。それと同時に、それまでの立場が逆転した。余裕綽綽の師匠に対し、逆にロマニオが余裕をなくしつつあるように見える。

「そして、心を読んだ相手をさらに技の模倣で追い込み、最後に余裕を失った相手を狩る。じゃがそのような手、このわしには通じぬわ!! 技をまねることができたくらいで、わしに勝とうと思うことが誤り! そしてわしの技はそう簡単に真似ることができないものではないわ!」

「だ、黙りなさい!」

「まだわからぬようじゃな。ならば、お主がどれだけわしの技をまねることができるか、

見せてもらおうとしようぞ」

そして再びファイトがはじまった! 同じ流派の技の応酬。技の持ち主である師匠に対し、ロマニオも負けじと流派・東方不敗の技の模倣で対抗する。

それはまさに、師匠とドモンの組手を見ているかのようだ。こいつがここまで同じ技、しかも模倣で師匠に食いつけるとはさすがだ。意外でもある。

しかし、それは突然終わりを告げた! 突然、ジエスター・ガンダムが崩れ落ちたのだ!
「う、うぐ……こ、これは……?」

「言ったであろう。わしの技は、そう簡単に真似られるものではないと。流派・東方不敗の技はいずれも、流派の基礎を学び、技を放つことのできる身体を築いて、初めて使いこなせるもの。それをせすいきなり模倣に走れば、そうなるは必定よ」

まさに師匠の言う通り。とある漫画に出てきた剣術と同じように、流派・東方不敗の技は、ちゃんと基礎を築いてはじめて使いこなすことができるもの。そう簡単に使いこなせるものではないのだ。デビルガンダム D G 細胞の身体を持つ俺でさえ、使うたびに少しずつ寿

命を削っている有様なのだから。

* * * * *

「ドモニー!」

「は、はい!」

と、そこで突然、師匠がドモンに声をかけた。

「お前がネオ・ジャパンに戻ったあの日、わしは時間不足で、お主に奥義を授けることができなかった。今、ここでその奥義を見せてやろう。しつかと刮目して見るがよい!」

「は、はいっ!」

奥義……? もしかしてあれか!?

「ぬおおおお……!」

うなりを上げて気を練る師匠。その機体が金色に輝く。これは……やはりあれだ!

「しかと見よ! 流派東方不敗が最終奥義っつ!!」

石を破り……。

「さあいくぞ、ロマニオとやら。覚悟はいいか?」

「あ、あわ……」

天をも驚かすと言われる拳……!!

「石破天驚けえええええんっつ!!」

師匠の叫びとともに放たれた拳から、巨大な光の塊が放たれた!! それは弾……いや

砲弾に等しい!

原作では、生身でもM^{モビルファイター}Fに乗っていても撃てるなど、その原理は不明だったが、ど

うやらこの世界においては、ジェネレーターにより気から変換されたエネルギーが周囲の荷電粒子を励起させて巨大なビームの弾丸を生成させるらしい。いや、そんな原理はどうでもいい!

これで燃えないGガンダムファンなどいるはずがない! そんな細かいことは関係なく、師匠が天驚拳を撃つのを垣間見れるだけで十分ではないのか。

そしてその気の砲弾はそのままロマニオのジェスター・ガンダムに飛んでいき、そして爆発!!

その爆炎がやんだあと、ジェスター・ガンダムはただのガラクタと化していた。

「本当ならば機体ごと消滅させてやつてもよかつたが……。そこまですたら会場も灰になつてしまうからの。運がよかつたな、ロマニオとやら」

そう言い放つ、師匠のヤマトガンダムは、とても雄大に見えた。ああ、やはりこの世界に転生してきてよかつたかもしれな!

27th Fight 『大会中断!? 襲来アナザー五人衆!』

ネオ・ホンコンの中心部に存在するスタジアム。今ここには、12体のガンダムたちが並んでいた。

新生デビルガンダム四天王からは俺……ジャンヌ・エスプレッソと師匠こと東方不败・マスターアジア、そしてホアキン・ムニスと偽名を名乗っているチコ・ロドリゲス。そして、シャツフル同盟からはドモンたち五人全員。後は、ネオ・ギリシア代表、ゼウスガンダムを駆るマーキロット・クロノス、ネオ・スペイン代表、マタドールガンダムのカルロス・アンドンシアなど四人。

いずれも、サバイバルイレブン、そして決勝大会をここまで勝ち抜いてきた猛者たちだ。

その彼らを前に、主催者であるネオ・ホンコン首相のウオンがこれから行われるバトルの説明をはじめめる。なお彼はこの場にはおらず、スタジアムに建設されたビルの中から放送をしているようだ。俺たちの攻撃を警戒しているのだろうか？

さて、バトルの内容は、原作とは少し違っているようだった。

ランタオ島の火山の頂上に設営されたリングに、ネオ・ホンコン代表のシード選手、(偽)東方不敗・マスターアジアが待っている。障害やライバルたちを突破し、一番早く彼の元へたどり着き、倒した者が優勝となる。なお、(偽)マスターアジアが、参加者12人全員を叩きのめした場合は、ネオ・ホンコンの優勝となる、とのことだ。

俺たちは(偽)マスター・アジアただ一人を倒せばいいのに対し、向こうは俺たち12人全員を倒さなければいけないなんて、なんか俺たちに有利すぎて、ルールがウオンらしくないな。ここまで好き勝手してきて良心がとがめたのか、それとも(偽)師匠の強さに自信があるのか。

それはともかく、開始の合図を前に、どのガンダムファイターたちも、やる気十分という様子だ。緊張感がスタジアムに満ちているが感じられる。これはもう、開始の合図を出す直前に、誰かフライングしそうだ。

そして、ウオンの声が響く。

『それでは、決勝最終バトルロイヤルレースをはじめましょう。用意……!』

そして、彼が『スタート!』と言おうとしたまさにその時!

彼のいるであろうビルが爆破されたーーーーー!?

* * * * *

バトルロイヤルレースが幕を開けようとした瞬間、ウオンをはじめとした運営陣がい

るであろうビルが爆破された!?

その突然の事態に、観客はもちろん、参加者のファイターたちも戸惑いを隠しきれない。むろん、それは俺も例外ではないが。

そこに、どこから声がとどろいた!

『くつくつくつ、ガンダムファイトか。面白くもない茶番を考え出したものよ』

まず聞こえたのは、(偽) マスターアジアの声。

『所詮、ガンダムファイトなど、戦争を競技などという衣にくるんだだけのものお!!』

荒々しくも雄々しい声は、チャップマンの声だ。

『ヒャーハハハア!!』

その笑い声を聴いて、俺は衝撃を受けた。これは……ミケロの声じゃないか!

そして最後に響いたのは、あの黒ガンダムのファイターの声。

『戦いたければ、ガンダムファイトなどという戯言ではなく、行えばいいのだ。互いに血を流しあい、奪い奪われる本当の戦い、争いをな……。その場は、我々が作り出してやろう』

そしてスタジアムに降り立った五機のガンダムたち。

『ひゃーはははっ! 天剣絶刀・ガンダムヘブンズソードオ!!』

猛禽類をほうふつとさせるような、大きな翼をもったガンダム、ガンダムヘブンズ

ソード。

『獅王争覇あ! グランドガンダムウウウ!!』

フェイク・ロンドタウンで遭遇した、ベヒーモスのような巨獣を思わせる巨大で獐猛なガンダム、グランドガンダム。

『ヘルマスターガンダムとは、わしのことぞっ!』

偽マスターアジアが乗る、マスターガンダム……いや、それより鋭利で邪悪な姿をもったヘルマスターガンダム。

『……漆黒覇魔、デモンガンダム』

チョコを襲い、チャップマンを化け物に変えた黒きガンダム。デモンガンダムというらしい。

『そして、笑傲江湖ウォルターガンダム!』

そしてウォルターガンダムも現れた。その声はボイスチェンジャーで変えられているようだが、男性の声っぽい。どうやら、乗っているのはアレンビーではないようだ。

そしてデモンガンダムのファイターが宣告する。

『ガンダムファイトなどという茶番は終わりだ。そんな舞台など叩き壊し、本当の戦いの場をこの世界に現出させてやる。我々、『アナザー五人衆』がな……!』

そして、アナザー五人衆と名乗った五機のガンダムたちは、デモンガンダムの宣告と

同時に暴れ始め、コロシラムのごとくを破壊していく。罪もない人々が逃げまどい、がれきの餌食となっていく。

* * * * *

アナザー五人衆と名乗る奴らによって、たちまちコロシラムは修羅場と化した。いや、彼らの破壊活動はコロシラムだけでなくネオ・ホンコンの市街地にまで及び、今やネオ・ホンコンは戦火に包まれた地獄と化した。

しかし……どういうことだ？ 彼らがウォンのいたビルを破壊したということは、黒いガンダム……いやデモンガンダムは、ウォンと関係ないのか？ 偽マスターアジアも、実はウォンに操られていたわけではないのか？

謎は深まるが、今はそれどころではないな。

そう考えなおした俺に、ドモンからの通信が入る。

『ジャンヌ、ネオ・ジャパンのカラト委員長から通信があった。彼や五大国の委員会が中心となって、観客や人々を、このネオ・ホンコンから避難させるそうだ。その手助けと奴らの迎撃のため、お前たち新生デビルガンダム四天王の力を借りたい』

答えは決まっている。

「わかりました。今や、デビルガンダムをどうこうするって問題ではなくなっていますからね。今はこれまでの立場を忘れ、協力することにしましょう。師匠たちもいいです

か?」

「無論よ。人々を苦しめるはわしの本意にあらず。喜んで力を貸そう」

「了解した」

「マカセトケ、ダークホッパーハタタカエナイガ、避難誘導スルグライハデキル」

本場に頼りになる四天王たちだ。とてもありがたい。

「よし、それでは二手に分けよう。わしとジャンヌ、ドモン、チボデー、ジオルジュは五人衆とやらを迎撃するぞ」

師匠の提案にドモンが返す。

「わかりました。それでは、チコとカンちゃん、アルゴ、サイ・サイシーは避難誘導を支援ですね」

「うむ。それではかかれえ!」

* * * * *

破壊活動を続けるアナザー五人衆たちのガンダムに、俺たちは飛び掛かった!

まず真っ先に攻撃を仕掛けたのはドモンだ。その右手を真っ赤にして、五人衆たちに突撃していく!

「それ以上の狼藉は許さん! 爆熱! ゴオオオオオッド・フィンガアアアア!!」

そして放たれる、ドモンのゴッド・フィンガー。それを、黒のガンダム、デモンガン

ダムが同じく拳で受け止める。ウォルターとヘブンズソードは、この場はデモンガンダムたちに任せる、ということなのか、市街地のほうに飛び去って行った。

ドモンのゴッド・フィンガーと、デモンのカオシック・フィンガー。二つの技のエネルギーがぶつかりあう！

『待っていたぞ、ドモン・カッシュ。お前と戦うこの時をな』

『なんだと!? お前は一体何者だ!?!』

『お前に答えてやる義理はない。うおおおおお!!』

デモンの拳の黒い光がさらに輝きを増す！

しかし、ドモンも負けてはいない！

『ならば腕づくでも聞き出すのみ! うおおおおお!!』

ゴッド・ガンダムの拳も輝きを増していく。

そして一方では、師匠のヤマトガンダム（に偽装したマスターガンダム）と、偽師匠のヘルマスターガンダムが激しいバトルを繰り広げている。

『ほお、この前とはさらに強さを増しておる。また新たなデータを組み入れたらしいな』
『むろんよ! わしには、決勝大会開始時点での、貴様のデータが反映されている! 今

度こそ、貴様を倒し、わしが本物の東方不敗・マスターアジアになってくれるわっ!』

『ふ……面白い。だが、そう簡単に成り代われると思わな、たわけがっ!』

そして一方の俺は、チボデー、ジオルジュとグラント・ガンダムと戦っていた。

「スプラッシュ・ソードッ!」

『ローゼス・ハリケーン!!』

『マシンガン・パーンチッツ!!』

三人の技が同時に、グラント・ガンダムに炸裂! 奴に少なくはないダメージを与えたようだが、それでもその進撃は止まらない。獅王争覇の名は伊達ではないということか。

『くそ、なんてタフな奴だ!』

『ですが、ここで止めなければ大変なことになりますよ!』

「そうですね。奴がとまるまで攻撃しましょう!」

戦いはまだ終わらない。

* * * * *

一方、ネオ・ホンコンの市街地では、サイ・サイシーのガンダム・ダブルドラゴン、アルゴのガンダム・ボルトクラッシュ、そしてチコのガンダム・ヘルトライデントとカンちゃんのダークホッパー・ガンダムが、人々の避難誘導を行っていた。

『ほらほら、気を付けて避難するんだぜ!』

『うん、ありがとう、サイ・サイシー! 頑張つてね!』

避難中の子供に声をかけられ、思わず鼻の下をこするサイ・サイシー。その一方では、ガレキに潰されそうになっていた老女を、アルゴがボルトクラッシュでかばって助けていた。

「あ、ありがとうございます……」

『……気を付けて避難しろよ。……ふ、海賊の俺が、人助けをするとはな。悪くはない』
また別の場所では、応急処置されたダークホッパーに乗ったカンちゃん、小さい子供たちを守りながら避難誘導していた。

そこに！

『あ、あれは……！』

『ウォルターガンダムと、ガンダム・ヘブンスソード！』

声をあげるチコとサイ・サイシー。そう、スタジアムのほうから、ウォルターとヘブンスソードの二機が襲来してきたのだ！

ヘブンスソードがその翼でビルを両断し、そのガレキが人々に襲い掛かる！逃げ惑う人々を、ボルトクラッシュが身を挺してかばった。

『奴ら……罪もない人々を巻き添えにする気か！』

『サイ・サイシー、カンちゃん。奴らは俺とチコが防ぐ。お前たちは、そのまま避難誘導を続けてくれ』

『わかった! 二人とも、気を付けてくれよな!』

『オレノダークホップパーハマダタタカエナイ。スマン。ソノブン、避難誘導ヲガンバル。マカセロ!』

二人の声を受けて、チコのガンダム・ヘルトライデント、アルゴのガンダム・ボルトクラツシュが、ウォルターとヘブンスソードに相對する!

『ヒャーハハハア!!』

『くっ……!』

しかし、飛行能力を持つ二機の前に、チコとアルゴは苦戦を強いられる。

ウォルター・ガンダムとガンダム・ヘブンスソードは空中を自在に舞い、急降下して襲い掛かり、それから急上昇して攻撃をかわしていく。

空中の相手では、こちらのハンマーや槍は届かず、固定武装であるマシンキャノンでは威力不足である。

そうしているうちに。

『しまった!』

隙を突き、ヘブンスソードが、サイ・サイシーとカンちゃんやんが避難誘導をしているほうに飛んでいった!

『このままでは犠牲者が……!』

『そうだ、アルゴ。ボルトクラッシュのパワーで、俺のヘルトライデントを放り投げてくれ』

『なんだと!?!』

『ヘルトライデントの推力と、ボルトクラッシュのパワーなら、奴に追いつけるはずだ。頼む!』

同じファイター同士。それ以上は余計な言葉はいらない。少しの間見つめあい、視線で会話する二人。

『……わかった!』

『よし、いくぞ!』

ヘルトライデントがボルトクラッシュの手の上に飛び乗った。それと同時に、ボルトクラッシュのボディが金色に光輝く。ボルトクラッシュのゴールドン・パイレーツ・モードの発動だ!

『いくぞ、チコ・ロドリゲス!』

『おう、やってくれ!』

『うおおおおお!!』

ボルトクラッシュが砲丸投げの要領で、ヘルトライデントを放り投げる! ゴールドン・パイレーツ・モードの超パワーで吹き飛んでいったヘル・トライデントは、さらに

バーニアのフルパワーでさらに加速し、今にも人々に襲い掛かろうとしているヘブンズソードに突撃していった。

『くらすえ、空中ガトリング・デススピアー!!』

『うおおおお!!』

その無数の突きを喰らったヘブンズソードは中破し、暴走したかのように明後日の方角に飛び去って行った。

それを見て、ウォルターのパイロットが独り言を言う。

『今回はここまでですか。我々五人衆のいいパフォーマンスにはなりましたかね……引き上げましょう』

そしてウォルターから、音にならない口笛が放たれた。

* * * * *

引き上げの合図でも出たのだろうか。奴らは撤退をはじめた。ヘルマスターはファイトを切り上げると、まるで軽業師のようにガレキやビルの上を飛び移りながら逃げ出し、グランドガンダムも地面に潜って撤退した。

そして黒いガンダム、デモンガンダム。

『いいところだというのに、奴め……。命拾いしたな、ドモン・カッシュ』

『ま、待て!』

ドモンが止めるのも聞かず、デモンガンダムは翼のような装甲を閉じ、光の矢となって離脱していった。

「なんとか撃退できましたね……いえ、逃げてくれたといったほうがいいのでしょうか……?」

そうつぶやく俺に、師匠が自嘲するように笑っていわく。

『そうじゃな。だがこれで、さらに凶状が増えてしまったか。これで一生、『マスターアジア』の名は名乗れぬな』

「いいじゃないですか。名前を変えれば。いつそ、ハイパーアジアとかグレートアジアとか」

そこに、ドモンからも声がかけられた。

『それに、師匠がやったわけではありません。何より、俺にとって師匠は師匠です』

『だいたい、名前が他人がつけるものだけ。それにとやかく言ったってはじめられないだろう?』

『ははは……いやつらめ』

しかし……運営陣はこの襲撃で、ほとんど死んでしまったし、スタジアムも廃墟になつてしまったし、ガンダムファイトはこれからどうなるのだろうか……?」

だがこの後、世界は大きな混沌の渦に飲み込まれることを、俺たちは知らされること

になるのだった!

それを告げる予兆のように、空は赤く染まっていた。

再び世界転戦編

28th Fight 『絆無情に。襲来へブンスソード』

ネオ・ロシアの輸送機ゴルビー。その会議室で、俺たちは次々へと入ってくる情報に顔をしかめていた。

「地球上の各地、特にきな臭い地域で、奴らが暴れまわっているみたいですね。これはやはり……」

俺……ジャンヌ・エスプレッソの問いに、師匠……東方不敗・マスターアジアがしかめっ面のまま答える。

「うむ。それによって各国の緊張を高めるのが狙いであろうな」

その言葉に、チボデーがショックに染まった顔でいう。

「おいおい、待ってくれよ。もしそれがエスカレートしたら……」

「ええ。コロニー国家間で戦争が起こりかねません。そうなれば、カオス戦争の再来……」

ジョルジュ・ド・サンドの言葉に、ネオ・ロシアのガンダムファイト委員会のナスターシャが棒鞭をびしつと鳴らして言う。

「うむ。ネオ・ジャパン、ネオ・アメリカ、ネオ・フランス、ネオ・ロシア、ネオ・チャイナの五大国の間では、五人衆の仕業はそれぞれの国の仕業ではないこと、戦争は起こさないことを確認しているが、影響下にある国同士が戦争をはじめたら、それも果たしてどうなるか……」

そして、ネオ・ロシア代表のアルゴ・ガルスキーが目をつぶり、腕を組んだままで言う。

「それに、中には、五人衆の所業を利用して、自国が有利になる策謀を進めようとしている国もあると聞く。緊張が高まり、そんな国が増えて行けば、世界は混沌を深め、カオス戦争の危険性はどんどん高まっていくだろう」

「でしようね……おそらくはそれが奴らの狙い……。師匠……」

俺、そしてチコ、カンちゃんが目を向けると、師匠は神妙な顔をしてうなずいた。

「うむ。カオス戦争が再発することになれば、地球環境はさらに悪化することになってしまう。最悪、地球が死ぬようなことになりかねん。アナザー五人衆。奴らの暗躍は、なんとしても阻止せねばなるまい」

「はい……」

師匠の言葉に、ドモンも同意してうなずく。

とそこに、会議室にサイ・サイシーが駆け込んできた！

「みんな、大変だぜ！ 前の戦いで中破したガンダムヘブンスソードが、ローマに向かっているってよ！」

「ぬう！ ナスターシャ殿！」

「うむ、追撃するぞ！ ゴルビーをローマに向けろ！」

そして俺たちを乗せたゴルビーは、ローマへと進路をとり、全速力で飛んでいくのだった！

* * * * *

そのころ、イタリア半島沖。そこに、ローマへ向けて一直線に飛んでいくガンダム——ガンダムヘブンスソードの姿があった。

「ウオオオオオオ………！ シヤツフル………シテンノウ………！！」

自分に大ダメージを与えたシヤツフル同盟と、新生デビルガンダム四天王への呪詛を口にしながら空を切り裂くように進むヘブンスソードの前に、ネオ・イタリア空軍の戦闘機が現れた。

その戦闘機たちからミサイルが放たれる！ それを目にしたヘブンスソードのミケ口の闘争本能が燃え上がり、それがD G細胞デビルガンダムによりさらに増幅される！

「ウオオオオオオオ！！」

ヘブンスソードは、中破した状態ながらも、高機動をもってそのミサイルを回避し振

り切ると、戦闘機の一機に向けて突撃！ その翼の一閃でその戦闘機を一刀両断した！
さらに別の方向から飛んできたバルカン砲をかわし、それを撃ってきた戦闘機へと迫る。そして！

「ヒャーハハハアツ!!」

脚の爪で戦闘機をわしづかみにすると、それを握りつぶそうとする。そのパワーの前に、最新の合金で作られたボディにひびがはいつていく。

「ヒャハアアアアア!!」

『う、うわああああ!!』

あわれ、その戦闘機はスクラップになった。

* * * * *

俺たちを乗せたゴルビーは、イタリア半島沖。ちょうど、へブズソードがネオ・イタリア空軍を相手に大暴れしている現場に到着した！

すぐさま、ブッドキヤリアーに乗ったゴッドガンダムと、ネオ・ロシアのSFS《サブフライトシステム》、レニーンに乗った俺のガンダムオルタセイバーの発進準備がはじまる。

『よし、発進準備OKだ。いいか、SFSに乗っての空中戦は難しい。気をつけろ』

「わかりました。いきますよ、ドモン」

『ああ。ガンダムファイトではないが、あえて言わせてもらう。ガンダムファイト!』
「レディイイイゴオオオオオ!!」

そして俺とドモンは、ゴルビーから発進していった。

そして数分飛び続け、俺たちはヘブンスソードを視界にとらえた!

『行くぞ、ミケロ・チャリオット! はああああ!』

『ドモオオオオン!!』

ドモンのゴッドガンダムがブッドキャリアーから跳躍し、ヘブンスソードに切りかかる。だが、その斬撃はかわされ、ゴッドは再びキャリアーに着地した。そして、ドモンの攻撃をかわしたヘブンスソードに、俺のオルタセイバーがマシンキャノンを浴びせる!

マシンキャノンの弾は、フェイクDG細胞を分析した得られた結果を反映した特別製だ。ヘブンスソードなどのフェイクDG細胞製モビルファイターMF、アナザー五人衆には少なくない効果がある。少なくとも、通常のMFにマシンキャノンを浴びせたぐらいの効果は。

案の定、マシンキャノンを受けたヘブンスソードはフェイクDG細胞の破片をばらまきながら苦しそうな動きをした。だが、それでも、ヘブンスソードは臆することなく、こちらに突進してきた。やはり、闘争本能が、フェイクDG細胞によって増幅されているのか。

『ヒャーハハハア!』

「くっ……!」

へブンズソードの突進をかううじてかわす。何しろ、SFSに乗つての戦闘は、回避をSFSに頼らざるを得ないから、地上戦と同じようにはいかない。今回も本当にギリギリだった。

そしてそこに、ドモンのゴッドガンダムがマシンキャノンを浴びせる!

『ドモン、ドモオオオオン!! グアアアアア!!』

そこでへブンズソードは制御を失つたのか、周辺を飛び回つたあげく、ローマへと墜落していった。

急ぎ、俺たちもその後を追う。

* * * * *

そして、今の戦いでさらにダメージを負つたガンダムへブンズソードは、ローマの郊外に墜落していた。機体の外に放り出されたミケロは頭を振りながら、よろよろと立ち上がる。その様子に、先ほどまでの狂気は感じられない。

「うう……ここは……? 俺は一体いつの間にか……?」

と、そこに人影がやってくる。大柄で、長髪の男。それはミケロもよく知る人物だった。

「ミケロの兄貴！ 戻ってきていたんですか!？」

「お前……アンドレか!？」

「ええ、そうです！ もう、ミケロの兄貴。凱旋したんだつたら言ってくれたらいいのに！」

「凱旋？ なんのことだ?」

「何を言ってるんです。見ましたよ、あのネオ・ノルウエーのファイターとのファイト！
とても血沸き肉踊りました!」

「??」

「それはともかく、官憲が来る前にここを離れましょう」

「お、おう……」

そして二人で、その場を離れていく。その中、ミケロは懐かしさを感じながら、何か大切なことを忘れていたような気がした。思い出さなければならぬ、だが思い出してはいけない。そんな気がするのだが……。

* * * * *

ミケロを追ってローマの地にやってきた俺とドモンはびつくりした。

奴は、それまでのことが嘘のように、ギャングをしているじゃないか!

「墜落のショックで、記憶を失っているんでしょうか……?」

「かもしれない。だが、悪事をあまりしていないところを見ると、お前とのファイトの影響がまだ少しはあるのかもしれないが」

このまま彼が、五人衆としての記憶を失ったまままでいてくれれば、こちらとしてはありがたいところだ。だが……。

「でもそうすると、私たちはあまり彼には接触しないほうがいいですね」

「そうだな。俺たちが接触したら、それをきっかけに、奴が再び五人衆に戻ってしまうかもしれない。接触を避けて、遠くから見守っていたほうがいいだろう」

そして俺たちは、ローマの場安の宿屋に部屋を取り、そこを拠点に、彼の様子を探ることにした。

* * * * *

ミケロのアジト。そこで、彼の子分の一人、小柄で、紫色の髪型が特徴のレテが、ミケロに話しかけていた。

「親分、本当に恐喝はしないんですかい？」

「くどいぞレテ。俺はもう悪事はあまりやりたくねえんだよ」

そう言うミケロ。アンドレもレテをたしなめる。

「親分がそう言ってるんだ。お前ももう、悪事からは卒業しろ」

「本当に親分、どうしたんですか？ ドモン・カッシュとファイトしてから、すっかり変

わっちまって……」

「ドモン・カツシユ？ 誰だそいつは？」

「レテ！ これ以上、親分を混乱させるのはやめろ！」

「へいへい、わかつたよ！ 俺はもう好きにやらせてもらうぜ！」

レテはそう言つて部屋を出て行こうとしたところで……。

「ぐはあ!!」

何者かに吹き飛ばされた！

「な、何者だ!？」

「見つけたぞ、ミケロ・チャリオット……」

* * * * *

ローマに宿を取つて数日。このまま何も起きず過ぎ去つてほしいと思つていたが、その希望はかなわず、事態が動き始めた！ 謎の男が、ミケロがアジトにしているビルに入つていったのだ。

その男は、漆黒のマントをドモンがしているようにまとい、仮面を身に着け、その表情や素顔は知れない。奴は、ビルの前にいたミケロの手下二人をたやすく蹴散らすと、そのままビルの中に入つていった。

その時、男が使つた技に嫌な予感を覚えた俺は、ドモンへと顔を向けた。

「ドモン、もしかして今の奴は……!」

「ああ。もしかしたら、デモンガンダムのファイターかもしれん! 急ぐぞ!」

「はい!」

そして俺たちは、大急ぎで宿屋の部屋を出た。

* * * * *

そしてアジトにたどり着くと……やはり思った通りだった。

あの男が、ミケロと対峙していたのだ。

「な、なんだお前は!? レテをこんな目にあわせて、ただで済むと……!」

だが、ミケロの激昂にも男は動じることなく、冷たい声で言い放った。

「今のお前には、この男はもはや関係のないものだ」

「なんだと!? もう許さねえ、お前など俺のガンダムで……。ガンダム……! 俺の

……ガンダムは……」

俺たちが部屋に飛び込んだのはその時だ。いけない! ミケロの記憶が戻ってしま

う! そうなれば、彼は再び五人衆になってしまう!

「いけません、ミケロ! 思い出しては!」

「お、お前たちは……。俺はお前たちと……いや、俺とお前たちとは初対面……うう

……」

「……お前たちか。だが、俺の邪魔はさせん。お前はこいつらと遊んでいろ」

黒マントの男がそういうと、レテと言われた小さな男がゆらりと立ち上がった。その表情からは生気が消えうせ、目はうつろになっている。フェイクDG細胞を植え付けられて、ゾンビになっているのか!?

そしてゾンビにされたレテは、俊敏な動きで俺たちに襲い掛かってきた! 俺たちが彼とファイトを繰り返す中、黒マントの男はさらに一歩、ミケロへと踏み出す。

「さあ、思い出せ。お前はガンダムファイターだった。お前のガンダムはなんだった……?」

ミケロはまるで催眠術にかけられたようにつぶやきはじめる。記憶が呼び起こされるようにしているのか!?

「俺のガンダムは……ネロスガンダム……いや……ネロスガンダムスクラップ……いや、それでもない……」

「ミケロ、何も無い! 思い出すことは何も無いんです!」
「くそ、このゾンビ、なかなか手ごわいぞ。このままでは!」

ミケロの表情がどんどん変わっていく。やばい!

「俺のガンダムは……ネロスガンダム……いや、違う……俺のガンダムは……俺は……」
「兄貴!」

「ミケロ！」

「さあ、思い出せ……！」

そしてついに！ ミケロの表情が、狂気に満ちたものに変わってしまった！！

「そうだああああ！ ひやはははあ！！ 俺様はミケロ・チャリオット！ アナザー五人衆様だああああ！！」

その叫びとともに、ビルの外に、へブンズソードとデモンガンダムが現れた！ ミケロと黒マンントの男は、窓から飛び降り、それぞれの機体に乗って入っていく。

そして、へブンズソードのカメラアイが邪悪な色に光る。まさか！？

「奴は、このビルを叩き壊すつもりです！ 早く脱出しましょう！ そのあなたも急いで！」

「わかった！」

「わ、わかった……！！！」

そして俺たちが部屋を出ると同時に、部屋はへブンズソードの爪で叩き壊された！

廃ビルから脱出した俺たち。彼が記憶を取り戻してしまったのなら仕方ない。これ以上の奴らの暴虐を阻止しなくては！

「来てええええええ！ オルタセイバアアアアアア！」

「こおおおおい！ ガンダアアアアアムツツ!!（パチンツ!）」

俺たちは、自分たちのガンダムに乗り込み、デモンガンダム、ヘブンスソードの二体と対峙した。

「いくぞ！ ガンダムファイトツ!」

「レディーゴー……!」

そのドモンと黒マンントの男……デモンガンダムのファイターの叫びとともに、奴らとの戦いははじまった!

ドモンはデモンガンダムに飛び掛かっていく。

「ぬあああああつ、はあつ!」

ドモンのゴッドガンダムが振るったビームソードを、デモンガンダムはその拳で受け止める。それでお互いの動きがとまった直後。

「うおっ!」

デモンガンダムの胸部からマシンキャノンから放たれ、ゴッド・ガンダムが吹き飛ばされた!

「ドモン!」

「ヨソミヲシテイル暇はナイゼエエエエ!!」

ドモンのほうに目を向けた俺に、ミケロのヘブンスソードが襲い掛かる! 俺は奴の

爪の一撃をかわし、ビームセイバーを振るうも、へブズソードは空に舞い上がり、それを軽くかわしてしまった。

俺のオルタセイバーが両肩のマシンキャノンをかわすも、奴はそれを軽くかわすと、こちらに突っ込んできて体当たり！ 吹き飛ばされてしまう。

「くうっ……！」

そして奴がさらに攻撃を加えようと突っ込もうとしたところに。

「兄貴ー！」

ミケロの子分だった大柄の男が、オルタセイバーとへブズソードの間に立ちはだかった！ なんて無茶な！

「もうやめてくれよ兄貴ー！ 一体どうしてしまったんだよ!？」

『……』

自分の男は、へブズソードの恐ろしい姿を前にしても、臆せず説得を続ける。その様子に、へブズソードも俺も動きを止める。

「思いだしてくれよ。数年前、兄貴と、主従の契りを交わした時のことを！」

『……』

必死に訴える子分。そして彼は、懐からバンダナを取り出して、さらに説得する。

「ほら、見てみれよこれを。あの時これを主従の証だといってくれたじゃねえか！ 頼

む、これを見て元に戻ってくれ！」

『……』

そしてまたしばし見つめあう。だが、それを哀しい結果に終わった。

『ギャハアアアア!!』

「ぎやあああ!!」

へブンスソードは、爪を振り下ろし、自分を踏みつぶしてしまったのだ！ フェイク D G 細胞による洗脳は、絆よりも強いものなのか。

「ミケロ・チャリオット！ あなたにはもう、絆や情というものはなくなってしまったのですか!?!」

俺は激昂し、ビームセイバーで切りかかるが、へブンスソードは再び上空へと飛び上がってかわす。

しかし、そこで俺は見た。

へブンスソードの目からオイルが流れ出していくのを。それはフェイク D G 細胞に操られ、本意ならずかつての自分を殺めた彼の血の涙だったのかもしれない。

その涙を流したへブンスソードが、そのまま上空から俺のオルタセイバーに襲い掛かろうとしてきた、その時！

ビームが放たれ、へブンスソードに直撃した！ それでも倒すには至らなかったが。

見ると、やっとゴルビーがローマに到着してくれるところだった。

それを見て、デモンが忌々し気に言う。

『増援が来たか……。今回はここまでのようだな……。命拾いしたな、ドモン・カツ

シュ』

そう吐き捨てる、デモンガンダムは、ガンダムヘブンスソードの背に飛び乗り、飛び去って行った。

その姿を見送りながら、俺は改めて思う。

人を支配し、悪へと駆り立てるフェイクDG細胞、そんなものは決して許してはならない！

俺は改めて、五人衆の打倒を心に誓うのだった。

29th Fight『進撃グラウンド・ガンダム！ 物資 輸送隊を守れ！』

砂漠の中、ネオ・クウエートの直轄地である、オールド・クウエート（地球上にある直轄地は、オールド・○○と呼ばれているのである）に向かうトラックとMSモビルスーツの群れ。今、オールド・クウエートは、人類の営みとガンダムファイトによる地球環境の悪化と、アナザー五人衆の破壊活動により、食料不足にあつた。この輸送部隊による援助物資の輸送がなければ、人々は餓えに襲われることになるだろう。

それを知っている彼らは、なんとしてもこの物資をオールド・クウエートに届けようと使命感に燃えていた。しかしそれは、無情にも打ち砕かれる。

彼らの眼前に、何者かが現れたのだ。

「な、なんだあれは？」

「き、巨大なMSだ!!」

「もしま、世界各地で暴れまわっている、アナザー五人衆とかいう……?」

隊員たちが話している間に、その巨大な陰はビームを放ち、物資を積んだトラックを爆破してしまった!

「と、トラックが!」

「迎撃だ! ただちに迎撃しろ!」

「了解!」

隊長の指令一過、ネオ・クウェートの量産型MS、サブツハが輸送隊の前面に展開し、敵にマシンガン浴びせる。しかし、その攻撃は相手に大したダメージを与えられず、巨影はさらに前進を続ける。

そして再びビームを発射! サバツハの一機が撃ち抜かれて爆散し、それに巻き込まれた数機も擱座してしまう。

「ひるむな、反撃しろ!」

「う、うわあー!!」

だが、輸送部隊の奮闘もむなしく、護衛のサブツハたちは次々と敵の巨大MSに破壊されていき……

ついに輸送部隊は壊滅した……。

* * * * *

そんな事件を起こったのを受け、俺たち新生デビルガンダム四天王と、ドモンたちシャツフル同盟を乗せた、輸送機『ゴルビー』は、その襲撃があったというルートに向かっていた。

このままにしては、オールド・クウエートの人々が苦しむということで、ネオ・ロシア政府を通して、俺たちに護衛支援の依頼が来たのだ。

ブリッジから、ナスターシャ女史が通信で指示を送ってくる。

『まもなく、問題のルートだ。準備はいいか？』

「はい。いつでもOKです」

ナスターシャに俺……ジャンヌ・エスプレッソはそう返答を送る。

続いてチボデーも返答を送ってきた。

『俺のマックスリボルバーもいつでもいいぜ。しかし、輸送隊を潰すとは、ひどいことしやがるぜ。人道支援の物資を積んでたんだろ？』

『そうだ』

ナスターシャはそう短く答えるが、その口調と声色に、義憤が強くにじみ出ていた。

『輸送隊を襲えば、この事件をきっかけに、ネオ・クウエートと周辺諸国の関係が悪化しますし、さらにはその周辺諸国間の間でも不信が広まり、深まっていきますからね。それが狙いでしょ？』

ジョルジュの考察に、アルゴも同意する。

『うむ。中東は、昔も今も不安定できな臭い匂いに満ちた地域だからな。カオス戦争の引き金とするにはびつたりだろう』

そして最後に、ナスターシヤ女史がめた。

『その通りだ。そしてそんなことを許すわけにはいかない。諸君らの奮闘に期待する』

「はい!」

* * * * *

そして到着すると、既にネオ・クウエートの護衛部隊が、巨大なMSと戦っていた。もうはじまっていたのか!

……が……。

サイ・サイシーが言う。

『なあ、あれはどう見てもグランド・ガンダムじゃないんじゃないか?』

『確かにそうですね。細かいところどころか、全てが違って見えるように見えます』

そこで、アルゴが何かがわかったように言った。

『むう、あれはネオ・イスラエルの拠点攻略用大型MS、『グレート・メルカバー』のようだ。大きく改造を加えてあるようだ』

ということとは……。

「なるほど、つまり今回の件、真犯人はネオ・イスラエルだったんですね」

確かこの前、アルゴが『五人衆の所業を利用して、策謀を巡らせる国もあらわれる』と

言ってたが、これもその一つか。

『そのようじゃな。さしづめ、この補給隊を潰して、オールド・クウエートを困窮させ、ネオ・クウエートとの交渉を有利にしようというところじゃろう』

師匠……東方不敗・マスターアジアの考察に、ジオルジュも同意する。

『ありそうですね。ニユースでも、ネオ・イスラエルとネオ・クウエートの間には、色々な係争があると聞きますから』

「でも、どんなわけがあるうと、こんなことを許すわけにはいきません！」

俺が怒りに燃えてそう言うと、ナスターシャが棒鞭をびしつと鳴らして言った！

『その通りだ！ 各機出撃、あの不埒者を叩き、輸送隊を守るのだ！』

「はー！」

『おう!!』

そしてゴルビーから、パラシュートを装着したガンダムたちが降下した！

* * * * *

俺たちが輸送隊の前面に着陸すると、さすがにネオ・イスラエルの大型MSはうろたえたようだ。何しろ、戦闘のプロであるガンダムファイターたちがやってきたのだから。

着陸した俺たちに、ナスターシャからの指示が届く。

『確認したところ、あの機体にネオ・イスラエルのマークはない。どうやら非正規部隊、使い捨ての奴らのようだ。どうせ潰しても、ネオ・イスラエルは黙殺するだろう。安心して、存分に暴れてこい!』

『OK、任せな!』

『腕が鳴るぜ!』

そう言つて、突進していくチボデーとサイ・サイシーを筆頭に、俺たちは『グレート・メルカバー』に襲い掛かった!

フライヤー・シールドIIに乗ったガンダム・マックスリボルバーが、グレート・メルカバーからの機銃を問題なくかわし、ギガンティック・マグナムで攻撃する。

『そーれっ!』

サイ・サイシーのガンダム・ダブルドラゴンが飛び上がると、両腕の竜の顎から炎を放射して浴びせた。

『輸送隊には一撃たりとも、当てさせはしませんよ!』

グレート・メルカバーからのミサイルやロケット弾は、ジョルジュのガンダム・ベルサイユがローゼス・ビットのオールレンジ攻撃で防ぎ……。

『グラビトン・メガハンマアアアアア!!』

『ガトリング・デススピアアアアア!!』

アルゴのガンダム・ボルトクラッシュのグラビトン・メガハンマーと、チョコのガンダム・ヘルトライデントのガトリング・デススパアが、巨大MSに炸裂する！
もちろん俺も。

「不埒な真似、許しはしませんよ！ スプラッシュ・ソードツ！！」

俺たち連合チームの猛攻を受けるネオ・イスラエルのグレート・メルカバー。さすがに無勢に多勢、しかも俺たちガンダムファイター相手では分が悪いと思ったのか、後退をはじめた。だがしかし！

ドグオオオオオオオ！？

どこかからビームが放たれると、それはグレート・メルカバーを貫き、爆散させた。

ネオ・イスラエルの証拠隠滅！？ いや、違う……。これは……！！

『グオオオオオオオ！！』

そして響く咆哮。これは、間違いない！

『おいおい、こいつぁ………』

『本当に来るとは思いませんでしたね………』

戦慄に彩られた、チボデーとジョルジュの声。

そして現れたのは……。

ベヒーモスを思わせる巨体。四門の巨大な砲門。

そう、獅王争覇グラント・ガンダムが現れたのだ!

* * * * *

『グオオオオオ! 潰す、潰すう……! シヤツフル同盟も四天王も、輸送部隊もみんな潰すうううう!!』

そう咆哮を放つグラント・ガンダムに、俺たちは戦慄に身体を貫かれながらも身構える。

「いいですか、皆さん! 輸送隊を壊滅させるわけにはいきません! 猛攻を仕掛けて、奴の注意をこちらにひきつけましょう!」

『わかった!』

俺がそう声をかけると、ドモンをはじめとして、みんなから返事がかえってきた。そして、俺を先駆けとして、みんながグラント・ガンダムに突進していく。

『喰らいな! ギガンティック・マグナムスペシャル!!』

デビルガンダム

対フェイク D G 細胞弾を装てんした、ガンダム・マックスリボルバーのギガンティック・マグナムスペシャルが火を噴いた! それにより、グラント・ガンダムの装甲が砕かれ、飛び散る。

『マシイイイン・キャノンツ!!』

ゴッド・ガンダムのマシンキャノンから放たれた対フェイク D G 細胞弾が、グラント

ガンダムに浴びせられる。

『はあっ!』

「ええいつ!!」

俺のオルタセイバーと、ジョルジユのベルサイユのビーム剣が鮮やかな軌跡を描き、
グラランド・ガンダムを切り裂く!

『酔舞・再現江湖デッドリーウエイブツ!! ……爆発!!』

師匠のデッドリーウエイブが炸裂! グラランドが爆炎に包まれる。

サイ・サイシー、アルゴ、ジョルジユ、チコモ、おのれの技でグラランド・ガンダムに
猛攻を加える。

しかしそれでも、グラランド・ガンダムの脚を止めるには至らない。

『くそつ、まだ止まらないのかつ……!』

「さすが、あの巨体だけのことはありますね。ですが、こちらに注意をひきつけ、輸送隊
がこのエリアを離脱する時間は稼げています。今はとにかく猛攻を浴びせるしか……」

そう、俺とドモンが言葉を交わしたその時!

『ウオオオオオオオオ!!』

グラランド・ガンダムが、山をも揺るがすほどの咆哮を放った! その咆哮は衝撃波と
なって、奴の周囲で攻撃していた俺たちに襲い掛かる!

「くうっ……いー!」

そしてその衝撃波の直撃を受けた俺たちは吹き飛ばされ、砂漠に倒れ伏してしまおう!
その俺たちを一瞥すると、グラウンド・ガンダムは悠々と輸送隊を追おうとする。いけない、このままでは輸送隊が……!」

「皆さん、大丈夫ですか……?」

『ああ、俺たち自身はなんとか大丈夫だ。だが、今の衝撃で、制御システムが異常をきたしてしまつて、動けん……っ! 師匠はどうですか?』

『わしも同じよ。いくらわしが無事でも、機体がいかれてはな……い!』

俺と師匠、チコの機体はDG細胞で強化されているが、それでも制御系は、通常のモビルファイター

M Fと同じである。奴の咆哮でダメージを受けてしまうのは、他のみんなと変わりないのである。

機体の復旧に必死になる俺たち。そうしているうちに、グラウンド・ガンダムは輸送隊に迫り、俺たちがなんとか立ち上がった時には、もう奴は輸送隊を、あと数歩でその巨砲の射程に収めるつてところまで進んでいた!

いけない! 今からではもう間に合わない!

だが、奴が射程に収めようと一步を踏み出したその時!

『グオオ!?!』

突然、グランド・ガンダムが砂に沈んだ!? そしてその機体が、爆発に包まれる！
そこにとどろく声。

『ゲルマン忍法、砂塵爆裂の術!! ……どうにか間に合ったようだな』

どこが聞いたような声が響いた。俺たちがその声のほうを向くと。

『シュバルツ!!』

ドモンの声。そう、太陽を背に、シュバルツのガンダム・シユピーゲルが腕を組んで直立していたのだ。彼が畏を張っていてくれたのか！ 助かった！

だが、グランド・ガンダムは諦めず、砲門をシユピーゲルに向ける。しかし。

『させん!!』

『甘いわっ!!』

シユピーゲルと、一足先に立ち直り、グランド・ガンダムに向かっていた師匠のマスターガンダム（偽装の必要がなくなったので、元の姿に戻しているのだ）が、その一閃で、四門の砲門を一刀両断した！

そうしているうちに、俺たちも二人に追いつき、さらに輸送隊も無事にこのエリアを抜けることができた。

『ぐいおお……! 許さぬう……! いつか、必ずううう……! グガアアアア……!』

それで作戦の失敗と、自らの不利を悟ったグラント・ガンダムはそのまま砂の中に沈んでいった。すぐさま、ゴルビーのナスターシャから通信が入る。

『奴と思われるエネルギー反応は、オールド・クウエートとは逆の方向に向かっていった。どうやら撤退したようだな。ご苦労だった』

なんとか守り切ったか、よかった……。だけど、シユバルツがいなければどうなっていたか……。

改めて、アナザー五人衆の強大さを思い知った俺たちは、再び護衛任務を再開するべく、輸送部隊のほうへと向かっていったのだった。その強大さへの戦慄と、それでも燃える闘志を胸に秘めながら。

30th Fight 『牙をむく奇門遁甲の陣！ デモンガンダムの謎！』

「何?! 新宿に、偽物の師匠が!?!」

輸送機ゴルビーの会議室で、ドモンがマスターシャ女史にそう聞いていた。

「ああ。新宿に、ヘルマスターガンダムがあらわれた。新宿にいる、ネオ・ロシア工作員からの情報だ」

そういうと彼女は、モニタをつけた。そこでは、ネオ・ジャパンのオールド・ジャパ^{モビルスーツ}ン防衛隊のMSと戦っている、ヘルマスターガンダムの姿が映しだされている。

流派東方不敗の技を鮮やかに使いこなす偽マスター・アジアは、たちまち防衛隊を撃滅してしまった。

「しかし、なぜ奴は新宿に……まさか!?!」

ドモンが衝撃を顔に浮かべて、師匠……東方不敗・マスターアジアのほうを向くと、師匠はうなずいて目を開いた。

「うむ。もしかしたら奴は、アナザーデビルガンダムの残骸を見つけ出し、復活させる気なのかもしれない」

「そんなのとんでもないぜ! すぐに新宿に向かわなきゃ!」

と、サイ・サイシーが言ったとき、突然、振動が会議室を襲った!

「な、なに!?!」

「何者かの襲撃か!?!」

俺たちは急いで、ブリッジへと向かった。

* * * * *

ブリッジに到着すると、そこではネオ・ロシアのスタッフたちや恵雲たちが戸惑った顔を浮かべていた。

「どうしたのだ?」

「は、はい。それが、ガンダムシユピーゲルが現れて、あれを機体に……」

スタッフの一人が、機外カメラの映像をモニターに映し出した。そこにあったのは

……。

「きよ、巨大な矢文……?」

レインが、呆然とそう言った。彼女の言った通り、ゴルビーの機体側面に、MSサイズの矢文が突き刺さっていたのだ。

「機体へのダメージは?」

「はい。それほど深く刺さらなかったんで、外部装甲の破損ぐらいで済みました」

「シュバルツ、いったいどういうつもりだ!？」

ドモンがそう問いたですと、モニターにシュバルツの姿が現れて、こう返事してきた。「お前たちが新宿に行くというのでな。注意を与えに来ただけだ」

「だからって、ゴルビーにアロー・レターを突き刺すか?」

チボデーがそう呆れながら返す。俺も同じ気持ちだ。風車の弥〇かよ。それとも、かげ〇うのお銀か? ここは水戸〇門の世界じゃないんだぞ、ドモンの兄疑惑があるネオ・ドイツのガンダムファイター。

と、そこで、モニターに何か地図のようなものが映し出された。これは……新宿の地図か? その地図のいくつかの地点にマークがつけられているが。

それを見て、ジヨルジュが質問する。

「これはなんででしょうか?」

「このポイントに、奴らが何か変な建造物を作っているらしい。何かあるのかもしれない。気を付けることだ」

シュバルツの助言にアルゴがうなずいた。そして。

「協力感謝する。しかし、お前は一体何者なのだ? 俺たちとの信頼をさらに深いものにするため、ゴルビーにやってきて、その覆面を取るべきではないかと思うのだが」

至極もつとものです。しかしそれに、シュバルツは、それまでの渋い態度が消えうせた

ように慌てふためいた。

「そ、それはできぬ! まだ私の正体を明かすべき時ではないのだ! さ、さらばつ!!」
そしてガンダムシユピーゲルは風に乗って姿を消した。逃げたな……。

一同は少し呆然としていたが、ナスターシヤが一足先に気が付いて言葉を発した。

「何はともあれ、シユバルツからの助言は頭にとどめておくように。それでは改めて新宿へ向かうぞ!」

「了解!」

そこで俺は、師匠が腕を組んで考えているのに気が付いた。何かあるのだろうか?

「師匠、どうしたんですか?」

「うむ、あの建造物の配置、どこかで見覚えがあると思つてな……。なんだつたか、むむう……」

* * * * *

そしてゴルビーは新宿上空までやってきた。

俺のガンダムオルタセイバー、ドモンのゴッドガンダムをはじめとした8機のガンダムが、パラシュートで新宿へと降下する。

「なんか、以前アナザーデビルガンダムで戦つた時とは、さらに変わってきていますね……」

『そうだな。何か、おどろおどろしきが増しているというか……』

俺の言葉に、ドモンがそう返してくれる。さらにサイ・サイシーも。

『ぶるる、オイラ、もうオールド・エジプトであつたようなものはもう嫌だよ……』

そういえばサイ・サイシーは原作では、ネオ・エジプトで、ファラオガンダムⅣ世にひどい目にあわされてきたんだったか。主にホラーな方向で。もしかしてトラウマになったのか？

だが、そんなことを言っている場合ではないようだ。ジョルジュがあることに気づいて注意を促してきた。

『皆さん、気を付けてください。計器がどうも怪しい動きをしています』

『俺のマックスリボルバーもだぜ。嫌な予感がするな……』

「畏が仕掛けられているのかもしれない。気を付けて進みましょう」

そして新宿を進むと……。

『ふははは、待っていたぞ、愚か者どもよ!』

「!!」

周辺に響く声。声のしたほうを見上げると、そこには東京タワーの頂上に直立した……。

「偽東方不敗・マスターアジア!!」

そう、偽マスター・アジアの乗るヘルマスターガンダムが待ち構えていたのだ!

『畏にかかりによくぞ参った。存分に貴様らをもてなしてやろう。わしの秘術でな!』

『秘術だ?!? 何するつもりだ!?!』

チボデーがそう言ったとたん、視界がぐにやりと歪み、頭がかすみがかかったようになる。

そして、俺は一瞬、気を失った。

* * * * *

そして俺が気が付くと……。

「なっ!?!」

おどろおどろしい姿をしたデスアーミー……いや、デスアーミーオルタたち6機が乱闘をしているところだった。ど、どういうことだ!?!

しかし、戸惑っている暇はないようだ。そのうちの1機がこちらを見つけ、攻撃してきたのだ!

「仕方ありませんね。まずはこいつを排除しなくては……!」

そしてビームセイバーを抜いて斬りかかるも……。

「なっ!?!」

再び俺は、驚きの声をあげた。そのデスアーミーオルタは鋭い動きで、そのビームセ

イバーの斬撃をさばいたのだ!

こいつ……強い!?

そして、俺とそいつは激しいファイトを繰り広げた。しかし、その敵の強さは破格で、防ぎ続けるのが精いっぱいだ。

だがそこで変化が起こった。そのデスアーミーオルタが何かに気が付いたようなのだ。

そいつは構えをとり……あの構えは、流派・東方不敗の?

そして一步を踏み出した!

「かあああああああつ!!」

俺の一瞬の隙を突き、奴の掌底が俺のオルタセイバーを直撃した!! しまった……!?

「……………」

しかし、不思議なことに、俺の機体には傷一つなかった。当身だったのか? そして目の前にいたのは……。

「し、師匠?」

『ふむ、ようやく正気に戻ったか』

そう、師匠のマスターガンダムだったのだ。ということは今は……幻術?

見ると、戦っているのも、デスアーミーオルタではなく、ドモンたちのガンダムだっ

た。

『詳しい話はあとじゃ。まずはこいつらを正気に戻さなくてはな』

そして師匠は、残りの6人にカツを入れ、正気に戻したのだった。十二王方牌大車併で。

* * * * *

『やれやれ、助かったぜ……』

とチボデー。

『奴の術にまんまとはまってしまおうとは……不覚です』

『気にはすることはない。わしもかかってしまったのだからな』

しよぼんとするドモンに、師匠がそう声をかける。

それにしても……。

「それにしても、この空間は一体なんなんでしょうか? 明らかに普通の空間とは違う

ようですが……」

『うむ。おそらくは、奴の術によって作り出された、結界のようなものであろう。みな、ここからは気合を入れて進めよ。少しでも気を緩めれば、さつきみたいに幻術に囚われることになるぞ』

『OK! わかったぜ……! ……』

そう言っておきながら、さっそく幻術にかかって、こつちに襲い掛かりそうになったサイ・サイシーのガンダムダブルドラゴンを、師匠が酔舞・再現江湖デッドリーウェイブで吹き飛ばした。

そして進むわけだが……。

『Oh My God……。一体出口はどこだよ……。それに、奴の姿も見えねえじゃねえか……』

チポデーが愚痴するのも無理はない。出口あるいは偽師匠の姿を求めて進んでいるのだが、まるで迷宮を進んでいるようで、なかなかそこまでたどり着けないのだ。

さすがにこの状況を、ジオルジユも危惧しているようだ。

『いけませんね……。これが続けば、また気持ちに隙ができてしまうかもしれません。そうなれば、奴の術中にはまることに……』

『むう……』

ジオルジユの指摘を受けて、師匠がうなる。

その時、俺はあることに思い出した。師匠に聞いてみることにする。

「師匠、もしかしたら、シユバルツが教えてくれたあの情報は、この結界に関係しているのではないでしようか？」

『あの建造物の配置……？ 配置……結界……そうか！』

『何かわかったのですか、師匠!』

聞いてきたドモンに、師匠はうなずいて答えた。合点が言った様子で。

『うむ。これは奇門遁甲の陣よ! やっと思い出したわ』

『キモントンコウ?』

チボデーの疑問には俺が答えた。

『はい。中国に古来から伝わる、占いの一種です』

『それを応用して結界を作るのが、『奇門遁甲の陣』じゃ。わしも使えるが、それをここまで再現するとは、さすがわしの偽物よ』

『マスター・アジアのおっちゃん。感心している場合じゃないぜ。どうすればいいんだ?』

サイ・サイシーに突っ込まれ、師匠は咳払いをして返した。

『うむ。奴は奇門遁甲に従った配置に要石を置くことで、この結界を生み出しているであろう。それを破壊すれば、結界を解除することができるはずじゃ』

『だが、その要石はどこに……? あっ! あのシユバルツからの情報か!』

アルゴの言葉に、師匠は力強くうなずいた。

『うむ、あの配置は、まさにその奇門遁甲の配置よ。答えは既に知っていたわけじゃな』
『それでは、さっそくそこに行ってみましょう』

* * * * *

そして、改めて、あの地図データを呼び出して、それをもとに進んでいると……あつた！

『やつと見つけたぞ、あれが要石だな！』

ドモンが叫ぶ。確かにそこには、不気味な形をした、水晶のようなものでできた柱があつた。

『あれを全て壊せば、結界とやらを解けるわけだな！ 楽勝だぜ！』

『いえ、楽勝とはいかないようですよ。要だけあつて、守護者がいるようです』

ジョルジユの言う通りだ。その柱の前には、テムジンガンダムを模したデスアーミーオルタが立ちはだかつていた。

『あれを倒さないと、柱は破壊できないようだな。それじゃ、派手にやつてしまおうぜ！』

サイ・サイシーの言葉をきつかけに、俺たちと守護者とのファイトがはじまった！

とはいえ……一対八でかかれば楽勝……とはいかなかつたが。

サイ・サイシーのガンダムダブルドラゴンがデスアーミーオルタに飛び掛かった途端、ダブルドラゴンと奴の周囲をバリアが包み込み、他の機体はその中に入ることができなくなったからだ。

「どうやら、一対一でないといけないらしい。」

「とはいえ、結果はサイ・サイシーの勝利。ガンダムダブルドラゴンが極・流星胡蝶剣でデスアーミーオルタを撃破し、それとともに柱も砕け散ったのだった。」

*** ** *

『むむう! あの時を抜け出すとは!!』

そして今。俺たちは、偽マスター・アジアのヘルマスターガンダムの前に立っていた。あの後も難なく、俺たちは残りの柱とその守護者を打ち倒し、結界を解除することに成功したのだ。

『ふん、あのような術にそう簡単に引かかると思っておるのか、たわけめ!』

「最初はちやっかりと引かかって、同士討ちしていませんでしたか?」

『余計なことは言わんでいい。さて……これまでの借り、一気に返させてもらうぞ、偽物よ!』

そう言うのと、師匠は構えをとった。それに応じて、偽マスター・アジアも構える。

『ならばこの手でお前たちを仕留めるまで! いでよ、デスアーミーオルタ軍団!』

奴の号令とともに、周囲に多数のデスアーミー・オルタが出現した。俺たちを取り囲むとすぐに戦闘態勢をとる。

『皆、この偽物はわし自らが相手をする。お前たちはその小物どもの掃除を頼んだぞ』

「はい！」

『わかりました。師匠こそお気をつけて！』

『うむ。ではいくぞ！ ガンダムファイトッ！』

『レディイイイ！』

『ゴオオオオオオツ!!』

そしてファイトがはじまった！

* * * * *

激戦である。師匠は偽物と一対一のファイト、そして俺たちは沸いてきた多数のデスアーミーオルタと大立ち回りを繰り返していた。

ドモンが超級霸王電影弾でデスアーミーオルタたちを薙ぎ払っていく。

チコが槍の乱れ突きで、次々と敵を鉄クズへと変えていき、チボデーがロッキー・モドを発動させ、目にもとまらぬ動きで、デスアーミーオルタを葬っていく。

サイ・サイシーがダブルドラゴンの両腕の顎からの炎でデスアーミー・オルタたちを焼き払い、ジョルジュはローゼス・ビットのオールレンジ攻撃で敵を撃ち抜いていた。

そしてアルゴは、敵からの攻撃をもとせず、ギガグラビトン・ハンマーでデスアーミーオルタたちを薙ぎ払っていく。

もちろん俺も。

「スプラッシュ・ソード!!」

スプラッシュ・ソードで次々と、デスアーミーオルタたちを貫いていった。

一方の師匠と偽物は激しいバトルを繰り広げていた。決勝開始前時点のデータを反映させているだけあって、師匠と互角の勝負を繰り広げている。すごい。

師匠の無数の突きを、偽物のヘルマスターが見事にさばっていく。

偽物のアッパーと、師匠の打ち下ろしのパンチがぶつかりあう。

お互い、打ち合い、さばきあう。

そして、二人の飛び蹴りが交錯した。

だがそこで、突然師匠のマスターガンダムがふらついた。いけない! もしかして、

あの病か!?

そしてその隙を偽マスター・アジアは見逃さなかった!

『勝機なり! 受けよ、我が奥義を! ぬあああああ!!』

構えを取ったヘルマスターガンダムが金色に輝いていく。まさか!?

それに気づいた師匠も、また構え、マスターガンダムが金色に染まっていく。そして。

『流派・東方不敗が!』

『最終奥義!』

『『石破天驚拳————!!』』

マスターとヘルマスター、二体のガンダムが同時に、石破天驚拳を放った！ まさか、偽マスター・アジアもあの奥義を撃てるなんて！

二つの石破天驚拳はぶつかりあい、エネルギーを周囲にまき散らしていく。そのエネルギーに、巻き込まれたデスアーミーオルタたちが塵へと変わっていき、俺たちはこらえながらそのぶつかりあいの結末を見届けることしかできなかつた。

というか、少しでも気を抜けば、俺たちも、この膨大なエネルギーの前に塵になつてしまふそうさ。

『ほう……わしのこの奥義まで撃てるとはな……ゴホツゴホツ』

そう言いながらせき込む師匠に、偽物がほくそ笑みながら言う。

『その通りよ！ 言つたはずだ。わしには、お主のデータが使われているとな！ 貴様のような半病人など、我が拳で消し去つてくれるわっ!!』

だがそこで、師匠がにやりと笑つた。

『我が拳で、わしを消し去るだと……たわけがっ!!』

師匠のマスターガンダムの輝きがさらに増した！ それにあわせて、師匠の天驚拳が勢いを増し、偽物のそれを圧倒していく！

『うおお……こ、これは……!?!』

『馬鹿め、わしは決勝大会、さらにこれまでの戦いと、さらに死地をくぐつてきておる。』

ただデータを移植されただけのお主とは違うわっ!!』

そしてついに、均衡が崩れた! 二人分の天驚拳がまとめて、偽物のほうに向かっていく。勝ったっ!

しかし。

そこに、何者かのエネルギー波が放たれ、二人分の天驚拳のエネルギー弾を四散させてしまった。それによる衝撃が辺りを襲う!

そこに響く、どこかで聞いた声。

『情けないぞ、偽マスター・アジア。それでも、我らアナザー五人衆か』

『で、デモンガンダム様!!』

* * * * *

『情けないぞ、偽マスター・アジア。それでも、我らアナザー五人衆か』

『で、デモンガンダム様!!』

サンシャインビルの頂上に、黒いガンダム……デモンガンダムが直立していた。

『お、お待ちください。今のは……』

『言い訳はいい。貴様が必ずとあるのでやらせてみたが、この体たらくか』

でもなんか、偽物とはいえ、師匠がこんなヘコヘコしてるのは奇妙な感覚。

『まあいい。引き上げるぞ』

『は、ははあ……』

そして引き上げようとする二機。そこに。

『待て、逃がさんっ！』

「ドモン！」

ドモンのゴッドガンダムが撤退しようとするデモンガンダムに飛び掛かっていく！

『爆熱！ ゴオオオオツドツ！ フィンガアアアアアアアア!!』

不意だったため、デモンガンダムはカオシック・フィンガーで迎え撃つことができなかつた。

かろうじてかわすが、ゴッド・フィンガーがデモンガンダムの頭部をかすめ、その一部が小さく爆発を起こす。

『やってくれたな……』

それと同時に、デモンガンダムから俺たちに通信が届く。その画像を見て、俺たちは驚愕した！

砕けた仮面。そこからのぞいたデモンガンダムのファイターの目は……。

ドモンのそれと瓜二つだったからだ！

ドモンのそれと瓜二つだったからだ！

ドモンのそれと瓜二つだったからだ！

大切なことなので三回言いました。

『お、お前は一体!?!』

『何度も言わせるな。お前たちに答えてやる義理はない……!』

そう吐き捨てる、デモンガンダムはゴッドガンダムを蹴り飛ばして吹き飛ばした。そして。

『今一度言おう。ドモン・カッシュ。必ずお前の首をもらい受ける。その時まで、せいぜい腕を磨いている』

そして二機は、呆然とする俺たちを残し、光となって飛び去っていた。

『あいつは……一体……?』

誰もいない新宿に、ドモンの困惑した声が風に紛れて流れて行った。

* * * * *

一方そのころ。ネオ・ジャパンコロニーに、一件のメールが届いた。

メールの送り主は……。

『コウゾウ・ミカムラ』。

レイン・ミカムラの父親である……。

31t h F i g h t 『穀倉地帯絶対防衛線！ へブンズソード迎撃作戦!!』

ネオ・ジャパンコロニーの一室。室温が氷点下に設定されたこの部屋で、兵士数人とある男が、何者かが封印されたカプセルの前に立っている。

男はカラト。ネオ・ジャパンの軍総司令官であり、政府副首相、そして、ネオ・ジャパンのガンダムファイト委員会委員長である。

そのカラト委員長がカプセルのテンキーを操作すると、ぷしゅーと音を出して、カプセルの蓋が開いていった。中から白い冷気があふれ出る。

そして封印されていた男が、ゆっくりと目を開いた。

「私は……カラト委員長……」

「おお、目が覚めたか、カツシユ博士。告発により、あなたの冤罪が明らかとなった。あなたと、そしてあなたの息子たちに苦しい思いをさせてきて済まなかった。お詫びを申し上げる」

そう謝罪するカラト委員長に、カツシユ博士と呼ばれた男……ドモン・カツシユの父親、ライゾウ・カツシユ博士が首を振って、穏やかに言葉を紡ぐ。

「謝ることはありません。私も、そしてあなた方ネオ・ジャパン政府も、あの男に踊らされていただけなのです。それより、例の事件があれからどうなったのかを教えてくださいませんか? 時と場合によっては、収束のため、私自ら地球に降りなくてはなりません」

「もちろんだ。今、地球では大変なことになっていてな……」

* * * * *

そのころ、俺……ジャンヌ・エスプレッソたちを乗せたゴルビーは一路、オールド・ウクライナを目指していた。

ヘブンスソードも、そのオールド・ウクライナを目指して飛行しているという観測結果を得たからだ。しかも、奴一機だけではなく、数十機のデスアーミーオルタを引き連れているという。

オールド・ウクライナには一大穀倉地帯がある。これを焼き払うのが狙いだろう、とナスターシヤ女史が推測した。師匠こと東方不敗・マスターアジアも、その推測に同意しておられた。

これを許せば、世界は食料不足に襲われ、その少なくなった食料を巡って世界がさらに混乱してしまうのは避けられないだろう。

それを防ぐため、俺たちはオールド・ウクライナを目指しているのだ。

そして、いよいよオールド・ウクライナに到着！

「皆、間もなくオールド・ウクライナだ。降下準備をはじめてくれ」

「はい！」

だが師匠はなぜか、腕を組んだまま動かない。

「師匠？」

「すまぬが、わしはここで一時離脱させてもらおう」

「な、なぜですか!？」

ドモンがそう問いただすと、師匠は彼のほうに真摯なまなざしを向けて口を開いた。

「お前に、拳を通して託したいものがあるのだ。そのために、身体を癒し、準備を整えて

おきたい」

「師匠……」

「だが、そこで奴らの襲撃を受けたら……」

師匠の言葉に、チボデーが懸念を述べた。それは俺も考えていたことだ。俺たちとは別行動になったところで、五人衆の襲撃を受けて、やられたり、最悪、奴らに洗脳されたら洒落にならない。いつもの師匠なら大丈夫だと思いが、ゲホゲホ言ってたからな……。万が一の可能性はある。

誰か護衛に着けるべきだが……。

と、そこで。

「心配はいらん。話は聞かせてもらった」

「!?」

俺たちがいる会議室に、どこかで聞いたような声が聞こえた。

周囲を見回していると……いた。物陰に腕を組んで立っているシュバルツが。お前は山〇んか。

「私に団体行動は難しいからな。責任をもって、マスター・アジアを護衛させてもらう」
確かにシュバルツがいれば、問題はないだろうな。彼なら裏切ることもないだろうし。

「わかりました、それではお任せします。いいですよね、ドモン?」

「ああ、シュバルツがついていてくれるなら心配ない。よろしく頼んだ」

「ああ、任せてもらおう。それでは!」

そしてシュバルツは、またしても風に紛れてこの場から消えた。……師匠もろとも。

* * * * *

そして、俺たちはゴルビーからパラシュート降下した。そして、それから時を経ずして敵影が視界に入ってくる。

観測通り、ガンダムヘブンスソードと、彼の指揮下の数十機のデスアーミーオルタた

ちだ。

奴らも俺たちに気が付いたらしい。まず、デスアーミーオルタたちが背中の翼を切り離し、パラシュート降下してくる。

『やつこさん、来やがったぜ!』

「ええ。師匠がいなくて不安ではありますが、頑張りましょう!」

『おう!』

そして戦いが始まった! 奴らに一機たりとも、ここを突破させるわけにはいかない!

『超級! 霸王! 電影弾! ー! ー! ー!』

ドモンが超級霸王電影弾で、多数の敵を薙ぎ払っていく。

『サイクロン・パンチ! バーニング・パンチ!! うりやうりやうりや!!』

チボデーのガンダムマックスリボルバーがサイクロンパンチやバーニングパンチを連発し、デスアーミーオルタたちを吹き飛ばしていく。

『うりやあ!!』

サイ・サイシーのガンダムダブルドラゴンは極・流星胡蝶剣で絨毯爆撃を行って撃滅していく。

他、アルゴ、ジョルジユ、チコモおのおのの技で、デスアーミーオルタたちを倒して

いった。

もちろん俺も。

「いきますよ! リントーネード・ブラストオオオオ!!」

ガンダムオルタセイバーを稲妻の竜巻と化して、デスアーミーオルタたちに突撃! 多くを薙ぎ払っていった。

そこに。

『ヒャーハハハアツ!!』

戦っている俺たちの上空をヘブンスソードが通り過ぎた! いけない、この防衛線を突破させるわけには!

俺はオルタセイバーを大きく跳躍させ、奴に追撃し、後方からマシンキャノンを浴びせた!

『ジャンヌウウウウウ!!』

今の攻撃で、まずは俺を仕留めるべきと判断したのだろう。奴は上空から、着地した俺に襲い掛かった!

俺はビームセイバーを抜き、奴を迎え撃とうとした、ところで……!

「!! くう……!」

突然、胸を鋭い痛みが襲った! さっきのリントーネード・ブラストの反動か!? あ

まりの痛みに応戦することはおろか、立ち止まることもかなわない。

その俺に、ヘブンズソードが襲い掛かる。その時！

* * * * *

『リントーネード・ブラスト』を放った反動による苦痛で動けない俺に、ヘブンズソードがとどめを刺そうと上空から襲い掛かったその時！

数本の矢がどこから飛来して、ガンダムヘブンズソードを襲った！

『イトコロヲオオオオオオオ!!』

そう叫び、ヘブンズソードは矢を回避して、一時上空へと退避した。光の矢はそのまま、俺の周囲に突き刺さって消え去る。

「……………」

俺が涙で視界がにじむ中、矢が飛んできたほうを見ると、そこにはネオ・ジャパンのマーキングがされたシャトルと、そのシャトルを護衛するように滞空している、シャイニングに似たガンダムが。

あれは……もしかしてライジング？

シャトルとガンダムはさらに降下してくる。やはり思った通りだ。降りてきたのはまさにライジングガンダム。

シャイニングガンダムの試作機として開発されたガンダムで、対デビルガンダム用に

開発された機体とのこと。武装はビームナギナタとビームボウのみと、そこらへんのガンダムと変わりないが、デビルガンダム用と称するからには特別な機能がついているのだろうか？

だけど、あれには誰が乗ってるんだ？ 原作でのファイターだったレインは今、ゴルビーに乗っているんだが。

そんな俺の疑問をよそに、ライジングは次々と、デスアーミーオルタをビーム・ボウで撃ち抜きながら降下してくる。

そしてライジングは、着陸すると名乗りを上げた。

『待たせたな、若者たち！ おっさん仮面、ただいま参上したぞー!』

……。

あのー、その声で俺とドモンには正体もろばれなのですが、おっさん仮面さん。

それはともかく、おっさん仮面のライジングの加勢で、俺たちはさらに勢いを盛り返し敵に猛攻を加えていく。もちろんそのころには俺もだいぶ回復し、戦列に参加。デスアーミーオルタを切り払い、ヘブンスソードにマシンキャノンを浴びせていく。

やがて、デスアーミーオルタもあと数機となり、形勢が不利と判断したヘブンスソードは、それ以上の戦いを断念し、残ったデスアーミーオルタとともに引き上げていくのだった。

と、そこでライジングが膝をついた。

もしかして、どこか怪我をしたのか!? ……と思ったら。

『いたた……やはり痛み上がりで無茶したのがいけないかったのか、くたくただし身体中が痛い。やはり、おっさん仮面でも、無理はダメだな』

……。

* * * * *

さて、シャトルも無事着陸し、中の人たちとおっさん仮面（仮）たちも、俺たちと合流した。

シャトルの乗員のトップは、なんと！ ネオ・ジャパンのガンダムファイト委員長、カラト委員長だった。そしてその横に立っているのは……。

「……」

入院用のパジャマを着て、白衣を羽織った仮面をつけた胡散臭いおっさん……おっさん仮面。

「あの、カラト委員長たちがこちらにきた理由はともかく、なんでそんな仮面をつけているのですか、ライゾウ・カッシュ博士」

「何を言ってるんだ？ 私はおっさん仮面だよ。はっはっはっ」

「いや、素直に正体を明かしてくれ父さん。その声で丸わかりなんだから」

実の息子にそう言われて、おっさん仮面は観念したように、仮面に手をかけた。

「むう……。もう少し謎の男でいたかったのだが」

「いや、その声であればれてるんですって。特にドモンには」

思わずそうツツこんでしまう。

何はともあれ、おっさん仮面は渋々、仮面を外した。そこから現れた顔は……。やはり、ドモンの父親、ライゾウ・カツシユ博士だった。

「やっぱり父さんじゃないか。でも、冷凍刑が解かれたんだな? よかった……」

「ああ。ミカムラ博士からの告発メールで、私の冤罪が明らかになってね」

「お父様が!」

レインが驚きの声をあげる。

カツシユ博士が語ってくれたところによると、ミカムラ博士の端末から、カラト委員長のもとにメールが届き、アルティメットガンダム強奪は、ウルベとミカムラ博士が仕組んだこと、ウルベがデビルガンダムを何かの目的のために悪用しようとしていることが明かされたという。

当然、それを聞いてレインは衝撃を受ける。

「そんな……。お父様が……」

そう言っただけでおられるレイン。ここはフォローしてやらないとな。最終形態のコア

になられたら大変だし、何より知人が悲しむところはあまり見たくない。

「そうふさぎこまないで。お父様は命をかけて、全てを明かして、カツシユ博士の無実を証明してくれたんです。それで彼の罪は許されたと思います。そして、それをあなたが気に掛けすぎることもないと思います」

「ジャンヌ……ありがとう……」

そこでドモンが口を開いた。

「それで、ウルベとミカムラのおじさんの行方はわからないのか？」

「うむ。地球に降りたところまではわかっているのだが、そこから消息がばったりと途絶えてしまったのだ」

それを聞いたアルゴが、俺に顔を向ける。

「もしそれが本当だとしたら、奴がアナザーと接触するのはもちろん、本物のデビルガンダムと接触したら大変なことになる。ジャンヌ、お前のほうで、デビルガンダムの現在位置は把握できないのか？」

申し訳ないのだが……。俺は首を振ってこたえた。

「ごめんなさい……。さすがにそこまでは把握できません……」

確かに、『ジャンヌ・エスプレッソ』のDデビルガンダムG細胞クローンである俺は、本体と精神的にリンクしている。しかしそれはあくまで、互いの見聞きしたものが相手に伝わる、と

いうレベルでしかないのだ。位置や状態がわかる、という便利なものではない。

それに、俺としても気にかかることがある。そのリンクも最近、不安定になってきているのだ。俺からのリンクを、本体が拒絶して、閉じこもっていることが時々あるような……。

「ですが、アルゴが言う通り、ウルベとデビルガンダムの接触は阻止しなければなりません。一刻も早く、二人を見つけないければ」

「わかった。では、ネオ・ジャパンの軍と情報部とで、二人を探すことにしよう。お願いできますかな、カラト委員長」

「了解した。さっそく指示を出しておこう。さて、わしらが地球に降りてきたのは、実はもう一つ理由があるのだ。それについて、君たちの助力を頼みたい」

「なにか?」

ナスターシャ女史がそう尋ねると、カラト委員長は重大なことを口にした!

「近々、オールド・イングランドのロンドンで、コロニー国家の代表団が集まり、コロニー国家平和会議が行われることになった。君たちには、ロンドンまでのわしらの護衛と、ロンドンの防衛をお願いしたいのだ」

32th Fight『危うしロンドン！獅王争覇、女王を潰すか？』

俺たち……俺、ジャンヌ・エスプレッソとチコ・ロドリゲス、カンちゃんの新生デビルガンダム四天王、ドモン、チボデー、ジョルジュ、サイ・サイシー、アルゴのシャッフル同盟……を乗せたゴルビーは、途中へブンズソードやウオルターの襲撃を受けたりしながらも、どうにかオールド・イングランドのロンドンに到着することができた。

だが、それもつかの間！ 機内に警報が鳴り響くことになる！

『グランドガンダム接近！ グランドガンダム接近！ 各ガンダムは、ただちに攻撃準備に入れ！ 繰り返し！ ……』

ナスターシャ女史の放送とともに、ハンガーが慌ただしくなりだした。

「ちっ、コーヒープレイクもなしでファイトかよ！ 忙しいったらありやしないぜ！」
「まったくです。ティータイムを楽しむ暇ぐらいほしいものですね」

そう愚痴りながら、チボデーとジョルジュが、それぞれのガンダムに走っていく。

「……」

アルゴは無言でガンダムボルトクラッシュに乗り込み、機体を起動させる。

そんな中、ふと見ると、ドモンの父親、ライゾウ・カツシュ博士も乗り込む準備を進めていた。おいおい。

「あの……もしかして、ライジングに乗り込むつもりなんですか?」

「どうか父さん、ファイトなんてできるのか?」

俺とドモンがそう尋ねるも、カツシュ博士は平然と、準備をしながら答えた。

「心配はいらん。これでも若いころは、ボクシングや空手で慣らしてきたからな。さすがにこの年だと正面きつてのファイトは無理だが、後方からビームボウで援護するぐらいならできる」

「それだと、カツシュ博士のライジングに敵を近づけないように気を付けないといけませんね、ドモン」

「ああ、もちろんだ」

と、そこで博士がぼつりと。

「でも、あのラバースーツを着こむのはとても大変なんだよなあ……なんとかならんものか」

「……」

「……」

ならどうしてライジングに乗り込む。アルティメットガンダムの開発者。

* * * * *

そして俺たちがゴルビーから発進すると、ちょうど敵の大群が向かってくるところだった。

まるでイナゴのように押し寄せるデスアーミーオルタ。その後方にグランドガンダムの巨大な影が見える。

『よし、ではさっそく、先制攻撃を仕掛けるとしようか』

カッシュ博士の声。博士のライジングはビームボウを空に向けてかまえる。そして、ビームボウにビームの矢が発生する。

『光雨掃滅、ライジング・シャワー!!』

ライジングガンダムが上空に光の矢を撃つ。すると、その上空から無数の光の矢が降り注ぎ、デスアーミーオルタを次々と貫いていった。すげえ！ 確かこんな技、原作にはなかったぞ。

『まだまだいくぞ。ライジング・シャワー!!』

ライジング・シャワーの二射目が放たれた。再び多くのデスアーミーオルタが空から降り注ぐ光の矢の餌食となった。

それにしても、この博士、ノリノリである。

二射のライジング・シャワーで敵は数を減らしたが、それでもまだまだ多くの数が接

近してくる。そして、俺たちとの格闘戦が始まった!

『ジャンヌ、お前はオールド・ウクライナの件がある。あまり大技を放たず、無理はしないようにするんだ!』

「はい、わかっています、ドモン!」

そうドモンに返ししながら、接近してくるデスアーミーオルタを斬り捨てる。一方のドモンも、ビームソードで敵を一刀両断した。

カッシュ博士は後方から味方を援護したり、俺たちを突破した奴を撃ち抜いたりしてくれている。他のメンバーも奮闘しているようだ。

『ガトリング・デススピアー!!』

チョコのヘルトライデントの、ガトリング・デススピアーが炸裂! その前方に迫っていた数機のデスアーミーオルタがスクラップと化した。

『でかいのをぶちかますぞ。離れていろ!』

『ちよ、ちよつと待ってくれよ、アルゴの兄貴!』

アルゴのガンダムボルトクラッシュが黄金色に輝きはじめた。ゴールド・パイレーツモードを発動させたのだ。そして。

『炸裂! ガイアクラッシュアアアアアア!!』

『ま、待ってって、うわああああ』

ボルトクラッシュが大地に拳を叩きこむ！　すると地面が大きく割れて、多くのデスアーミーオルタを吹き飛ばした！　なお、サイ・サイシーのダブルドラゴンは、その地面に足を取られて倒れこんでしまった。そこに、別のデスアーミーオルタが襲い掛かるが……。

『そう簡単にやられるかよっ！　ダブル・ドラゴンファイヤー!!』

それをトリツキーな動きでかわし、両腕の竜の顎から炎を発して撃破した。

『次から次へとキリがないね！　マシガン・パーンチッ!!』

『いきなさい、ローゼス・ビットたち!』

ガンダムマックスリボルバーの豪熱マシガンパンチが、多くのデスアーミーオルタたちを吹き飛ばし、ジョルジュは、敵のビームをローゼス・リフレクター・ビットで防ぎながら、ローゼス・ビットで敵を撃滅していく。

そんな風に激闘を繰り広げる中、ジョルジュはあることに気が付いた！

* * * * *

一息ついたジョルジュが見たもの、それはグランドガンダムが、自分たちの脇を突破して、中心部へと突進するところだった。

しかもその先にあるのは……!

『いけません、あれは……バッキンガム宮殿!』

そう、ネオ・イングランドの女王陛下がいる Buckingham 宮殿だった! ネオ・イングランドの首相や政府はネオ・イングランドコロニーにいるのだが、女王はあえてオールド・イングランドにいるのだ。

何はともあれ、それに気づいたジオルジュは。

『すみません、みなさん。前線は頼みます!』

そう言うと、ガンダムヴェルサイユを突撃するグランドガンダムに向けた。

『グオオオオオ!!』

そして、グランドガンダムが宮殿に迫ろうというところで!

ガシッ!!

ガンダムヴェルサイユがグランドガンダムを押しとどめた!

グランドガンダムはそのパワーを武器に、ガンダムヴェルサイユを跳ね飛ばし、宮殿

を踏みつぶそうとする! だが。

『はああああああ!!』

ジオルジュは力を振り絞り、ガンダムヴェルサイユのジェネレータをフル出力にして、そうはさせじと押しとどめ続ける! 押しとどめながら、ジオルジュはグランドガンダムのチャップマンを説得する。

『正気に戻ってください、チャップマン! ネオ・イングランド女王は、あなたたちに

とって大切な存在のほうです！ それを、あなた自身の手で踏みつぶそうというのですか!?!』

『グオオオオオ!!』

しかしチャップマンは、説得が耳に届いていないかのように、さらに前進しようとする。ヴェルサイユが少しずつ後退し始めた。

『ぐ、このままでは……!』

『ジヨルジユくん、もう少し持ちこたえてくれ!』

『カツシユ博士?』

そう、カツシユ博士のライジングガンダムも追いついてきたのだ。

『いくぞ、ライジングに秘められた、対デビルガンダムの秘策! 浄化じょうかせいこう聖光フラツシン

グ・アロー!!』

ライジングがビームボウを放つ! それらはグランドガンダムではなく、その周囲に、まるで取り囲むように突き刺さった! そして、その光の矢に囲まれた空間が清らかな光に包まれる!

『う、うう……わ、私は……』

『……?』

グランドガンダムが動きを止めた。聞こえてくる声は、いづらか正気を取り戻したか

のように聞こえた。

『わ、私はなんとということをしようと……。……。う、ぐあああああ! 私、ぐおとおお……。!』

そこで再びグランドガンダムが暴れ始めた! だがそれは、暴れるというより、まるで苦しんでいるかのようだ。

そしてひとしきり暴れると、グランドガンダムは地面に潜り、姿を消した。

他のデスアーミーオルタたちを全滅させたジャンヌが駆け付けてきたのは、ちょうどその時である。

* * * * *

戦いが終わり、みんなが帰還したゴルビーのMFハンガー。

「ジョルジュ、優男なのにやるじゃないか! あの巨大な奴を正面から受け止めるなんてよー!」

「あの時は、無我夢中でしたから……」

謙遜したように言うジョルジュに、サイ・サイシーも賞賛の言葉を贈る。

「それでもたいしたもんだぜ! それに、あのグランドを苦しめたあの攻撃もな!」

「うむ。あれはおそらく、ライジングに積まれた、対デビルガンダム用の切り札と見たが?」

そう聞いてくるアルゴに、カツシユ博士はうなずいて説明をはじめた。

「うむ。あれは特殊な電磁場を浴びせることで、DG細胞デビルの支配力を弱めるというものだ。あれを使うと、洗脳が弱まり、ファイターの正気を一時的にだが取り戻すことができる」

「すごいじゃないか。それがあれば、他の五人衆やアナザー、そしてデビルにも……」

ドモンがそう感心したかのように言うと、カツシユ博士は険しい顔をして首を振った。

「いや。フェイクDG細胞で洗脳された者には有効だが、自らの意志でアナザーの手下になった者には残念ながら有効ではない。それに、有効範囲が決められているから、グランドぐらいの大きさならまだいいが、あまりに大きくなりすぎるとこれまた効果はない。何より、奴らも次回からは対策を講じてくるだろう」

「最後の……しかも、無効になる可能性がある切り札つてところか」

「うむ」

「これからの戦い、一筋縄にはいかないかもしれないかもね……」

「そうだな……」

俺が目を向けた空は、この次の戦いの激しさを予言するかのようになり、どこまでも赤く染まっていた。

33th Fight 『総力戦！ 狙われたコロニー国家平和会議！』

グラントガンダムとの激闘があつた翌日。

ついに、オールド・イングランドはロンドンの迎賓館で、コロニー国家平和会議が開催された！

各コロニー国家の代表がここに集まり、カオス戦争を回避する手立てを話し合うのだ。

これがうまくいけば、少なくともカオス戦争が起こることはないだろう。なのだが……。

「平和会議、開始そうそううまく言っていないようだな」

ロンドン上空に滞空しているゴルビーの会議室で、チボデーがドリンクを飲みながらそう話を振ってきた。それに、腕を組んだままうなずいて、アルゴが言う。

「うむ。戦争回避の枠組みを作るうえで、主導権をどの国が握るか、はもちろん、関係がよくない国同士が、国境近くで起こった事件を、五人衆ではなく相手の仕業だと糾弾しあっていることもあるそうだ」

「カヲト委員長が議長役をしているが、かなり調停に難航している、つて父さんが言ってたな」

ドモンの言葉に、サイ・サイシーが呆れたように言った。

「世界がカオス戦争の戦火に包まれるかどうかの瀬戸際だというのに内輪もめなんて、なーに考えてるんだよ、お偉いさんたちは」

サイ・サイシーの愚痴に、チコがなだめるように言う。

「会議なんてそんなものだ。目指すものは同じだが、それぞれが求めるものは国によって違うからな。もつとも、俺もサイ・サイシーと同じ意見だが」

そう言うチコの口調は苦々しい。ガンダム・ファイトに振り回された経緯があるからか、上層部の愚かさに辟易しているのだろうか。

そこに。

『ガンダムファイターたちへ！ 五人衆が来訪した！ ヘブンズソードが北から、グランドが南から、ヘルマスタアが西から、そしてデモンガンダムが東から襲来してきている！ ただちに迎撃態勢をとれ！』

ナスタシーヤ女史からの放送が、敵の襲来を教えてくれた。

「……来ましたか。行きましよう、みなさん！」

「ああ。俺はデモンガンダムを迎え撃つ。レイン、お前はこれがはじめてのファイトだ

が、大丈夫か?」

「ええ。会議のオブザーバーをしているライゾウおじさまの分まで戦ってみせるわ!」

そう、レインは今回、カツシュ博士の代わりに、ライジングに乗って戦うことになったのだ。そして二人はハンガーに走っていった。

続いては、チボデー。

「それじゃ俺は、ヘブンズソードを迎え撃つぜ。残りの奴らは任せた!」

「オイラも行くよ! 空を飛ぶあいつには、オイラのトリツキーな技が相性いいだろうしな!」

チボデーとサイ・サイシーもハンガーへ。

「ならば俺は、グラランドを迎え撃とう。あのパワーを抑え込むには、ボルトクラツシュのパワーが必要だろう」

「私もグラランドガンダムを迎え撃ちます。私も、やりあえるほどの馬鹿力があるかわかりましたからね。いざという時には役に立つでしょう。残ったヘルマスターガンダムは、ジャンヌとチコに任せてもいいですか?」

ジョルジュの言葉に、俺とチコもうなずく。

「はい。私では、師匠と同じ実力を持つ偽物を倒すには力不足かもしれませんが、持ちこたえることぐらいはできます」

「ああ」

「よし、では行くー！」

そして俺たちも、ハンガーへと走っていった。

* * * * *

かくして、ロンドン上空を飛行中のゴルビーから、まずはフライヤーシールドIIに乗ったマックスリボルバーと、ネオ・ロシアのS F S、レニーンに乗ったサイ・サイシーのガンダムダブルドラゴンが発進する。

それから俺たちのガンダムがパラシュート降下し、南、西、東へと散っていった。

決戦がはじまる!!

* * * * *

「見えたぜ、チボデーの兄貴！ あの鳥野郎を先頭に、たくさん来やがる！」

「よし、それじゃお出迎えするとするぜ！」

「よっしやー！」

そして二機は、北の空から接近してくるヘブンスソード率いる飛行型デスアーミーオルタの軍団に突撃していった。

「いきなりいかせてもらうぜ！ 豪熱！ マシンガン・パンチっ!!」

マックスリボルバーから、炎に包まれた多くの拳が放たれ、前方のデスアーミーオル

夕を撃ち抜いていく。そうして切り開かれた先に、ガンダムダブルドラゴンが躍り込む!

「そーれっ!」

ドラゴンクロウで、一機の頭部を握りつぶし、

「はあっ!」

ビームスピアで薙ぎ払い、

「とりゃああ!!」

火炎放射で円形に焼き払う!

「へへん、どんなもんだい!」

と自信満々に言ったのもつかの間、別のデスアーミーオルタが放ったビームで、乗っていたレニーンを撃墜されてしまう!

「うわっ!!」

だが、それでサイ・サイシーを仕留めたと思ったのは甘かった。ダブルドラゴンは、レニーンから飛びのいた数瞬後には変形し、炎の胴体をもった巨大な龍となった! そして、そのデスアーミーオルタを含めた多数の敵機に、炎を浴びせて焼き払った!

「調子に乗るからだ! まだ油断するには早いぞ」

「へへ、まだまだこれからだぜ、兄貴!」

そう言葉をかわすところに。

「ガンダムウウウウウ!!」

ガンダムヘブンスソードが突っ込んできた! 二機はあわててその突撃をかわす。変形して飛行することが出来るダブルドラゴンに対し、マックスリボルバーはフライヤーシールドIIを失ってしまったら、後は短時間の滞空しかできない。失うわけにはいかなかった。

マックスリボルバーは、再び突っ込んできたヘブンスソードをジャンプしてかわす。そして、再びフライヤーシールドIIに着地したところで。

「対フェイクDデビルガンダムG細胞弾を喰らいな! 遠慮はいらんぜ!」

ギガンティックマグナムで、対フェイクDG細胞弾を放つ。ヘブンスソードはそれを華麗な動きでかわすが、その後方のデスアーミーオルタがそのかわした弾を喰らって爆散した。

そしてヘブンスソードは、今度はシールドに乗ったマックスリボルバーからは死角となる真下から突撃を仕掛ける! そこに。

「させねえよ!」

サイ・サイシーの炎の龍が突進! 途中でMモビルファイターF形態に変形し、そして突進した勢いのまま、ビームスピアを振るった!

「オノレエエエエ!!」

ビームスピアはかわされたが、ヘブンズソードは必殺の一瞬を逃してしまい、この場を一時離脱した。

「サンキューな、チビ!」

「へへん、兄貴のほうこそ、安心するのはまだ早かったみたいだな!」

「言ってる!」

そして、再び戦闘を再開する。

* * * * *

一方、ロンドンの南側。

「オオオオオオオオ!!」

そこでは、グランドガンダムが、その巨体とパワーを武器に、ネオ・イングランド軍の攻撃をもともせず、前進していた。目指すは言うまでもなく、迎賓館。平和会議の会場である。

ただ一機だけだが、ネオ・イングランド軍には太刀打ちできないようであった。

そこに、ガンダムヴェルサイユとガンダムボルトクラッシュが駆け付ける。

「よし、行くぞ! ジョルジュ、援護を頼むぞ!」

「ええ、かしこまりました」

「うおおおおお!!」

ボルトクラッシユは突進すると、グランドガンダムの巨体に拳を叩きこんだ! そのパワーに、装甲の一部が砕け散るが、すぐに修復されてしまう。

そして、ボルトクラッシユとグランドガンダムが激突! ボルトクラッシユの巨体が大きく後退する。だがそれでも、アルゴはひるまない!

「うおおおおお!!」

ボルトクラッシユのツインビクトルエンジンをフル稼働。ゴールデン・パイレーツ・モードを発動し、そのパワーでグランドガンダムを受け止める!

「いきなさい、ローゼス・ビットたち!」

そこに、ガンダムヴェルサイユがローゼス・ビットを展開! ビットを前面に集結させて一斉砲火! 巨大なビームがグランドに直撃した!

「ウオオオオオオ!!」

だがそれでも、グランドガンダムはびくともしない! グランドはボルトクラッシユがしがみついたまま跳躍して着地! その衝撃で地面が大きく跳ね上がり、ボルトクラッシユを跳ね上げた! そして、地面に叩きつけられる。

「ぐう……! まさか、ガイアクラッシャーのような攻撃まで使ってくるとは……。この化け物め……!」

そのボルトラツシユに、グランドガンダムが踏みつぶそうと迫る!

「させませんよ! ローゼス・ハリケーン!」

そこにガンダムヴェルサイユがローゼス・ビットをグランドの周囲に展開し、ローゼス・ハリケーンを放つ!

「ファイナーレ!!」

そして爆発!! グランドガンダムはかなりの損害を受けたが、それでも戦意を失うことはなかった。

「くそ、なんてタフな奴だ!」

だが、それでもボルトラツシユが立ち上がり、態勢を立て直すまでの時間稼ぎにはなったらしい。アルゴは立ち上がり、構えを取り直した。

* * * * *

そして、こちらはロンドンの西側。

俺……ジャンヌ・エスプレツソと、チコ・ロドリゲスは今まさに、ヘルマスターガンダムが率いる、デスアーミーオルタ軍団を迎え撃とうとしていた!

「私は一気に大将首を狙ってみます。チコ、雑魚の処理と援護をお願いしていいですか?」

「ああ。戦えないカンちゃんに分まで戦い、見事援護を果たしてやろう。一機たりとも、

お前に攻撃はさせない」

「ありがとうございます。いぎー！」

そして俺たちは、前進してくる敵の軍団に突進していった！

「スプラッシュソード!!」

俺が突進しながら、スプラッシュソードで敵を撃破していき、その後方でチコが、

「ガトリング・デススピアー!!」

ガトリング・デススピアーで俺に迫る敵を撃破していく。

「よし、ジャンヌ、飛べー！」

「はいー！」

チコの言葉に従い、俺はオルタセイバーを高く跳躍させた。そして！

「ヘル・バニシング・トルネード!!」

チコのガンダムヘルトライデントが槍を大きく風ぎ、竜巻を作り出す！

それは進路上にある敵機を次々とスクラップへと変えていき、師匠の偽物までの道を

切り開いた！

その中を俺たちは駆ける。

「むうう、きおったか！」

「偽マスター・アジア！ 師匠の名を散々騙ったことの使用料、ここで全額払ってもらい

ますよー!」

「ほざけ!」

そう吠えるとともに、偽物のヘルマスターガンダムが、俺に拳の連打を放ってきた! やはりその攻撃は、本物の師匠と同じく鋭い。

「ふははは! どうだ! 貴様は本物には勝てぬだろう。ならばそれと同等の力を持つわしにも勝てぬということだ!」

「やってみなければわかりませんよ! それに!」

「お前と戦っているのはジャンヌだけじゃない!」

俺がビームセイバーで斬撃を放つのを、偽物がかわす。そして反撃を返そうとしたところに、チコがビーム・トライデントで突きを放った!

* * * * *

そして、ロンドンの東側。ここでは、ドモンのゴッドガンダムと、謎のファイターのデモンガンダムが対峙していた。

「覚悟してもらおうぞ、ドモン・カッシュ。今度こそお前の首をいただく!」
「そうはいかん! お前を倒し、正体を見せてもらおう!」

二機が同時に力強く一步を踏み出した音が戦いのゴングだ。

ゴッドガンダムがビームソードの居合抜きを放つ! それをデモンは跳躍してかわ

し、上空から蹴りを見舞う。

だが、ドモンはそれを明鏡止水の動きでかわし、着地したデモンガンダムに猛攻を加えた。

「ぬう!?!」

だが、今度はドモンが驚く番だった。彼の明鏡止水の境地から放つ、激しくそれでいて隙のない攻撃を、デモンガンダムはことごとくかわし、さばき、弾いていくのだ。

そしてデモンガンダムが反撃に転じる。それにドモンは再び驚愕した。

「こいつの攻撃の筋……俺の攻撃に酷似している!?!」

デモンガンダムの攻撃の動き。それは、驚くほどドモンのそれに似ていたのだ。その攻撃をかわしていくドモン。

そこに、後方からビーム・アローが放たれ、デモンガンダムはそれを飛びのいてかわした。

「邪魔をするか。ならば……」

デモンガンダムは再び跳躍し、矢を放った相手……レインのライジングガンダムに飛び掛かった!

「きゃあ!」

「レイン!」

デモンガンダムの飛び蹴りを、ドモンのゴッドガンダムはレインをかばい、身を挺して受けた。

「ぐうっ!!」

「ドモン、大丈夫!？」

「ああ。レインこそ、気をつけろ!」

そして二機で再び構える。だが、それでもデモンは動じなかった。

「なかなかやるな。だが、ここにきているのは、俺たち四人だけだと思うか?」

「なに!？」

「ど、ドモン、あれ!」

「なに……なに!」

ドモンはまた驚くことになる。彼らの頭上を、五人衆の最後の機、ウォルターガンダムが飛び去って行ったのだ。

「くそ、こいつらは罔だったのか! レイン、奴を追ってくれ!」

「わ、わかったわ!」

「行かせると思うか……!」

ウォルターを追撃しようとするレインを、背後から攻撃して阻止しようとするデモンガンダムだが……。

「はあっ！」

「ぬうっ!!」

ドモンのゴツドの攻撃により、それを阻止され、吹き飛ばされる。

「それはこっちの台詞だ！ 行かせはしないぞ！」

「おのれ……」

そして二機は、再び向かい合い、構えあつた。

* * * * *

ウォルターガンダムは、迎賓館の近くまで到達した。

ネオ・イギリス軍のMS部隊の対空砲火を苦も無くかわしながら、ビームを撃つ。それによって、数機のMSが撃破された。

その爆発の音は、当然、迎賓館にも聞こえてくる。

中は突然、騒然となった。当然逃げようとする者もいる。

「ここは危険だ！ 逃げよう!!」

そう言つて立ち上がろうとするある国の代表を、カツシユ博士が制する。

「お待ちいただきたい！ 今外では、ガンダムたちが敵を食い止めるため、奮闘している。彼らは若いながらも、この会議を守り、平和を取り戻すために戦っているのです。しかしあなた方はそれにも関わらず、自分の利権に縛られ、会議を紛糾させているだけ。」

あまつさえ、敵襲におびえ、逃げようとする始末。それでいいのですか!? あなたたちはガンダムたちに恥ずかしくはないのですか!?

「う……」

「むう……」

カツシユ博士はさらに続ける。

「私たちができることは、この会議を成功させ、彼らに報いることだけのはず! それもせず、ただ逃げようとするのは、彼らを裏切ることには他ならないのです!!」

その言葉に打たれた各国代表たちは、再び席についた。

「う、うむ、その通りだ……」

「彼らに報いるためにも、この会議を成功させなければ……」

* * * * *

ウォルターガンダムのファイターはほくそ笑んでいた。

ほとんどのネオ・イングランドのMSは排除した。これで、もう障害はない。ここから迎賓館を破壊し、会議を吹き飛ばすことなど、造作もない。HBの鉛筆をベキつとへし折るより簡単なことである。

「ふふふ、これで終わりですよ……」

そう言つて、彼がビームを発射しようとしたところで……。

「うおっ!？」

背後からビームの矢が飛来し、ウォルターの左の触手を撃ち抜かれた!

彼が向き直ると……。

「そうはさせないわよ!」

ライジングガンダムがビームボウを構えてこちらに接近してくるところだった!

「忌々しいですね! ならば、あなたから先に葬ってあげましょう!」

「その声……ネオ・ホンコンのウォン!？」

レインが驚いている隙に、ウォルターはライジングに体当たりして、吹き飛ばした! そして、地面に叩きつけられるライジングの正面に再び滞空する。

「さあ、これでとどめですよ!」

「くっ、こんなところで、やられるもんですか……!」

ウォルターが突進してくる!

「あなたのような人は……」

目前に迫ってきた!

「女の脚に蹴られて吹き飛ばされなさいっ!!」

そのウォルターに、レインは鋭い蹴りを放つ!

「うおお〜! お、おのれえええええ!!」

それで吹き飛ばされたウォルターは、これ以上はヤバイと判断したのか、そのまま逃げ去っていくのだった。

それを見て、他の五人衆も撤退していく。

* * * * *

そして、戦いが終わった後。

「喜んでくれ。お前たちのおかげで、会議はまとまったよ。これで、カオス戦争の危機はひとまず去った」

「そうか! それはよかった」

カヲト委員長の説明に、ドモンがそう喜びの声をあげた。

俺たちの奮闘が、平和の礎になったのなら、本当に本望だ。

「だが、喜んでばかりもいられん。五人衆は引き続き、破壊活動を続けるだろうし、デビルガンダム、そしてウルベの足取りもつかめない」

「まだ、ウルベの行方はつかめないのかい?」

カッシュ博士の懸念を聞き、チボデーがカヲト委員長に尋ねる。それに、委員長は申し訳ないような顔をしてこたえた。

「うむ。まだつかめない。軍や情報部が血眼になって探しているのだが……」

「そうですか……」

一刻も早く、ウルベを見つけ出してほしい。彼がデビルガンダムを見つけてしまえば、とんでもないことになる。そんな予感がしたからだ。

そこに。

ズズウン……。

「な、なんだ!?!」

「て、敵襲かよ!?!」

アルゴとサイ・サイシーがそう声をあげる。

ゴルビーを大きな揺れが襲ったからだ。

そしてブリτζジに上がるが……それは杞憂のようだった。

シユバルツから、巨大矢文が届いたのだ。何度も言っているが、この世界は水○黄門の世界じゃないんだぞ。

それはともかく。文の内容は……。

ドモンに託す準備ができたから、ネオ・ホンコンのランタオ島に来てほしい、というものだった。

34th Fight 『真なる伝承! マスター魂の天驚拳!!』

俺たち新生デビルガンダム四天王と、ドモンたちシャッフル同盟を乗せたネオ・ロシアの輸送機ゴルビーは、拍子抜けするほどあっさり、ネオ・ホンコンのランタオ島に着した。

五人衆の襲撃があるかと思っただが、奴らも先の戦いで消耗した戦力を立て直しを図っているのか、襲ってくることはなかったようだ。

そして輸送機を降りた俺たちは、ガンダムに乗ったまま、ランタオ島の火山の頂上を目指した。おそらく師匠は、そこで待っている。

果たして、その通りだった。

頂上に作られた、本来は第13回大会のバトルロイヤル・レースのゴールとなるはずだったリング。

師匠とシユバルツはそこで、それぞれの機体に乗って待っていた。

『……来たか、待っておったぞ』

『師匠! 身体の具合はいいのですか?』

ドモンの問いに、師匠は無論というようにうなずいた。

『うむ。万全ではないが、それでも、お主と一戦交えるぐらいなら問題はない。……構えよ、ドモン。戦いを通して託そう。わしの中の、真のキング・オブ・ハートとしての力と、わしの奥義、石破天驚拳を』

『はいー』

『そして、この戦いで聞かせてもらう。お主が至った答えを。その答えが理にかなったものであり、そしてお主がわしに勝った時は……わかつておるな、ジャンヌ』

そう言つて、師匠は俺……ジャンヌ・エスプレツソに目を向けた。その目から、師匠の言いたいことを読み取った俺は、それに同意してうなずく。

「はい。その時には、ドモンたちの理を受け入れ、人類追放計画を中断させます。そして、デビルガンダムを再び封印しましょう」

『うむ』

『師匠……！』

師匠が再びうなずく。

俺が人類追放計画を推し進める動機の一つは、師匠とドモンの破滅的、悲劇的な対立をなくすことだ。それは既に叶っている。そのうえで、ドモンたちの理が、俺たちの計画以上に、地球の保全、復活に適したものであれば、俺たちの計画に固執する理由は何一つ

ない。

『それでは行くぞ、ドモン! 流派・東方不敗はあ!!』

『王者の風よっ!』

そして、ドモンのゴッドガンダムと、師匠のマスターガンダムが、激しく拳を打ち合わせる。

『全新!』

『系列!』

『天破侠乱!!』

そして、今一度打ち合わせた拳が、激しい火花を発した!!

『見よ! 東方は赤く燃えているうろうう!!』

そして再び構えなおす師弟のガンダム。

『ガンダムファイトオ!』

『レディーゴオオオオオ!!』

* * * * *

二機のガンダムが激しく拳と蹴りを交差させる。

師匠とドモンが、突きを、蹴りを放ち、攻撃を防ぎ、かわす。

そして、二人の飛び蹴りが交差した! それだけでリングが崩壊した!

『すごい戦いだ……』

そうチコが言う。チボデーがそれにうなずいて口を開く。

『ああ。この戦いのレベルは、もはや俺たちが入れるレベルじゃない……』

『でも、不思議だぜ。二人の拳からは怒りも憎しみも感じないぜ』

サイ・サイシーの言葉に、俺もうなずく。

「ええ、これが本当のガンダムファイトなのかもしれませんね」

戦いはまだ続く。

ドモンの猛攻！ ゴツドガンダムが放つすさまじい突きの連打を、師匠のマスターガンダムがさばきつづける。

そこに蹴り！ マスターガンダムは吹き飛ばされたが、蹴りが決まった瞬間、師匠は後ろに飛んで勢いを殺したので、それほどダメージはひどくないようだ。

『なんの、まだまだあ！ 十二王牌大車併!!』

マスターガンダムから、気で作られた十二機のマスターガンダムが放たれ、ゴツドガンダムに同時に飛び蹴りを放った！

『ぐわああ!!』

そして地面に叩きつけられる。

『帰山笑紅塵!! さあ、立ち上がるがよいドモンよ。お主はまだまだやられる男ではな

かろう?』

『はい……!』

『うむ。これぐらいで倒れていては、キング・オブ・ハートの名が泣こうぞ。行くぞ!』
そして師匠のマスターガンダムが、超級霸王電影弾の構えを取った。それに対し、ドモンも同じく超級霸王電影弾の構えをとる。

二機のガンダムがオーラに包まれた。

『行くぞお! 超級!』

『霸王!』

『『電影弾——!!』』

そして二機は同時に、光の竜巻の弾丸となって突撃! ぶつかりあう!!

その様子を見て、ジオルジユが言う。

『聞こえますか?』

アルゴがこたえる。

『ああ』

「互いの想いが響きあい、共鳴しあう拳の響き……」

そして、竜巻が消えて、後には拳をぶつけあう二機のガンダムの姿があった。

『むう。ドモン、それがお主の答えか』

『はい。過激な方法をとるのではなく、一人ひとりが自分ができる限りのことで、地球を救う行動をとる。確かに一人ひとりのできることは小さいかもしれませんが、ですが、人々みんなが少しずつでも、それを続けければ、それは大きく、強い力となりえます！
そうなれば地球を救うことも可能はず!!』

そして二機のガンダムが離れ、間合いをとりあつた。

『よし。お主の答え、確かに受け取つた。ではこれが最後の試練じゃ。構えい、ドモン。見事天驚拳で、わしの天驚拳を破つてみせよ!』

そして師匠のマスターガンダムが奥義、石破天驚拳の構えをとつた!

* * * * *

師匠のマスターガンダムが、天驚拳の構えをとつた。その機体が金色のオーラを帯びていく。

『構えい、ドモン。お主も、我が流派を学び、大会でわしの天驚拳を見て、自らもこれを放てるようになっていようであろう? 見事、天驚拳を放ち、わしの天驚拳に打ち勝ち、勝利と、キング・オブ・ハートの真の力をつかみとるがよい』

『……はい!』

そしてドモンも構える。やはりその機体も、黄金に光輝いていく。

『ごくぞい!』

師匠が吠える。それに対してドモンも応える。

『応! 流派!』

『東方不敗があ!』

『最終!』

『奥義!』

二人の輝きはどんどん増していき、ついにはランタオ島全体が金色の光に包まれた!

そして!!

『『石破天驚拳—————!!』』

叫びと共に、二人の機体から巨大という言葉では生ぬるいビームの塊が放たれた!

そして激突!!

その衝撃で、周辺の大木がなぎ倒され、岩が吹き飛ばされていく!

「チボデー!」

チボデーギヤルズから避難するように声がかけられるが、チボデーも、そして俺たちもここから逃げ出すつもりはない。

なぜなら!

『俺たちはここを動かねえ!』

アルゴが続ける。

『最後まで見届ける!』

俺が言う。

『なぜならこれは!』

最後にジオルジユが叫ぶ。

『私たち、いえ、地球に関わる者たち全てが見届けるべきものだから!!』

技同士の打ち合いは、やはり、流派の熟達者で、天驚拳についても十分に使いこなせる師匠に対して、今使ったばかりのドモンは分が悪いようだ。少しずつ後ずさっていく。

そのドモンに、師匠の櫓が届く。

『どうした、そこまでか? お主の力など、そこまでのものにすぎぬか!? それでもわしの弟子か、キング・オブ・ハートかあ!!』

師匠が力をこめ、さらに押していく。

『足を踏ん張り、腰を入れぬか! そんなことでは、わしを超え、地球を救うことなど、夢のまた夢ぞ! この馬鹿弟子があ!!』

ついに、ドモンのゴッドガンダムが膝をついた! 万事休すか!?

『何をしておる!?! 自ら膝をつくなど、勝負を捨てたものものすることぞお!!』

ついに師匠の天驚拳がドモンのゴッドガンダムに……!!

しかし。

よく見ると。

天驚拳はドモンを撃破しようとしたのではなかった。原作の時と同じように、ゴッドガンダムを下から持ち上げ、立たせようとしていたのだ。

本当に師匠馬鹿な人だ……。知らずのうちに、俺の目から一筋、涙が流れた。

『さあ、立て! 立ってみせえい!!』

『……はい! 師匠の檄、しかと受け取りました! 今こそ全力を振り絞り、師匠を超えてみせます! はああああ!!』

そして再び立ち上がったドモンが気合を入れなおし、天驚拳で、師匠のそれを逆に押し返していく。そして。

『はああああああ!!』

『ぬおおおおお!!』

そして爆発! あたりは爆炎に包まれた!!

* * * * *

爆炎がおさまった。その後には、拳を突き出したままのゴッドガンダムとマスターガンダムが構えをとったままにいる。

やがて、マスターガンダムが膝をついた。それと同時に、背中ウィングバインダー

が砕け散る。

『見事じゃ……今こそ、お前は本物のキング・オブ・ハートぞ……』

そして自らの手をかざす師匠。その手にはキング・オブ・ハートの紋章が光り輝いている。その紋章はさらに強く輝いたかと思うと、静かに消えていった。ドモンに完全に受け継がれたのだろうか。

安堵が辺りを包む。しかし！

『ぞくっ!!』

師匠が突然、口を押え吐血した!! もしかして、ついに師匠の身体に限界が!?

『師匠!』

駆け寄るドモンに、師匠は苦笑しながら返した。その苦笑に無念さをにじませて。

『わしもこれで限界か……。もう少し先を……。お主が大成する様を、地球がその緑を取り戻す姿を見届けたかったが……。それも許されぬか……。無念じゃ……。』

『師匠……。』 どうかしつかりしてください……。』

だが、その二人を引き裂くような声が、戦慄と衝撃とともにとどろいた!

『ふん……。茶番にしては上出来だったぞ。マスター・アジア、ドモン・カツシュ!』

『弱ったじじいを殺すなど、羽虫を潰すよりも簡単なこと! 今こそ、おいぼれを倒し、わしが真のマスター・アジアとなつてくれるわ!』

『みんな切り裂いてやるぜえええ!!』

『今度こそ、お前たち全てを蹂躪してくれるうううう!!』

『さあ、いよいよ最後の時ですよ!』

夕日をバツクに、アナザー五人衆が現れたのだ!!

35th Fight 『シユバルツの正体！ ついに訪れた再会!!』

『ふん……茶番にしては上出来だったぞ。マスター・アジア、ドモン・カツシユ!』

『弱ったじじいを殺すなど、羽虫を潰すよりも簡単なこと！ 今こそ、おいぼれを倒し、わしが真のマスター・アジアとなつてくれるわ!』

『みんな切り裂いてやるぜえええ!!』

『今度こそ、お前たち全てを蹂躪してくれるうううう!!』

『さあ、いよいよ最後の時ですよ!』

ドモンと師匠……東方不敗・マスターアジアの対決が終わつたのもつかの間、師匠が吐血して倒れたそのタイミングを合わせたように、アナザー五人衆が現れた！ もしや、この時を狙っていたのか!?

『ここをお前たちの死地にしてやろう。はあっ!!』

デモンガンダムが構えると、その手から光弾が放たれ、周辺を焼き尽くし始めた！ それを合図に、五人衆のガンダムたちが襲い掛かってきた！

偽東方不敗マスター・アジアは、デモンガンダムとともに、ドモンのゴッドガンダム

と激しい戦いを繰り広げ、チャップマンのグランドガンダムは、前方にあるものを踏みつぶしガレキにしながらこちらに迫る!

ミケロのヘブンズソードは、以前よりもさらに素早い動きで宙を舞いながら、その羽と爪で全てを切り裂き、引き裂き、ウォルターガンダムはビームで周囲のものを吹き飛ばす。

その暴威、パワーは、前に戦った時以上だ!

『くそつ、奴らめ……!』

『みんな、今は態勢を立て直すことと、マスター・アジアを安全なところに連れて行くのが先だ! 奴らを迎え撃ちながら後退するのだ!』

シュバルツの言葉に、サイ・サイシーが愚痴をぶつける。

『こんなとんでもない奴ら相手に、無茶ぶりしてくれるよ! でも、わかったよ!』

そして撤退しながら、奴らに応戦するが、奴らがパワーアップしたのと、それとみなが師匠の昏倒で動揺しているのか、かなり苦戦しているようだ。

その戦いの中、チボデーが言う。

『なんて強さだ。このままでは、ゴルビーまでもたないぜ!』

そこに現れたのは……。

『私に任せてもらおう!』

『父さん!』

そう、ライジングガンダムに乗った、ライゾウ・カツシユ博士だ!

『いくぞ。光雨掃滅、ライジング・シャワー!!』

カツシユ博士のライジング・シャワーが、五人衆に降り注ぎ、その脚を止めた!

『もう一発いくぞ、ライジング・シャワー!!』

さらにライジング・シャワーが炸裂! みんなが撤退する時間をさらに稼ぐ! そして。

『これでおしまいだ! 浄化聖光フラツシング・アロー!!』

フラツシング・アローを放つ! さすがに既に対策をしてあるのか、彼らは少しの間ひるんだぐらいだったが、それでも、なんとか俺たちはゴルビーの近くまで戻ることができたのだった。

しかし! これでなんとかなった……と思うのは、まだ早かった!

* * * * *

撤退中の俺たち。カツシユ博士の援護のおかげもあり、もう少しでゴルビーにたどり着ける! というところで。

『逃がさん、ドモン・カツシユ!』

『デモンガンダム!!』

上空からデモンガンダムが急襲してきた!

「邪魔はさせません! スプラッツシュ・ソード!!」

『女は引っ込んでいろ!』

「きやあつ!!」

スプラッツシュソードで迎撃するも、なんとデモンガンダムは、そのスプラッツシュソードの刺突を蹴りではねのけ、そのまま俺のガンダム・オルタセイバーにキックを炸裂させた! その威力に、俺は吹き飛ばされてしまう!

『今度こそ、お前の首をもらおう! カオシツク・フィンガー!!』

『ゴッド・フィンガー!!』

いつぞやのように、カオシツク・フィンガーとゴッド・フィンガーがぶつかりあう! 激しいスパークが周囲を白く染めた。

『お前は何者だ! なぜ、そこまで俺をつけ狙う!』

『ふ……いいだろう。今日でお前は俺にやられるのだからな!』

そう言うと、俺たちの機体のスクリーンに、奴の顔が映し出された! それを見て、俺たちは愕然とする。なぜならその顔は……。

『こ、この顔は……俺?!』

『その通りだ。俺は、シャドウ・ドモン。お前の細胞とDG細胞とを掛け合わせて生まれ

たクローンに、お前の中の邪心をコピーして生まれた存在だ』
『俺の中の邪心だと!?!』

そうドモンに聞き返されたシャドウ・ドモンの目が赤く光る。

『そうだ。お前は感じていたのではないか? お前とは違い、あらゆることに長けた兄、キョウジ・カッシュに対しての嫉妬を?』

『ち、違う、そんなことは……!』

その言葉が、ドモンに動揺をもたらしたのか、ゴッド・フィンガーの光が弱まり、デモンガンダムがさらにゴッドガンダムを押し。

『思っていたのではないのか、兄なんていなければいいと』

『そ、そんなことはないっ……!』

ドモンのゴッドガンダムが、ついに膝をついてしまう。それが、ドモンの心が折れかけていることの証だった。

『さあ、俺に首をとられるがいい。お前の全てを喰らった時、俺はお前に成り代わり、ドモン・カッシュとなるのだ!』

万事休す……その時!

* * * * *

ドモンが今まさに敗れようとした、その時!

『折れるな、ドモン! そんな偽物の言葉に屈してはならん!』

シュバルツの声があたりに響いた! みんなが声が出たほうを向くと、そこには……。

ゴルビーの機体の上に乗し、腕を組んで直立するガンダムシュピーゲルの姿があった!

『シュバルツ!』

『ふん、何をたわごとを』

だが、シャドウの言葉に、シュバルツは動ぜず、彼を厳しく断じた!

『黙れ! 誰の心にも邪心はあるもの! それは変えることはできん! ある偉大な漫画家が言っていた。『誰だつて叩けばほこりは出る』と!! だがそれに引きずられるだけが人間ではない! その邪心を受け入れつつも抑え、善き生を貫くことができる心の力があるのだ、それが人! 人の偉大さなのだ!』

そして目を閉じ、くわつと開いた!!

『そして私は……ドモンを、弟を、お前が持ち、騙る邪心に負けるような男に、育てた覚えはないつっ!!』

まるで、集中線が入っていきそうな形相で言い放つ。

おおおおお!! なんてすばらしい演説! 俺は思わず、心の中で拍手をしてしまっ

た。とりあえず、育てたのはシユバルツじゃなくて両親だろう、というツツコミはわきに置いておこう。

少しの沈黙。そこで、ドモンがおそろおそろ口を開いた。

『え、お、弟……？ シユバルツ、今、俺のことを弟と……？』

『はっ!!』

『そういえば、キラルに襲われた時も、確か自分のことを兄と……？』

またそこで沈黙。まあ、原作を見ていた俺からすると、シユバルツの正体がキョウジ（正確にはそのクローンだが）というのは、周知の事実ではあるのだが。とはいえ、この世界のキョウジは、シユバルツを生み出すことはできないはずだがなあ。

と、そこで俺たちのスクリーンに映し出されたシユバルツが、覆面に手をかけた！

『ええい、仕方あるまい！ 今ここで正体を明かしてやろう!』

そして、覆面を取った。その素顔は……！

『に、兄さん……?!』

そう、キョウジでした。俺にはわかっていた……けど、どういうことだ？ キョウジのクローンとしてのシユバルツは存在しえないはずなんだが。

そしてドモンはやはり、シユバルツの正体が、カツシユ博士の証言により誤解が解けたとはいえ、それまで憎み、追っていたキョウジだったことに、シヨックを隠し切れな

い様子だった。その証拠に、今にもシャドウのカオシックフィンガーが、ゴッドを捉えようとしている。

『ど、どういうことだ……?!? 兄さんはデビルガンダムのコアになっていたはず……?!?』
 「……ごめんなさい、ドモン。それは過去の話。今、デビルガンダムのコアになっているのは私……正確には私の本体なんです」

『なんと?!?』

「細かいことは後にして……」

『うむ。とりあえず、弟から離れてもらおうか、偽物よつ!!』

俺のスプラッシュ・ソードと、シュバルツのクナイ攻撃が同時に放たれた! それを受け、デモンが一時ドモンから離れる。

* * * * *

デモンがゴッドガンダムから離れたところで、他の五人衆が追い付いてきた。せつかくここまで撤退してきたのに、これはきついな……。

だが、シユピーゲルのシュバルツ……いや、キョウジは、不敵に言った。

『いくぞ、ドモン。私たち兄弟の力のパワーは、こいつらには負けぬということを見せてやるのだ!』

『はー!』

そして、二人が気を高めあい、その機体が黄金に染まる。その気のパワーに、五人衆はたじろぎ、手を出せずにいる。

『俺のこの手が真つ赤に燃える！』

『兄弟の絆示せと！』

『轟き叫ぶつ!!』

『ぬおおおおおお!!』

そして二機がともに、ゴッドフィンガーの態勢をとった！ 二機の輝きはもう最高潮にまで達している!!

『爆裂！』

『カッシュ！』

『『兄弟拳—————!!』』

そして、二機から石破天驚拳に匹敵するほどの気の塊が放たれた!!

『そのようなもので私は碎けぬうううう!!』

そして、そのカッシュ兄弟拳から、他の五人衆を守ろうと、グランドガンダムが立ちはだかる！ そして直撃!!

激しい爆炎が辺りを襲う!!

さすがグラウンドガンダムと言うべきか。大破させたものの、倒すまでには至らなかつたようだ。しかし、グラウンドを大破まで追い込むとは、なんという威力!!

その威力に、五人衆はみな、戦慄している。

『な、なんとという威力。おのれえ……!』

『ここはひきあげるぞ。次に相まみえた時こそ、必ずお前の全てをもらい受けるぞ、ドモン・カッシュ』

そして五人衆はひき上げて言った。

* * * * *

五人衆をかろうじて退けた俺たちは、ゴルビーのメデイカルルームにいた。片隅のメデイカルカプセルの中には、師匠がコールドスリープされている。

「一体どういふことなんだ? 教えてくれ」

ドモンの問いに、キョウジと俺は一緒にうなづく。

「はい。先ほども話した通り、今、デビルガンダムのコアになっているのは、私の本体です。私の本体は、師匠の推し進める人類絶滅計画を、追放計画にシフトし、それを遂行するために、キョウジさんに成り代わり、デビルガンダムのコアとなりました。私は、私の私の本体が、デビルガンダムD・G細胞で生み出したクローン。彼女の分身のような存在です」

そして、俺の後を継いで、キョウジが口を開く。

「うむ。そして私はデビルガンダムから排出され、ジャンヌを新たなコアに戴いたデビルはその場から消えたわけだが、それでも私には、そのデビルガンダムから分離したDG細胞がいくらか残って付着していた。それは私に侵食し、DG細胞の怪物に作り変えようとした。だがそれは私にとって、千載一遇の機会でもあったのだ」

「も、もしかして……!?!」

俺は思わず、そう言葉をこぼしてしまう。そして彼の語ったことは、俺の思っていた通りだった。

「私は意志の力で、そのDG細胞たちを制御し返し、支配し返した。そればかりではなく、意志の力をもって、DG細胞を、アルティメット細胞に昇華し、さらにこの身体をアルティメット細胞のそれにしたので」

「な、なんだって……!?!」

俺がそう叫んでしまうのを、誰も責められまい。それはまさに、スパ○ボTにおいて、師匠がやったこと。それをキョウジがやってしまうなんて、誰が想像できようか。

「そして力と技を得た私は、ドモンの力となるべく、覆面をかぶり、シユバルツ・ブルーダーと名乗ったのだ」

「そうだったのか……済まない、兄さん。あなたを憎んでしまつて……」

「気にするな、ドモン。悪いのはウルベだ。それに、そのおかげで、こうして成長したお

前と再会できたのだからな。たくましくなったお前と会えてうれしいぞ、弟よ

そしてしばし見つめあう二人。

「兄さん!」

「ドモン!」

「兄さん!」

「ドモン!」

「兄さん!」

「ドモン!」

と、そこに!

「い、いかん!」

師匠の様子を見ていたカツシユ博士が声をあげた。な、なにかあったのか!?

「どうかしたのか、父さん!」

「マスター・アジアの生体レベルが低下していく。このままでは死んでしまうぞ!」

なんだって——!?

最終章

36th Fight 『師匠復活！ 決戦デスメギド
ガンダム』

兄弟再会という感動的な場に、切羽詰まったライゾウ・カツシュ博士の声が響く。「マスター・アジアの生体レベルが低下していく。このままでは死んでしまうぞー！」
な、なんだってー！?!

感動的な空気は一変。メデイカルルームは緊迫した空気に包まれてしまった！ 全員で、師匠……東方不敗・マスターアジアが眠るメデイカルカプセルに駆け寄る。

「やはり、患っていた病が重いのだろう。それが、先ほどのドモンとのファイトで……」
「そんな……。なんとかならないのか、父さん!？」

そう訴えかけるように問うドモンに、カツシュ博士は沈痛な表情で首を振る。

「この病状では、どうしようもない。このまま果てるのを見届けることしか……」

そんな……！ せっかく、師匠と弟子の破滅的な対立フラグを回避できたと思つたのに！

俺だけではなく、周囲の全員が、絶望と悲痛に打ちひしがれてきたその時。

「いや、まだ方法はある」

シユバルツ……いや、キョウジが立ち上がってそう告げた。

そのキョウジに、チポデーが問う。

「どんな方法なんだ!?! 何をすれば!?!」

「うむ……ジャンヌ、お前の力……正確に言えば、お前の細胞が必要だ」

「!?!」

キョウジの言葉で、彼が何を言おうか察した俺は、衝撃を受けた。

俺の細胞……デビルガンダムD G細胞が必要、ということは、考えられることは一つしかない。だ

が……。

「キョウジさん、まさか、あの方法を……?」

俺が震える声でそう聴くと、キョウジはこくりとうなずいた。やはりか……。

「何をするんだ、兄さん!?!」

「ジャンヌのDG細胞を、マスター・アジアに感染させるのだ。もし、彼の生命力、そして心の光のエネルギーが十分なら、それがそのDG細胞をアルティメット細胞に変質させ、彼は助かるかもしれん。俺がアルティメット細胞の身体を得た時のようにな」

「そ、それじゃあ……」

希望に目を輝かせてサイ・サイシーがつぶやくと、キョウジはそこで、厳しい目を師匠に向けた。そして。

「だが……もし失敗すれば、マスター・アジアはDG細胞の暴走を受け、DG細胞の化け物になってしまいかもしれん」

「なんだって!? だ、だがそれなら、あんたのアルティメット細胞をそのまま移植すれば……」

チボデーがそう聞くが、キョウジは首を振って答えた。

「いや、それはできません。アルティメット細胞の放つ光の生命力は強大だ。私のアルティメット細胞を直接移植したりすれば、彼の身体の細胞がアルティメット細胞の光の生命力に負けてしまい、マスター・アジアの身体がはじけ飛んでしまう危険性がある。彼の心の光と生命力で、少しずつDG細胞をアルティメット細胞に昇華させ、慣らしていくながら身体の細胞を変化させていく必要があるのだ」

「……」

再び訪れる沈黙。そこに。

「やろう、兄さん！ 俺たちにはわかっているはずだ。生か死か、師匠がどちらの道を選ぶのか！」

「うむ、それではジャンヌ、頼む」

「……わかりました」

そして俺は手首を切り、そこから滴る血液を、師匠の口に少し注ぎ込んだ。俺の手首の傷は、すぐにふさがるから問題ない。

「これでOKです。後は、師匠の生命力と、心の光に賭けるだけ……」

そう俺が告げた直後！

ズズウン……！

「な、なんだ!?!」

そう言つて周囲を見回すアルゴ。そこに、ナスターシャが入ってきた。

「大変だ! 五人衆が再び接近しているぞ!」

「くそ、こんな時に! みんな、出撃するぞ!」

この場を、カッシュ博士とキョウウジに任せてハンガーに走つていこうとする俺たち。だが、そこで俺はふとあることに気が付いて足を止めた。

その俺に、アルゴが聞いてくる。

「どうしたのだ?」

「いえ。突然、デビルガンダムの本体とのリンクが完全に切断されたんです。一体何が……。でも、今はこちらのほうが大切ですよね」

俺は嫌な予感を感じながらも、ハンガーへと走つていった。

* * * * *

俺たちがガンダムに乗って、ゴルビーから出撃すると、ちょうど五人衆がビームを撃ちながら接近してくるところだった！

「行くぞ……。言つた通り、今度こそドモン・カツシュの全てをいただき、俺がドモンになる……！」

デモンガンダムを駆るシャドウ・ドモンがそう言いながら先頭に行く。

「シャドウ様、それはいいですが、東方不敗・マスターアジアの首を討つのは私めに！」
「ふん……。好きにしろ」

偽マスター・アジアはやはり、師匠を討つのに固執しているようだ。しかし、この卑屈な様子。偽物とはいえ、こんな小物な師匠は見たくなかつたぜ……。

「潰すううう！ 全て踏みつぶすうううう！！」

「ヒャーハハアツ!!」

そう吠えながら、チャップマンのグラウンドと、ミケロのヘブンスソードが突っ込んでくる。

そしてその後方には、ウォンの乗る（レインが教えてくれた）ウォルターガンダムが。「さあ、これであなた方の最期です。あなた方が消えれば、世界を再びカオス戦争の渦に叩き込むなどたやすいこと！ そして戦乱と陰謀の果てに、私のネオ・ホンコンが世界

を手中に収めるのです!!」

「ウオンがそんな野望と策略を練っていたとは……!! ということとは、やはり偽マスタール・アジアと、シャドウ・ドモンを生み出したのは、奴で間違いないだろう。だが!! 「そうはいきませんよ! カオス戦争の再来など、させません!」

「おう! 行くぞ、みんな!」

ドモンの掛け声に、みんなが応じる。

そして俺たちは、五人衆との決戦に突入した!

* * * * *

「うおおおお! 爆裂ゴッド・スラッシュユ!!」

「腐食カオス・スラッシュユ……!!」

ドモンのゴッドガンダムのゴッド・スラッシュユと、シャドウのデモンガンダムの放つかオス・スラッシュユが激しくぶつかりあう!!

「うおおおおお!!」

「ぬああああ……!!」

さらに、ゴッドガンダムの無数の蹴りと、デモンガンダムの無数の蹴りが激突する。その威力ゆえの衝撃に、周囲の地面が砕け、石や岩を吹き飛ばす!

「つぶす、つぶすううううう!!」

「ぬおああああああ!!」

ただ前進と、あらゆるものを踏みつぶそうとするグランドを、アルゴのガンダム・ポルトクラッシュが受け止め、押し返そうとする!

「切り裂いてやるぜえええええ!!」

「そうはいかねえぞ、鳥野郎!」

チボデーのマックスリボルバーを斬り裂こうとするミケロのガンダム・ヘブンズソードと、フライヤーシールドIIに乗ったマックスリボルバーが、激しい空中戦を繰り広げる。ヘブンズソードの爪をかわしたチボデーが、ギガンティック・マグナムで銃撃を浴びせる!

「あなた方のような優男とガキが、私に勝てると思ってるのですか!?!」

「へん! お前のようなひよろひよろに言われたくねえな!」

「私たちの熱い魂は、あなたには負けないことを教えてあげましょう!」

宙を自在に舞い、空中から襲ってくるウォルターガンダムに、サイ・サイシーのガンダム・ダブルドラゴンと、ジョルジュのガンダム・ベルサイユが立ち向かう!

サイ・サイシーがダブルドラゴンを龍形態に変形させて空中戦を行い、それをジョルジュがローゼス・ビットで援護する。

そして俺とチコモ。

「ふん、貴様らのような小娘どもに、わしが負けるとでも思っているのか!」

「その油断が命取りだぞ!」

「ええ。本物の師匠なら、そんな油断はしないでしよう。それがあなたが偽物という証です!」

「ほざけ!」

偽マスター・アジアの乗る、ヘルマスターガンダムに挑んでいた。ヘルマスターの放つ拳を、ビームセイバーでさばき、その隙をチコがヘルトライデントのビーム・トライデントで突く!

俺たちは激しいバトルを繰り返していた。

* * * * *

激しいバトルを展開する俺たち。しかし、やはり五人衆たちのパワーは、あれからさらに強化されたのか、恐るべきものだった!

「くうっ……!」

突然、俺の胸を激しい痛みが襲った! その痛みに膝をつき、うずくまってしまった! これまでの戦いや技による負荷に、身体が悲鳴をあげているのか。もう、俺に残された時間は少ないのかもしれない……!

そしてその隙を、偽マスター・アジアが見逃すわけがなかった!

「勝機あり！」

ヘルマスターガンダムが、俺に向かって突進すると、強烈な蹴りを見舞った！ それに、俺のオルタセイバーは吹き飛ばされてしまう！

「ジャンヌー！」

「油断が命取りと言ったのは、お前だったろうが!!」

さらに、チコのヘルトライデントをも、強烈な拳で吹き飛ばした！

アルゴのポルトクラツシユは、ビルの前まで追い詰められ、グランドガンダムと巨大な岩との間でつぶされようとしていた！

「潰す、潰すうううううう!!」

「くそ、この化け物め……!!」

ウォルターガンダムのビームの乱れうちが、ヴェルサイユとダブルドラゴンを襲う！

その直撃を受け、龍形態のダブルドラゴンは撃墜され、モビルファイター M F 形態に戻ると、地に叩きつけられた！

「ぐう！ ちくしょう！」

「このままでは……!!」

さらにそのウォルターのビームの流れ弾が、フライヤーシールドIIに乗ったマックスリボルバーに命中！ マックスリボルバーはシールドから弾き飛ばされてしまう！

！
落下しているところにヘブンスソードが襲い掛かり、チボデーはその体当たりを受けた

「ヒャーハハハア!!」

「ぐわあ!!」

そしてドモンも……!

「ぐううう……!」

「さあ、今こそ、俺がお前を喰らう時だ……!」

シャドウとつばぜり合いを演じているが、かなり不利。今にも、その凶刃に、ゴツドガンダムが切り裂かれようとしていた!

だがその時!

* * * * *

俺たちが苦戦から敗北に転げ落ちようとしていたその時!

笑い声が聞こえた!

「わーはっはっはっ! 待たせたな、皆の者!」

声が出たほうを見ると、そこには……!

「師匠……!」

「師匠……!」

俺とドモンが声をあげる。そう、そこには……ゴルビーの上に乗って腕を組み、直立した、金色に輝くマスターガンダムの姿があった!! 処置が成功したのか!

そのマスターガンダムは、俺たちを見るとうなずき、そしてヘルマスターガンダムへと目を向けた。

「おのれえ……。死にぞこないがあ……!」

そう呪詛の声をあげる偽マスターアジアに、師匠は不敵に言い放つ。

「ふん。小物めが。わしがこうして復活した以上、そう簡単にお主らの好きにはさせぬわ」

そこに、ウォルターのウオンが声をあげる。

「おのれ、東方不敗・マスターアジア。まだ私たちの邪魔をするというのですか」

「ふん。やはり貴様らは小物よな。わしはもう、そのような名ではない。今のわしは……」

瞠目する師匠。そして目を見開いて言い放つ!!

「東西南北中央不敗・スーパーアジアよっつ!!」

その名乗り、五人衆が驚愕する。

「東!」

と偽マスター・アジア。

「西!?!」

とウオン。

「南!?!」

とミケロ。

「北!?!」

とチャップマン

「中央不敗だ?!?!」

とシャドウが驚きの声をあげる。

それを見下ろす師匠の姿は堂々としていた。もう、そのバックに『東西南北中央不敗・スーパーアジア』と文字が描かれているかのようだ。

「本当に、この師匠は……。でも、うまく行ってよかったです」

「さすが! それでこそ師匠です!」

俺もドモンも、感極まった声を上げる。本当によかった……。

そしてここから、師匠の進撃がはじまった!

* * * * *

「切り裂いてやるうううう!!」

マスターガンダムに突撃してくるガンダム・ヘブンスソード。だが師匠はそれをひら

りと造作もなくかわし……。

「たわけめ！　いくら見事な翼を持っていようが、当てることができなければ、ただのスズメよ！」

ヘブンズソードの上空から、飛び蹴りで急襲!!　炎をまとったその飛び蹴りで、ヘブンズソードの翼をぶち破った!!

「ぎええええええ!!」

「東方不敗！　許しませんよ！」

ヘブンズソードに代わって、ウォンのウォルターが襲い掛かってきた!

「ふん、わしは東西南北中央不敗と言っておろうが！　来るがよい、風雲再起!!」

師匠が呼ぶと、上空から馬型のMF……モビルホース・風雲再起が現れた!　乗っているのは無論、師匠の愛馬、風雲再起だ。

「うぬのような小物は……馬の脚に蹴られて吹き飛ばされるのがお似合いよ！」
「ぎゃあああぁ!!」

そして、師匠のマスターガンダムが風雲再起にまたがる。そして、襲い掛かってきたウォルターを、まるでボールを蹴るかに蹴り飛ばした!　サッカーボールのように、ウォルターは遠くへ飛ばされていった。

続いて、グランドガンダムが、ボルトクラッシュを潰すのを中絶し、風雲再起に乗っ

たマスターガンダムにビームを発射する! しかし、師匠と風雲再起はそれを軽やかにかわす。

「潰す、潰すうううう!!」

「ふん、この巨体、倒すのは難しそうだ。だが、巨体とパワーだけで勝てると思うは間違えよ!」

引き続き、マスターガンダムに対空砲火を浴びせるグランドガンダム。だが、それは師匠の狙い通りだった!

「さあ、ブラック・ジョーカー、いやさアルゴ・ガルスキーよ! 力を振り絞るがよい!! うぬのブラック・ジョーカーの力、それでおしまいではあるまい!」

「! うおおおおお!!」

師匠の檄を受け、ガンダム・ボルトクワツシユが息を吹き返した! さらに、ゴールデン・パイレーツ・モードを発動させ、逆にグランドを押し返す!! そして!

「碎け散れええええ!!」

「うがああああ!!」

ボルトクワツシユのパンチが炸裂! その威力にグランドが吹き飛ばされた!

「この死にぞこないがああああ!」

「ふん、所詮偽物は偽物! 流派・東方不敗の魂のない貴様に、わしが負けるとでも思っ

ているのか！」

さらに、偽マスター・アジアのヘルマスターガンダムが襲い掛かる！ 激しい拳と蹴りの応酬が繰り返される！ だが、やがて、師匠の技の激しさが、偽物のそれを上回っていた！ 偽マスター・アジアは、やがて防戦一方になり、おしまいには師匠に撃たれるばかりとなった！

「ば、馬鹿なああああああ!!」

「愚か者め、だからお前はアホなのだあああああ!!」

そしてとどめに、師匠の拳が、偽物のヘルマスターガンダムを吹き飛ばした！

そしてそれを見て、ドモンも勢いづく！

「師匠がああしてパワーアップして蘇ったからには、俺も負けてはいられん！ はああ

あああああ!!」

「ぬうっ……!!」

今度はゴッドガンダムの刃が、デモンガンダムを押し去った！

「せやっ！」

「くっ……!!」

そしてドモンの刃一閃！ シャドウは危うくそれを交わした。

「これで決める！ 行くぞ！ 俺のこの手が真っ赤に燃える！ 勝利を掴めと、轟き叫

ぶっ!!」

ドモンのボイスコマンドに反応し、胸のカバーが開き、背中の羽が展開し、そのボディが金色に染まる。いや、その金色の輝きは、今までよりも強烈であった。

「うおおおお! 爆熱! ゴオオオオオオオッド・フィンガーアアアア!!」

「その輝きごと喰らいつくしてやる……!! カオシツク・フィンガー……!!」

そして再び、ゴッド・フィンガーとカオシツク・フィンガーがぶつかり合った! しかし、今度は今までとは違った。

「なっ!？」

シャドウが驚いた声を上げる。ドモンのゴッド・フィンガーのパワーの前に、デモンの右腕にひびが入り、砕けていったのだ!

「はああああああ!!」

「ぐああああああ!!」

悲鳴を上げるシャドウ。デモンの右腕は、ついにゴッド・フィンガーに砕かれてしまったのだ!

「おのれ……!! ドモン・カツシユ……!!」

そして後退するデモンガンダム。その腕はたちまち修復されていた。さすがフェイクとはいえDG細胞ということか。

* * * * *

飛びずさったデモンガンダムの周囲に、残り四体の五人衆たちが集まってくる。ここからが正念場か……!?!?

上空に浮遊しているウォルターが、余裕を演じながらも、震える声で言う。

「い、いいでしょう。ならば私たちも奥の手を見せるとしましょう。五人衆の皆さん、行きますよ、合体です!!」

合体だつて?! そういえば原作でも、旧四天王が合体したグランドマスターガンダムというのが出ていたな。

そして五体のガンダムが合体をはじめ。その周囲には激しい竜巻が荒れ狂い、阻止することはかなわない。

「奴らも奥の手を出してきましたか……!」

「……」

「へい、いくらでもやってきな……って、これじゃまるで、『俺たちの戦いはこれからだ!』ENDみたいだな」

「でも、どんなのが来ても、俺たちはもう負けやしねえさ。なあ、ドモンの兄貴!」

「ああ!」

「その意気じゃ。例えどんな敵が来ようと、わたらの力で粉碎してくれるわ!!」

そして竜巻が消えた! そこに現れたのは……。

言葉では言い表せそうにない。まさに三次元の暴力、とでもいうべき形状しがたいガンダムだった。

「どうだ、驚きましたか? これぞ私たちの奥の手、五悪魔合体、デスメギドガンダムです! さあ、この力であなたたちに終末をもたらしてあげましょう!」

そうウオンが言い放つとともに、デスメギドガンダムが一步を踏み出した。だがその時!

「!?」

「な、なんだあ!?!」

突然大きな地震があたりを襲うと、突然地面が裂け、そこから現れた巨大な手が、デスメギドガンダムを握り捉えてしまったのだ!

「ここ、これは……!?! 師匠!?!」

「わからぬ。これは一体、何が起こっておるのか……」

ドモンと師匠がそう言葉を交わしている間にも、デスメギドガンダムを握りしめる手の力は、さらに増していく。そして、その機体にひびが走り始めた。

「俺は……ドモンを……くら……ドモ……」

「ギイイイヤアアアアア!!」

「グアアアアアア!! マノン……!! マ……ノ……ン……!!」

「ひいひいひい、い、いやじやああああ!!」

「た、助けて……助けてくれえ〜!」

五人衆の悲鳴や断末魔が響く中、ついにデスメギドガンダムは腕に握りつぶされてしまった! デスメギドガンダム、そしてアナザー五人衆。そのあつけない終わりだった。

だが事態はこれで終わりではなかった! さらに地面から何かが出てくる!

あれは……デビルガンダム!?

さらに、そのデビルガンダムの周辺から、地面がDG細胞に変異していったのだ!!

37th Fight 『一体何が!? デビルガンダム大暴走!!』

デビルガンダムが出現して、五人衆が乗るデスメギドガンダムを秒殺した。それはいい。

しかし問題はその後。デビルガンダムは急速に、地球を侵食しだしたのだ。

この突然の事態には、俺……ジャンヌ・エスプレッソも、驚愕を禁じ得ない。

そしてそれは、ドモンたちも同じようだ。

「ジャンヌ、どういうことだこれは!? 人類追放計画は破産になったはずでは!?」

「ええ、そのはずなのですが……」

そう言葉を交わしているうちにも、侵食はさらに進んでいく。もはや、ランタオ島のこの火山全体がDG細胞に侵食されてしまったようだ。

そこに、ゴルビーからカツシュ博士の声が届く。

「みんな、ゴルビーに帰還してくれ! このままでは地球は人の住めない星になってしまう。大至急、地球に住んでいる人々の、宇宙への脱出作戦を行わなければならない!」
「わかった! みんな、話はあとだ。ゴルビーに戻るぞ!」

ドモンの言葉にみんなうなずき、ゴルビーに戻ろうとする。しかし！
D G細胞に侵食された大地から、何かが浮上し、姿を現した。それは……。

「これは……ヘルマスタールガンダム!？」

「こちらは……ガンダムヘブンズソードですか」

「ジャンヌ……もしやこれは」

師匠の問いにうなずく。

「ええ。私の本体が、今倒したデスメギドガンダムのデータから生み出したコピーだと思えます」

「まずはこいつを倒さなくちゃ、脱出できないみたいだな。やってやろうぜ!」

チポデーの強がった陽気な声に、サイ・サイシーもうなずく。

「ああ! コピーなんかにはやられるもんかい!」

そしてドモンたちは、コピーたちとの戦いをはじめた。

俺もビームセイバーを抜いて戦おう……としたところで!!

「……!!」

胸を、そして全身を激しく貫くような激痛に襲われた!

そして倒れ、意識を失った……。

* * * * *

(世界にはまだ陰謀と悪意が……)

俺が目を見開くと、そこには俺……いや、ジャンヌ・エスプレツソ本人がいた。俺の本体だ。

その『俺』は、悲しく目を伏せると再び嘆き、自問する。

(各国は陰謀を繰り広げ、ウォンも陰謀を繰り広げていた……。どうすれば……)
(こうなれば……地球を……人類から……)

そして、視界を光が埋め尽くす。

* * * * *

「ん……」

「あつ、アネキが目覚ましたぜー」

目を覚ました時、聞こえてきたのは、サイ・サイシーの声。視界に映ったのは、真っ白な天井。

ここは……ゴルビーのメデイカルルーム？

「おお、気が付いたか、よかった」

「私は……激痛で昏倒していたのですか……」

俺がそう聞くと、ジョルジュがうなずいて答えてくれた。

「ええ。びっくりしましたよ。突然倒れたのですから。世界が凍ったように感じまし

た」

「デモ、キガツイテクレテヨカッタ。カンチャン、ヒトアンシン」

「だが、ジャンヌ、もしかして……」

チコの質問に、俺はうなずいた。

「ええ。流派・東方不敗の亜流の技を使ってきた反動による、私の身体のDG細胞の損傷

が、深刻なレベルにきてしまったのだと思います」

そこで重い空気があたりを包んだ。

「そうか……。ならばこれからは、戦わず、身体を休めていたほうがいいぜ」

チボデーはそう言ってくれた。それはありがたいが……。俺は微笑んで首を振った。

「いえ。私には、人類追放計画に関与した責任があります。この緊急事態を収め、地球を緑あふれる星に戻すまで、剣を置くわけにはいきません。それが私の贖罪ですから」

「でもよお……」

そう言い募るサイ・サイシーの肩に、ドモンが手を置いた。

「それ以上はやめておけ。武道家が自分の命を賭して、戦い続けると言っているんだ。ならばそれを止めさせる権利は、俺たちにはないはずだ」

「うう……」

「ドモン、ありがとうございます……」

「ああ、だが無理はするなよ」

そのドモンの言葉が暖かった。いかん、目に涙がにじみそうに。俺はそれをごまかすように、ナスターシャ女史に聞いてみた。

「それでナスターシャさん、侵食はどうなりましたか?」

俺がそう聞くと、ナスターシャ女史は、深刻な表情をして答えてくれた。

「最悪だ。既に、ネオ・ホンコン全体がD G細胞に侵食されてしまった」

引き続き、カツシュ博士が話してくれた。

「計算の結果、あと1日で地表全てがD G細胞に侵食され、それから三日で、地球は中枢部まで浸食され、D G細胞の星になってしまう。そうなれば、なんらかの方法でD G細胞を除去したとしても、地球は人類の住める星ではなくなってしまうだろう」

「今、カライト委員長が中心となり、世界各国が協力して、地球の人々を全て宇宙に脱出させる計画が進行中だ。我々も、その計画が実行中であるタネガシマのスペースポートに向かい、その計画を支援する予定だ」

「そうですか……」

「あと一時間ほどでゴルビーは、タネガシマに到着する。それまでゆっくり身体を休めている。それも立派な任務だ」

「ええ、そうさせてもらいます」

そして俺は、ベッドに横になって、再び目を閉じた。でも休むことはできたが、眠ることはできなかった。

それは、あの夢のことが頭に残っていたからだ。

あれはもしかしたら、俺の本体の心がかすかに俺に届いたのかもしれない。ならば、あの言葉の意味は……？ 『俺』は何を考えているんだ……？

俺は悲しみが混じった不安を感じるのを否定することはできなかった。

そしてゴルビーは、一路タネガシマに向かっていった……。

* * * * *

そして約1時間後、ついにゴルビーはタネガシマのスペースポートに到着した。

スペースポートでは、既に世界中から集められた人々が、脱出ポッドに乗せられ、そして宇宙に打ち上げられていった。幸いながらに、デビルガンダムによる邪魔は入れられていないようだ。俺の本体も、『人類を宇宙に追い出す』という目的の根本だけは忘れないでいる、ということなのだろうか。

「よし。それでは、任務を開始する。報告では、デスセラフが、ここに追いやるように、人々を襲っているそうだ。お前たちは奴らが人々を傷つけないように、ここにやってくる人々を、デスセラフから守ってやってくれ」

「わかりました！」

そして待機すると、ナスターシャ女史が言ったように、人々が乗った数機の飛行機と、それを追撃するデスセラフがやってきた。

俺の本体からの指示が十分に届いていないのか、それとも、その過程で人々の被害が出てもやむなしと考えているのか、一機の飛行機が撃墜された。

他にも、避難民の乗った船と、それを追撃するデスセラフもやってくる。

俺たちはさっそく手分けして、そのデスセラフたちに向かっていった。

「……っ」

全身を激痛が駆け巡る。鎮痛剤をてんこもりに打ち、気を保っていられるギリギリまで痛みが緩和されていたが、それでも抑えきれない激痛が俺を襲う。

それに耐えながら、俺はビームセイバーを一閃！ デスセラフたちを斬り捨てた。

他のみんなも、船や飛行機を守りながら、デスセラフを撃破している。

激痛に耐えながら戦い続ける俺。だがその激痛で注意が散漫になったのが致命的になったのか、気が付いた時には、一機のデスセラフが俺の背後に迫っていた！

そこに！

「はあっ!!」

ドモンのゴッドガンダムのビームソードが一閃！ その敵機を一刀両断した。

「大丈夫か、ジャンヌ?」

「ええ……ありがとうございます」

「少し休めとは言わん。だが、わかってるな？」

「はい、わかってます……」

そして、戦いを続ける。そんな中……。

突然、巨大な影が、俺たちの下に降りた。

「！ いけません、皆さん、離れてください！」

「!?!」

俺の警告と同時に、みんなはその場を離れた。そしてその直後、俺たちが戦っていた地点に何かが落下……いや、着陸してきた！

それは……！

* * * * *

俺たちが離れたその場に落ちてきたもの……それは巨大なガンダム。デビルガンダムではない。

かつて俺たちと戦い……そして、デビルガンダムに潰された、デスメギドガンダムだった。だが、その姿はあれよりさらに清らかさ、神々しさが増しているような気がした。そう、例えるなら、天使と悪魔が交わったような。

「ふむ……これはどうやら、あのデスメギドガンダムを元に、デビルガンダムが生み出し

た輩のようだな。さしずめ名前をつけるなら、ガンダムエンジェルフィール、といったところか」

師匠……東西南北中央不敗・スーパーアジアが余裕たっぷりと言う。さすがだ。

一方のサイ・サイシーは苦々しい顔をしていた。

「とんでもないが来やがったもんだぜ。こっちは、人々の護衛で、こいつと戦う余裕はないつてのによ!」

「ですが、こいつをなんとかしなければ、人々の被害も……。下手したらスペースポートもやられるかもしれません」

ジョルジユも焦りながら、そう言う。そこに!

「心配はいらん。例え地獄から蘇ろうと、天使と悪魔が交わっていようと、わしの敵ではない。こんな奴ら、わしがたやすく葬ってくれよう。ドモン、手を貸せい。共にこいつを葬るぞ」

「はい!」

「キョウジ・カツシユ、いるのであろう? お主も力を貸すがよい。カツシユ兄弟拳を放ったお主の力、頼りにさせてもらおう」

「承知した」

いつの間に、キョウジのシュピーゲルが、師匠のマスターガンダムの隣に立っていた。

正体を明かしても、神出鬼没なのはそのままのね。

「ではいくぞ。他のみんなは引き続き、人々の護衛を頼むぞ」

「わかった！」

「いくぞー！」

師匠の言葉にチボデーが返し、そして師匠が掛け声をかけたその直後、ガンダムエンジェルフィールが、その巨大な腕をマスター、ゴッド、シユピーゲルに叩きつけた！
が数瞬早く、三機はその場から散開する。

「キシヤアアアアアアアアアア!!」

そして、エンジェルフィールと師匠たちの戦いが始まった。エンジェルフィールは三機が集まると大技を撃たれると理解しているのか、ビームやミサイルを乱射し、三機が集合する隙を与えない！
だがそれでも、師匠たちはその攻撃を軽々とかわしていく。

「ふん、なかなかやるようだが……」

「劣化コピーなら恐れるに足らん！」

「巨体だからと言って、俺たちを捉えられると思うな！」

余裕をもって交わし続ける三機。そして。

「石破天驚拳————!!」

「石破天驚ゴッドフィンガアアアアアア!!」

「シユツルム・ウント・ドラックウウウウウ!!」

「ドゴオ!! バゴア!! ズバアアアア!!」

「ウグアアアアア!!」

三方向から師匠たちの技が直撃し、ガンダムエンジェルフィールは苦しさにのたうち回った。そしてそれこそが必殺の隙となる!

「よし、いくぞ!」

「はい!」

「これでとどめだ!」

三機が集まる。そして、気を高める。それぞれの機体が黄金色に染まり、金色の光を放つ!

「わしらのこの手が真っ赤に燃える!」

「亡霊砕けと!」

「轟き叫ぶつ!!」

そして天驚拳の構えを取った! その高まりつつある気は、今にも弾けるかのようだ!

なんとか立ち直ったエンジェルフィールが三機に襲い掛かるが、もう遅い!

「超究極! 石破! 天驚拳!」

三機から通常の天驚拳をさらに超える大きさと輝きの気弾が放たれた!!

それは見事に、師匠たちに飛び掛かったガンダムエンジェルフィールに直撃!!

「キシヤアアアア!! ドモ……キリキリイ……マロ……ワシコソワ……ヒイヤアアアア!!」

その圧倒的なエネルギーは、エンジェルフィールの身体を光の粒へと変えていく。奴は必死に身体を再生しようとするが、それすらも光に変わる。超究極・石破天驚拳が、奴を光に変えていくスピードが、エンジェルフィールの自己再生能力を上回っているのだ。

「アアアアア……」

そしてガンダムエンジェルフィールは、光の粒になって消えていった。

「ふん、こんなものじゃな」

「はい」

「やりましたね、師匠!」

* * * * *

そして、最後の脱出ポッドを打ち上げた後、俺たちも、ネオロシアの宇宙輸送艦ゴルビーIIに乗り換えて、地球から脱出した。

そして衛星軌道まで脱出したところで、俺たちの目の前で、地球はDG細胞に完全に

包まれてしまった。

もはや一刻の猶予もない。早く、この地球を侵食したDG細胞をどうにかしなくては、人類は地球を失うことになる。永遠に。

そして、その俺の危惧を裏付けることがさらに起こった!

「ナスターシャ殿、見てください、あれを!」

ゴルビーⅡに乗り込んでいた惠雲が何かを見つけ、叫ぶようにナスターシャ女史に報告する。

そして、窓に集まった俺が見たものは……。

「地球からDG細胞が盛り上がって、何かの形に……」

「あれは……巨大なジャンヌさん……?」

レイモンドとマリアルイゼ姫が、そうつぶやいて絶句する。

そう、地球を覆ったDG細胞が、DG細胞に覆われた地球を大事そうに抱えた俺の形をとったのだ。まるで宝玉を守る女神のように。

その様子を見て、俺の中でつながった。そして気づいた。俺の本体が何を考えているかを。

「これは……!」

「何かわかったのか、ジャンヌ!?」

そう聞いてくるドモンに、俺は我知らず声が震えながら答えた。

「私の本体は……ジャンヌ・エスプレッツは……地球を人類から永遠に取り上げるつもりです……！」

38th Fight 『想いよ届け! 集結ガンダム連合!』

「地球を人類から取り上げるつもりって、どういうことだよアネキ!」

衛星軌道上のゴルビーⅡにて、サイ・サイシーが俺……ジャンヌ・エスプレッソに、シヨックを張り付けた顔でそう聞いてきた。

一方の俺も、答える声が震えるのを隠し切れない。

「おそらく私の本体は、大会中断後も、ウオンや各国が争いや陰謀を続けていることに絶望して、地球をDG細胞の塊にして、星としての生命を終わらせることで、人類から地球を永遠に奪い、人々に地球の大事さを思い出させようとしているんだと思います……」

その答えに、アルゴが口を開いた。

「なるほど。だが、地球の大事さを思い出させるために、地球を消滅させるなんて本末転倒ではないか? 思い出しても大事にする地球がないのではどうしようもないだろう」

「ええ……。きつと本体は、それも思いつかないほど、思い詰め、これに固執してるんで

しよう……」

そこで、チボデーが口を開いた。

「だけど、こうして見ているだけというわけにもいかないんじゃないか？ あと三日で、地球は人が住めなくなっちゃうんだろ!？」

「ええ。彼女の志はともかく、それを許すわけにはいきません」

ジョルジュの言葉を聞き、ナスターシャ女史がうなずき、びしつと棒鞭を鳴らした。

「よし！ ジョルジュの言う通りだ。D G細胞の駆除の方法を模索しつつ、これ以上のD G細胞の侵食を阻止するのだ！」

しかし、そこに！

「ナスターシャ、あれを！」

チボデーギヤルズのジャネットが声をあげる。ナスターシャと俺たちが地球のほうに目を向けると……。

デビルガンダムから、デスセラフたちが大挙して出撃してきた！ そいつらは、まだ衛星軌道上に存在している脱出ポッドばかりか、それより外にある脱出ポッドまでも攻撃していく。

「奴ら、この周辺宙域にいる奴らを皆殺しにする気か!？」

と、ドモン。

チコも顔をしかめて言う。

「もしかしたらジャンヌの本体は、地球に一步も人類を近づかせないために、人類をコロニーから一步も出させないつもりなのかもしれない……」

「ソレヤバイ! ソレナツタラ、人類ノ文明、ドンドン衰退シテシマウ!」

カンちゃんという通りだ。人の文明の営みは、違う地域との交流があつてこそ。それを断たれては、人類は衰退するばかりとなつてしまう。俺の本体は、地球保護に固執するあまり、そのことに気づいてないのか、それとも、そうなつてしまつても、地球が保護できるならよし、と考えているのか……。

目を閉じて問いかけてみるも、本体は心を閉ざしているのか、リンクを断つたまま返事を返してはこない。

「ナスターシャ殿、こちらにもデスセラフたちがやってきていますぞ!」

瑞山の報告に、ナスターシャ女史は再び、棒鞭を鳴らした。

「よし、ならばガンダム各機、出撃せよ! ゴルビーIIを護衛しつつ、可能なら他の脱出ポッドの離脱も援護するのだ!」

「わかった!」

そう言つてハンガーに駆け込むサイ・サイシーを先頭に、俺たちはブリッジを走り出て行つた。

* * * * *

「ヒューー！ 来やがる来やがる！ 次から次へと！」

ゴルビーⅡから出撃した俺たちに、デスセラフの軍団たちが突撃してくる。その数は、以前俺たちが戦ったデスアーミー・オルタ軍団の数よりはるかに多い。だがそれの前にしても、面白そうに強がってしまうのは、ファイターの性だろうか。

師匠も、動じず面白そうに言い放つ。

「ふん。いくら来ようが、雑魚にすぎぬわ。こんな奴ら、あつという間に蹴散らしてくれよう。行くぞ！」

そして戦闘に突入した。

「ぬあああああつっ!!」

ドモンのゴッドガンダムが、拳でデスセラフの一体を貫き、それが爆散したのと同時にそこを離れ、次のデスセラフへと向かい、それも葬る。

「マシンガン・ペアアアンチッツ！」

チボデーが駆るマックスリボルバーが、迫りくるデスセラフの軍団を、豪熱マシンガンパンチでまとめて吹き飛ばしていく。

「それ、焼かれちまえ！」

「行きなさい、ビットたち！」

サイ・サイシーのダブルドラゴンが、龍モードの火炎放射でデスセラフたちを焼き尽くし、ジョルジュはローゼス・ビットによるオールレンジ攻撃で、デスセラフたちを撃滅していく。

そして俺もスプラッシュ・ソードでデスセラフたちを貫いていく……が!!
ビキイ!!

「んあああつ!!」

ついに技の反動が限界を超えたのか、俺の右腕が(物理的に)砕け散った!! 砕け散った腕のカケラたちは風化して消えていく。いよいよ、俺の命の終わりが迫ってきているのか……。

その激痛に耐えながら、ビームセイバーを左腕に持ち替えて戦い続けるが、続いて後ろに回りこんだデスセラフに蹴りを喰らってしまう!

「きゃあああああぁー!」

そして別のデスセラフがメイス型ビームライフルをこちらに向ける!! そこに!

「はあつ!!」

師匠のマスターガンダムが駆け付け、デスセラフをマスタークロスで一刀両断した!

「師匠……!」

「ジャンヌ、デビルガンダムの元へ向かうがよい」

「え？」

俺がデビルガンダムの元に行ったところで……あ……。

「そうじゃ。むしろガンダムファイター……いや、武道家にとって、想いを伝える方法は言葉だけではなかるう？」

「そうだ、拳はただ敵を打ちのめすだけにあらず。拳は己の心を物語るもの。そう言っていたのは、目の前の人だったじゃないか。」

「ならば、私の本体の元まで駆け付け、この拳を使えば、直接想いを伝えることができるかもしれない！」

「はい……！」

「チコ、ジャンヌの護衛をしてやれ。彼女一人では無理だが、お主ら二人なら、なんとかデビルガンダムまでたどり着くことができようからな」

「わかった！」

「後詰はむしろに任せておけい！ はああああ!!」

そして師匠は後方から迫ってくるデスセラフたちに突撃、次々とこれをせん滅していった。

「よし、行くぞ、ジャンヌ！」

「はい!!」

そして二機で突撃していく! ただデビルガンダム……俺の本体のもとへただ一直線に!

* * * * *

目の前の敵を斬り捨てながら、デビルガンダムに向けて一直線で進んでいく。そうしていく俺たちの目前に、デスセラフが突っ込んできた!

「はあっ……!」

そのデスセラフに蹴りを見舞う!

「……っ!」

蹴りを放った右脚に激痛が走る。その痛みとともに、右脚が、膝の下から砕け散った! でもそのかいあって、デスセラフは大きく態勢を崩した。そこに、チコのヘルトライデントが槍の一撃を放ち、撃破することができた。

そしてデスセラフを倒しながら進んでいくが、やはりデビルガンダムの、デスセラフを生み出す能力はすさまじく、その物量の前に、俺たちは苦戦を強いられていた。

無双を続ける師匠は相変わらずだが……。

「ぐわっ!」

ゴッドガンダムが、デスセラフたちの集中砲火を吹き飛ばされる!

「くそ、とつとつとやられちまえ! くっ!!」

マックスリボルバーが拳で、デスセラフの一機を撃破するも、背後から別の敵の攻撃を受けてよろめいてしまう。

「くっ……ローゼス・ビットの残りが。でも、まだまだ負けませんよ！」

ほとんどのローゼス・ビットを破壊されたジオルジユのヴェルサイユが、それでも、残りのビットたちとビームサーベル片手に奮闘する。

「くそ、これではらちが明かん。だが、負けるわけにはいかない！ うおおおおお!!」
ポルトクラツシユがビームやミサイルを浴びながら、その傷だらけのボディを駆り、グラビトン・メガハンマーと拳で、デスセラフたちをなぎ倒し続ける。そのポルトクラツシユに、またビームが命中した！

サイ・サイシーも、ダメージを受けながら、それでも負けずに戦い続ける。

そして俺たちのほうも……!!

「きゃあ!!」

デスセラフの攻撃を受けた俺のオルタセイバーは吹き飛ばされ、ヘルトライデントのそばを離れてしまう！

「ジャンヌ!! ……くっっ！」

そのヘルトライデントに、別のデスセラフが斬りかかる！

さらに、それとはまた違うデスセラフが、俺に斬りかかろうとした！ 万事休すか！

その時!

「ネーデル・ビームタイフーン!!」

どこからか、光の渦巻きが放たれ、そのデスセラフを飲み込んで粉碎した!

そしてやってきたのは……。

* * * * *

「ルドガー!」

「ジャンヌ・エスプレッソ! 間に合ってよかった!」

そう。かつて戦った、ルドガー・バンホーベン。そして彼の駆るネーデルガンダムだった。ところどころ、宇宙戦用に改修されているようだが。

「ありがとうございます。でも、身体のほうは大丈夫なのですか?」

「ああ。コクピットをM モビルファイター F仕様ではなく、通常のM モビルスーツ S仕様に改装してあるからな。

心配してくれてありがとう」

そう言葉を交わしているうちに、別のデスセラフが襲ってきた!

しかし、それは両肩のパーツと、長大な曲刀 ミナレット が特徴のガンダム……ミナレットガンダム

ムに一刀両断された!

「セイツト! あなたも来てくれたんですね、ありがとうございます!」

「礼はいらないよ。君には、ドモンとともに、俺をDG細胞から解放してくれた借りがあ

るからね。それに、駆け付けてきたのは俺たちだけじゃない」

「え？」

デスセラフの一機とつばぜり合いを演じているドモンのゴッド。その背後から別のデスセラフが襲い掛かろうとしたところに、細身のまるで女の子のようなガンダムが飛び掛かり、そのビームリボンで、デスセラフを撃破した！

「アレンビーー！」

「へへ、久しぶりだね、ドモン！ 約束通り、身体を治してきたよ！」

そう、アレンビー・ピアズリーのノーベルガンダムだった！

一方、傷つきながらも奮闘するアルゴの元へは……。

「ふん!!」

別のガンダムがその巨大な斧で、ボルトクラッシュに迫ってきていたデスセラフたちをまとめてなぎ倒した！

「アンドリユーー！」

「助けたわけではない。痛みを抱えても進むといったお前の覚悟を全て見せてもらう前に倒れられては困るからだ」

そう言い放ったアンドリユー・グラハムのランバーガンダムが、接近してきたデスセラフを叩き潰す。

それ以外にも、ガンダムゼブラやマーメイドガンダム、ジェスターガンダムにマンガラガンダム、いやその他にも、俺たちが戦ったガンダムや、それ以外の世界各国のガンダムたちが、コロニーのほうからたくさん駆け付けて、援護してくれている。

その様子に、思わず目がしらが熱くなってくる。

「さあ、行つてこいジャンヌ。お前にはまだするべきことがあるのだろうか? ここは私たちに任せておけ」

「はい、ありがとうございます!」

「恩に着るぞ!」

ルドガーの言葉を受け、俺とチコは再びデビルガンダムへと突撃していく。

そして、ついにその至近まで到達した俺の目前に、巨大ジャンヌの姿をとったデビルガンダム……デビルジャンヌの額に、コアとなつてゐる俺の本体の姿が映つた。

だがそこで、そのデビルジャンヌの胸部に穴が開くと、そこにエネルギーがチャージされ始めた。まさか!?

* * * * *

デビルジャンヌがエネルギーをチャージし、超高出力ビームを発射しようとしていることは、ゴルビーⅡの面々、戦っているガンダムたち、そしてそのうちの一機である、マンガラガンダムを駆るキラル・メキレルにも感じ取れた。彼はすかさず、同胞たちに指

示を出す。

「いかん、奴らはネオ・ジャパンコロニーをビームで破壊しようとしているぞ！ ガンダム連合第一部隊は我に続け！ 我らの力を合わせて、コロニーをデビルガンダムから守るのだ！」

彼の言葉を受け、アレンビーたち、他のガンダムたちが全員、デビルジャンヌとネオ・ジャパンコロニーの中間点に集結する。そして一齐に構え、気を練り始める。

そして、デビルジャンヌから超高出力ビームが発射された!!

* * * * *

デビルジャンヌは、なりふり構わなくなったのか、ネオ・ジャパンコロニーにビームを発射して消し去ろうとしていた！

「やめてー！ー！ー!!」

俺がそう叫びながら、本体の元に急ぐも、たどり着く前にビームは発射された！

それはネオ・ジャパンコロニーに向かって直進し、そして爆発!!

「なんとことを……」

そして絶句するチコ。そしてそれは俺も同じだった。

「私……。え？」

俺は驚いた。ネオ・ジャパンコロニーからの信号は健在だった。コロニーは無事だっ

たのだ。

そして、デビルジャンヌと、ネオ・ジャパンコロニーの中間地点には、多くのガンダムたちが。彼らが力を合わせて、コロニーとそこに住む人々を守ってくれたのだ。

そのことに、俺の本体も驚愕し、動きを止めている。チャンスは今しかない!

「やああああああ!!」

俺はオルタセイバーのバーニアを全開にして、一気に本体に急接近する。そして目前まで近づいたところで、コアとなった俺の本体を守っているクリスタル状のカバーに、その左拳を叩きつけた! そして念じる。

* * * * *

——私、もういいでしょう? 彼らの姿を見れば、人類が排除すべき存在なのかどうか、わかるはずです。

.....

——許してくれ、とは言いません。ですが、彼らを、人類をもう一度、信じてみたくありませんか?

.....

——彼らはただ地球を汚し、傷つける存在だけの問題ではないんです。

.....

——彼らには、欲望のために地球を傷つける心だけではなく、地球を労り、守りたいという心もあります。今、彼らが見せてくれたように、その心が集まれば、このような手をとらずとも、地球を蘇らせることができるはずですよ。その可能性を信じてあげてほしいんです。

——私……そうですね……。

——私……。

* * * * *

俺の想いは届いたようだ。デスセラフたちの動きは止まり、戦いがとまっている。

そこに、ナスターシャ女史からの報告が届く。

「カツシユ博士から朗報だ。D G細胞の、地球中心部への侵食が止まったそうだ。これなら、細胞の駆除方法を確立すれば、地球は再び人が住めるようになるだろう。みんな、よくやった」

間に合ったか、よかった……。

それも、みんなが力を合わせて頑張ってくれたおかげ。そして彼らの奮闘と、俺の想いを受け取った俺の本体が翻意してくれたおかげだ。

ふと目の前を見る。クリスタルのカバーの奥、金属のようなD G細胞で包まれた俺の本体も、やわらかい微笑みを向けてくれている……ような気がする。

だがそこで!

「ああああああああ!!」

「私?!」

突然、俺の本体が顔を歪ませて苦悶の悲鳴をあげた。そして、俺の本体は封じられたカプセルごと、DG細胞の中に埋もれていく。

こ、これは一体……!?!

そこに響く声。

「ふふふ……待っていたぞ。この時を! コアの支配が緩むこの時を、私が人類に復讐する時を!!」

ゴルビーIIからまた報告が届く。

「デビルガンダム、地球のDG細胞、再活性化を確認!」

「なんだと!?! 再び、地球への浸食を再開するつもりか!?!」

「い、いえ、これは……!!」

「デビルガンダムが変形していきます!」

その報告の通り、俺の姿をとったデビルガンダムは蠢きながら、変形を開始した。

デビルガンダムは、少しずつ、まがまがしい、恐ろしい、まさに悪魔といふべき姿に変形していった。

そしてその頭頂部に水晶のカプセルに封じられて現れたのは……。
「ウルベ……!?!」

39th Fight 『地球と人類危うし! 憎しみに染まったデビルガンダム!!』

俺……ジャンヌ・エスプレッソを模した姿から突然、邪悪な異形の姿に変貌したデビルガンダム。その姿はまさに全てを滅ぼそうとする悪魔のようだ。

そして、その頭部のクリスタルに封じられているのは……ウルベ!? 彼が、俺の本体からデビルガンダムから奪い取ったというのか!?

「ウワーハハハアアアアアア!!」

クリスタルの中で高笑いをあげるウルベ。その笑い声は衝撃波となって、周囲に放たれた。

俺もその衝撃波で吹き飛ばされてしまう。この衝撃で全身が粉碎されなくてよかった……。

「待ったぞ、待ちかねたぞ、この時を!!」

「ウルベ、なぜあなたがそこに……?」

仮に彼が寄生していれば、危険因子として俺の本体に抹消されているはずなのだが……。

「言っただろう、この時を待っていた、と。私は、デビルガンダムを発見すると、そのサブシステムに寄生し、サブシステムのユニットの一つに擬態して、コアによる消去を免れていたのだ！」

そして、俺の説得で、俺の本体が翻意して、コアによる支配が弱まったことを利用して、逆にデビルガンダムの制御を奪い取った、と……。

だが、謎はまだ残っている。

それは、カツシユ博士が言ってくれた。

「だが、男の身体では、デビルガンダムをそれほどに成長させることはできず、逆に弱体化してしまうはず!?」なのになぜ!?!」

そうだ。デビルガンダムのコアに適應しているのは女性だ。男がコアになっても、これほどの成長はしないはずなのだ。

「それにウルベ大尉、なぜ君がこのようなことを?」

カラト委員長がそう聞くと、ウルベは苦笑いを浮かべて言った。

「その質問、二つともに答えてやろう。それは……これだ!!」

そしてウルベは、身に着けていた服を引き裂き、上半身をさらけ出した。そこにあるのは……本来そこにあるはずのないもの!!

「それは……女性の胸!?!」

驚きの声をあげるドモン。そう、ウルベの胸にはささやかながらも膨らんだ乳房があったのだ!!

「まさかあんな……女性だったのか!？」

チボデーがそう聞くと、ウルベはチボデーに憎しみに満ちた視線を送り、デビルガンダムの腕からビームを発射して、マックスリボルバーを吹き飛ばした。

「馬鹿を言うな、私は男だ! だがあの時……」

* * * * *

一年前……。アルティメットガンダムが地球に落ちてデビルガンダムになったばかりのころ。

ウルベの駆るM^{モビルスーツ}S、フアントマト、セイツトのミナレットガンダム、そして、ルドガーのネーデルガンダムが、そのデビルガンダムと激闘を繰り広げている。

デビルガンダムは、その巨腕をネーデルガンダムに叩きつけた。ネーデルガンダムは吹き飛ばされ、大破してしまう。

「おのれ、デビルガンダムめ!」

ミナレットガンダムが背後から、デビルガンダムに斬りかかった! しかし、そのデビルガンダムの背中から無数の光弾が放たれ、ミナレットガンダムを撃ち落としてしま

その光弾の中には、デビルガンダム D G 細胞でできた弾丸も含まれていたらしい。ミナレットガンダムが少しずつ、でも着実に、D G 細胞に侵食されていく。

そして残ったのは、ウルベのファントマのみ。デビルガンダムは不気味に、ゆっくりとそのファントマに近づいていき……。

* * * * *

「私はセイト・ギゼルとともに、D G 細胞に侵されてしまった。だが、私の身体の遺伝子はD G 細胞とは相性が悪かったらしく、こともあろうに、細胞は私の身体を、女性のものに作り替えてしまったのだ!!」

そう叫ぶウルベの脳裏に、はじめて膨らんだ自分の胸を目撃して、衝撃を受けた時の様子がフラッシュバックされる。

「それで私の軍人としてのキャリアは終わった。男と女のあいのこと軽蔑され、侮蔑され、出世街道から外され、ガンダムファイトとデビルガンダム捜索の部署に回されてしまったのだ! そればかりか、軍の奴らどころか、市民まで私に心無い視線を送ってきた! お前たちにわかるか、男としてのプライドが女の身体によって打ち砕かれた衝撃を! わかるか、男女と侮蔑され、さげすまれた目で見られるあの屈辱を!!」

そしてさらに吠える。その叫びは再び衝撃波となって俺たちに襲い掛かった。

「くう……!」

「人類なんてそんなものだ。所詮、自分たちとは異なる者に対しては、軽蔑し、侮蔑し、排除しようとする! そんな人類など滅ばばいい! そうだ、デビルガンダムによる世界征服などどうでもいい! 私はこのデビルガンダムで、人類を、地球を滅ぼしてやるのだ!!」

彼の気持ちはわかる。だが、それでも奴のしようとすることを許すわけにはいかない! なぜなら……!

アルゴのボルトクラッシュユが一步進み出た。そしてアルゴが言う。

「ウルベ、お前は一つ間違えている」

「なにい!?!」

さらにジョルジユが。

「あなたのその境遇にはささやかですが同情を感じます。ですがそれも、アルティメットガンダムを奪い取って良からぬ目的に使おうとしたことによる自業自得!」

サイ・サイシーも続ける。

「それに、辛い思いをしてるのはあんなだけじゃないぜ!」

チボデーも厳しい言葉をぶつけてくる。

「世界には、あなたの他にも差別や心無い目に苦しむ人たちや、力による理不尽に苦しめられる人たちもいる! ネオ・ケニヤの人たちのようにな! でもそれでもみんな、世

界に恨みを持つことなく、必死に生きてる!!」

そして、四人のガンダムの前に、ドモンのゴッドガンダムと、キョウジのガンダムシユピーゲル、師匠のマスターガンダムが現れて、言い放つ!

「なのに、世界や、お前と似たような目にあっている人々を含めた人類に憎悪を向けて滅しようなど!」

「くだらぬ私怨! 理から外れた的外れな恨み、憎しみにすぎぬわ!!」

「そんなもので地球と人類を滅ぼそうなど、俺たちが許しはしない!」

おおー! 俺が思っていること、言おうとして思っていたことを全部言ってくれた! まさにその通り!

だが、そう断じられても、ウルベの恨み、憎しみは揺るぎもなかったようだ。再び叫びとともに衝撃波が俺たちに叩きつけられる。

「ええい、黙れ! わからぬならわからぬともよい。お前らをせん滅し、人類を滅ぼすだけだああああ!!」

「そうはさせないと言っている! いくぞみんな!!」

『おお!!』

そして俺たちと、ウルベ操るデビルガンダムとの決戦がはじまった!

* * * * *

そして、ウルベとの決戦に突入した俺たちだが、ウルベのデビルガンダムは強敵という言葉すら生ぬるい強敵だった!

彼が女性だったことに加え、彼の持つ憎しみの力によってさらに強化され、そのパワーを十二分にふるってくるのだ!!

「ぐわあー!!」

キラルのマンダラガンダムが、デビルガンダムの触手、ガンダムヘッドの直撃を受けて吹き飛ばされる。彼の横で戦っていたアレンビーも……!

「キラル!! きゃあー!!」

別のガンダムヘッドからの光弾を受けて吹き飛ばされた!

そして俺たちの元へも!

「喰らいやがれ、マシガン・パーンチツ!!」

「極・流星胡蝶剣ー!!」

「グラビトン・メガハンマアアア!!」

「ローゼス・ハリケンツツ!!」

チボデーたち四人の必殺技が、ガンダムヘッドに直撃! ガンダムヘッドが爆炎に包まれた!!

「やったぜ……!」

「!!」
そう安心したように言い放つサイ・サイシー。しかし!!

チボデーが何かの気配を感じ、衝撃に目を見開く! その爆炎の中から、ガンダムヘッドが突っ込んできたのだ!

その体当たりにより四機は吹き飛ばされてしまう。

忌々し気にアルゴが言う。

「くそ、これではらちがあかない……!!」

* * * * *

「やらせはせん! 恵雲ビーム!」

「瑞山レーザー! 発射!!」

ネオ・チャイナの恵雲と瑞山の二人が、両舷のビーム砲からビームを放ち、ガンダムヘッドに吹き飛ばされたガンダム連合のガンダムを援護する。

「レイモンド、そっちに行きましたわ!」

「かしこまりました!!」

マリアルイゼ姫の管制に従い、レイモンドが機銃を指示した方向に向け、対空砲火を放つ。

必死にガンダム連合のガンダムを援護しながら、デビルガンダムの攻撃をかわし続け

るネオ・ロシアの輸送艦ゴルビーII。

そのブリッジには、ガンダム連合各機からの悲痛な報告が立て続けに届いていた。

「こちらネーデルガンダム部隊! マーク3、マーク5、マーク6大破!! うわぁー!!!」

「こちら、ガンダム連合第4部隊、損耗率76%! え、援護を!!」

それを聞きながら、危機感と焦りに表情を歪ませるナスターシャ。そこに、キヤスカら驚くべき報告が入る!!

「いくつかのガンダムヘッドが、後方にある他のコロニーに向かっていきます!」

「なんだと!」

その報告に、カラト委員長が驚きの声をあげ、ライジングに搭乗しているカツシユ博士が顔を歪ませて言う。

「奴め、コロニーまでも飲み込み、滅ぼすつもりか!」

「全世界に警告! 地球が……いや、地球圏、そして全ての生きとし生けるものたちが危ない!!」

ナスターシャから切羽詰まった警告が送られた。

* * * * *

いつ終わるともしれない苦闘を続ける俺たちとガンダム連合たち。

ドモンと師匠はまだ余裕がありそうだったが、それでもその消耗は無視できないよう
だ。

「なかなかしぶとい奴よ。これはさすがのわしも少しきついわい」

「くそ、なんでこんなにしぶといんだ!?!」

「おそらく、ウルベ本人の憎しみの力に加えて、取り込んでいる私の本体の女性としての
パワーも加えてるんだと思います。せめてそれらを切り離せば……あ」

そこで俺は一つ思いついた。俺の本体とデビルガンダムを切り離す術、必殺の策を。
俺の命と引き換えにの策ではあるが……。

だが、背に腹は代えられない!!

* * * * *

「……師匠、ドモン、それに他の皆さん。私を援護してもらえませんか?」

「ぬう……?」

「何をする気だ、ジャンヌ!?!」

触手の一本をビームソードで断ち切ったドモンが俺に、そう聞き返してくる。

「私の本体に接近し、私の力、記憶、心全てを、私の本体に託します。そうすれば、私の
本体をデビルガンダムから解放することができるはずです」

「なるほどな……」

「だが、そうすればお前は……?」

ドモンの質問に、俺は苦笑して返す。それが答えだった。

「ええ。これまでの戦いで傷ついたこの体、もたずに砕け散ってしまうでしょうね……」

「なんと……!」

「ですが、悔いはありません。私の命が、地球圏を助けるきっかけになれるなら……」

そこに、サイ・サイシーから通信が入る。

「そんな、アネキ……! そんなの……」

「やめろ、サイ・サイシー。ジャンヌ、それしか手はないんだな?」

「はい……」

「それしか手はないなら、それをファイターであり武道家であるお前が決めたのなら、俺たちにそれを否定する権利はない。せめてもの手向けに、全力で援護してやる」

「うむ。それがわしらにできるせめてものことよ」

ドモンと師匠、二人の言葉を聞き、目がしらが熱くなる。そこに。

「ジャンヌ……」

「ジャンヌノアネキ……」

「チコ、カンちゃん、今までありがとうございました。もしできれば、私の本体も憎むことなく、あなたたちの仲間として受け入れてもらえませんか?」

二人とも同時にうなずく。

「ああ、約束しよう」

「ワカツタ。タトエ本体ダロウガンダロウガ、ジャンヌハジャンヌダ」

「ありがとうございます……カツシュ博士。私の本体の位置を探ってください」

「了解した。任せてくれ」

「……行きます！」

そして俺はオルタセイバーを駆り、デビルガンダムへと突撃していった。

* * * * *

ただ一筋にデビルガンダムへと突進してくる俺のオルタセイバー。加速によるGの影響で、身体が少しずつ崩れていく。

だがそれでもいい。俺はこの作戦に命を賭けている。彼女……俺の本体のもとに、俺の全てと、このオルタセイバーを託せれば。

その俺に、ガンダムヘッドが追撃してきた！ いけない、振り切れない！！
そこに！

「石破天驚拳————！！」

師匠が放った石破天驚拳が直撃し、ガンダムヘッドを消滅させた。

「師匠！」

「全力で援護してやると言っただろう? お主は後ろや周囲を気にせず、ただ本体の元へ向かうがよい」

「はい……!」

さらに加速して向かう。前方からガンダムヘッドが二体迫ってきた! それらが口を開け、ビームを放とうとしたその時!

「ガトリング・デススパアー!!」

「たあああああー!!」

駆け付けたチコのガンダムヘルトライデントと、アレンビーのノーベルガンダムがガンダムヘッドを撃破してくれた。

「ありがとうございます、二人とも!」

「うむ!」

「さあ、ここは私に任せて、先に行つて!」

「はい!」

さらに突撃する。そこに、カツシュ博士からの報告が届いた。

「発見した! デビルガンダムの胸元だ!」

「しかし、DG細胞の筋肉に包まれているな……」

「ならこじ開けるのみだ! ビーム砲、発射用意! 目標、ジャンヌの本体が封印されて

いるポイントの周辺部分だ!!」
そして。

「行きますぞ! 惠雲ビーム!」

「瑞山レーザー!」

「最大出力斉射!!」

ゴルビーIIから高出力のビームが放たれ、デビルガンダムの胸元に直撃した!

そのビームの連射を浴びているうち、そのダメージに耐えかねたのか、胸元の一部が盛り上がり、開いた。そこには、俺の本体が封印された水晶が!! いまだ!!

* * * * *

その衝撃で、ウルベの奴に縛られた俺……ジャンヌ・エスプレツソ本人の意識が戻った。

その俺の視界に、俺の分身が生み出したガンダム、ガンダムオルタセイバーが映った。

そのオルタセイバーは、攻撃をかわし、またある時は攻撃を受けながら、ただ一直線へと向かってくる。そしてそれを、他のガンダムたちが必死に援護している。

それを見守る俺に、分身からの思念が届いた。

——待っていてください、『私』。今行きます!

——『私』、なぜそこまで……。道を誤り、罪を犯した私に……。

——だからこそです。私たちは罪を償わなくてはなりません。そして、人類を救い、明るい道を切り開くことこそが、その償いです。

——『私』……。

そして、そこでデビルガンダムが大きな口を開いた。まさか……! !

「だめええええ!!」

「オオオオオオオ!!」

デビルガンダムが、その咆哮とともに、衝撃波を放った!! その直撃を受け、オルタセイバーは中破するも、さらに接近してくる。

——だから、また立ち上がりましょう、『私』。私とあなたに託すことを決心してくれた、みんなのためにも!!

——『私』……!!

そしてオルタセイバーは俺の目前まで接近すると、頭突きで水晶を破壊した! そしてハッチが開き、中からもう頭部と肩までになった俺の分身が飛び込んでくる。その身体もどんどん崩れていく。

「私……! !」

そして頭部も砕けると、後には光の玉だけが残された。その玉を俺は抱えると、胸へと抱え込んだ。光がどんどん俺にしみこんでくる。

彼女の力、記憶が俺の中にしみこみ、精神が『彼女』と融合していくのがわかる。

そして俺は、ついにデビルガンダムの、ウルベの支配から完全に抜け出した！　そして、目前にたたずむオルタセイバーに向かって言う。

「行きますよ、『私』！　そして、オルタセイバー、いえガンダムピュセル!!」

Final Fight 『俺とみんなで切り拓く明日 ! 光輝く未来へレディーゴー!!』

俺……ジャンヌ・エスプレッソの本体……は、分身が砕け散ったあとに残った光の玉……彼女の力や心、記憶の集合体を抱え、胸に押し当てた。

光の玉が俺の中に入り込み、分身の全てが俺の中にしみこんでいくのが感じられる。彼女の心や記憶が、俺のそれと一体化していくのが感じられる。

「これが、『私』が今まで培ってきたもの……」

今や、俺は俺ではなくなっていた。俺は俺であり、『俺』でもある。

「ありがとう……ございます……そして、これから一緒にがんばりましょうね、私」

俺は、目の前に直立したままのオルタセイバーを見据えて言った。

「行きますよ、オルタセイバー! ……いえ、ガンダムピュセル!」

その言葉に呼応するかのように、オルタセイバーが崩れ始めた。否! 新たな姿に生まれ変わろうとしているのだ! 俺の思念に反応し、アルティメット細胞に変質し、機体を修復、改修しては崩れていくD^{デビルガンダム}G細胞。

そして、全てのDG細胞が崩れ落ちた後には、完全な状態のオルタセイバー……いや、

かつての俺の乗機、ガンダムピュセルが堂々と直立していた！

そして、俺は絡みついていた触手を引きちぎり、ガンダムピュセルのコクピットに飛び込んでいった。俺が入ると同時にそのハッチが閉まる。

頭上からリングが回転しながら降りてくる。そのリングはそのまま回転しながら、俺の生まれたままの身体にファイティングスーツをまとわせていく。その苦しさがどこか懐かしかった。

そして、俺のささやかな胸も、細身の腕や足も、ファイティングスーツに包まれていく。

それが全部終わったところで、ピュセルのモビルトレスシステムが起動。軽く演武を行う。その動きの通りに相棒が動く。

「よし、いきますー！」

そして俺は、ガンダムピュセルとともに、みんなの元に戻った。

「ジャンヌノアネキ！」

「戻ってきたか、本当によかった！」

「ええ、ご心配をおかけしました。それに、あのような罪を犯しておいて、皆さんの元に戻るのもどうかと思いましたが……」

俺がそう言つて頭を下げると、チコもカンちゃんも笑つて許してくれた。

「気にするな。お前の分身と別れる時、約束したんだからな。お前を変わらず仲間として受け入れると」

「ソウダ。ソレニ、タトエ本物ダロウガ分身ダロウガ、ジャンヌハジャンヌ」

「二人とも……」

そこに、師匠やドモンからも通信が入る。

「それに、お主がしたことなど、わしがしようとしたことに比べればどうつてことはない」

「正直、お前がしたことは看過できるものではないが、お前なりに地球のことを思つてやったことだし、そして自らのことを悔い改めたのなら、俺たちはそれ以上言うべきことはない」

「二人とも……」

さらに、シユバルツ……いや、キョウジも言つてくれた。

「何より、ある漫画家も言つていた。『男の価値はどんな奴だったかで決まるものではない。今どんな奴かで決まるもの』と。過去に過ちを犯したのなら、これからの行動でそれらを払拭すればいいことだ」

「キョウジ……ありがとうございます。私は女なんですけどね」

俺のそばに、シャッフル同盟の四人も駆け付けて、言葉を投げかけてくれる。

「そうそう、これからのお前の頑張り、しっかりと見せてもらうからね！」

「手を抜いたら、承知しないぜ、アネキ！」

「その通りです。共に、全力で戦いましょう！」

「何より手を抜くなど、お前の中のジャンヌも許さないだろう」

その言葉を受け、俺は胸に熱いものを感じながらうなずく。

「はい。行きましょう、みんな！」

そして俺たちは、改めてデビルガンダムに突撃した！

* * * * *

俺を失ったデビルガンダムは、やはりいくらか弱体化したようだ。攻撃の激しさも、

今までほど激しくはない。

とはいえ、やはり腐ってもデビルガンダム。弱体化しながらも、その攻撃は緩むところを知らない。

ビームセイバーを振るって、接近してくるガンダムヘッドを両断！ 何しろ、生身の身体に戻ってしまったことで、今まで磨いてきた、流派・東方不敗の亜流の技は使えなくなってしまった。今の身体ではその負荷に耐え切れないのだ。元から使える剣術しか使えない。しかし、やるしかない！

また別の方向から飛んできたガンダムヘッドに、ビームセイバーを突き刺す!

「たあああー!!」

そして切り上げて撃破!!

しかし、別の方向から飛んできたガンダムヘッドに体当たりを喰らって吹き飛ばされる!

「くうっ……!」

吹き飛ばされた俺のガンダムピュセルに、ビームで追撃しようとするガンダムヘッド。そこに!

「させぬ!」

キョウジのガンダムシユピーゲルが駆け付け、そのガンダムヘッドを一刀両断してくれた!

「ありがとうございます、キョウジ!」

「礼には及ぼん。では!」

そして、接近してくる二本のガンダムヘッドに飛んでいき、その両方を両断する。

さすがキョウジ。俺も負けてはいられないな。俺もビームセイバーを構えなおし、気合を入れる。

そこに、ゴルビーIIのナスターシャ女史から通信が入る。

「朗報だ！ 各コロニーに伸びていたガンダムヘッドたちが、コロニーの目前で動きを止め、朽ちていった。どうやら、ジャンヌを失って弱体化したことが原因のようだ」

それを聞いて、チボデーが歓声を上げる。

「そいつはハッピーな報せじゃねえか！ よーし、もう一息、頑張ろうぜ！」

「あいよー！」

チボデーの言葉に、サイ・サイシーがうなずき、ガンダムマックスリボルバーと、ガンダムダブルドラゴンが突撃し、暴れまわる。

師匠の無双っぷりは相変わらずだし、ドモンもビームソードでガンダムヘッドを斬りまくる。

ガンダムヘッドの一体の頭上にガンダムボルトクラッシュユが着地し、拳を振り上げる。

「喰らえ！ ガイアクラッシュヤー!!」

そして拳を叩きつける！ ガンダムヘッドはつながっている触手もろとも砕け散った。

激闘を繰り広げる俺たちだが、それでもデビルガンダムの猛威はとどまるところを知らない。ガンダムヘッドを潰しても潰しても、また新しいガンダムヘッドが現れる。本体を攻撃しても、すぐに自己再生で修復されてしまう。

もう、きりが無い。無限に戦い続けるしかないように思われた。

「くそ、これではきりが無いぞ! カツシユ博士、何か手はないのか!」

カラト委員長が焦った様子で、カツシユ博士にそう意見を求める。

「本体を一気に叩くしかないですが……」

「そうですね……。叩いても自己再生されてしまいます。強烈な光のパワーで、デビルガンダムを構成しているDG細胞を、一瞬にしてすべて、アルティメット細胞に昇華させてしまえばいいのですが、そんな手段は……」

俺が言ったその時!

「手段? そんなものあるではないか」

師匠がそう言い放った!

* * * * *

「手段!? 師匠、何か手があるのですか?」

そう聞いてくるドモンに、師匠は不敵に笑みを浮かべて言った。

「キョウジ・カツシユがいつていたではないか。DG細胞は意志の力で、アルティメット細胞に昇華することができる。そしてわしらには、意志の力を敵にぶつける手があるはずだ」

「そうか、拳か!」

チコの答えに、師匠がうなずく。

「そうじゃ。石破天驚拳に意志の力を込めて放つ！」

「ですが、あれだけの巨体をアルティメット細胞に昇華させるには、私たちだけの意思の力では……」

圧倒的に足りない。この場にいる、俺たちやガンダム連合たちを集めても、出現している全てのガンダムヘッドを消滅させられるかどうかとところだ。とても、デビルガンダムを消滅させるなんてことは……。

「心配はいらぬ。ほら、感じぬか？」

「え？ あ……」

確かに感じる。あちらこちらのコロニー……いや、地球圏の全てから、光にあふれた意志が集まってくるのが。

これは……。

「地球消滅の危機を目の当たりにし、そしてわしらの戦いを見た者たちが、地球を守りたいという気持ちを抱いてくれておる。この力があれば、あの化け物を光に還元することなどたやすいであろう」

「皆さん……」

人々がその気持ちを持ってくれたことに目頭が熱くなる。俺の進んだ道は結局は誤

りだったが、それでもこうして地球を救う一助になってくれたのは、本当によかった。
「おのれええええええ!!」

そこに、ウルベの叫び声。デビルガンダムがガンダムヘッドとともに突撃してきた!

「ふん、最後の悪あがきに出たか。皆の者、いくぞ!」

「はい!」

「ええ!」

師匠の言葉に、ドモンと俺が答える。他のみんなも力強くうなずいた。そして全員で構える。

「わしらのこの手が光輝く!」

師匠の後を、ドモンが続ける。

「未来を拓けと!」

その後に俺が。

「轟き叫ぶつ!!」

さらにデビルガンダムが突っ込んでくるが、動じない。

それどころか、俺や師匠、ドモンたち、いや、この場にいる全てのガンダムたちが金色を超えた金色に光輝いていた。

再び師匠が。

「星！」

シユバルツが。

「破！」

チコとカンちゃん、そしてシャツフル同盟たちが。

「超越！」

そして全員で。

「神驚拳——————！！」

俺たちから超巨大な光の塊が放たれた!! 俺にはその光の塊の中に、無数のキング・オブ・ハートが見えたような気がした。

それはまさに、星を破り、神を驚かすというその名のごとし。

その光の塊は迫りくるガンダムヘッドを、次々と光に変え、そして、デビルガンダム本体に直撃した!!

その光のパワーの前では、その巨体は意味をなさない。その巨大な体が徐々にアルティメット細胞へと変わって崩れていく。そしてウルベも。

「ああ、私の身体が……憎しみや恨みが……浄化され、光へと変わっていく……！」

そして憎しみと恨みに生きた男は、デビルガンダムとともに、浄化され、光……アルティメット細胞となって消えていったのだった。

そして、神鷲拳の光はそれだけではなく、地球にも……。

「見て、地球が……」

「おお……!」

通信機から、チボデーギャルズと、サイ・サイシーのお目付け役二人の、喜びの声が聞こえてくる。

振り注いだ光は、地球を覆っていたD G細胞をアルティメット細胞へと変えていった。変わったアルティメット細胞は大地に、緑を蘇らせて消えていく。

そして、地球を覆っていたD G細胞が消えた後には、今までよりもさらに美しい地球がそこにあつた。

地球は救われたのだ。

* * * * *

最後の戦いから四年後。ガンダムファイト14回大会が始まった。

この14回大会では、これまでのガンダムファイトが地球を汚し、傷つけてきたことを反省し、ラグランジュポイントに作られた大会用コロニー『ガンダム・コロシウム』で行われることになった。

良い変化はそれだけではない。

コロニー国家各国が共同して、地球に住む貧しい人たちをも、コロニーに住まわせる

ように手を尽くして、今や地球には、環境を調査する調査員以外の人類は存在しない。

みんな、あの戦いを通して、地球について考えてくれた成果だ。

「久しぶりじゃな、ジャンヌよ」

「師匠」

そう俺が回想しているところに、師匠……東方不敗・マスターアジア……もとい、東西南北中央不敗・スーパーアジアが俺の隣にやってきた。

彼は俺の身体を見回すと、面白そうに笑みを浮かべて口を開いた。

「ふむ、鍛錬は欠かしてはおらぬようだな。結構なことだ」

「はい。そのおかげもあって、東方不敗亜流の技も、スプラッシュ・ソードぐらいなら問題なく撃てるようになりましたよ」

「そうか、それは楽しみだ」

「師匠も参加されるのですか？」

俺がそう聞くと、師匠は苦笑して首を振った。そして答える。

「いや、わしは東西南北中央不敗・スーパーアジアだからな。そんなわしが大会に出ては、他の者たちのやる気がなえるじやろう。今回は見届け人よ」

「はは……」

俺も苦笑を浮かべる。全てが終わり、師匠はまた東方不敗・マスターアジアの名を名

乗っても問題ないようになった。だがそうであっても、師匠はいまだ、東西南北中央不敗・スーパーアジアの名を名乗り続けている。確かに、彼の強さならそう名乗っても違和感がなさすぎるのだが。

と、そこに、アナウンスが流れた。次の試合が始まるらしい。

リングに現れたのは、カンガルーのようなガンダム。カンちゃんの子、ピヨンちゃんの子の駆るジャンピングガンダムMk-IIと、ネーデルガンダムの改良機のような機体。

確か、ルドガーの話では、あのガンダムには彼の弟子が乗っているらしい。彼の技や力を全て受け継いだその弟子は、圧倒的な強さでサバイバルレブン（これも当然、宇宙で行われていた）を勝ち抜いたんだとか。

この二機のガンダムの対決は、新しい時代を象徴しているかのように見えた。

彼らが対峙している向こうには、青く輝く地球が。まるで、新しい時代をつかみ取った俺たち人類を祝福してくれているかのようだ。

そんな希望にあふれた風景の中、二機のガンダムのファイターたちは、希望にあふれた叫び声を放つ。

「ガンダムファイト!」

「レディーゴオオオオオオ!!」

{
E
N
D
}